12
咎神の騎士
三雲岳斗
illustration マニャ子
ストライク・ザ・ブラッド
STRIKE THE BLOOD
電撃文庫

ストライク・ザ・ブラッド 12

咎神の騎士

STRIKE THE BLOOD

三雲岳斗
illustration マニャ子

羽波唯里［はばゆいり］
『第二の剣巫』Another Swords Shaman
純真律儀な銀剣の巫女
斐川志緒［ひかわしお］
『第二の舞威媛』
Another Shamanic War Dancer
気丈で純情な降魔の弓姫

リディアーヌ・ディディエ
『戦車乗り』Tank rider
鋼と戯れる異才の童女
藍羽浅葱
『あいばあさぎ』
『電子の女帝』Cyber Empress
華麗で気儘な天才電脳女子高生

暁古城『あかつきこじょう』
『第四真祖』The fourth primogenitor
世界最強の"怠惰な"吸血鬼
姫柊雪菜『ひめらぎゆきな』
『剣巫』Sword Shaman
獅子王機関の可憐な監視者

Contents

序　章　Intro …… 11

第一章　凍える水面　On The Frozen Lake …… 21

幕間 i …… 82

第二章　白霧の戦場　Battlefield Of White Mist …… 93

幕間 ii …… 135

第三章　咎神の騎士　Knight Of Sinful God …… 147

幕間 iii …… 192

第四章　真祖と龍と　The Original Vampire And The Dragon …… 201

幕間 iv …… 248

第五章　異境からの帰還　Return From The Farthest World …… 255

終　章　Outro …… 323

あとがき …… 338

デザイン／渡邊宏一（有限会社ニイナナニイゴオ）

本書（電子版）に掲載されているコンテンツ（ソフトウェア / プログラム / データ / 情報を含む）の著作権およびその他の権利は、すべて株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡおよび正当な権利を有する第三者に帰属しています。

法律の定めがある場合または権利者の明示的な承諾がある場合を除き、これらのコンテンツを複製・転載、改変・編集、翻案・翻訳、放送・出版、公衆送信（送信可能化を含む）・再配信、販売・頒布、貸与等に使用することはできません。

CONTENTS

序　章　Intro

第一章　凍える水面　On The Frozen Lake

幕間 i

第二章　白霧の戦場　Battlefield Of White Mist

幕間 ii

第三章　咎神の騎士　Knight Of Sinful God

幕間 iii

第四章　真祖と龍と　The Original Vampire And The Dragon

幕間 iv

第五章　異境からの帰還　Return From The Farthest World

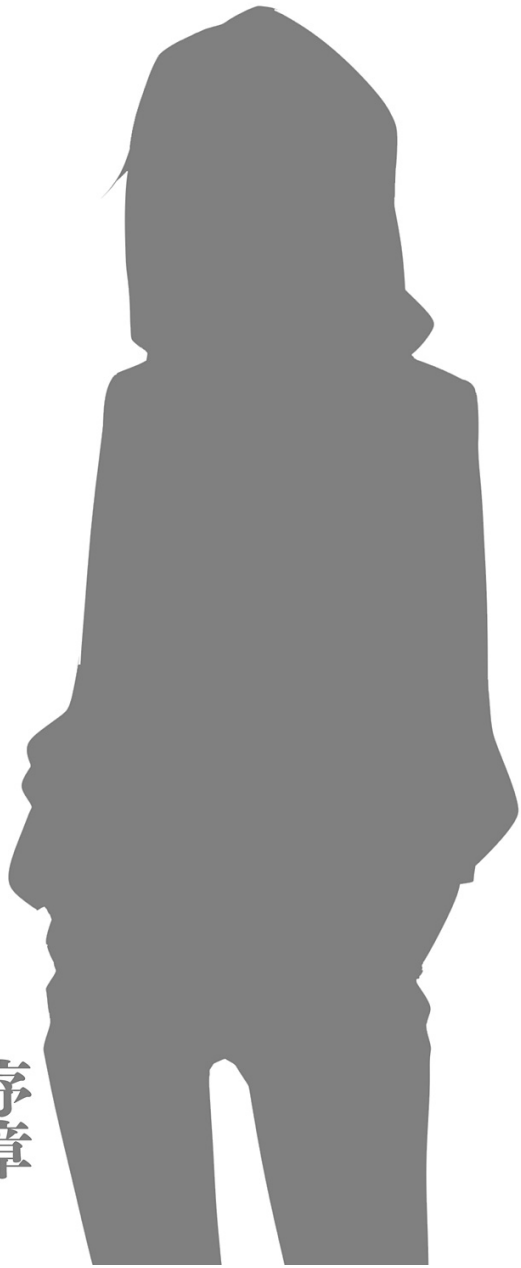
終　章　Outro

あとがき

ストライク・ザ・ブラッド

咎神の騎士

12



序章
Intro

全金属製の銀色の槍やりが、閃せん光こうとともに突き放たれた。

七式突撃降魔機槍〝雪せつ霞か狼ろう〟――

それは魔ま族ぞくを殺すためだけに造られた、獅し子し王おう機き関かんの秘ひ奥おう兵へい器きだ。

魔力を無効化し、ありとあらゆる結界を斬きり裂く破は魔まの霊れい槍そうは、魔族の超再生能力を阻害し、彼らの肉体に致命的な崩ほう壊かいを引き起こす。不老不死を誇る吸血鬼といえども、刺し貫かれれば滅びるしかない。たとえそれが世界最強の吸血鬼であっても、だ。

だが〝第だい四よん真しん祖そ〟暁あかつき古こ城じようは、その〝雪せつ霞か狼ろう〟の刃を向けられて、笑っていた。

銀色の槍に無惨に貫かれる瞬しゆん間かん、彼は、牙きばを剝むき、獰どう猛もうに笑ってみせる――

衝しよう撃げきが大地を激しく揺らし、轟ごう音おんが大気を引き裂いた。

人工島の海岸部が、ごっそりと抉えぐられたように消失した。

鋼こう鉄てつの骨組みが粉々に砕け散り、樹脂製の消波ブロックが塵ちりへと帰っていく。

押し寄せる波は濤とうの中に一瞬だけ浮かび上がったのは、透明な肉体を持つ巨大な水すい妖ようだった。美しい女性の上半身と、蛇の下半身を持つ水の精霊ウンデイーネ――第四真祖の眷けん獣じゆうだ。

「くっ……！」

巫み女こ装しよう束ぞくの若い娘が、ズタズタに破壊された防波堤の端に、唇くちびるを噛かみながら着地する。

彼女の身体からだに傷はない。巫女装束の袖そでと緋ひ袴ばかま

の裾すそが、わずかに引き裂かれているだけだ。眷獣の攻撃に巻きこまれる直前に、彼女は爆ばく心しん地ちから脱出していたのだ。

　だが、その結果、彼女が握にぎっていたはずの銀色の槍は失われた。

　第四真祖の反撃から逃れるために、槍を手放さざるを得なかったのだ。

「暁……古城……！」

　ヴェールのような薄うす絹ぎぬで顔を隠したまま、彼女は無意識の声を洩もらす。

　巨大な水妖は、すでに召しよう喚かんを解かれて消滅していた。残っているのは人工の大地に刻まれた、喰くいちぎられたような巨大な傷跡だけだ。

　無差別に撒まき散らされた第四真祖の眷獣の攻撃が、絃いと神がみ島じまの砂浜を、一瞬で原子レベルにまで分解したのだろう。

　もし脱出するのが一瞬でも遅れていれば、彼女も同じ運命を辿たどっていたはずだ。

　暁古城は、あの絶体絶命の状況から、咄とつ嗟さの機転で彼女をそこまで追い詰めたのだった。

　不死の肉体を利用した、自滅覚悟の反撃によって――

「ずいぶん派手にやらかしたね、閑しずか。人工島管理公社の連中、今ごろ頭を抱えてるだろうよ」

　立ち尽くす彼女の足元から、不意に誰だれかの声が聞こえてくる。

　気負いの感じられない洒しゃ脱だつな口調だ。

　声の主は一匹の猫だった。しなやかな体つきの美しい黒猫だ。首

輪には大きな金きん緑りよく石せきが埋めこまれ、輝かがやくような金色の瞳ひとみには、明らかな知性の輝きがある。

「……見ていたのですか、縁えん堂どう縁ゆかり」

　喋しやべる黒猫を見下ろして、巫み女こ装しよう束ぞくの少女は淡々と問いかけた。

　彼女が縁堂と呼んだのは、黒猫を操っている術者の名前だ。三百キロ以上も離はなれた日本本土から使つかい魔まを操る、破格の式神使いである。

「獅し子し王おう機き関かん三さん聖せいの閑しずか古こ詠よみを出し抜くとはね。第だい四よん真しん祖その坊やもやるじゃないか」

　喋る黒猫が、どこか小気味よさそうな口調で答えてくる。暁あかつき古こ城じようが少女の攻撃を凌しのいだことは、式神使いにとっても予想外だったのだろう。

　第四真祖、暁古城を〝魔族特区〟絃いと神がみ島じまの外に出さないこと。それが今回、獅子王機関に課せられた任務だった。破は魔まの霊れい槍そうを突き立てることで、暁古城の魔力を無効化し、神格振動波の結界で彼を仮死状態に至らしめる。七式突撃降魔機槍シユネーヴアルツアーには、そういう使い途みちもあるのだ。が、

「あの坊やが戦せん闘とうの素人しろうとだと思って侮あなどったかい、〝静寂破りペーパーノイズ〟？　だとしたら、失態さね」

　揶や揄ゆするような黒猫の問いに、閑古詠は曖あい昧まいに首を振った。

　存在しないはずの時間を、現実の世界に無理やり割りこませるという、彼女だけが操る特殊な現象、〝静寂破りペーパーノイズ〟──

　時間を止めているわけでも、超高速で移動しているわけでもない。なのに、存在しないはずの時間の中で古詠が実行した、存在しないはずの攻撃の結果だけが残される。

　いわば予測不可能な絶対先制攻撃の権利──それが〝静寂破りペーパーノイズ〟の正体だった。偉大なる吸血鬼の真祖たちすら警戒す

る、獅子王機関三聖筆頭の能力である。

　そんな〝静寂破りペーパーノイズ〟の本質を、暁古城が初見で見破れたとは思えない。

　しかし彼は、古詠が構えた〝雪せつ霞か狼ろう〟を見て笑ってみせた。

　七式突撃降魔機槍シユネーヴアルツアーの魔力無効化能力は、使用者である古詠にも影えい響きようを与える。少なくとも七式突撃降魔機槍シユネーヴアルツアーを起動している間は、〝静寂破りペーパーノイズ〟の力は使えない。

　暁古城は、自らの右腕を犠ぎ牲せいにして古詠の槍やりを受け止めた。そして自分自身を巻きこむような形で、召しよう喚かんした眷けん獣じゆうに攻撃を命じた。絶対先制攻撃の能力といえども、相手の攻撃を無効化できるわけではない。相あい討うち狙ねらいは〝静寂破りペーパーノイズ〟に対する唯一の、もっとも有効な迎撃手段だ。計算ではなく直感でそれを理解して、暁古城は笑ったのだ。

　彼の眷獣から逃れるために、古こ詠よみは、〝雪せつ霞か狼ろう〟を手放して脱出するしかなかった。

　暁古城は傷ついたまま海中へと沈んだが、結果的に古詠は彼を止められなかったことになる。

　第四真祖の力を受け継いだとはいえ、たかだか一いつ介かいの高校生を、獅子王機関の三聖がみすみす取り逃がしてしまったわけだ。失態といわれても反論の余地はない。

「―あの坊やは、無力な人間の分ぶん際ざいで〝焔えん光こうの宴うたげ〟を生き延びて第四真祖の力を手に入れた、正真正銘の規格外品イレギユラーなのさ。真祖の魔力や眷獣なんかよりも、その事実のほうがよっぽどおっかないことだよ。本人にも自覚はないようだがね」

　黒猫が、人間臭く肩をすくめて溜ため息いきをついた。

　閑しずか古こ詠よみは、破壊された防波堤の縁ふちから、足元の海をのぞきこむ。

眷けん獣じゆうが撒まき散らした衝しよう撃げきの余波で、海面は激しい渦うずを巻いていた。重傷を負った暁あかつき古こ城じようだけでなく、彼の監視役である姫柊ひめらぎ雪ゆき菜なや、太たい史し局きよくの妃き崎さき霧きり葉はも、海に呑のまれてしまったはずだ。

「では、姫柊雪菜に彼を任せたのは、正解だったということですね。やり方はどうあれ、彼女は、結果的にその規格外品イレギュラーをどうにか制御しているわけですから」

「まあね……で、これからどうする気だい？」

「姫柊雪菜を回収します。今はまだ彼女を失うわけにはいきませんから」

そう言って古詠は薄絹ヴエールを脱いだ。

吸血鬼である暁古城はともかく、雪菜と霧葉をこのまま放置しておくわけにはいかない。ただでさえ南みな宮みや那な月つきとの戦せん闘とうで消耗していた彼女たちに、さらに身動きできないほどのダメージを与えたのは、ほかならぬ古詠自身だ。古詠には、二人が溺でき死しする前に、彼女たちを救助する義務がある。

しかし、海に向かって探索用の式しき神がみを放とうとした古詠を、黒猫が唐とう突とつに制止する。

「……人命救助の必要はなさそうだよ、閑しずか」

黒猫が金色の瞳ひとみで睨にらんでいたのは、破壊された防波堤の対岸だった。

剝むき出しになった鉄骨の先端に、長身の男が立っている。

純白のスーツを瀟しよう洒しやに着こなした、容姿端たん麗れいな異国人の青年だ。古詠と黒猫を眺めながら、口元に笑みを浮かべている。彼の全身から滲にじみ出ていたのは、隠しきれない殺気だった。

これ以上、暁古城に干渉するなら、おまえたちを殺す。青年の瞳が雄弁にそう語っている。

単なる威い嚇かくというよりも、むしろ古詠との戦いを求めてウ

ズウズしている──そんな危険な印象すらあった。

「〝蛇へび遣つかい〟……」

　青年の瞳を見返したまま、古詠が苦悩の溜息を洩もらす。

　暁古城を絃いと神がみ島じまの外に出せば、彼は本土に致命的な混乱を引き起こす。だがそれは、戦闘狂バトルマニアである青年貴族にとっては、願ってもない展開だろう。

　古詠が暁古城を封じようとしたのと同じ理由で、青年は、彼を島外に連れ出そうとしているのだ。そして古詠には、それを防ぐ手段はない。今ここであの美しい青年貴族を、殺すわけにはいかないからだ。

「……縁えん堂どう。外事部に連絡を。すぐに動かせる舞ま威い媛ひめが、あと一人残っていたはずですね」

　古詠が冷静な口調で黒猫に訊きいた。あの青年貴族が本土に向かうことを止められないのなら、それなりの対策を講じる必要がある。獅し子し王おう機き関かんの長ちようとして、彼らを野放しにはできないのだ。

「うちの不ふ肖しようの弟子のことなら、高たか神がみの杜もりで謹きん慎しん中ちゆうだけどね」

　黒猫の操あやつり手てが、素そっ気けない口調で答えてくる。古こ詠よみは安あん堵どしたようにうなずいて、

「呼び戻してください。今すぐに」

「それはお安い御ご用ようさね。で、どちらを監視させればいい？」

「……え？」

　予期せぬ黒猫からの質問に、古詠は小さく眉まゆを寄せた。

　黒猫の視線を追って顔を上げ、彼女は驚きよう愕がくに目を見張る。

　絃いと神がみ島じまの上空に、一いつ隻せきの装甲飛行船が浮か

んでいた。

　それは地上を睥へい睨げいしながら、悠ゆう然ぜんと蒼そう穹きゆうを横切っていく。金属製の硬こう殻かくに覆おおわれた船体の色は、氷河の煌きらめきにも似た白群青ペールブルー。安あん定てい翼よくに刻まれているのは、大剣を持つ戦いくさ乙女おとめ―北欧アルディギア王家の紋章だ。

「そんな……どうして彼らが……!?」

　飛行船の甲かん板ぱんに立つ小柄な影に気づいて、古詠はうめいた。

　影の正体は、見慣れない白ト装ー束ブをまとった少年だ。

　華やかな黄金の装飾品が、彼の全身を飾り立てている。

　少年の肉体から無造作に放たれている魔ま力りよくは、地上にいる青年貴族のものと比べても見劣りしない。本来なら、この〝魔族特区〟にすら存在してはならないレベルの怪物だ。

　互いに数百メートルの距きよ離りを置いて少年と青年貴族は睨にらみ合い、しかし装甲飛行船は何事もなく洋上へと飛び去っていった。飛行船が向かっているのは絃神島の北方。日本本土の方角だ。

　そして古詠が再び地上に視線を戻したときには、青年貴族の姿は消えていた。

　海に沈んだはずの、暁あかつき古こ城じようたちの気配も消滅している。青年貴族が、彼らを連れ去ったのだ。

「なんなのよ……もう……」

　その場に取り残された古詠が、巫み女こ装しよう束ぞくの袖そで口ぐちを握にぎり締しめてこっそりと呟つぶやく。

　獅し子し王おう機き関かん三さん聖せいの肩書きを与えられたとはいえ、彼女はまだ十八歳。世界を滅ぼしかねない大だい災さい厄やくの襲しゆう来らいに対して、余裕があろうはずもない。

　もういや、と頭を抱える彼女の嘆きを、黒猫は聞こえなかったふりをして受け流す。

斯かくして包ほう囲い網もうは破られた。

破壊の爪つめ痕あとだけを残して、第だい四よん真しん祖そが〝魔族特区〟を離はなれていく。

だがそれは、新たなる騒そう乱らんの序章にすら至っていない。

真の脅きよう威いは絃神島から遠く離れた本土の湖底に、今もまだ眠り続けているのだから。

世界最強の吸血鬼すら霞かすむ脅威が、今もまだ――

第一章 凍える水面

On The Frozen Lake

1

「―っくし！」

神かん縄なわ湖こと名付けられたダム湖を見下ろす、山奥の神社。朝あさ霧ぎりに煙けむる境内けいだいに響ひびき渡ったのは、とある中年男の豪快なくしゃみだった。

暁あかつき牙が城じよう、というのが男の名だ。

日焼けした肌に、不敵な顔立ち。前髪はナイフで無造作に切ったように不ふ揃ぞろいで、顎あごには無ぶ精しよう髭ひげが目立っている。本職は考古学者のはずだが、どちらかといえば時代遅れのマフィアの一員か、あるいは流は行やらない私立探偵―そんな雰ふん囲い気きの男だった。

「うー……寒さみィ。やっぱ本土の朝は冷えるな、畜ちく生しよう」

腕立て伏せを中断した牙城が、汗まみれの身体からだをタオルでぬぐう。

牙城がいる場所は、古い土ど蔵ぞうの中だった。鬱うつ蒼そうと樹木の茂る鎮ちん守じゆの森の奥。神社の本ほん殿でんから半ば隔かく離りされたような場所に建てられた、土壁造りの建物である。

床は畳張りで、それなりに快適ではあるが、窓の位置は高く、外の様子はほとんどわからない。もちろんテレビやパソコンなどの情報端末も置かれていない。建物の出入口には頑がん丈じような鉄てつ格ごう子しが設置され、複雑な錠じよう前まえで何重にも施せ錠じようされている。いわゆる座ざ敷しき牢ろうというやつだ。

おまけに彼の足首には、鎖付きの足あし枷かせが嵌はめられている。

要するに牙城は、軟禁されているのだった。

この神かみ緒お多だ神社を訪れてからの約一週間──牙城はこの座敷牢から一歩も外に出ていない。

だが、そのわりに彼の表情には余裕があった。

畳の上にあぐらをかき、外にいる見張り役の少女に親しげな口調で呼びかける。

「おーい、唯ゆい里りちゃん、朝メシまだー？」

「そ、そんなふうに馴なれ馴なれしく呼ばないでください！」

頬を真っ赤に染めながら土蔵に入ってきたのは、高校生とおぼしき制服姿の少女だった。身長は百六十センチにやや満たない程度。髪型は清せい楚そな雰囲気のミディアムボブで、サイドに流した前髪をリボン型のヘアピンでまとめている。

彼女が背中に背負っているのは、全金属製の銀色の長ちよう剣けんだ。真ま面じ目めそうな女子高生と無ぶ骨こつな白はく兵へい武器の組み合わせは、正直あまり似合っているとは言い難い。

そんな唯里と呼ばれた少女は、土蔵の鉄格子越しに牙城を見て、ひっ、と怯おびえたように息を呑のんだ。

「な、なんで裸なんですかっ!?」

「あー、これか。日課なんだよ、トレーニング」

上半身裸の暁牙城が、全身に白い湯気をまといながら答えてくる。

「ほら、俺おれもいい歳としだろ。油断してると腹回りに肉がついちゃって困るんだよな。ただでさえ、こんな狭い場所に閉じこめられて運動不足だってのによ」

「だ、だからって、そんな恰かつ好こうで……！」

唯ゆい里りが目元を覆おおいながら必死に反論した。幼いころから全寮制女子校で育った彼女にとって、男性の裸身を生で見るのは、物心ついて以来ほぼ初めてだ。おまけに本人の言葉とは裏腹に、ギリシャ彫刻ばりの筋肉に覆われた牙が城じようの肉体は、唯里の恐怖を誘うのに十分だった。

　しかし牙城は、唯里の心情などお構いなしに畳の上にごろりと寝転がって、

「唯里ちゃんも一緒にどうだ？　ストレッチを手伝ってもらえるとありがたいんだが」

「ス、ストレッチ……!?」

「そうそう。ほら、おじさんと一緒に気持ちいいことしようぜ」

　妖あやしく手招きしてくる牙城から、唯里は表情を引き攣つらせて後ずさる。

　もちろん唯里もストレッチの重要性は理解していた。筋トレ後に柔軟体操をするのは理に適かなっているし、二人組でしか行えないストレッチがあることも知っている。

　しかし暁あかつき牙城のストレッチを手伝うということは、当然、彼の身体からだに触れなければならないわけで、場合によっては互いに身体を密着させることもあり得る。あの男の筋肉に触った上に、肌と肌をくっつけてしまうのか。これが大人への階段を上るということなのか。男の人の相手は初めてなのだが、痛くされたりしないだろうか──などと、唯里が軽くうろたえていると、

「──って、ぬお!?」

　寝そべる暁牙城の耳元スレスレに、ズドッ、と金属製の矢が突き刺さった。狙ねらいが数センチ外れていたら、彼の左耳は根元からちぎれていたはずだ。

「唯里を誘惑するな、ケダモノめ！」

「し、志し緒おちゃん……!?」

　唯里が驚きよう愕がくの表情で、自らの背後を振り返る。

　牙城に憎悪の眼まな差ざしを向けていたのは、銀色の洋よう弓きゆうを構えた黒髪の少女だ。背格好は唯里とほぼ同じ。両サイドだけを長めに残したショートヘアのせいか、気の強そうな印象を受ける。

　彼女が着ているのは唯里と同じ制服だ。その制服のスカートの下

から新たな矢を取り出して、彼女は再び牙城に狙いをつけようとする。

　しかし牙城は、志緒の足元に置かれた食事のトレイを目め敏ざとく見つけて、

「おっ、メシだメシだ」

「ふ、服を着ろ！　馬ば鹿かっ！」

　上半身裸のまま距きょ離りを詰めてくる牙城を見て、焦あせった志緒が矢を取り落とした。

　牙城は鉄格子に身体を預けて、志緒のほうへと身を乗り出し、

「ところで、志緒ちゃんさ」

「あ、あなたにちゃん付けで呼ばれる筋合いはない」

「んじゃ、志し緒お。いつまで俺おれをこんなところに入れとく気だ？　おまえらいちおう政府の特務機関なんだろ。善良な一般市民を拉ら致ち監かん禁きんしていいのかよ？」

「市民を保護するための緊急措置だ。問題ない。というか、呼び捨てもやめろ！」

「緊急措置……ね」

　志緒から食事のトレイを受け取りつつ、ふむ、と牙が城じようは唇くちびるを斜めにした。

　トレイに載っているのは、缶入りの五ご目もく飯めしにたくあん漬け、牛肉の野菜煮という組み合わせ。メニューとしては豪華だが、明らかに保存食だとわかる組み合わせだ。

「それに牙城さんの拘束は、緋ひ沙さ乃の様の指示なんです」

「いまだに信じられないが、あなたはあの方の息子なのだろう？」

「ちっ……またあの婆ばばあか」

　唯ゆい里りと志緒の弁明を聞いて、牙城はうんざりと舌打ちした。

一週間前。神かみ緒お多だ神社を訪れた牙城を不意討ちで気絶させ、この座ざ敷しき牢ろうに放りこんだのが、ほかならぬ牙城の実の母親、緋沙乃だった。

それ以来、緋沙乃は姿を見せず、牙城はなにひとつ事情を知らされていない。孫娘を連れて帰省した息子への仕打ちとしては、最悪といっていいだろう。

「いい歳としこいて実の息子を虐ぎやく待たいしやがって。あれはロクな死に方しねえな。で、その婆さんは今なにをしてるんだ？」

「あなたがそれを知る必要はない。というか、食べるか喋しやべるかどちらかにしろ！」

口に食べ物を含んだまま質問してくる牙城を睨にらんで、志緒が不ふ機き嫌げんそうに目を細める。

しかし牙城は、出された料理にひととおり口をつけると、

「ふーん。自衛隊が動き出したのか。いよいよだな」

何気ない口調でそう言い切った。それを聞いた志緒たちの顔が青ざめる。

「獅し子し王おう機き関かんと連携してるってことは、習なら志し野のの特殊攻こう魔ま連れん隊たいあたりだな。指揮してるのは獅子王機関の三さん聖せいクラス……目的は神かん縄なわ湖こ底ていの〝黒殻アバロン〟かい？」

「暁あかつき牙城、あなた……なぜそれを……!?」

志緒が運んできた料理は、神社で調理されたものではなく、戦せん闘とう糧りよう食しよくの一種だった。簡単な調理だけで食事が摂とれるように、あらかじめ加工された自衛隊の装備品だ。

その戦闘糧食が配給されたということは、志緒たち獅子王機関の関係者から、調理に手間をかける余裕が失われたことを意味している。ついに本格的な作戦行動が始まったということだ。

たかが食事内容の変化から、暁牙城はそれを正確に言い当ててみせた。

　今回の獅子王機関と自衛隊の連携は、機密度の高い極秘プロジェクトだ。作戦開始の正確な日時は、唯里たちにも知らされていない。そんな重要な情報を、うっかり部外者に洩もらしてしまったことに気づいて、唯里と志緒は動揺する。そして、

「相変わらず小こ賢ざかしいことですね、牙城。いったい誰だれに似たのでしょうか……」

「ひ……っ！」

「緋ひ沙さ乃の様!?」

　立ち尽くす唯ゆい里りと志し緒おの背後に現れたのは、合気道風の道着を身に着けた老女だった。

　背筋がすらりと伸びているためか、実際の身長以上に背が高く見える。長い白はく髪はつは背中で無造作に結われていた。頬ほおには年齢相応の深いしわが刻まれているが、凛りんとした彼女の佇たたずまいは、若かりしころの美貌の面影を色いろ濃こく残している。

　牙が城じようはそんな老女を見上げて、ふて腐くされたように頬ほお杖づえを突く。

「ようやくお出ましかよ、妖よう怪かい蛇じや骨こつ婆ばあ」

「誰だれが妖怪ですか、失敬な」

　苛いら立だちを圧おし殺したような口振りで、緋沙乃は言った。

　ギスギスとした異様な親子のやりとりを、唯里たちは息を殺して見守っている。

　緋沙乃の表向きの役職は、神かみ緒お多だ神社の巫み女こたちをまとめる巫ふ司しだ。神しん職しよくとしてはそこそこの地位だが、唯里たちの直接の上司というわけではない。

　しかし緋沙乃は、過去、数多くの魔ま導どう災さい害がい鎮ちん圧あつに攻魔師として協力しており、獅し子し王おう機き関かんを含む多くの組織で呪じゆ術じゆつ教官を務めていた。彼女の教え子の多くは、今でも現役の国家攻魔官として活かつ躍やくしている。つまり唯里や志緒にとっては、師匠の師匠に近い立場の人物だ。本

来なら、直接話しかけることもためらわれる相手である。緊張するな、というほうが無理だった。

「凪なぎ沙さは？」

　牙城が、攻撃的な視線を緋沙乃に向けて訊きく。

　この座ざ敷しき牢ろうに囚とらわれたあと、牙城は、娘である暁あかつき凪沙と一度も顔を合わせていない。凪沙が体調を崩くずしたというわずかな情報を、唯里たち経由で与えられただけだ。

「もちろん無事ですよ。身体からだのほうもようやく回復しました」

　表情を変えずに緋沙乃が告げる。

　牙城は空からになった戦せん闘とう糧りよう食しよくの缶を眺めて、そうか、と静かに呟つぶやいただけだった。

「……やはり黒殻アバロンの存在を知った上で、凪沙を連れてきたのですね」

　緋沙乃が責めるような視線を息子に向けた。

　そんな母親を挑発的に見上げて、牙城は笑う。

「あいつを救えるなら、なんだってするさ。それはあんたも同じだろ？」

　一いつ瞬しゆん、息を詰まらせたように沈ちん黙もくして、緋沙乃は深々と溜ため息いきをついた。

「牙城、あなたはどこまで覚えているのですか？」

「覚えてる……？」

　なにをだ、と牙城が眉まゆを寄せた。

　その反応を冷ややかに見据えて、緋沙乃はさらに質問を重ねる。

「あの兄妹きようだい……古こ城じようと凪沙のことを？」

「ぐ……っ！」

緋ひ沙さ乃のの口調は穏おだやかだったが、牙が城じようの反応は劇的ですらあった。

戦せん闘とう糧りよう食しよくの缶を畳の上に落とし、苦く悶もんするようにその場に倒れこむ。

牙城の頬ほおからは血の気けが失われ、噛かみしめた奥歯の隙すき間まから苦痛のうめきが洩もれた。脳そのものをかき回されているような激痛が彼を襲おそっているのだ。

「やはり記憶を喰われているのですね。〝焔えん光こうの宴うたげ〟―第だい四よん真しん祖その復活の後遺症で」

緋沙乃が哀あわれむような口調で独ひとりごちた。

暁あかつき牙城は、自分の子どもたちの記憶の大部分を失っている。自分がそれを失った理由すら、今の彼にはわかっていない。古こ城じようや凪なぎ沙さがそのことに気づいていないのは、牙城が事前に周到な準備を施ほどこし、そして必死の演技を続けてきたからだ。

「てめェ……なにを知ってやがる、婆ばばァ!?」

感情を剝むき出しにして、牙城が怒ど鳴なった。

「緋沙乃様……！」

「危険です！　もうこれ以上は……」

激げつ昂こうする牙城の姿を見かねて、唯ゆい里りと志し緒おが同時に叫ぶ。

緋沙乃はそんな二人を一いち瞥べつし、

「斐ひ川かわ志緒には、引き続きこの男の監視を任せます。儀ぎ式しきが終わるまでは、決して目を離はなさないように。羽は波ば唯里は、わたくしと一緒に来なさい」

「は……はい」

緋沙乃の迫力に気け圧おされて、唯里と志緒は諾だく々だくとうなずいた。しかし二人の瞳ひとみには、困惑の色がありありと浮か

んでいる。

「儀式……だと!?」

　苦しげな呼吸を続けながら、牙城が喚わめいた。

　鉄てつ格ごう子しに指をかけ、必死に緋沙乃に詰め寄ろうとする。

「おまえら、凪沙を使ってなにをする気だ……!?」

「あなたがやろうとしたのと同じことですよ、牙城」

　緋沙乃の口調は穏やかなままだった。

　凪ないだ湖のように平へい坦たんな声こわ音ねで、彼女は告げた。

「アヴローラ・フロレスティーナを殺します。今度こそ、完全に――」

2

　暁凪沙は、浴よく槽そうの縁へりに頭を載せて、のんびりと溜ため息いきをついていた。

　神かみ緒お多だ神社の巫み女こたちが暮らす社寮の大浴場。岩いわ風ぶ呂ろ風の天然温泉だ。

　まだ早朝ということもあって、浴場内にはほかの人影はない。広々とした浴よく槽そうを独占して、凪なぎ沙さは朝あさ風ぶ呂ろを満喫していた。

「ふー……気持ちいー……」

　ぷかぷかと澄んだ水みな面もを漂ただよいながら、凪沙が満足げな呟つぶやきを洩もらす。

　浴よく槽そうの泉せん温おんは約四十度。熱すぎず温ぬるすぎず

の心地ここち好よい温度だ。噂うわさによればこのお湯の効能は、筋肉痛や関節痛の治ち癒ゆ、病後回復や美肌効果など。そしてなによりも重要なのは、この温泉が消耗した霊れい力りよくを癒いやす優すぐれた霊れい泉せんということだった。

一週間前、神かみ緒お多だ神社に着くなり、凪沙はなぜか意識を失って倒れてしまい、それからずっと寝こんでいたのだ。冬休みを利用しての四年ぶりの帰省が、おかげで見事に台無しである。

そんな凪沙に対して祖母の暁あかつき緋ひ沙さ乃のが命じたのが、この温泉を使っての湯とう治じだった。

要は時間が許す限り風呂に入って、体力を回復させろ、ということらしい。凪沙がこうして朝から温泉に浸つかっているのは、それが理由だ。

水が合うという言葉があるが、実際、凪沙の肉体は神緒多の霊泉によく馴な染じんだ。

絃いと神がみ島じまという巨大な龍りゆう脈みやくから離はなれたことで、力を失った巫み女こである凪沙は、無自覚に体力を消耗していたのだろう。それがこの霊泉の力を借りて、ようやく回復しつつある。そんな実感が凪沙の気分を明るくさせていた。

「やっぱり温泉はいいよねえ。雪ゆき菜なちゃんたちも一緒に来られたらよかったなー。古こ城じよう君も心配してるよね。留守電、聞いてくれたらいいんだけど」

絃神島に残してきた実じつ兄けいとクラスメイトのことを思い出し、凪沙は誰だれに言うともなく呟いた。独ひとりぼっちの入院生活が長かった反動か、やたらに口数が多いのは凪沙の悪あく癖へきだ。

いきなり寝こんでしまった上に神社の所在地が携帯電話の圏外ということもあり、古城とはこの一週間、まったく連絡が取れていなかった。凪沙に対して過保護な彼のことだから、今ごろは大おお騒さわぎしているに違いない。

いちおう古城の携帯の留守番電話サービスには、昨夜のうちに事情を吹きこんでおいたのだが、彼がそれに気づいたかどうかは定かではなかった。焦あせりのあまり、古城が無む茶ちやな行動に出て

いなければいいのだが、と凪沙は余計な心配をしてしまう。

「そういえば前にここに来たときは、古城君と一緒にお風呂に入ったんだっけ……」

　互いに小学生だったころのことを思い出し、凪沙は真っ赤になりながら顔面を水中に沈める。慣れない岩風呂がなぜか恐こわくて、古城を無理やりつき合わせたのだった。

　さすがに今となっては兄妹きようだい一緒に入るのは無理だろうが、そのことが若じやつ干かん寂しくもある。

　いや待て水着着用という手もあるか、と凪沙が真ま面じ目めに検討を始めた、その直後──

　ガラガラガッシャンッ、とド派手な騒そう音おんが浴場に鳴り響ひびいた。

　少し遅れて、ひゃあっ、と頼りない悲鳴も聞こえてくる。

「だ、誰だれ!?」

　凪なぎ沙さは慌あわてて水すい面めんから頭を出して振り返った。

　積み上げてあった湯ゆ桶おけの山が崩くずれ落ち、その隣となりに尻しり餅もちをついている人影が見える。

　凪なぎ沙さと同い年くらいの小柄な少女だ。濡ぬれた岩で足を滑らせて、素っ裸のまま仰あお向むけに転倒してしまったらしい。

「ご、ごめんなさい。すみません、ごめんなさい」

　あうう、と弱々しい声を洩もらしながら、少女はもたもたと起き上がり、散らばった湯桶を片付け始める。見るからに大人しく、気弱そうな雰ふん囲い気きの娘だった。

　今にも泣き出しそうな不安げな表情をしているが、もともとそういう顔立ちらしい。

　生まれつきの体質なのか、彼女の髪の色は白かった。愛らしいホッキョクギツネの毛並みを連想させる、神こう々ごうしいまでの

純白だ。

　しかし凪沙の目を奪うばったのは少女の髪ではなく、彼女の裸の胸元だった。

「で、でかい……」

　少女の裸身をがっつり凝ぎよう視ししながら、凪沙はごくりと唾つばを呑のむ。

　小柄な体つきからは想像もつかないほどの巨大なふたつの膨ふくらみが、少女の動きに合わせて弾はずんでいた。形といいボリュームといい張りといい、凪沙の理想を体現したような美乳である。

　そんな凪沙の視線に気づいたのか、白はく髪はつの少女はおどおどとした態度で顔を上げ、

「あう……お、お見苦しい姿をお目にかけてしまいまして」

「いえいえ、そんな」

　結構なモノをお持ちで、と思わず声に出しかけて、凪沙はギリギリで思いとどまった。

　湯桶の整理を終えた白髪の少女が、身体からだを流して遠慮がちに湯船に入ってくる。神社の職員にしてはずいぶん若い。間違いなく凪沙とは初対面のはずだ。

「あのっ、ここの神社の方ですか？」

　なるべく感じのいい笑顔を作りながら、凪沙が訊きいた。

　白髪の少女は、少し慌あわてた様子で首を振り、

「ち、違います違います。ちょっとした事情があって、今だけお世話になってるんです」

「ああ。だったら、あたしと同じですね」

　少女に共感を覚えて、凪沙はにこやかに微笑ほほえんだ。祈き禱とうや憑つきもの落としのために、神かみ緒お多だ神社を訪ねてくる客は多い。彼女もそんな訪問者の一人なのだろう。

「わ、わたし、白しろ奈なといいます。闇くらき白奈」

　ぎこちない口調で名乗りながら、白髪の少女が頭を下げた。凪沙もつられてお辞じ儀ぎしながら、

「よろしくお願いします。えっと、あたしは―」

「し……知ってます。暁あかつき凪沙さん、ですよね」

　凪沙が自己紹介をする前に、白奈が凪沙の素す性じようを言い当てる。凪沙はぱちぱちと目を瞬またたいて、

「そうだけど……どうして……？」

「緋ひ沙さ乃の様のお孫さんが来てると聞いていたので」

「そっか。お祖ば母あちゃんのことを知ってるんだ」

「はい」

　白しろ奈なはおずおずとうなずいて、自分の胸元に目を落とした。彼女の胸の膨ふくらみが、ほんのりと桜色に染まりながら、透明な水みな面もに浮かんでいる。深い胸の谷間が作り出す絶景は、氷河に彩いろどられた美しいフィヨルドを連想させた。

　凪なぎ沙さが一いつ瞬しゆん、我を忘れて、喰くい入るようにその光景を見つめていると、

「あの……もしよかったら、触ってみますか？」

　もじもじと頬ほおを赤らめながら、白奈が自分の胸を凪沙に向けた。

「え？　いいの!?」

「す、すみません……なんだか、気にしてるみたいだったので……」

　戸と惑まどう凪沙に、白奈が言う。凪沙は、ぴくり、と両手の指先を反応させて、

「う、うん。実は……でも、本当にいいの？」

「はい。こんなもので喜んでいただけるなら」

「じゃ、じゃあ遠慮なく！」

　白奈の気が変わらないうちに、と彼女の胸に触れる凪沙。包みこむように丸めた凪沙の掌てのひらから、白奈の巨乳がこぼれ落ちる。あ……と白奈の唇くちびるからかすかな吐息が洩もれた。

「おお、こ、これは……！」

　いまだ経験したことのない手触りに、凪なぎ沙さのテンションが一気に上がる。密着した掌てのひらに伝わってくるのは、ずっしりと心地ここち好よい重量感だ。

「柔やわい……それでいて、このしっとりとした弾力。吸いつくような肌触り……絶品だよ！」

「う……う……」

　白しろ奈なは唇くちびるを噛かみながら、凪沙の蹂じゆう躙りんに耐えている。恥じらいに満ちたその表情が、凪沙の気分を更さらに盛り上げた。白奈の胸をもむ手に思わず力が入ってしまうが、それを上回る弾力で、凪沙の指先は押し返される。その至福の触感に、凪沙は恍こう惚こつの息を吐いた。

「ふわあああ……危なかった……意識が遠のくところだったよ……」

　たっぷりと白奈の胸を堪たん能のうして、凪沙は名残なごり惜しそうに手を離はなした。

　白奈は顔を真っ赤にしてうつむいたまま、

「ま、満足していただけましたか……？」

「うん。いやー……気持ちよかったよ。ありがとね」

「そう……ですか」

　涙で潤うるんだような眼まな差ざしで、白奈が凪沙を見返してくる。そして白奈は、口元に妖あやしげな笑みを浮かべた。気配もなく伸びてきた彼女の右手が、凪沙の二の腕をそっと握にぎる。

「では、次はわたしの番ですね」

「へ……!?」

　白奈に唐とう突とつに引き寄せられて、凪沙は間の抜けた声を洩もらした。反射的に逃げ出そうとした凪沙を背後から抱き寄せて、白奈が肌を密着させてくる。

「ふふ……凪沙さんの背中、綺き麗れいです」

「ちょ、ちょっと、白奈さん……！」

「だめ。自分だけ他ひ人とのことを触るのはなしですよ」

　耳元に息を吹きかけられて、ひっ、と凪沙は全身を硬直させた。電気が流れたような感覚が背筋を這はい上のぼり、手脚に力が入らない。

「で、でも、ほら、凪沙なんて幼児体型だし、白奈さんみたいに立派じゃないし、朝ご飯食べすぎちゃってお腹なかぽっこりで……」

「いやいや。膨ふくらみきらぬ蕾つぼみには蕾の風情があるというものよ。己おのれに自信を持つがいい」

　必死の説得を続ける凪沙を嘲あざけるように、白奈がクッと喉のどを鳴らして笑った。

　先ほどまでの気弱げな彼女とは、まるで別人のように力強い口調だ。声こわ色いろも心なしか変わっていた。老人臭い口調のせいか、年齢不詳な印象を受ける。

「し、白奈さん……そ、そこはちょっと……ひゃっ!?」

「よいのう。熟うれる前の果実のような瑞みずみずしさがこたえられぬ」

　脇わき腹ばらあたりの敏感な部分を白奈に触れられて、凪沙はたまらず悲鳴を上げた。そんな凪沙の初ういういしい反応に、白しろ奈なは嗜し虐ぎやく的てきな表情を浮かべている。

　今の白奈の人格は、さっきまでの彼女とは明らかに別物だ。多重人格、あるいは憑ひよう依い―詳しい原理メカニズムは不明だが、なんらかの理由で性格が激変している。もしくは今のこの白奈こそが、彼女本来の人格なのかもしれない。

　ともあれ白奈の急激な変化に、凪なぎ沙さは為なすすべもなく翻ほん弄ろうされる。

「くっくっ……なかなか弄いじりがいのある身体からだじゃな。ここはどうかの？」

「や……白奈さん、だ……だめ……」

「おうおう、よい手て応ごたえじゃ。ほれ、ほれ」

「んんっ!?」

凪沙の太ふと腿ももの内側を、白奈がそっと撫なで上げる。ぐったりと脱力した凪沙は、半ば朦もう朧ろうとした状態で水みな面もに仰あお向むけに浮かんでいた。そんな凪沙の首筋に、白奈が舌を這はわせてくる。白奈の白い髪が自ら意思を持つように動いて、凪沙の肌にそっと巻きついた。

「白奈さん、あなたは――！」

凪沙が大きく目を開いて白奈を見た。弛し緩かんしていたはずの凪沙の全身が、恐怖で再び強こわ張ばった。凪沙が見ているのは白奈本人ではなく、彼女の内側に潜ひそむ異質の魂たましいだ。

「さすが緋ひ沙さ乃のの孫じゃな。儂わしの本性を、こうも簡単に見透かしてくれるか」

白奈が感心したような口調で告げてくる。彼女の束そく縛ばくから逃れようと、凪沙は必死に抗あらがうが――

「怯おびえずともよい。我は魔ま族ぞくに似て真なる魔族に非あらず。むしろ其方そなたに近しい存在よ――十二番目のアヴローラ」

「い、いやっ……！」

抵抗を続ける凪沙の瞳ひとみを、白奈が至し近きん距きよ離りからのぞきこんでくる。その瞬しゅん間かん、凪沙の意識が弾はじけ飛んだ。流れこんできた膨大な情報で、頭の中が真っ白に染まる。

「ああっ――」

力尽きたように動きを止めて、凪沙は眠りに落ちていた。はあはあ、と小刻みに繰り返される、浅い呼吸の音だけが浴場に響ひびいている。

そんな彼女を見下ろして、白奈は自らの唇くちびるをちろりと舐なめた。

意識をなくした凪沙の身体を、白奈は片手で抱き上げる。

そして白奈はそのまま浴よく槽そうを出た。彼女が左手を一いつ閃せんすると、虚こ空くうから真新しい白しろ装しょう束ぞくが現れる。それを横たえた凪沙の肩にかけ、白奈は自らも新たな白装束を羽は織おった。

それが合図になったように、金色に輝かがやいていた白奈の瞳から光が消えた。

元の気弱げな表情に戻った白奈は、目の前で倒れている凪沙に気づいて息を呑のむ。

「ごめんなさい……ごめんなさい……」

凪沙の寝顔にそっと囁ささやきかけて、白奈は静かに目を閉じた。

闇くらき白しろ奈なにはふたつの意思がある。ひとつは何世代にもわたって引き継がれてきた闇くらきの意思。そしてもうひとつは、闇くらきの力の器うつわとしての彼女だ。

力の使つかい途みちを決めるのは闇くらきの意思だが、実際に力を操あやつるのは彼女──

彼女もまた闇くらきの原罪から逃れることはできないのだ。

ごめんなさい、と白奈はもう一度呟つぶやく。彼女の頬ほおを涙が流れ落ちていく。

自分が誰だれに赦ゆるしを請こうているのか、それすら理解できないままに。

3

神かん縄なわ湖こを一望できる展望駐車場には、自衛隊の車両が集結していた。

主体となっているのは、無人偵てい察さつ機きを運用するための管制車や整備用トラックだが、軽装甲機動車などの偵察車両、さらには大口径火器を装備した装輪装甲車までもが持ちこまれている。小さな都市のひとつふたつなら、制圧可能な規模の戦力だ。

彼らの所属は、防衛大臣直ちよつ轄かつの自衛隊・特とく殊しゆ攻こう魔ま連れん隊たい──

魔導災害対策専門の攻撃的な特殊部隊である。

場内に張られたテントの中では、無人機が集めた観測データの解析が、不眠不休で行われている。厳げん戒かい態勢が続いているせいか、オペレーターたちの表情には疲労の色が濃こい。

それでも、彼らの緊張感が途と切ぎれる気配はなかった。解析された観測データが、神縄湖底に異様な物体の存在をとらえていたからだ。

テントの中に漂ただよう張り詰めた空気に、羽は波ば唯ゆい里りもつられて表情を硬くする。

獅し子し王おう機き関かん所属の唯里は、この指揮所では完全な部外者だ。しかも見習い剣けん巫なぎである彼女にとって、今回の事件は事実上の初うい陣じんでもある。この状況で平静でいられるはずもない。所在なげにテントの隅すみに突っ立ったまま、唯里はただ唇くちびるを噛かんでいる。と、

「落ち着きなさい、羽波唯里。専門家のあなたが緊張してどうするのですか」

そんな唯里を力づけるように、道着姿の暁あかつき緋ひ沙さ乃のが穏おだやかに語りかけてくる。

かつて特殊降魔連隊の実技教官も務めていたという緋沙乃は、唯里とは対照的に、このテントの空気によく馴な染じんでいた。自衛隊の幹部連中からも信頼されているようだ。

それでいて冷ややかな印象はなく、足手まといな唯里のことも、こうして彼女は気にかけてくれている。すでに攻魔師としては一線を退しりぞいた緋沙乃が、いまだに多くの人々からの尊敬を集めている理由がよくわかる。

「す、すみません。わたし、こういうのは初めてで、どうしたらいいのかわからなくて──」

唯里はぎこちなく目を伏せて正直に伝えた。被ひ害がい妄もう想そうと自覚しつつも、邪じゃ魔ま者ものを見るような自衛官たちの視線が恐こわい。

「ですから、少し力を抜きなさい、と言っています。あなたも獅し

子し王おう機き関かんの剣けん巫なぎなら、理屈ではなく己おのれの感覚に頼りなさい。その霊視力めを買われて、あなたはここにいるのでしょう？」

「は、はい」

　緋ひ沙さ乃のの言葉に、唯ゆい里りが気を引き締める。

　唯里のような小娘がこの指揮所にいるのは、霊れい能のう力りよく者しやとしての鋭敏な感覚を期待されているからだ。それを緋沙乃が説明したことで、自衛官たちも納得したのだろう。彼らが唯里に対して抱いていた警戒心や反発も、心なしか和やわらいだように感じられた。

　指揮所の空気が変わったことで、ようやく落ち着きを取り戻し、唯里は眼下の神かん縄なわ湖こに意識を向けた。うっすらと朝あさ霧ぎりに包まれて、神縄湖は静かに凪ないだ水みな面もを晒さらしている。

　目に見えるような異常はどこにもない。美しくもありふれた観光地だ。

　しかし唯里の霊れい媒ばいとしての感覚は、湖底に存在する濃のう密みつな力の塊かたまりをとらえていた。神こう々ごうしくもなければ、禍まが々まがしさも感じない。ただ圧倒的に異質な霊気の集合体だ。

　自衛隊の水中探査機も、その塊の存在を確認している。陽炎かげろうのようにゆらゆらと形を変えるその物体は、貝殻の真珠層に似ていることから黒殻アバロンと名付けられていた。

　すべてを拒絶するような黒い障しよう壁へきに囲まれて、内部の様子はわからない。

　唯里の霊視をもってしても、黒殻アバロンの素す性じようまでは見透かすことができずにいた。ただ、胸の奥がざわつくような、不吉な予感があるだけだ。

「―黒殻アバロンの現状は？」

　新たにテントに入ってきた迷めい彩さい服ふくの男性が、慌あわただしい口調でオペレーターに訊いた。

年齢はおそらく三十歳前後。猟りよう犬けんを思わせる風ふう貌ぼうの、背の高い男だ。部隊指揮官の安あ座ざ真ま三等特佐である。二時間足らずの短い仮眠を終えて、指揮所に戻ってきたらしい。

待機中の緋沙乃と唯里に気づいて、安座真は短く敬礼する。唯里のような小娘を見ても、侮あなどるような態度は見せない。若いが有能な指揮官なのだ。

「活性化が進行しています。殻かく内ない圧力は四十八時間で一・二五パーセントの上昇。表面の魔ま力りよく濃のう度どは基準値の七百七十四倍──危険域です」

オペレーター席の女性自衛官が、感情を殺したような口調で安座真に報告する。

「速いな」と安座真が低い声で呟つぶやいた。

「はい」女性オペレーターがかすかに声を震ふるわせる。「このペースで魔力濃度が上昇を続けた場合、十日以内に付近の生態系に深刻な影えい響きようが発生します。最悪の場合、市街地にまで被害が及ぶ可能性も──」

「そうなる前に事態を収拾する。そうですね、暁あかつき師範せんせい？」

「ええ、もちろん」安座真の呼びかけに、緋沙乃がうなずく。「古来、蜂蛇ホウダが覚かく醒せいの兆きざしを見せるたびに、神かみ緒お多だ神社は、それをことごとく鎮しずめてきました。今回も例外ではありません」

「蜂蛇ホウダ？」安座真が眉まゆを寄せる。「それが黒殻アバロンの中に眠っている存モ在ノの名前ですか？」

「古い文献には、そう記されています。神縄湖などという無ぶ粋すいな水みず溜たまりが造られる前の記録ですが──曰いわく、蜂蛇ホウダとは災さい厄やくの先触れである、と」

「災さい厄やく……ですか」なるほど、と安あ座ざ真まは不敵に微笑ほほえんで緋ひ沙さ乃のを見た。「神かみ緒お多だ神社は、その災厄を鎮しずめるために置かれた社やしろというわけですね」

「そう思っていただいて差し支えありません」

「つまり今回のような黒殻アバロンの異常活性化を止める方法も、あなた方には伝わってるのですか？」

「それを知っていたから、獅し子し王おう機き関かんも私の作戦参加を認めたのでしょう……白しろ奈な？」

　緋沙乃が、振り返ることもなく唐とう突とつに誰だれかに呼びかけた。

　その瞬しゆん間かん、唯ゆい里りの背後でゆらりと空気が揺れた。えっ、と思わず驚おどろきの声が洩もれる。

　そこに立っていたのは、純白の髪の小柄な少女だ。見習いとはいえ、獅子王機関の剣けん巫なぎである唯里が、こんな至し近きん距きよ離りまで彼女の接近に気づかないなど、あってはならないことだった。

「もちろん、そういうことになろうかの」

　澄すんだ声──しかし老女のような独特の口調で、白はく髪はつの少女が緋沙乃に言った。

「闇くらき卿きよう……」

　安座真が少女に呼びかけた。美しい白髪を揺らして振り返り、白奈は笑う。

「久しいの、安あ座ざ真ま三佐。息災でなによりじゃ」

「闇くらき……って、三さん聖せいの……!?」

　唯里は咄とつ嗟さに抜いた剣を慌あわてて下ろし、全身を緊張で強こわ張ばらせた。

　闇白奈は獅子王機関三聖の一人──獅子王機関の長ちようにして、日本最強クラスの攻こう魔ま師しだ。唯里ごときが刃やいばを向ければ、殺されても文句を言えない相手である。

　しかし白奈は唯里には目もくれず、傍そばにあったパイプ椅い子すの上に勝手にあぐらをかいて、

「神緒多の社やしろに伝わる秘ひ儀ぎ、我らが使わせてもらうぞ、緋沙乃。よもや文句はあるまいな？　これは本来、其方そなたの務め。そして其方の孫娘を救うためでもあるのじゃからな」

　挑発するような白奈の言葉に、緋沙乃は厳おごそかにうなずいた。

「儀式の詳細、ほかの三聖は？」

「閑しずかは知らぬ。あの娘は、ああ見えて潔癖なのでな。知らせぬほうがよかろうよ」

　白奈は微笑ほほえんで首を振る。悪戯いたずらがばれた子どものような表情だ。

「……正直、意外でした。あなたがこれほどの強硬手段を選ぶというのは」

　緋沙乃が諦てい観かんしたように息を吐く。彼女の言葉の不ふ穏おんな響ひびきに、唯里は再び身を硬くした。

　白奈が実行しようとしている儀ぎ式しきは、おそらく危険な賭かけなのだ。獅子王機関三聖の間でも、意見が分かれてしまうほどに。しかし今さらやめろと言っても、白奈が説得に応じることはないだろう。それを知る緋沙乃の表情は、どこか投げやりですらあった。

「其方の孫と、少し話をしたよ」

　そんな緋沙乃に、白奈が優しく語りかける。まるで年下の娘をあやしているような口振りだ。

「人ひと懐なつこい子じゃな。若いころの其方そなたを思い出す。儂わしらが初めて出会ったのも、其方がちょうどあの娘と同じ年のころであったな」

「白しろ奈な……あなたは……」

　なぜかつらそうな表情を浮かべた緋ひ沙さ乃のに、白奈はふてぶてしく笑ってみせた。

「すまんが、儂わしはほかの三さん聖せいと違って、政府のために

動いておるわけではない。〝聖せい殲せん〟の脅きよう威いを除くためなら手段は選ばぬ」

「〝聖せい殲せん〟の脅威……殺さつ神じん兵器、ですか……」

緋沙乃の視線が鋭さを増した。そして彼女は、ふと思いついたように唯ゆい里りに向き直る。

「あなたはどう思いますか、羽は波ば唯里？」

「え!?　わ……わたしですか……!?」

いきなり話を振られて唯里が焦あせる。見習い剣けん巫なぎである唯里に、最高ランクの機密情報である〝聖せい殲せん〟のことを訊きかれても答えられるはずがない。そもそも唯里には黒殻アバロンの正体や、今回の作戦の具体的な内容すら知らされていないのだ。

「あの……でも、脅威というのは少し違うんじゃないかって……」

追い詰められて狼ろう狽ばいした優里は、なかば自や棄けになって感じたことをそのまま口にした。緋沙乃の眉まゆがかすかに動く。

「違う、とはどういうことですか？」

「その……つまり、あの黒殻アバロンは、災さい厄やくそのものではない気がするんです。あれはただ眠ってるだけっていうか、なにかを護まもってるっていうか……あの……だから……」

たどたどしい説明を続ける唯里の声が、しだいに小さくなっていく。

もとより確固たる根拠があって発言しているわけではないのだ。正直、自分がなぜそう感じたのか、唯里も理解しているとは言い難い。

しかし緋沙乃は、唯里を責めようとはしなかった。唯里の瞳ひとみをじっと見つめたまま、なにか思案するように彼女は沈ちん黙もくし、

「白奈……私の代わりに彼女を連れて行ってもらえますか？」

緋沙乃の言葉を聞いた白奈が、ほう、と愉快そうに呟いた。唯里のような未熟な剣巫を、緋沙乃が、自らの代役として指名したことが意外だったらしい。

「面白い。儂は構わぬよ」

「え？　緋沙乃様の代わりって……え!?」

動揺したのは唯里のほうだった。具体的な作戦内容は知らされていなくても、今回の儀式の重要性は唯里にもよくわかっている。しかも緋沙乃の孫娘の命もかかっているという。

そんな状況下で、伝説的な攻こう魔ま師しである緋沙乃の代役が自分に務まるとは、唯里にはとても思えない。しかし白奈は、そんな唯里の困惑など、もちろんーいつ顧こだにしなかった。

「さて、では始めようか。準備は良いな、安あ座ざ真ま三佐」

純白の巫み女こ服ふくを着た白奈が一方的に宣言する。その瞬しゆん間かん、自衛隊のテントの中に、剃刀かみそりで薙ないだような緊張が走った。緋ひ沙さ乃のは無言のまま目を伏せ、唯ゆい里りは緊張に両手を握にぎり締しめた。

始めようか、と白しろ奈ながもう一度繰り返す。

かつて第四真祖だった存モ在ノを殺すための儀式をな―と。

4

暁あかつき凪なぎ沙さは水の中に浮かんでいた。見渡す限りの透明な檻おり。周囲は深い空のように青く澄すんで、ゆらゆらと揺らめく光の帯が、頭上の水面から雨のように静かに降りそそいでいる。

息苦しくも、寒くもない。柔らかな宝石の中を漂ただよっているような不思議な感覚だ。

「ここ……どこ？」

凪沙はゆっくりと視線を巡らせながら呟つぶやいた。解ほどけた長い髪が、熱帯魚の尾びれのように彼女の動きに追従してくる。そして、ほかに凪沙の身を隠かくすものはなにもない。水みな面もから射しこむ淡い光が、凪沙の白い素肌の上に、波のような幾き何か学がく模も様ようを描いている。

「え!?　あたし、なんで裸!?　そういえばたしか神社のお風ふ呂ろで―」

もしかして夢を見ているのか、と凪沙は自分の頬ほおに触れてみる。呼吸や体温の心配をすることもなく、水の中に潜もぐっていられるという状況は、もちろん現実ではあり得ない。

しかし凪沙には、これが夢ではないという確信があった。

目に映る景色はあまりにも繊せん細さいで、想像では補えない現実感に満ちていた。凪沙自身の意識も明めい瞭りようだ。むしろ目覚めているときよりも知覚が冴さえているような実感がある。

その鋭敏な感覚で凪沙がとらえたのは、彼女に寄り添うように水中をたゆたうほかの誰だれかの存在だった。白はく髪はつの少女の小柄な身体からだが、凪沙を背後から支えている。

「目覚めて……ますか、凪沙さん」

「白奈ちゃん!?」

闇くらき白奈に呼びかけられて、凪沙は声の方角に身体を向けた。その瞬間、バランスを崩くずして沈みそうになった凪沙の腕を、白奈が素早く引き寄せる。

「寒くはありませんか？」

「あ、はい」

白奈の肌の温ぬくもりを背中に感じて、むしろ気持ちいいです、と凪沙は危うく口に出しかけてやめる。今の状況が現実なのかどうかはわからない。が、凪沙に触れる白奈の柔らかな弾力は、最初に彼女に出会ったときと同じだ。

「あの、ここは？」と凪沙が訊きいた。

「神かん縄なわ湖こです。やっぱり水中のほうが霊れい体たいを安定させやすいので」

「湖の……中？」

「凪沙さんの意識だけを、切り離はなさせてもらいました。幽ゆう体たい離り脱だつ……みたいなものです」

「え？　幽体離脱？」

　白しろ奈なの説明に驚おどろいて、凪なぎ沙さはうっすらと透きとおる自分の身体からだを見下ろした。

　自分が幽ゆう霊れいになったという実感はさすがに湧わかないが、言われてみればもろもろ腑ふに落ちる。水の冷たさや息苦しさを感じないのも、霊体ならば当然のことだ。

「じゃあ、今の白奈さんも生いき霊りようってこと？　凪沙たちの本当の身体はどこ？」

「それは今……神かん縄なわ湖この祭さい壇だんに」

「祭壇？」

　凪沙は頭上へと意識を向ける。直接視認できる距きよ離りではなかったが、幽体離脱の恩恵か、祭壇の存在はすぐに感じられた。

　陽光にきらめく水みな面もに、神楽かぐらの舞まい殿どのに似た小さな祭壇が浮かんでいる。

　小舟を連結させて造った木製の簡易祭壇だ。

　祭壇上にいるのは、銀色の長ちよう剣けんを持った制服姿の少女――

　彼女に見守られるような形で、巫み女こ装しよう束ぞくを着せられた凪沙が横たえられている。

　見慣れた自分自身の姿。ただ髪の色だけが、普ふ段だんの凪沙とは違っている。光の加減で刻々と色を変えていく金髪。逆さか巻まく炎のような虹にじ色いろの髪だ。

「違う……あの子は……あたしじゃない……」

「そう。彼女は、かつての第だい四よん真しん祖そアヴローラ・フロレスティーナ……十二番目のアヴローラです。私よりもあなたのほうが、彼女のことはよく知っているはず……ですが」

　白奈の呟つぶやきが呼び水になって、凪沙の意識になにかが流れこんでくる。膨ぼう大だいな情報の奔ほん流りゆうに、凪沙の霊体が悲鳴を上げた。しかし同時に精神を縛しばっていた見えない鎖が、ばらばらにちぎれていく感覚がある。封印されていた記憶が甦よみがえり、闇やみに閉ざされていた景色が鮮明に見えてくる。

　黒き翼つばさ、眷けん獣じゆうたち、吸きゆう血けつ禍か、〝焔えん光こうの宴うたげ〟と〝原初ルート〟のアヴローラ──それは彼女が、自ら消したはずの忌いまわしい記憶だった。

　凪沙の中で眠り続けていた少女、十二番目のアヴローラの記憶──

「あの子を使って、なにをする気……？」

　押し寄せてくる記憶の断片に翻ほん弄ろうされながら、凪沙は白奈を見上げて訊きいた。

　白奈は泣き出しそうな表情のまま、ゆっくりと湖底を指し示す。

　彼女の示す方角を目で追って、凪沙は動揺に瞳ひとみを揺らした。得え体たいの知れない恐怖に襲おそわれて、寒気を覚える。湖底に埋うずもれるような姿で沈んでいたのは、巻き貝に似た闇やみ色いろの多面体だった。

　その表面は黒い真珠に似て、陽炎かげろうのように不規則に揺らいでいる。生物と人工物の特徴を兼ね備えた異質な物体──地上にあるいかなる物質にも似ていない。

「なに……あれ……」

「神かみ緒お多だの土地に眠る災さい厄やくを封じるための結界です。自衛隊の人々は黒殻アバロンと呼んでいますが」

　怯おびえたように呟つぶやく凪なぎ沙さに、白しろ奈ながぼそぼそと説明する。

「結界……あれが……？」

「大丈夫……です。大勢の人たちが、あれを鎮しずめるために動いていますから。獅し子し王おう機き関かんの攻こう魔ま師しや、自衛隊の特殊部隊も集結してます。緋ひ沙さ乃の様の采さい配はいです」

「お祖ば母あちゃんが……？」

「神かみ緒お多だ神社の本来の役目は災さい厄やくの眠りを見守り、鎮めること……ですから」

「鎮めるって……」

　凪沙はもう一度、湖底の黒い塊かたまりに視線を向けた。不規則にゆらめくその外がい殻かくは、内包された強大な魔力を封じこめた薄うすい膜のようにも見える。いつか内圧が限界に達して、紙風船のように弾け飛ぶのではないか──そう思わずにはいられない。

　あんなものをどうやって鎮ちん圧あつするというのだろう？　凪沙はそんな疑問を抱いだく。

「霊れい力りよくに優すぐれた巫み女こを人ひと柱ばしらとすることで、黒殻アバロンの封印を強化する……それが神緒多神社の神しん職しよくに課せられたお役目です。最後に儀ぎ式しきが行われたのは、七十年以上も昔のことですが」

「人柱……」

　白奈が淡々と告げてきた返事に、凪沙は過剰なまでに強く反応した。

　一いつ瞬しゆん、凪沙の脳裏をよぎったのは、異国の遺跡で氷漬けのまま眠り続けていた少女の姿だ。彼女も、やはり〝災厄〟を鎮めるための人柱として封印されていたのだった。

　自分でも制御できない怒りに衝つき動かされて、凪沙は、唇くちびるを震ふるわせながら白奈を睨にらむ。

「もしかして生いけ贄にえってこと？　人間を生きたまま犠ぎ牲せいにする気……!?」

「過去にはそういうことも行われた、という話です。災厄を避けるために穢けがれなき処女おとめを湖に沈める──同様の儀式は世界各地で行われてきました」

　詰きつ問もんのような凪沙の問いかけに、白奈は弱々しく反論する。

「ですが、今回の儀式は違います。贄にえにするのは人ではなく魔ま族ぞく。しかも彼女は、もうすでに死んでます……から。凪沙さんの力で、現世に意識を留とどめていただけで」

「白奈さん、それって……まさか、あの子を……!?」

　凪沙は絶望的な思いで頭上を見上げた。

　なぜ祭さい壇だんに、自分の身体からだが横たえられているのか。そしてなぜ幽ゆう体たい離り脱だつという形で、自分の霊体だけが肉体から切り離はなされたのか──凪沙はそれを理解した。

　白奈たちの目的は、凪沙の中で眠っているアヴローラの魂だったのだ。

　湖の上に造られた祭壇は、おそらく生贄の霊体を抽出し、湖底の黒殻アバロンに送りこむためのものなのだろう。しかし白奈の能力によって、すでに凪沙の霊体は、肉体から一時的に切り離されている。生贄として使われるのは、凪沙の肉体に残されたもうひとつの霊体──すなわちアヴローラの魂たましいだけだ。

「十二に裂かれた第だい四よん真しん祖その眷けん獣じゆう──その一体を封印するために生み出された、人造の吸血鬼。それがアヴローラ・フロレスティーナの正体です。災さい厄やくを鎮しずめるための生いけ贄にえに、彼女以上の適任はいません。それはあなたにもわかるはずです、凪なぎ沙ささん」

　凪沙の直感を裏付けるように、白しろ奈なが答える。

　それは、ある意味でよく練り上げられた作戦だった。

　活性化した黒殻アバロンの封印を強化するために、外部から霊れい力りよくを供給する。

　霊力源とは、すなわち生いけ贄にえ。人ひと柱ばしらだ。そして

白奈たちはアヴローラに目をつけた。

　死者であるアヴローラの魂たましいを人柱として使う。

　その結果、表向きは一人の死者も出さずに、生贄の儀式を執とり行うことができるのだ。

　しかもアヴローラは、もともと第だい四よん真しん祖その魂を封印する器うつわとして造られた吸血鬼だ。

　すでに肉体を失ったとはいえ、彼女の霊体は、いまだに桁けた外はずれの魔ま力りよくを残している。魔力を供給して黒殻アバロンを強化するのが目的なら、たしかに彼女は生贄として最適だろう。

　そしてアヴローラの魂が消滅すれば、彼女の依より代しろとしての凪沙の役目も終わる。

　緋ひ沙さ乃のはそれを知っていた。だから彼女は、この冷酷な計画に荷か担たんしたのだ。霊力の酷使がもたらす肉体の衰弱から、孫娘である凪沙を救うために。だが──

「駄だ目めだよ、白奈ちゃん。それは駄目……！」

　凪沙が、祭壇で眠るアヴローラを庇かばうように両腕を広げた。

　しかし今の凪沙に出来るのはそこまでだ。自分の身体に戻って儀式を妨害したくても、白奈の髪から伸びる純白の霊れい糸しが、凪沙の霊体を水中につなぎ止めて逃がさない。その霊糸こそが、他人の霊体を自在に操あやつる能力の触しよく媒ばいなのだろう。

「お願いです、凪沙さん。聞き分けてください。もう遅いんです。迂う闊かつに近づけば、あなたの魂も儀ぎ式しきに巻きこまれてしまいます……から」

　白奈の髪から伸びる霊糸が数を増し、凪沙の霊体を拘束していく。

　湖上の祭壇では生贄の儀式が始まっていた。無数の巨大な魔法陣が水面を覆おおい尽くし、湖底の黒殻アバロンへと向けて、巨大な樹木のように束ねられた霊糸が伸びていく。

　それらの霊糸を経由して、アヴローラの魔力を黒殻アバロンに送

りこむつもりなのだ。

「〝焔光の夜伯カレイドブラツド〟の一体を憑ひよう依いさせたまま何年も過ごすのが、そもそも無む謀ぼうだったんです。あなたがどれほど優すぐれた巫み女こであっても、これ以上は自らの寿命を削るだけ……だから」

「違うの、白奈ちゃん！　そうじゃないんだよ！」

　焦あせりに表情を歪ゆがめながら、凪沙が叫ぶ。白奈たちはまだ気づいていないのだ。

　凪沙は祖母譲ゆずりの霊力を持つ強力な巫女だが、同時に母親から素養を受け継いだ天然の接サ触イ感コ応メ能ト力ラ者ーでもある。だから、凪沙だけが辿たどり着くことができた。白奈を含めた攻魔師たちが誰だれも気づかなかった真実、彼らが黒殻アバロンと呼んでいるものの正体に――

「あれは封印なんかじゃないの。監視してたのは、あの子のほうなんだよ。あの子を起こしちゃいけなかったの！」

「凪沙……さん？　あなた、なにを言って……!?」

　白しろ奈なが初めて困惑を見せた。だが、そのときにはもはや手遅れだった。

　祭さい壇だんから伸びた霊れい樹じゆの幹が、黒殻アバロンへと到達し、アヴローラの霊体に残されていた魔ま力りよくを吸い上げようと脈動する。そして、

「なに……これは……!?」

　湖底に起きた異変を感知して、白奈が声を震わせた。

　黒殻アバロンの表面に亀き裂れつが走り、その隙すき間まから無数の影が現れる。それは、鋼はがね色いろに輝かがやく生物の姿をしていた。複眼を持つ蜂はちのようでもあり、長い尾を持つ蛇へびのようでもある。

　明らかに有機生命体のシルエットを持ちながら、人工物のような質感を持つ怪物だ。

　その怪物の出現は、白奈にとっても予想外だったのだろう。身体からだに巻きついた霊れい糸しを通じて、彼女の動揺が凪なぎ沙さにも伝わってくる。

　しかし異変はそれだけでは終わらない。

　鋼色の怪物たちを迎え撃うつかのように、水中に巨大な影が出現する。

　意思を持つ濃のう密みつな魔力の塊かたまり。異界からの召しよう喚かん獣じゆう。上半身は人間の女性に似て、下半身は魚の姿である。そして背中には翼つばさが生え、猛もう禽きんのような鋭い鉤かぎ爪づめを持っている。

　氷の人魚、あるいは妖鳥セイレーン──氷河のように透明な肉体を持つ、吸血鬼の眷けん獣じゆう。アヴローラの中に封印されていた彼女の分身だ。

「……駄だ目め……やめて……」

　氷の眷獣を見上げて、凪沙が祈るように訴える。

　しかしその声は届かない。

　肉体から切り離はなされた今の凪沙には、アヴローラに意思を伝える手段がない。

　妖鳥セイレーンの翼から撒まき散らされた膨ぼう大だいな魔力が、神かん縄なわ湖こ全体を凍りつかせていく。それは急激な凍結がもたらす収縮と脆ぜい化かにより、あらゆる物質を塵ちりに帰きす破壊的な凍気だ。

　膨大な魔力を秘めた黒殻アバロンといえども、その攻撃の前にはひとたまりもない。

　だからこそ凪沙は絶叫する。

「アヴローラ！　駄目えぇ──────────！」

　その瞬しゆん間かん、凪沙の視界は眩まばゆく蒼あおい光に包まれた。

神かん縄なわ湖こと呼ばれていた場所のすべてが、渦うずを巻く巨大な氷の結晶に変わる。

純白の霧きりと氷雪が、周囲の山々を覆おおい尽くしていく。

薄うすれゆく意識の片かた隅すみでそれを知覚しながら、凪なぎ沙さの霊れい体たいは光に呑のまれていった。

5

斐ひ川かわ志し緒おは座ざ敷しき牢ろうの鉄てつ格ごう子しを挟はさみ、暁あかつき牙が城じようと向かい合って座っていた。

「私らしさ……って、なんなんだろう……」

両手で抱かかえた膝ひざの上に顔を伏せ、志緒は哲学的な疑問を口にする。強気に見える口調の端はし々ばしに、行き場のない不安と葛かつ藤とうが滲にじむ。

座敷牢につながれた暁牙城が、そんな志緒の独白を聞いている。

最初は彼のことを無視していた志緒だが、いつまでもしつこく話しかけてくる牙城に、つい反応してしまったのが運の尽きだった。好きな食べ物の話からスタートして、誕生月の星座の話題になり、そのうち性格診断の心理テストが始まり、いつの間にか悩み相談に変わっていた。志緒が勝手に愚ぐ痴ちを洩もらして、牙城はひたすら聞き役に徹てつするという形である。

どうしてこんな男に、と敵意を覚えつつ、気づけば志緒は、思いきりプライベートな悩みを牙城に暴ばく露ろしてしまっていた。胡う散さん臭くさい容姿でありながら、ベテランのホストも真っ青の牙城の話術であった。このままではまずいと薄うすすうす感じつつ、志緒の自分語りは止まらない。

「それは私だって唯ゆい里りみたいになれたらいいなと思う。唯里は本当に可愛かわいいから。明るくて、素直で、女の子らしくて。私も唯里のことは大好きだけど、あの子と比べると自分が情けなく思えてくるっていうか……」

「―でも唯里ちゃんは、志緒ちゃんのこと好きだよな。無条件で信頼してるっつうかさ」

　会話が途切れた絶妙のタイミングで、牙城がぼそりと呟つぶやいた。たいした根拠もないはずの彼の言葉に、志緒は不意を衝つかれて浮き足立つ。

「それは、たまたま私のほうが呪じゆ術じゆつの成績がよかったから……だけど、本当に凄すごいのは唯里のほうだから。七式突撃降魔機槍シユネーヴアルツアーだって、本来はあの子が受け取るはずだったんだし」

「へえ、マジか……そいつは凄いな……」

「うん」

　本気で感心しているような牙城の姿に、志緒はささやかな満足感を覚える。なんだかんだと文句を言いつつも、唯里が褒ほめられると、志緒は自分のことのように嬉うれしいのだ。

　牙城は、下へ手たな慰なぐさめを口にしない。代わりに志緒自身も気づいていなかった、本当の望みを的確に言い当ててくる。それが志緒にとっては歯は痒がゆくもあり、妙に心地ここち好よくも感じられた。

「偉いな、志緒ちゃんは」

　その牙城が、さらりと志緒を褒ほめてくる。志緒は思わずムッとして、

「なんですか、馬ば鹿かにしてるんですか」

「違う違う。つまりさ、志緒ちゃんは大好きな友達に釣り合う人間になりたくて、そんなに落ちこんじゃうくらい頑張ってるってことだろ」

「だ、だって、そんなの……当たり前だし……」

「いやいや、そんなふうに普通に思えるところが凄すごいんだって。そりゃ唯ゆい里りちゃんが信頼するわけだわ」

　妙に余裕ぶった態度で、牙が城じようが言った。なにもかも見透かしたような彼の物言いに、志し緒おは軽く反発しつつ、ほのかに頬ほおが赤らむのを感じる。

「あ、あなたが唯里のことを語るな……！」

　反論する志緒の声には迫力がない。これが暁あかつき牙城の話術テクニツクだとわかっていても、そんなふうに褒ほめられて悪い気がするはずもなかった。最初の戦いで一方的にやられたせいで、牙城にはロクな印象がなかったが、もしかしたら悪い人ではないのだろうか、と思ってしまう。実は見た目だって意外に悪くはないのだ。むしろ渋くて恰かつ好こういいといえなくもない──

「あの……あ、ありがとう……話を聞いてくれて」

　志緒が、精いっぱいの勇気を振り絞って言った。囁ささやきのような小さな声だが、聞き取れない距きよ離りではなかったはずだ。

　しかし牙城の返事はない。突然、恐ろしいほどの無表情になって、彼は外を睨にらんでいた。

「あ……暁牙城？」

「なあ、志緒ちゃん……おかしくないか、この空気？」

「え……!?」

　牙城に真剣な表情で訊きかれて、志緒も意識を周囲に向けた。土ど蔵ぞうの中に流れこんできたのは、異様な冷気だ。真冬にしても寒すぎる。急激な気温の低下によって、空気が白く凍っている。

　その冷気に含まれた魔ま力りよくの余よ韻いんに気づいて、志緒がハッと息を呑のむ。

「なんだ……この嫌いやな感覚……」

　志緒が呟つぶやきを洩もらした直後、神かみ緒お多だ地区の大地が揺れた。

　地じ震しんのような断続的な揺れではない。巨大な錘おもりが間近に落ちてきたような、瞬しゆん間かん的な衝しよう撃げきだ。

　震源はおそらく神かん縄なわ湖こ──唯里たちが儀ぎ式しきを執とり行っているはずの方角である。

　しかし魔力を含んだ冷気の霧きりに邪じゃ魔まされて、志緒には神縄湖でなにが起きているのかわからない。ただ漠然とした胸むな騒さわぎがするだけだ。

「この震動……ただの地震ってわけじゃなさそうだな。あの婆ばばあ、しくじりやがったか」

　憎々しげに吐き捨てて、牙城が檻おりの中で立ち上がる。がちゃりと重々しい音を残して、彼の足元になにかが落ちた。それを見て志緒がぎょっとする。

「ちょっ……なんで足あし枷かせが取れてるんだ!?　どうやって……!?」

　牙城を座ざ敷しき牢ろうにつなぎ止めていたはずの金属製の足枷が、いつの間にか外れていた。二重構造になっていたはずの錠じよう前まえ部分が、バラバラに分解されている。

「なんでと言われても、商売柄、こういうのには慣れてるからなあ」

　自由になった足首の関節を回しながら、牙が城じようがのんびりした口調で言った。

　志し緒おは呆ぼう然ぜんと牙城を眺めて、

「あ、あなた、考古学者じゃなかったのか!?」

「あちこちフィールドワークに行ってると、いろいろあるんだよ──」

　いい加減な口調でそう答えて、牙城は勢いよく頭上を振り仰あおいだ。

「ヤバい……！　志緒ちゃん、上だ！」

「え!?」

　牙城の怒ど鳴なり声に反応して、志緒は視線を空へと向けた。その一いつ瞬しゆんが志緒の生死を分けた。土ど蔵ぞうの天井を破って志緒の真上に現れたのは、鋼はがね色いろに輝かがやく怪物だ。

「なに……こいつ!?」

　怪物の全長は三、四メートルほど。雀すずめ蜂ばちに似た頭部と蛇へびの胴体、そして翼よく竜りゆうのような翼つばさを持つ異い形ぎようの化け物だ。それは志緒の存在に気づくと同時に、躊ちゆう躇ちよなく顎あごを開いて襲おそってくる。

　牙城に知らされていなければ、志緒は為なすすべもなく怪物に引き裂かれていただろう。

「響かぎりよ──！」

　志緒は制服の胸元から、ありったけの呪じゆ符ふを取り出して叫んだ。

　呪力を注そそぎこまれた呪符たちが、無数の猛もう禽きんに姿を変えて怪物を襲う。

　獅し子し王おう機き関かんの舞ま威い媛ひめが得意とする、式しき神がみを使った攻撃呪術。最初の二、三羽目までは、あっさりと式神を撃うち落とした怪物も、無数の式神にまとわりつかれて次第に動きを鈍らせ、ついには地上へと落下する。

　手持ちの呪符をすべて使い切ったところで、鋼色の怪物はようやく動きを止めた。

　それを確認する余裕もなく、志緒はその場にふらふらと倒れこむ。

　たった一匹の怪物を迎撃するために、志緒が操あやつった式神の数は十七体。一気に呪力を使い過ぎたせいで、過呼吸に近い状態になっていた。高たか神がみの杜もりではそれなりに優等生で通っていた志緒だが、かつての同級生だった煌きら坂さか紗さ矢や華かのような、化け物めいた呪術の才能はないのだ。

　あの鋼色の怪物は、本来なら、志緒が一人で戦えるレベルの敵で

はなかった。どうにか倒すことができたのも、ただ運がよかっただけだ。

　しかしそれに安あん堵どする間もなく、志緒の頭上から新たな羽は音おとが聞こえてくる。

　さっきの個体によく似た鋼色の怪物が、土蔵のほうへと迫っていた。しかも一体や二体ではない。視界に入るだけで二十体以上。空を埋め尽くすような勢いで近づいてくる。

「数が……」

　志緒は絶望に青ざめた。いくらなんでも敵の数が多すぎる。式神を生み出すための呪符も残っていない。大規模な呪術を準備する時間もない。

　せめて唯ゆい里りがいてくれたら――と、志緒は唇くちびるを噛かみしめた。

　近接戦せん闘とうに長たけた剣けん巫なぎが前衛となって、怪物たちを引きつけて時間を稼いでくれたなら、志緒にも打つ手があったのだ。獅し子し王おう機き関かんの舞ま威い媛ひめだけが持つ切り札が――

「伏せろ！」

　立ち竦すくむ志し緒おのすぐ背後で、荒々しい声が鳴り響ひびいた。

　その声に無意識に衝つき動かされて、志緒は姿勢を低くする。そんな志緒を襲おそってきたのは、群れの先頭にいた怪物の一体だ。

　のたうつように降下してくる鋼はがね色いろの巨体に、志緒は死を覚悟する。

　ダンッッ、と金属質の轟ごう音おんが大気を揺らし、彼女の鼓こ膜まくを震ふるわせた。

　志緒の眼前まで迫っていた怪物が、横殴りに吹き飛ばされて弾はじけ飛ぶ。爆ばく炎えんとともに解放されたのは、濃のう縮しゆくされた高密度の呪じゆ力りよくだった。

　呪力を封印した貴金属の弾丸──呪じゆ式しき銃じゆうによる攻撃だ。

「暁あかつき牙が城じよう!?　どこから銃を……!?」

　短く改造ソウドオフしたショットガンを構えていたのは、座ざ敷しき牢ろうの中の牙城だった。彼が撃うち放った弾丸が、鋼色の怪物を粉砕し、志緒の命を救ったのだ。

　うっすらと硝しよう煙えんに包まれたショットガンを再さい装そう塡てんしながら、牙城は座敷牢の鉄てつ格ごう子しに向かって歩き出す。そして牙城は、蜃しん気き楼ろうのように鉄格子をすり抜けて、そのまま牢の外に出た。

「物質透過……!?　いや……違う……その能力はいったい……！」

　平然と土ど蔵ぞうから歩み出る牙城を眺めて、志緒が困惑の叫びを洩もらす。

　物質透過は、空間制御に匹敵する超高難度魔ま術じゆつのひとつである。しかし牙城が使った技は、一般的な透過術式とも少し違っていた。物質透過の特徴である、量子レベルでの肉体の分解や再構築が行われた痕こん跡せきがない。魔力が使われた気配もない。暁牙城という人間は、最初から牢の中には存在しなかった──そんな錯さつ覚かくにすら陥おちいりそうになる。

「二十年ばかり前に、中央アジアで妙な遺跡に迷いこんでしまってな……」

　混乱する志緒に、牙城は気け怠だるく笑ってみせた。彼のショットガンが再び火を噴ふき、三体目の怪物を撃破する。

「──そのとき同行した遺跡調査隊は全滅。唯一生き残った俺おれの身体からだの半分は、今も〝あっち側〟に残ったままだ」

「そうか……死し都と帰がえり……〝死都帰り〟の暁あかつき牙城！」

　志緒は牙城の通とおり名なを思い出す。こちら側の世界には存在しないはずの、死の都から帰還した男──そして彼の肉体は、ふたつの世界の境界線上に今も留とどまったままなのだ。

　暁牙城は座敷牢の中にいながら、同時に、こちら側の世界のどこにも存在しなかった。

　いかに頑がん丈じような鉄格子をもってしても、この世界にいない人間を閉じこめておけるはずがない。

「支払った代償もでかかったが、おかげでこういう隠かくし芸ができるようになったぜ」

　弾丸を撃ち尽くしたショットガンを投げ捨て、牙城は無造作に両腕を広げた。

　彼の左右の手の中に、どこからともなく巨大な武器が出現する。〝死都〟の兵器庫に蓄たくわえた銃を、空間を超えて実体化させたのだ。

「き、機関銃!?」

「一匹ずつチマチマ撃ってたらキリがなさそうだからな―」

　そう言って牙が城じようは、大口径の軍用機関銃を怪物の群れに向けて連射した。

　呪じゆ式しき銃じゆうほどの威力はないが、毎分六百発を超える弾だん幕まくの密度は圧倒的だ。強力な対たい魔ま獣じゆう専用弾の効果もあって、迫り来る怪物たちをことごとく突き放す。

「志し緒おちゃん、降こう魔ま弓きゆうだ！　こいつらまとめて焼き払え！」

「い、言われなくても……！」

　志緒は、腰の後ろに装着マウントしていた銀色の洋よう弓きゆうに手を伸ばした。牙城が怪物たちを牽けん制せいしている今が、この弓を使うおそらく最後の好機だ。

「―認証申請！　六式降魔弓・改フライクーゲル・プラスプロトIIIスリー、解放アンロツク！」

　折り畳まれたままの洋弓を掲かかげて、志緒が起動コマンドを詠えい唱しようする。流れこんだ志緒の呪じゆ力りよくを感知して、金属製の洋弓が大きく広がった。安全装置が解放されたのだ。

『登録射手、斐ひ川かわ志緒を認証。六式降魔弓・改フライクーゲル・プラス、起動アクテイブ』

　降魔弓の起動を確認して、志緒は太ふと腿ももものホルスターから取り出した金属の矢をつがえた。

　一いつ瞬しゆんだけ目を閉じて、三十体近い怪物たちの位置、すべてを脳裏に焼きつける。呪術標的の多重固定マルチロツクオンは、志緒がもっとも得意とする技だ。生まれつきの呪術の才能では、煌きら坂さか紗さ矢や華かに及ばなくても、積み重ねてきた修練の量では劣っていないという自負がある。

　そしてこの六式降魔弓・改フライクーゲル・プラスは、そんな志緒の能力を最大限に活かすために再設計された武ぶ神しん具ぐなのだ。

「獅し子しの舞ぶ女じよたる高たか神がみの真ま射い姫ひめが請こい奉たてまつる！　雷霆ひかり、あれ――！」

　志緒が放った銀色の矢は、いくつもの多た重じゆう魔ま法ほう陣じんを描きながら空へと飛ひ翔しようした。

　呪じゆ矢しの先端に取りつけられた鳴なり鏑かぶらが、人間の喉のどでは不可能な高密度、大音量の呪文を生成し、大規模な呪術を実現する。

　無数の爆風が巻き起こった。

　志緒が生み出したのは、稲妻を模もした呪力の刃やいばだ。それらは雷らい光こうの速度で地上へと降り注ぎ、狙ねらい違たがわず、鋼はがね色いろの怪物たちを一匹残らず刺し貫つらぬいていた。

「……おお、すげえな。さすがは獅し子し王おう機き関かんの舞ま威い媛ひめってところか」

　呪力を使い切って倒れこむ志緒を、牙城が背後から抱き支える。

　怪物たちの群れは、志緒の攻撃で一いつ掃そうされていた。

　志緒の六式降魔弓・改フライクーゲル・プラスは、獅子王機関が密ひそかに開発を続けてきた制圧兵器の完成形である。怪物たちの

群れを圧倒できたのは、その降魔弓の力に拠よるところが大きい。

　結果、神社に残った非戦闘員たちが怪物に襲おそわれる危険は、とりあえずは去ったことになる。こうなる可能性を最初から見越して、緋ひ沙さ乃のは、志緒をこの場に残したのかもしれなかった。

「とはいえ、まずいな。神社の結界の奥まで怪物どもが侵は入いってきたってことは、神かん縄なわ湖この包囲部隊は全滅か……？」

　純白の霧きりに沈む神縄湖を睨にらんで、牙が城じようは唇くちびるを歪ゆがめている。

　人造のダム湖の周辺は、濃のう密みつな凍気と魔ま力りよくに遮さえぎられて、迂う闊かつに近づくこともできない状況だ。

　湖を監視していた自衛隊の部隊は、間違いなく異変に巻きこまれていた。

　彼らと行動をともにしていた緋ひ沙さ乃のたちも同様のはずだ。

　暁あかつき凪なぎ沙さと、そして羽は波ば唯ゆい里りもだ。

「唯里……！」

　志し緒おの弱々しい呟つぶやきが、霧の中に反はん響きようして消えていく。

　牙城は表情を消したまま、無言で湖を睨み続けていた。

6

　藍あい羽ば浅あさ葱ぎとリディアーヌ・ディディエは、丹たん沢ざわ山系の上空三千メートル付近を飛行していた。

　ディディエ重工製のティルトローター輸送機―〝パンディオン〟の機内である。

　特区警備隊アイランド・ガードに追い回されて、半なかば逃げ出すような形で絃いと神がみ島じまを脱出したのは昨日の午後。その

後、本州に到着した浅葱たちは、横浜にあるディディエ重工の倉庫に隠かくれて一夜を過ごし、武器弾薬と燃料の補給を済ませていた。

そして失しつ踪そうした暁凪沙の捜索のため、満を持じして神縄湖に向かっているところだ。

正月早々、ずいぶんな大おお騒さわぎである。

浅葱としても、最初は気軽な情報収集の手伝いのつもりだった。こんな大おお事ごとになる予定ではなかったのだ。

しかし空港で特区警備隊アイランド・ガードに襲おそわれたことで、彼女を巡る状況も一変した。

暁凪沙の失しつ踪そうには、どうやら国家レベルの重要機密が関かかわっているらしい。そして凪沙の行方ゆくえを探ろうとしたことで、浅葱も無関係では済まなくなった。このままでは、最悪、問答無用で拘束されてそのまま留置場行きだ。事件解決の糸口なり、政府と取り引きできる情報なりを自力で入手するまでは、浅葱は絃神島には帰れない。

どうしてこんなことになってしまったのか、という疑問や不満は多々あるが、今はまず凪沙の捜索が最優先だった。とにかく情報を手に入れる。その唯一の手がかりが彼女なのだ。

「―うむ。〝膝ひざ丸まる〟複座ユニットの接続、完了でござる」

そんな浅葱の苦悩も知らず、窮きゆう屈くつな格納庫内ではしゃいでいたのは、機体調整用の小型端末を持ったリディアーヌだ。推定年齢十二歳前後。華やかな赤い髪を持つ、外国人の少女である。

彼女の愛機である赤い超小型有脚戦車マイクロロボツトタンクは、大規模な改修を終えて、大幅に見た目が変わっている。最大の特徴は、装備の多くが、市街戦用から野戦向けに変更されたこと。そして浅あさ葱ぎが乗りこむための副操縦席が増設されたことだった。

愛あい嬌きようのある丸っこい見た目はそのままに、各種の装備だけを追加したせいで、ゆるキャラが殴りこみに備えて武装したようなユーモラスな姿になってしまっている。

　もっともリディアーヌは、その強引な状態にも満足している様子で、

「エネルギーパックの増設によって、稼働時間が飛ひ躍やく的てきに増加。さらに火力も増し増しにござる。あとは機動性の低下を補うための補助推進器サイドスラスターが、どこまで機能するかでござるな」

「それはいいんだけどさ、戦車乗り。この服は、もうちょっとどうにかならないの？」

　用意されたパイロットスーツに着替えた浅葱が、胸元を隠かくしながらリディアーヌを睨にらむ。

　リディアーヌとお揃そろいのその防護服は、素肌にぴったりと張りつく競泳水着風のデザインだ。

　身体からだのラインがくっきりと浮き出ている上に、胸にはゼッケンが縫ぬいつけられて『あいばあさぎ』と黒マジックで書かれている。付属品は二の腕まで覆おおう長手袋と、太ふと腿もも丈たけのオーバーニーソックス。浅葱本人の派手な髪型も相まって、痛々しいコスプレ少女のような姿になっていた。

　しかし〝戦車乗り〟の少女は、怪け訝げんそうに首を傾かしげて瞬まばたきする。

　なにが問題なのかまったくわかってない、という表情だ。

「よく似合ってるでござるよ、女帝殿」

「いやだから、似合うとか似合わないとかそういう問題じゃなくて……！」

「そう言われても、ディディエ重工が誇る最新鋭のパイロットスーツでござる故ゆえ。最高水準の防ぼう弾だん防ぼう刃じん耐たい衝しよう撃げき性能に加え、撥はつ水すい性と透湿性も抜群。家庭用

の洗濯機での丸洗いも可能で、殺菌消臭効果も備えた優すぐれものでござる」

「どう見てもただのスク水なんだけど。どういう趣味なのよ、あんたの会社の技術者は……」

　浅あさ葱ぎは脱力して戦車の装甲にもたれかかる。

　たしかに有脚戦車ロボツトタンクの操縦席は狭く、ひらひらした服装は、機械の隙すき間まに挟はさまって危険―という理屈はわからないでもない。でかでかと名前が書かれたゼッケンも、万が一の事故のときに負傷者を判別するため、と説明されたら強く文句は言えなかった。

「それよりも女帝殿、そろそろ〝膝ひざ丸まる〟に搭とう乗じよう召めされよ。間もなく着陸予定地点でござる」

　自らも有脚戦車ロボツトタンクに乗りこみながら、リディアーヌが浅葱に呼びかけた。

　ティルトローター輸送機〝パンディオン〟は、人工知能ＡＩが操縦する無人機だ。飛行高度や針路の決定は、すべて有脚戦車ロボツトタンクを経由してリディアーヌが行っている。

　そのリディアーヌの唐とう突とつな発言に、浅葱は少し驚おどろいて、

「着陸予定地点？　なにそれ？　まさかいきなり地上に降りるつもり？」

「この機体はティルトローター故ゆえ、垂すい直ちよく離り着ちやく陸りくが可能でござる。上空から眺めているよりも、地上に降りて捜索したほうが、詳細な情報が手に入るでござろう？」

「それはまあ、そうかもしれないけど」

　浅葱は戸惑いの表情で思案する。本気で凪なぎ沙さの行方ゆくえを調べるなら、いずれは地上に降りなければならないのも事実だ。

「だけど神かん縄なわ湖この周辺は自衛隊が封鎖してるんでしょ。のこのこ降りてって大丈夫なわけ？　撃うち落とされたりしないでしょうね？」

「呵か呵か、心配無用。攻撃ヘリの一機や二機、返り討ちにしてご覧に入れようぞ」

「ご覧に入れるなっ！　自衛隊機を撃ち落としてどうする!?」

　戦争する気かっ、と浅葱は怒ど鳴なるが、リディアーヌはとっくに操縦席のハッチを閉めていた。浅葱も仕方なく副操縦席に潜もぐりこむ。

　有脚戦車ロボツトタンク〝膝ひざ丸まる〟の複座ユニットは、あくまで後付けの簡易装備だ。ふたつの操縦席はそれぞれ独立しており、通信機を使わなければ会話もできない。不便といえば不便だが、プライバシーという点では悪くない仕様だ。

　四方を電子機器に囲まれたシートは窮きゆう屈くつだが、完全に乗りこんでしまえば意外に快適だった。コクピットハッチの内側は外部モニタになっているため、圧迫感も特にない。が──

　その巨大なモニタ全体に、いきなり不細工なマスコットキャラのＣＧが表示されたときには、さすがの浅葱も驚いた。浅葱の相棒とでも呼ぶべき人工知能ＡＩの現身アバターが、容よう赦しやなく大音量で話しかけてくる。

『俺おれだ、嬢じようちゃん。聞こえるか？』

「モグワイ!?　あんた、なんなのよいきなり!?　ていうか、うるさい！　声でかい！」

　慣れない操作パネルに苦労しながら、浅あさ葱ぎはボイスチャットの音量ボリユームを落とした。モグワイはそんな浅葱の苦労も知らず、一方的に会話を続けてくる。

『やれやれ、やっと通信がつながったぜ。携帯電話が使えないのはやっぱ不便だな』

「逃走中なんだから仕方ないでしょ。それより、用件はなに？」

『ん、ああ……この情報は伝えるべきかどうか迷ったんだが、いろいろ面倒なことになってるみたいなんで、いちおう今のうちに言っておこうと思ってな──』

「なによ、気持ち悪いわね。言いたいことがあるならさっさと言っ

たら？」

　浅葱が苛いら々いらと言い返す。それを聞いたモグワイは、自分の顔の前で両手を合わせて、

『悪わリィ。古こ城じようの兄ニイちゃんの位置情報を喪失ロストした』

「は？　なによそれ？　古城がいなくなったってこと？」

『ま、そういうことだな』

　電子機器を操作する手を止めて、浅葱はモグワイを睨ねめつけた。妹に続いて、兄まで失しつ踪そう。あの兄妹きようだいはいったいなにをやっているのだ、と思う。

「姫柊ひめらぎさんは？　古城と一緒じゃなかったの？」

『槍やり使つかいの嬢ちゃんも行方ゆくえ不明だ。妙な魔ま術じゆつを使う敵と戦ったらしくて、付近の監視カメラは軒並み全滅。ド派手な戦せん闘とうの痕こん跡せきだけが残ってる』

「ちょ……戦闘って、どういうこと!?　古城には予備の端末を持たせてあったでしょ!?」

『いやそれが、古城の兄ニイちゃんごと海に落っこちてな……それ以来、電波が届かねえ』

「海に落ちた……!?」

　浅葱は今度こそ絶句した。絃いと神がみ島じまは太平洋上に浮かぶ人工島だ。周囲の水深は半はん端ぱではないし、潮しおの流れも相当速い。事実上、太平洋のド真ん中に放り出されたのと大差ない。

　いくら古城が不老不死の吸血鬼といえども、さすがにまずいのではないかと思う。それでなくても古城は水泳が苦手なのだ。

「敵と戦ったって、どういうことよ……どうして古城が狙ねらわれるわけ……!?」

『あー、そいつはたぶん──』

　モグワイがなにかを言いかけた直後、不意に彼のＣＧ画像が乱れた。突き上げるような衝しよう撃げきに〝パンディオン〟の機体が大きく揺れ、モグワイとの通信が途絶する。

「今度はなにっ!?　なにがあったの、〝戦車乗り〟!?」

　内蔵無線で怒ど鳴なりつけた浅葱に、リディアーヌが飄ひょう々ひようと答えてくる。

『どうやら敵てき襲しゆうのようでござるな』

「て、敵襲……!?　あんた、まさか本当に自衛隊機と戦ってるんじゃないでしょうね!?」

『否いな。機外の映像をそちらに送るでござる』

　リディアーヌの言葉が終わる前に、副操縦席のモニタにもティルトローター機の外部映像が転送されてきた。そこに映し出されているのは、神かん縄なわ湖ことおぼしき場所の風景だ。

「湖が……凍ってる……？」

　浅あさ葱ぎはそう呟つぶやいたきり言葉を失った。

　美しい山々に囲まれた巨大な人造湖──

　しかし、その湖面は白く凍りつき、氷山のように荒々しく隆りゆう起きしていた。ダム全体が凍結しているのだ。極低温の冷気が生み出す純白の霧きりが、湖の周囲を覆おおい尽くしている。

　どう考えてもまともな自然現象ではなかった。大規模な魔ま導どう災さい害がいだ。

　急激な大気の収縮によって、気流が激しく乱れている。旋せん回かいを続ける〝パンディオン〟の機体が安定しない。魔力を帯びた霧の影えい響きようか、電波障害も発生しているらしい。モグワイとの通信が途切れたのも、おそらくそれが原因だ。

『データ収集を継続しつつ、この空域を離り脱だつするでござる！　エンジン戦せん闘とう緊急出力──！』

　めずらしく焦あせった口調でリディアーヌが言った。彼女の判断

は的確だ。異変の原因がわからない以上、この空域に留とどまるのは得策ではない。

　だが、実際に機体が上昇する前に、金属が裂けるような激しい異音が、格納庫内に響ひびき渡る。

『不覚……！』

「は、はい!?」

『敵に完全に取り付かれたでござる……！』

「敵って……嘘うそ……!?」

　格納庫の外壁を喰くい破るようにして現れたのは、蜂はちのような顎あごを持つ鋼はがね色いろの怪物だった。翼よく竜りゆうに似た巨大な翼つばさで飛ひ翔しようして、この〝パンディオン〟を襲おそってきたらしい。

『ネット上には該当するデータがござらぬ……おそらく新種の魔ま獣じゆうでござるな……』

　リディアーヌが妙に冷静な口調で告げてくる。魔獣の映像を使って検索をかける程度には、心に余裕があるらしい。しかしその間も怪物の攻撃は続いている。〝パンディオン〟の機体の振動は悪化を続け、徐々に高度を下げているようにも感じられた。

「もしかして、この魔獣を抑えるための自衛隊の包ほう囲い網もうだったわけ……!?」

　神縄湖周囲の幹線道路が封鎖されていたことを思い出して、浅葱がうめく。

　こんな凶暴な魔獣がわらわらと出現していたのでは、たしかに自衛隊が出てくるのも当然だ。情報が隠いん蔽ぺいされていたのも、近隣住民のパニックを避けるためにはやむを得ないと思えてくる。

　問題は、暁あかつき凪なぎ沙さが、この騒動とどう絡んでいるのか、ということだが――

『エンジン出力喪そう失しつ。油圧系統切断。制御不能。このままでは墜つい落らくは免まぬがれんでござるな』

「つ、墜落……!?」

　たらりと冷や汗を流す浅葱の背後から、轟ごうと渦うずを巻く風の音が聞こえてきた。〝パンディオン〟後部の格納庫のハッチが、異音を響ひびかせながら強引に開いていく。リディアーヌが、遠えん隔かく操作でハッチを開放したのだ。

〝膝ひざ丸まる〟を固定していたワイヤーが解除され、有脚戦車ロボツトタンクの固定用フックが次々に外れていく。

「な、なにやってんのよ、〝戦車乗り〟!?」

『空中投下を行うでござる』

「は!?　空中投下って……と、飛び降りるってこと!?」

　浅あさ葱ぎはぎょっとしてコクピットの計器を見た。墜つい落らく途中とはいえ、対地高度はいまだに千メートル以上。地表は木々に覆おおわれた険しい山々の連続で、安全に着地できそうな場所はどこにもない。そもそも戦車を空中投下する場合、乗員は乗せずに無人の状態で行うのが基本ではなかったか。いくらパラシュートで減速しようとも、鋼こう鉄てつの塊かたまりの中に閉じこめられた状態では、着地の衝しよう撃げきは並大抵ではないからだ。

『備えあれば憂うれいなし。このような不測の事態に備えて、〝膝丸〟には空挺降下エアボーン装備を取りつけておいたのでござるよ。実用テストはまだでござるが、理論上はなんら問題ござらぬ』

　根拠のない自信に満ちた口調で、リディアーヌが告げてくる。

　浅葱は真っ青になって髪を振り乱し、

「問題大ありだっての！　死ぬから！　絶対死ぬから！」

『身を捨ててこそ浮かぶ瀬せもあれ。行くでござるよ、女帝殿！』

　リディアーヌの宣言と同時に、ガコンッ、と最後の固定用フックが外れる音がした。ふわり、と不快な浮遊感が浅葱を襲おそい、有脚戦車ロボツトタンクが格納庫から滑すべり落ちていく。

　足場もなにもない高度一千メートルの空中へと──

「冗談……でしょ……」

　凄すさまじい空気抵抗が、分厚い大気の壁となって有脚戦車ロボツトタンクを襲った。衝撃に機体ごと振り回されて、浅あさ葱ぎはもはや声も出せない。

　鋼はがね色いろの怪物に襲われていたティルトローター輸送機が、浅葱たちの頭上で爆ばく散さんした。

　飛び散った破片と爆風をもろに浴びながら、有脚戦車ロボツトタンクは落ちていく。

「い……いやあああああああああああああ──っ！」

　浅葱の悲鳴が蒼そう穹きゆうに吸いこまれて消える。

　眼下では純白の霧きりに覆われた地表が、彼女たちを無慈悲に待ち受けていた。

幕間ｉ

どこか懐なつかしい匂においがした。青臭さの残る畳の匂いだ。

広々とした和室に敷かれた布団の中で、暁あかつき古こ城じようは目を覚ます。

障しよう子じ越しに射しこむ光が、寝ぼけた視界を柔らかく照らしていた。

「ここは……？」

見覚えのない部屋の内装を、古城は仰あお向むけのままぼんやりと見回す。

年季の入った古い建物だ。長い年月で飴あめ色いろに変色した柱と梁はりの木材が、落ち着いた高級感を醸かもし出している。人工島である絃いと神がみ島じまでは、あまり味わったことのない雰ふん囲い気きだ。

「そうか……俺おれたちは、あの妙な巫み女こ服ふくの女に襲おそわれて……」

古城が思い出せる最後の記憶は、人工島の海岸での戦せん闘とうだった。

南みな宮みや那な月つきの追撃を命からがら逃れた直後、謎なぞの巫女装しよう束ぞくの少女に襲しゆう撃げきされたのだ。

連続した時間の中に無理やり割りこんでくるような、恐ろしい能力を使う少女だった。古城はもちろん、雪ゆき菜なや妃き崎さき霧きり葉はまで、為なすすべもなく一方的に叩たたきのめされた。

彼女の追撃を逃れるために、古城は自じ爆ばく覚悟で眷けん獣じゆうを召しよう喚かん。足元の地面を丸ごと破壊して、結果、雪菜たちもろとも海に落ちたのだった。

古城が覚えているのは、そこまでだ。

「そうだ、姫柊ひめらぎは――！」

雪菜たちを攻撃に巻きこんでしまったことを思い出し、古城は跳はね起きようとする。

そんな古城の胸のあたりに、かすかな抵抗が感じられた。気まぐれな猫が乗っているような、柔らかな重さと温ぬくもりだ。

掛け布団越しの古城の胸に突っ伏して、少女が静かに寝息を立てている。

「ひ、姫柊……!?」

理解の範はん疇ちゆうを逸脱した光景に、古城はそのまま固まった。

古城に寄り添うような姿勢で、姫柊雪菜が静かな寝息を立てている。長い睫まつ毛げと形のいい唇くちびる、綺き麗れいな顔立ちは相変わらずだが、無防備に眠っているせいか普ふ段だんより幼くも感じられる。

彼女はいつもの制服ではなく、なぜか浴衣ゆかたを身に着けていた。突っ伏した姿勢で眠っているせいか、その襟えり元もとが少しはだけている。古城の視界に飛びこんできたのは、露あらわになった白い首筋と、くっきりとした細い鎖さ骨こつ。そして胸元のほのかな膨ふくらみだ。

「なんで……姫柊が……一緒に、浴衣で……布団で……」

雪菜の浴衣姿に目を奪われたまま、古城はパニックに陥おちいっていた。落ち着け、と自分自身に言い聞かせるが、至し近きん距きよ離りでちらつく彼女の素肌が、古城の冷静な思考力を奪っていく。

そうこうしているうちに古城の焦あせりが伝わったのか、眠っていた雪菜が身じろぎする気配があった。古こ城じようの布団に頬ほおをこすりつけるようにして、名残なごり惜しげに息を吐く。

「……ん……ぅ」

小動物っぽい謎なぞの声を洩もらしつつ、雪ゆき菜なはゆっくりと頭を上げた。彼女の表情はぼんやりとして、瞳ひとみの焦点が合っていない。まだ少し寝ぼけているのかもしれない。浴衣ゆかたがズレて華きや奢しやな肩が半分ばかり露あらわになっているが、そのことにも気づいていないようだ。

「あ……先輩、おはようございます……」

幼い子どものように目をこすりながら、雪菜が目覚めの挨あい拶さつを口にする。古城は安全装置の外れた爆ばく弾だんを抱えているような気分で、とろんとした目つきの彼女を見つめて、

「お、落ち着け……姫柊ひめらぎ……は、話し合おう……」

「はあ」

「れ、冷静に……まずは冷静に状況の確認を──」

「――先輩!?」

その瞬しゆん間かん、雪菜はカッと目を見開いて、勢いよく古城の眼前に身を乗り出してきた。噛かみつかれる、と恐怖に身を竦すくませた古城だが、

「よかった、目が覚めたんですね！　怪け我がは!?　傷は大丈夫なんですか？」

「あ、ああ……たぶん……」

本気で心配してくれている雪菜に、古城は気が抜けたような表情でうなずき返す。

よかった、と安あん堵どの息を吐く雪菜。彼女の背後の壁かべ際ぎわには、全金属製の銀色の槍やりが、剝むき出しのまま立てかけられている。

雪菜が敵に奪われたその槍で、古城は危うく刺し殺されそうになったのだ。どうにもならない状況だったとはいえ、雪菜はそのことに責任を感じていたのかもしれない。

だが皮肉にも、古城が巫み女こ装しよう束ぞくの少女を撃退できたのは、その〝雪せつ霞か狼ろう〟のおかげだった。魔ま力りよく

を無効化する雪菜の槍は、巫女装束の少女の、時間に割りこむ能力をも発動不能にする。だから古城にも反撃のチャンスが生まれたのだ。が、

「……なるほどね」

　そのことを雪菜に伝える前に、古風な長い黒髪の少女が、古城と同じ布団の中から、ぬっと顔を出してきた。まるでホラー映画さながらのその光景に古城はギョッと目を剝いて、

「ぬおっ!?」

「徹てつ夜やで看病した挙げ句に隣となりで寝落ち……まるで安いラブコメね。しかも浴衣で胸チラ付き。そういう天然ぶった色気で第だい四よん真しん祖そをたらしこんだのね。イラッとくるけど、参考にはなるわ。さすがは獅し子し王おう機き関かんの剣けん巫なぎといったところかしら、姫柊雪菜」

「妃き崎さき!?　お、おまえ……なんでそんなところから……!?」

　自分の布団から這い出してきた妃崎霧きり葉はを啞あ然ぜんと眺めて、古城がかすれた声で訊きく。

　雪菜は表情を凍りつかせたまま、ひくっ、と眉まゆを痙けい攣れんさせて、

「先輩……妃き崎さきさんと一緒のお布団で……いったいなにを……!?」

「違う！　俺おれだって今起きたとこなんだよ！　なんも知らん！」

「いいから姫柊ひめらぎ雪ゆき菜なは浴衣ゆかたを直しなさいな」

「……っ!?」

　霧きり葉はに素そっ気けなく指摘された雪菜が、乱れた浴衣の襟えり元もとを慌あわてて隠かくした。うーっ、と恨みがましく見つめてくる雪菜から、古こ城じようは後ろめたさを覚えつつ目を逸そらし、

「いったいなにがどうなってんのか、ちゃんと説明してくれるんだ

ろうな、妃崎霧葉？」

「その前に聞かせて欲しいのだけど、あなたはどこまで覚えているの、第だい四よん真しん祖そ？」

　むくり、と上体を起こしながら、霧葉が古城に訊きき返してくる。彼女もやはり雪菜と同様の浴衣姿だ。よく見れば古城が着ているのも、二人と同じ柄の男物の浴衣だったりする。

「……巫み女こ服ふくの女にいきなり襲おそわれて、殺されそうになったとこまでだよ。たしか姫柊が槍やりを奪われて、そいつで俺が狙ねらわれたんじゃなかったか――」

「そう……ところで、右腕の調子はどう？　問題なくて？」

「問題？」

　なんのことだ、と自分の右手を見下ろして、古城は表情を硬くした。

　怯おびえたように瞳ひとみを揺らしていた雪菜が、強く唇くちびるを噛かみしめる。

「先輩？」

「右手の感覚が……ないな……」

　誤ご魔ま化かしきれないと判断して、古城は溜ため息いき混じりに呟つぶやいた。そんな、と雪菜が肩を震ふるわせる。

「やっぱりね」

　霧葉は、訳知り顔で肩をすくめた。古城は戸惑いの表情で彼女を睨にらみ、

「知ってたのか？　この右手のこと――」

「ええ。私がこの豊満なおっぱいを触らせてあげたのに、なにも反応しなかったし」

　霧葉は、わざとらしく前まえ屈かがみになって胸元を強調してみせる。

「お……おっぱ……って……」

　古城の視線は、無意識に、霧葉の浴衣の合わせ目に吸い寄せられた。その魅惑の隙すき間まに手を突っこんでおきながら、まったく気づかなかったとしたら、それはかなりのショックである。

　しかし霧葉は、悪びれもせずに肩をすくめて、

「嘘うそよ」

「嘘なのかよ!?」

「あなたの右腕はちぎれかけてたのよ。発動中の七式突撃降魔機槍シユネーヴアルツアーを、素手で受け止めるような無む茶ちやをするから──」

「そう……か……そういや前にも似たようなことがあったな……」

　古城は力無く笑って呟つぶやいた。雪菜は、緊張感のない古城たちのやりとりに呆あきれているのか、なんともいえない無表情になって黙だまりこんでいる。

　獅し子し王おう機き関かんの秘ひ奥おう兵器であるところの〝雪せつ霞か狼ろう〟に古こ城じようが貫かれたのは、二回目だ。前回の負傷は眷けん獣じゆうの暴走を誘発し、刺された傷口が半実体化。魔ま力りよくの漏ろう出しゆつによる体調不良という形で、古城をしばらく悩ませた。そして今回の症状は、感覚喪そう失しつというわけだ。

　吸血鬼の真祖を滅ぼし得る破は魔まの槍やりというだけあって、〝雪せつ霞か狼ろう〟に受けた傷だけは、第だい四よん真しん祖その再生能力をもってしても、容易に回復させてはくれないらしい。

「でもまあ、いい判断だった、と褒ほめてあげなくもなくてよ」

　霧きり葉はが、意外にも古城を慰なぐさめるような口調で言った。

「眷獣による自じ爆ばく攻撃も含めて、〝静寂破りペーパーノイズ〟を撃退する手段は、あれ以外にはなかったわけだし。おかげで私たちまで溺おぼれ死じにそうになったわけだけど」

「〝静寂破りペーパーノイズ〟……って、あの巫み女こ装しよう束ぞくの女のことか？　閑しずかとかって名乗ってたよな」

「はい。獅子王機関の三さん聖せい筆頭。日本最強の攻魔師の一人です」

　古城の疑問に、雪ゆき菜なが神しん妙みような顔つきで答えてくる。

　日本最強などという馬鹿げた肩書きも、実際に彼女の力を体験した今となっては、笑い飛ばす気にはなれなかった。閑古こ詠よみが獅子王機関の重要人物なら、彼女が〝雪せつ霞か狼ろう〟を扱えたことにも納得がいく。

「太史局わたしたちとしては認めたくないけど、吸血鬼の真祖たちも一目置くような化け物よ。右腕一本の犠ぎ牲せいであの女を追い払えたのなら、あなたにしては上出来と言えるでしょうね」

　霧葉もどこか投げやりな口調で言った。

　感覚をなくした古城の右手を見つめて、雪菜は悄しよう然ぜんと目を伏せる。

「すみません、先輩……わたしが〝雪せつ霞か狼ろう〟を奪われたせいで……」

「姫柊ひめらぎが気にすることじゃねーよ。あんなの、どうやっても防げなかっただろ」

　閑しずか古こ詠よみの攻撃は、気づいたときには、すべて終わっているのだ。防御も回避もほぼ不可能。警戒することすらままならない。雪菜を責めるのは筋違いだ。

「それよりも凪なぎ沙さを捜さがしに行かないと――」

　古城は、嫌がらせのようにしなだれかかってくる霧葉を押しのけて立ち上がった。まずは現在地を確認するべく、窓に歩み寄って障しよう子じを開ける。

　そして古城は、誤作動を起こしたスマホのように固まった。

　窓の外に広がっていたのが、完全に予想外の光景だったからだ。

　折り重なるようにそびえ立つ山々と、そそり立つ常緑樹に覆おおわれた斜面。うっすらと漂ただよう白煙は、温泉が吐き出す蒸気だろうか。遠くには、白い冠かん雪せつを頂いた富士山が見える。

　どれをとっても、常とこ夏なつの人工島である紘いと神がみ島じまには存在しないはずの絶景だ。

「どこだ、ここは……!?」

　太平洋のド真ん中で溺おぼれかけていたはずの古城たちが、なぜこんな山の中で目を覚ますのか。

　混乱しながら振り返る古こ城じようの目の前で、部屋の襖ふすまが勢いよく開け放たれる。

　そこから雪な崩だれこんできたのは、色とりどりの和服を着た、外国人の女子の集団だった。

「お待たせしました、ルームサービスです！」

　振ふり袖そで風の赤い着物にフリル付きのエプロンという和装メイド服を着ているのは、二十歳前後のグラマラスな金髪美人。見覚えのある顔である。

「ふふ、お食事、お待ち致しました」

　青い和装メイド服のしっとりとした美女が、恭うやうやしく三つ指をついて頭を下げる。

「マッサージ、頑張ります！」

　同じく黄色いメイド服の少女が、健けな気げに拳こぶしを握にぎり締しめて古城を見上げてくる。

「お風ふ呂ろでお背中を流したり……」「ちょっとエッチなサービスも……」

　それぞれ白と黒の服を着た二人組の少女が、意味深な微笑を浮かべながら古城の布団に潜もぐりこもうとする。そのあたりで古城は、ようやく驚おどろきから立ち直り、

「あんたらっ……！　ヴァトラーんとこのメイド軍団がどうし

て……!?」

　上うわ擦ずった声で、どうにか疑問を言葉にした。

　謎なぞの和装メイドたちの正体は、ディミトリエ・ヴァトラーのクルーズ船〝オシアナス・グレイヴII〟の乗船客だ。もともとは祖国の安全と引き換えに人質としてヴァトラーに預けられた、〝戦せん王おう領りよう域いき〟周辺諸国の王族や重臣の娘たちだと聞いている。

　しかし肝心のヴァトラー本人が人質にも女にも無関心だったこともあり、彼女たちは単なる客人として、自じ由ゆう気き儘ままな生活を送っている。正直、自由過ぎるのではないかと思えるほどに。

　そんな〝オシアナス・ガールズ〟と遭そう遇ぐうしたことに、古城は動揺を隠かくせない。

　彼女たちが古城の前に現れたということは、今回の凪なぎ沙さの失しつ踪そう事件に、ヴァトラーが介入してきたということだからだ。あの戦闘狂バトルマニアの〝蛇へび遣つかい〟が──

「実は……その、溺おぼれかけていたわたしたちを、アルデアル公が拾ってくださったんです」

　雪ゆき菜なが言いづらそうな態度で答えてくる。

　なるほど、と落ちこみつつも納得する古城。海に転落した古城たちを、居合わせたヴァトラーが回収する──言われてみればありそうな話ではあった。閑しずか古こ詠よみが古城たちをあっさり見逃したのも、ヴァトラーが現れたせいだと思えば筋が通る。

「じゃあ、ここはヴァトラーの船の中なのか？　この景色は立体映像……とか……」

「いえ」

　それは違います、と微笑ほほえみながら答えたのは、赤い着物の和装メイドだった。

「こちらはジャパニーズ温泉旅館ですわ。ハコネ温泉」

「は、箱はこ根ね……!?　なんでそんなところにあんたたち

が……!?」

「ヴァカンスです」

　青メイドが愉快そうに目を細める。

「アルデアル公の粋いきな計はからいで、オシアナス・グレイヴIIの乗員は、ニューイヤーホリディを温泉で過ごす許可をいただいたのです」

「そ、そうか……」

　だからって俺おれたちまで連れてこなくても、と古こ城じようは複雑な気分になる。たしかに紘いと神がみ島じまから本土まで運んでもらえたのはありがたいが、こんな観光地に案内されても、正直、困る。

　適当な港で放り出してもらえれば、むしろそのほうがよかったのだが―

　と、そんな古城の思考をなぞったように、残るメイドたちが口々に言う。

「第だい四よん真しん祖そ、どうぞお忘れなく」

「箱はこ根ねから神かん縄なわ湖こまでの距きよ離りは二十キロ足らず」

「徒歩でも辿たどり着ける距離ですわ」

「……っ!?」

　すべて見透かしたように微笑ほほえむ彼女たちを、古城は驚おどろいて凝ぎよう視しする。

　どうやら古城たちは知らぬ間に、事件の核心へと放りこまれつつあるらしかった。

第二章　白霧の戦場

Battlefield Of White Mist

1

優雅に空を舞う装甲飛行船の船橋ブリツジで、ラ・フォリア・リハヴァインは物もの憂うげに頬ほお杖づえを突いていた。銀色の髪と碧あおい瞳ひとみ。美フのレ女イ神ヤの再来とも称される、北欧アルディギアの若き王女である。

彼女が口元に浮かべているのは、世間が彼女に抱いだくイメージそのままの、慈じ愛あいに満ちた優しげな微笑ほほえみだ。しかしその儚はかなげな微笑が、今はどこか恐ろしげなものに感じられる。

なまじ容姿が優すぐれているだけに、笑顔を透かして滲にじみ出る悪意が恐怖を誘さそう。

王女はめずらしくご立腹なのだった。

「遺い憾かんです。せっかくの休暇で絃いと神がみ島じままで来たというのに、肝心の古こ城じようが不在とは―」

そう言ってラ・フォリアは、透きとおった氷のような眼まな差ざしを部下へと向ける。

その視線に射い竦すくめられたように、神しん妙みようにうなだれたのは短い銀ぎん髪ぱつの女おんな騎き士しだった。

叶かな瀬せ夏か音のんの護ご衛えいを兼ねて、絃神島に駐在しているラ・フォリア配下の密偵―ユスティナ・カタヤ要よう撃げき騎き士しである。

「申し開きもありません。姫様へのご報告が遅れましたのは、このユスティナ・カタヤ一生の不覚。斯かくなる上は腹を切って、この失態の償つぐないを―」

「おやめなさい。飛行船が汚れます」

　懐かい剣けんを取り出し悲壮な決意を口にするユスティナを、ラ・フォリアが冷たくーいつ蹴しゆうする。

「で、ですが、姫様──」

「その失態が奏功して、意外な御お方かたと誼よしみを結べまし

た。それをもって此こ度たびは不問にしましょう。どうやら下界は面白いことになっているようですし」

　ユスティナをからかって気が晴れたのか、ラ・フォリアがいつもの調子に戻って外を見た。

　装甲飛行船〝ベズヴィルド〟の現在地は山やま中なか湖こ上空。対地高度は約二千五百メートルだった。富ふ士じ裾すそ野のから丹たん沢ざわ山地までを一望できる位置である。

　高度な魔ま導どう技術を誇るアルディギア王国製の観測機器は、神かん縄なわ湖こに出現した巨大な魔力源の存在をはっきりとらえている。暫ざん定てい的に〝蜂蛇ドローン〟と名付けられた魔ま獣じゆうの群れの存在もだ。

「ところで、彼かの君きみの姿が見当たりませんが？」

　ラ・フォリアが船橋ブリツジの乗員クルーに訊きく。緊張の面持ちで答えたのは、副長席に座った若い騎き士しだ。

「単独で降下されました。なにやら調べたいことがあるとの仰おおせで」

「なるほど……この展開は予想されていた、というわけですか……」

　瞳ひとみに好奇の光をたたえてラ・フォリアが呟つぶやく。

　ユスティナは、なにかに気づいたようにハッと顔を上げ、

「姫様、もしや絃いと神がみ島じまを出た古こ城じよう殿の目的地も……」

「ええ、おそらく」

　首しゆ肯こうするラ・フォリアの表情は愉たのしげだ。

「神かん縄なわ湖ことやらには降りられますか、船長？」

「そいつは、ちと難しいでしょうな」

　中世の海賊を思わせるごつい風貌の船長が、気まぐれな王女の問

いかけに首を振る。なぜです、とラ・フォリアは拗すねたように小首を傾かしげるが、

「〝蜂蛇ドローン〟程度に、この〝ベズヴィルド〟の聖護結界は破れやしませんがね、どうも、あの霧きりの中にはもっとヤバい相手が潜ひそんでるようで」

船長が指さしたのは、船橋ブリツジの隅にある望遠カメラのモニタだった。神縄湖から二キロほど離はなれた山中の空き地に、所属不明の部隊が展開している。大型トレーラーを含む装甲車両が全部で三台。兵力の規模は小さいが、霧きりに紛まぎれるように隠かくれ潜ひそむ姿はどこか不気味だ。

「彼らは？　自衛隊ＪＳＤＦの部隊ではありませんね？」

ラ・フォリアが、興味を惹かれたように唇に手を当てる。

神縄湖を包囲している自衛隊の目的は、出現した魔獣の封じこめのはずだった。すでに戦闘が始まった状態で、わずかな戦力を伏兵のように配置する理由はない。

彼ら所属不明部隊の指揮系統は、明らかに自衛隊とは別物だ。むしろ敵対しているようにも見える。

「あのトレーラーの積み荷、気になりますね。解析は済んでいるのでしょう？」

静かに微笑ほほえんだまま、ラ・フォリアが訊きく。

「姫様には敵かないませんな」

船長は肩をすくめながら、画面の切り替えを部下に指示した。表示された虹にじ色いろの立体映像は、魔ま力りよくの分布を示すリアルタイムの解析情報だ。

所属不明部隊が隠かくれている位置に、見慣れない輪りん郭かくが浮かび上がっている。〝蜂蛇ドローン〟の群れとは比較にならないほどの、強大な魔ま獣じゆうの反応だ。

「船長、これは？」

意外な伏兵の正体に、ラ・フォリアが瞳ひとみを輝かがやかせ

る。船長は眉み間けんにしわを寄せながら、

「シルエットだけなら飛龍ワイバーンに見えますな」

「飛龍ワイバーン？　特別保護指定の稀き少しよう種しゆではありませんか！」

　生き真ま面じ目めな口調で訊き返したのは、ユスティナだった。

　飛龍ワイバーン──飛行能力に長たけた二本脚の翼よく龍りゆう。龍族ドラゴンの下位種族というよりは、単に龍族ドラゴンに姿形の似た魔獣というべき存在だが、それでも翼長十四、五メートルにも達し、屈指の戦せん闘とう力りよくを持つ凶暴な種族だ。

　中世には世界各地で猛もう威いを振るった飛龍ワイバーンだが、環境破壊による棲せい息そく地ちの減少や乱獲によって、近年では絶滅が危き惧ぐされるほどに数を減らしている。日本では現在、ブルーエリジアムの〝魔獣庭園〟などの数カ所にしか棲息していない。ましてや野生の飛龍ワイバーンが、こんな人里近くで生き残っているはずもない。

「ただの飛龍ワイバーンなら、この〝ベズヴィルド〟が警戒するほどの相手じゃありませんがね。生せい体たい障しよう壁へきの術じゆつ紋もんも魔力組成も、通常の魔獣のものとはまったく違っています。単なる新種ということでは済まないでしょうな」

　船長が慎重な口調で言った。ふふっ、とラ・フォリアが失笑を洩らす。目の前に転がっていくボールを見つけてウズウズしている子猫のような表情だ。

「人為的に生み出された新種か、あるいは飛龍ワイバーン以外のなにか、というわけですね。いずれにせよ目的は戦闘用ですか。彼かの君きみの予想が当たったようですね」

「ひ、姫様？」

　ユスティナが怯おびえたような表情で主君を見上げる。ラ・フォリアの気まぐれに振り回されて苦労するのは、彼女の護ご衛えいである騎き士し団だんだ。第一王女であるラ・フォリアの身になにかがあったら、ユスティナ一人の切腹程度では済まない。

　そんな女騎士の気苦労を知ってか知らずか、王女は愛用の呪じゆ

式しき銃じゆうの手入れを始めつつ、

「アルデアル公のクルーズ船も東京湾に停泊しているようですし、ネウストリア国籍のティルトローター機も神かん縄なわ湖こ上空で目撃されたとか。ロタリンギアや〝混こん沌とん界かい域いき〟の方々も、当然、目を光らせておりましょう。ふふ……楽しくなってきましたね、ユスティナ」

「姫様、何なに卒とぞご自じ重ちようを……何卒……！」

ほとんど土下座しそうな勢いの女おんな騎き士しの嘆たん願がんが、装甲飛行船の船橋ブリツジに響ひびく。

白群青ペールブルーの船体は、ゆっくりと降下を始めていた。

2

白く凍いてついたダムの堤防を、暁あかつき緋ひ沙さ乃のは駆け上がっていた。

彼女の肩には、意識をなくした白はく髪はつの少女が背負われている。幽ゆう体たい離り脱だつ中の闇くらき白しろ奈なは完全に無防備で、緋沙乃はそんな白奈の本体を、たった一人で護ご衛えいしていたのだ。

彼女たちを襲おそってきた一体の蜂蛇ホウダが、轟ごう音おんとともに地面に転がった。緋沙乃が放った薙刀なぎなたの連撃が、鋼はがね色いろの魔ま獣じゆうを撃ち落としたのだ。小柄な少女とはいえ、人一人を背負っているとは思えない、凄すさまじい技の冴さえだった。

ズタズタに斬きり裂かれた蜂蛇を見下ろして、しかし緋沙乃の表情は険しい。呪じゆ力りよくによって硬度を増していたはずの薙刀が、わずかに刃は毀こぼれしていることに気づいたのだ。

「硬い……銃弾程度では歯が立たないわけですね……」

七十歳近い老女とは思えぬ身軽さで、緋沙乃は氷結したダムの

ゲートを乗り越える。

霧きりに包まれたダム周辺のあちこちで、自衛隊は蜂蛇の群れとの戦せん闘とうを続けていた。通常のライフル弾程度では、蜂蛇の鱗うろこを貫通できない。そのためか各部隊ともに魔獣に苦戦している。偵察用の高機動車を主体とした特殊攻魔連隊の装備では、魔獣の群れを相手にするには圧倒的に火力が足りない。戦力的にはかろうじて拮きつ抗こうしているが、いずれ包囲が突破されるのも時間の問題だ。

作戦本部の置かれた展望駐車場の周辺も、蜂蛇の猛もう攻こうを受けていた。体長四、五メートルに迫る鋼色の魔獣たちが、十体近くも暴れている。

緋沙乃はそんな魔獣たちの群れの中に、迷うことなく飛びこんだ。意識のない白奈を背負ったまま、無造作とも思える手て捌さばきで薙刀を振るっていく。

「やはり最後まで保もちませんか。歳としは取りたくないものですね――」

六体目の魔獣を斬きり伏せたところで、緋沙乃の薙刀の刃が砕けた。呪力の供給量が追いつかずに、刃を強化していた術式が解除されてしまったのだ。

「ですが、内部への打撃はそれなりに有効なようですね。化け蟹がにの類たぐいを相手にしていると思えば、なんとかなりますか」

襲いかかってきた七体目の蜂蛇を、緋沙乃が素手で吹き飛ばす。特殊攻魔部隊の隊員たちが、そんな緋沙乃のデタラメな戦いぶりを、目を丸くして見つめていた。

蜂蛇の数が半減したことで、自衛隊の戦力にも余裕が生まれる。重火器の集中砲火を浴びて、魔獣たちが次々に撃ち落とされていく。蜂蛇の群れが壊かい走そうを始めたのを確認して緋沙乃はようやく武器を下ろし、作戦本部のテントへと向かった。

「暁あかつき巫ふ司し、ご無事でしたか」

潰つぶれかけたテントの中から声をかけてきたのは、迷めい彩さい服ふく姿の女性自衛官だった。安あ座ざ真まの補佐を務めていたはずの人物だ。目つきが鋭く無表情で、やや近寄りがたい雰ふん囲

い気きがある。

　意識のない白しろ奈なを椅い子すに横たえる緋ひ沙さ乃のの前で、彼女は形だけの敬礼をして、

「第一中隊、沖おき山やま観み影かげ一等特とく尉いであります。安座真三佐の所在が不明のため、代理で連隊の指揮を執とっています」

「……安座真三佐が行方ゆくえ不明？」

「はい。状況から見て殉じゆん職しよくの可能性も──」

　なるほど、と緋ひ沙さ乃のは溜ため息いきをついた。

　蜂蛇ホウダの急きゆう襲しゆうによる本部付近の被害は甚じん大だいだ。有能な安座真らしからぬミスだが、指揮官の負傷は当然起こり得る事態であり、沖山観影は定められた手順どおりにそれに対応している、というわけだ。

「戦況は？」

「よくありません」沖山が事務的な口調で答えてくる。「濃のう霧むで指揮系統が寸断されています。この視界では航空機の支援も期待できませんし」

「蜂蛇の数がこれほどとは、さすがに想定外でしたね」

　緋沙乃が厳しい表情で呟つぶやいた。蜂蛇が実際に出現したという記録は、神かみ緒お多だ神社にも残されていない。黒殻アバロンの解放によって生じる災さい厄やくは、緋沙乃にとっても未知の体験なのだ。

「予測を誤ったのは我々も同じです」沖山の口調はあくまでも冷静だった。「これだけの大型魔ま獣じゆうを駆く逐ちくするには、現在の我々には、圧倒的に戦力が足りません。せめて各部隊の連携を回復させることができれば、現在の装備でも対応可能なはずですが──」

「連携、ですか。それならば、なんとかなりそうですね」

「え？」

確信に満ちた態度で告げる緋沙乃に、沖山は初めて困惑の表情を浮かべた。強い魔力を帯びた霧きりのせいで、無線や呪じゆ術じゆつによる通信は阻そ害がいされている。この状況で、湖の周辺一帯に散らばる隊員たちを連携させる手段など、そうそう残されているとは思えない。

そんな沖山のすぐ隣となりで、ようやく意識の戻った白はく髪はつの少女が、恐る恐る手を挙げる。

「あの……それは……わたしがやります」

「闇くらき卿きよう？」

沖山が驚おどろいて白しろ奈なを見た。

「ですが、指示を伝えるといっても、どうやって？」

「わたしが操作します……彼らを、直接……」

そう言って白奈は目を閉じた。彼女の髪が、重力から解き放たれて音もなく舞い上がる。

そこから伸びる不可視の霊れい糸しが、まるで網あみの目のように湖一帯を覆おおう気配があった。霊れい力りよくの糸を介した巨大なネットワークを編み上げて、そのすべてを一人の少女が掌しよう握あくしていく。

自衛隊員たちの動きが変わったのは、その直後だ。

生き残っていた装甲車搭とう載さいの機関砲が火を噴ふいた。分厚い霧の中に隠かくれていた蜂蛇ホウダたちを、砲弾が正確に撃ち抜いていく。蜂蛇の傍そばにいたほかの隊員の視覚情報を使って、目標の正確な位置を割り出したのだ。同様の光景は包ほう囲い網もうのあちこちで起こっている。

一切の時間差タイムラグを感じさせない、完全な連携。

目の前の敵を殲せん滅めつした部隊は、戦力の手て薄うすな部隊の援えん護ごに回り、救護部隊は行方不明だった負傷者の救助へと動き出す。たとえ無線が生きていたとしても、これほどまでに緊密な連携を維持するのは容易ではなかったはずだ。闇くらき白しろ奈なただ一人の意思が、戦場全体を支配している。あたかも優秀な

チェスプレイヤーのごとく、盤ばん上じようの駒こますべてを操あやつっているのだ。

「これが……獅し子し王おう機き関かん三さん聖せいの力……」

　沖おき山やまが戦せん慄りつの表情で呟つぶやいた。数百人、あるいは数千人の兵士を完全に同期して統率する能力。それはこの現代社会において、直接的な戦せん闘とう力りよくよりも、ある意味、遥はるかに危険な能力だ。

　暗殺、組織犯罪、情報収集、政治や経済の操作──能力の使い方次第では、国家そのものを操ることすら可能だろう。さすがは獅子王機関三聖の一人というべきか。日本最強の攻こう魔ま師しという触れこみも、決して誇大表現とは言い切れない。

「すまぬな、緋ひ沙さ乃の。黒殻アバロンの正体……見誤ったわ……」

　戦場が安定したことで余裕が出来たのか、白奈は裏の人格に変わっていた。

　闇白奈は、千年以上もかけて記憶と霊れい力りよくを受け継ぎ、力を高めてきた一族の末まつ裔えいだ。生まれつきの呪のろいにも似た彼女たちの在り方は、不老不死の吸血鬼に似ていると言えなくもない。

　その白奈の中の旧ふるき人格が、自じ嘲ちようするように弱々しく笑う。

「あの娘の……羽は波ば唯ゆい里りの言葉どおりであったよ。黒殻アバロンは封印などではなかった。あれは我らを利用していたのだ。生いけ贄にえの巫み女こから、知識を吸い上げることによって、時が満ちるのを測っておった。花粉を虫に運ばせる植物のようにな」

「求めていたのは、生贄の持つ霊力ではなく知識だった、というわけですか」

　緋沙乃はかすかに眉まゆを震ふるわせた。

　白奈の見立てが事実なら、今回の獅子王機関の作戦は、前提からして間違っていたことになる。そして黒殻アバロンの中にいた災モ

厄ノは、生贄となっていた十二番目のアヴローラの知識を手に入れた。それが災さい厄やくを目覚めさせたのだ。

「沖おき山やまーいち尉い、この場はお任せします」

「暁あかつき巫ふ司しはどちらへ？」

　予備の薙刀なぎなたを手に取る緋沙乃に、沖山が無感情に訊きき返してくる。

　緋沙乃は冷気に包まれた神かん縄なわ湖こを静かに見据えて、

「蜂蛇は災さい厄やくの先触れに過ぎない──その伝承が真実ならば、こうは考えられませんか？　すなわち蜂蛇ホウダの主あるじたる何者かが、いまだ湖底に潜んでいる、と」

「この魔ま獣じゆうの群れは、真の災さい厄やくに寄生している取り巻きに過ぎない、と……？」

　沖おき山やまは、信じられないと言うように首を振った。

「馬ば鹿かな……あれだけの数の魔獣を従えられる存在など、吸血鬼の真祖くらいしか……」

「ならば私たちが戦っている敵は、吸血鬼の真祖に匹敵する何者か、ということになりますね」

　緋ひ沙さ乃のは微笑ほほえんで淡々と言い放つ。直後、

「ああっ……！」

　白しろ奈なが悲鳴とともに激しく仰のけ反ぞった。魔力が逆流する気配があった。張り巡らせていた無数の霊れい糸しが弾はじけ飛び、その反動で白奈は再び気絶する。

　白い冷気の霧きりの中に、一いつ瞬しゆんだけ浮かび上がったのは巨大な影だ。

　災さい厄やくそのものに形を与えたような、黒く禍まが々まがしい影だった。

　数千人の兵士を自在に操あやつる白奈だが、逆に言えば、数千の

兵をもってしても倒せない敵には、彼女は無力ということでもある。霧の中で蠢うごめく黒こく影えいは、まさしくそのような敵だった。

「なんなの……あれは？」

　沖山の問いに答える者はなく、ただ災厄の巨大な咆ほう吼こうだけが凍こごえた大気を震ふるわせていく――

3

　斐ひ川かわ志し緒おは、純白の霧きりに包まれながら、広大な氷の平原を歩いていた。

　総貯水量六千万トンを超える神かん縄なわ湖この広大な水すい面めんが、対岸まで完全に凍りついている。

　凍結によって増加した体積の分だけ、湖面は氷山のように険しく盛り上がり、氷雪混じりの寒風とともに、志緒の行く手を阻はばんでいた。

　残されたわずかな呪じゆ力りよくを使って寒さに耐えつつ、志緒は必死に氷の段差を越えていく。と、そんな志緒の耳に聞こえてきたのは、緊張感の乏しい中年男の声だった。

「おーい、志緒ー」

「な、馴なれ馴なれしく私を呼び捨てにするなっ！」

　当然のようについてくる牙が城じようを睨にらんで、志緒が怒ど鳴なる。実に腹立たしいことに、志緒を散々手こずらせている凍った湖面も、牙城はたいして苦にしていないようだ。

「じゃあ、志緒ちゃんさー。なんでもいいけど、あんま無理すんなって。呪じゆ力りよくだってほとんど残ってないんだろ。今度あの化け物の大群に襲おそわれたら、死ぬぜ、俺おれたち。いや、マジで」

「だからって唯ゆい里りを放っておけるわけないだろ。だいたい、どうしてあなたまでついてくるんだ!?」

　まるで運命共同体のように、俺たち、などと一ひと括くくりにするのはやめて欲しい、と志し緒おは真剣に腹を立てる。しかし牙が城じようはそんな志緒の気も知らず、

「俺は、娘を保護しなきゃなんねーしさ。それにまあ、俺一人なら大抵なんとかなるからな」

「なんだ、それは。私が足手まといだって言いたいのか」

　思わずカチンと来て足を止める志緒。

　牙城は笑って首を振りつつ、コートの内側に手を入れて、

「そうは言ってねーよ。たださ、無む茶ちやするなら時と場所を選べってこと。自分が先に死んだら、もう誰だれも助けられないんだからな」

　そして突然抜き放った単発式のグレネードランチャーを、志緒の背後に向けてぶっ放した。

　氷の陰から志緒を狙ねらっていた鋼はがね色いろの魔ま獣じゆうが、頭部を吹き飛ばされて横転する。

　やれやれ、と溜息をつく牙城の額ひたいには、うっすらと汗が浮いていた。志緒は、そんな牙城を意地悪く見上げて、

「そういうあなたもずいぶん消耗してるみたいじゃないか。〝死し都と帰がえり〟の力、なんの代償もなく使えるほど便利なものとは思えないぞ」

「おお、さすが。鋭いね。気にしてくれてるのか、俺おれのこと？」

「だ、誰だれが！」

「まあ、うちの婆ばあさんもそのあたりの事情を知ってたから、戦力温存のつもりで俺を座ざ敷しき牢ろうに隔かく離りしといたんだろうけどな」

　使い切ったグレネードランチャーを投げ捨てながら、牙城はふてぶてしく笑う。

「てことは、俺が戦場に駆り出された時点で、あの婆ばばあも相当追い詰められてるってことだな。多少無理してでも凪なぎ沙さだけは回収しとかねーと」

　そう言って凛りゞりしく笑う牙城の姿に、志緒は一いつ瞬しゆんだけ目を奪われた。そのせいで注意が疎おろそかになっていたのだろう。うっかり足を滑らせて、志緒は見事にバランスを崩す。

「きゃあああっ！」

「おっと」

　深々と抉えぐれた氷の斜面を滑かつ落らくしかけた志緒を、牙城が右手一本で軽々と抱き上げた。

「ふぃー……大丈夫か、志緒ちゃん？」

「大丈夫……大丈夫だから、下ろせ……！」

　牙城の肩に担かつぎ上げられた志緒が、バタバタと手脚を振り回す。しかし牙城の腕はがっちりと志緒を抱えこんでビクともしない。志緒が暴れれば暴れるほど、互いの身体からだが密着していく。

「軽いなー。ちゃんとメシ喰くってるか？」

「う、うるさい！　放せ、セクハラ中年！」

「やれやれ……これは湖の底まで完全に凍りついてやがんな」

　目の前に広がる氷の裂け目クレバスを見下ろして、牙城が気け怠だるげに息を吐いた。巨大な怪物が這はい出した痕こん跡せきのような、凄すさまじく深い裂け目クレバスである。

　裂け目クレバスの深さは四、五十メートルを超えていたが、それでも氷の底は見えない。神かみ緒お多だダムが溜ためこんでいた水のすべてが、完全に凍結しているのは間違いなかった。何者かの魔ま力りよくが、ダムを丸ごと凍りつかせたのだ。

「なんで……こんなの真祖の眷けん獣じゆうでもなければできるはずないのに……」

　自分が、かつてない規模の魔ま導どう災害に直面していることを思い知らされて、志し緒おは怯おびえたように首を振る。牙が城じようは、ふっ、と他ひ人と事ごとのように笑って、

「真祖の眷獣か。だったら、つまりそういうことなんだろ」

「……暁あかつき牙城？」

　牙城の発言の意味を量はかりかねて、志緒は彼の横顔を見つめる。しかし牙城は沈ちん黙もくしたまま、純白の霧きりの奥を、険しい表情で睨にらみつけていた。

「凪なぎ沙さ……か？」

　警戒したような低い声で、牙城が呟つぶやく。その声を聞いて志緒も気づく。氷の裂け目を平然と渡って、小柄な人影が志緒たちのほうに近づいてくる。

「いや、違うな……」

　人影を睨みつけたまま、牙城は担かついでいた志緒をそっと下ろした。

　近づいてくるのは、純白の巫み女こ装しよう束ぞくをまとった少女だった。

　少女の顔立ちは暁あかつき凪なぎ沙さそのままだ。しかし髪の色が違っている。プリズムのように光の加減で色を変える淡い金髪。燃え上がるような虹にじ色いろの髪。

「誰だれ……!?」

　志緒は無意識に声を洩もらす。白装束の少女が、青白く燃える炎のような瞳ひとみで志緒を見た。禍まが々まがしくおぞましい魔力の気配に、ゾクリと志緒の背筋が凍る。

　その瞬しゆん間かん、攻魔師としての直感で志緒は気づいた。

　この異様な凍結現象を引き起こしたのは、彼女だと―

「お目覚めかい、お姫様」

　敵意がないことを示すように、牙城が両腕を広げて呼びかける。懐なつかしい友人に語りかけるような親しげな態度だ。

『汝なんじは……』

　白装束の少女が、焔えん光こうの瞳ひとみを牙城に向けた。

　少女が浮かべたのは、泣き出す一歩手前のような絶望に満ちた表情だった。

「俺おれのことを覚えているか、眠り姫」

　そんな彼女に、牙城が優しく笑いかける。

　少女は、虹色の金髪を揺らしながら弱々しく首を振り、

『何なに故ゆえ、笑う？』途切れ途切れの声で彼女は答えた。『我われは、汝に贖しよく罪ざいの言葉を持たず……汝の侮ぶ蔑べつと憤ふん懣まんと呪じゆ詛そを、我は甘んじて受け入れよう』

「勘違いすんなよ、お姫様。誰もおまえを恨んじゃいねえよ。俺も、もちろん古こ城じようのやつもな」

　牙が城じようは強い口調で言い切った。細い刃やいばの上で綱つな渡わたりをしているような、危ういバランスで成り立つ二人の会話を、志し緒おは息を殺して聞いている。

「凪なぎ沙さは無事か？」

　牙城がそう尋ねたとき、初めて少女の口元に笑みが洩もれた。大切なものを愛いとおしむような、儚はかなくも美しい微笑ほほえみだ。

『彼かの優しき巫み女この御み魂たまは、此方こなたに――』

　自らの胸元に両手を当てて、白しろ装しよう束ぞくの少女は目を閉じた。

　そして彼女は、力尽きたようにその場に倒れこむ。

　志緒は溜ためこんでいた息を静かに吐いた。少女の意識の消滅と

ともに、志緒を萎い縮しゆくさせていた強烈な圧迫感が薄うすれていく。漂ただよっていた冷気もかすかに和やわらいだようだ。

「暁あかつき牙城……今のは……誰だれ？」

　硬く強こわ張ばった声で、志緒が訊きいた。

　牙城は志緒の質問には答えずに、眠っている暁凪沙を抱き起こす。

「悪い、志緒ちゃん。こいつの世話を頼んでいいか？」

「それはもちろん構わないけど……あなたはどうするんだ？」

　志緒が眉まゆを寄せて訊き返す。せっかく回収した娘を置いて、暁牙城がなにをするつもりなのか気になった。わけもなく酷ひどい胸むな騒さわぎがする。

「代わりに俺おれが唯ゆい里りちゃんを捜さがしに行く、と言いたいところだが……感じないか、この空気」

「……空気？」

　言われて志緒もようやく気づく。大気がかすかに震えていた。硬く凍てついた湖面が、不規則に揺れている。巨大な質量の塊かたまりが、遠くで暴れているような異様な震しん動どうだ。

「なにか……いるのか……!?」

　霧きりの切れ間から一いつ瞬しゆんだけ姿を見せたのは、城じよう塞さいにも似た漆しつ黒こくの影だった。

　歪いびつな刃物にも似た広大な翼つばさ。装甲車すら華きや奢しやに思えるほどの逞たくましい四し肢し。凶暴な肉食のトカゲに似た頭部。鋭い牙きばと真紅の瞳ひとみ。

　実際に目にするのは初めての、しかし誰もがその名を知る最強の魔ま獣じゆう──

「嘘うそ……」

　志緒の唇くちびるが、引き攣つるように震ふるえる。

純白の霧を巻き上げながら、漆黒の龍ドラゴンが雄お叫たけびを上げた。

4

頬ほおの痛みで目が覚めた。誰だれかが乱暴に浅あさ葱ぎの頬をはたいている。耳元で響ひびき続けているのは、年下の少女の甲かん高だかい声だ。

「女帝殿！　女帝殿……っ！」

「その呼び方、いい加減やめなさいっての……」

平手打ちを繰り返すリディアーヌを涙目で睨にらんで、浅葱はのろのろと頭を上げた。

超小型有脚戦車マイクロロボツトタンクの背中に増設された、副操縦席の中だった。傷だらけの装甲ハッチが開いて、赤毛の少女が心配そうに、浅葱の顔をのぞきこんでいる。

「女帝殿、無事でござったか！」

「いや、全然無事じゃないし。あちこち痛いし、ホント最悪だわ。なにが空挺降下エアボーン装備よ。おかげで余計に死にかけたじゃない」

狭い副操縦席から這はい出しながら、浅葱はひとしきり文句を垂たれる。

上空一千メートルから投げ出された有脚戦車ロボツトタンクは、姿勢制御用のブースターを吹かしながら、四基の非常用パラシュートを展開。落下速度を殺しながら、丹たん沢ざわの山中へと降下した。だが、上う手まくいったのはそこまでだ。

最初のトラブルは、降下先が気流の荒れた山間地帯ということだった。凄すさまじい横風にパラシュートが引きずられて有脚戦車ロボツトタンクは横倒しになり、その時点で脚部の衝撃吸収機構ショツクアブソーバーと着陸用エアバッグは、完全に役に立たなく

なった。

　着陸地点が、樹木の密集した山林というのも悪かった。有脚戦車ロボツトタンクは木々の弾力でピンボールのように何度も撥はね飛ばされ、最終的に深い谷底に落下。浅葱が覚えているのはそこまでだ。

「いやはや、降下先が渓けい谷こくというのは想定外でござった。水密構造の見直しを肝きもに銘めいじねば。然されど、パイロットスーツが高性能なのは僥ぎよう倖こうでござろう？」

「って、これ、水没することを見越してスク水みたいなデザインになってたわけ!?」

　びしょ濡ぬれになった操縦服を見下ろして、浅葱が心底呆あきれたようにうめく。

　谷底を流れていた渓流に落下したことで、防水機能のない操縦席は水浸しになっていた。たまたま水深が浅くて助かったものの、でなければ溺でき死しするところだ。

　だが、たしかにリディアーヌが自慢するだけあって、水浸しでもあまり寒さは感じない。あれだけの衝しよう撃げきを受けて、浅葱が怪け我がらしい怪我もなく済んだのも、このスク水風操縦服の性能のおかげだろう。

　とはいえ、こんな谷底でじっとしていたら、いつまで無事でいられるかはわからない。ただでさえ真冬の渓流の水は冷たく、気のせいか先程から水みず嵩かさが増しているようにも感じられる。

「で、どうなの？　この戦車、まだ使えるの？」

　乱れた髪を整えつつ、浅あさ葱ぎは、操縦席に戻ったリディアーヌに訊きいた。

　主要な道路から遠く離はなれた、山奥の名もない渓けい谷こくだ。左右両りよう脇わきはそそり立つ崖がけになっており、生身の人間が登れるような地形ではない。助けを呼ぼうにも電波が届くとは思えない。リディアーヌの戦車が動かなければ、浅葱たちは即座に遭そう難なん者しやの仲間入りである。

　落下の衝しよう撃げきであちこち壊こわれていたが、戦車の電源

は生きているらしかった。リディアーヌは回路を切り替えて、整備用のコンソールを立ち上げる。

「自己診断セルフチエツク実行中。駆動系、電装系ともにクリア。破損したモジュールを切り離はなせば、おそらく再起動は可能でござろう。各種センサー類は再調整が必要なれど、ソフトウェアで補正可能な範囲でござるな」

「オーケー、そっちはあたしがやるわ」

「かたじけない。では拙者はシステムの再起動プロセスを開始するでござる」

　浅葱は自前の端末を広げて、有脚戦車ロボツトタンクの観測システムに接続した。実験機であるリディアーヌの〝膝ひざ丸まる〟は、現場で簡単に制御ソフトウェアの修正ができるようになっている。業界でもトップクラスのプログラマーである浅葱とリディアーヌが手を組めば、システムを丸ごと書き換えたとしても、たいした時間はかからない。

「おー……来た来た。さすがは〝戦車乗り〟……綺き麗れいなコード書いてるわね。これなら最低限の手直しで行けるかなー……このあたりの処理を並列化すればリソースに余裕が出来るから、自動補正のパッケージを割りこませて……と」

　浅葱は瞬またたく間まに有脚戦車ロボツトタンクの損傷箇所を特定、それぞれ個別の修正プログラムを組み上げていく。手間はかかるが、そう難しい作業ではない。鼻歌交じりにキーボードを叩たたいて、八割ほどの作業を終わらせたところで、

「うー……」

　浅葱はもじもじと両脚をこすり合わせ、ぶるっ、と背中を震ふるわせた。

　そんな浅葱を、リディアーヌが心配そうに振り返り、

「おしっこは我慢しないほうが健康に良いでござるぞ、女帝殿？」

「違うわよ！」

　浅葱が顔を真っ赤にしながら怒ど鳴なる。

「そうじゃなくて、なんか異様に冷えてきたんだけど、どうなってるの、これ？」

「言われてみれば妙でござるな。ヒーターは滞とどこおりなく作動中でござるが……」

「水温が氷点下って……げっ!?」

　温感センサの数字を確認して、浅葱はぎょっと目を剝むいた。

　リディアーヌの赤い有脚戦車ロボツトタンクは、細い渓けい流りゆうの澱よどみに取り残されている。その水面が凍結を始めていた。神かん縄なわ湖こから流れ出した強烈な凍気が、ついにこの渓谷にまで辿たどり着いたのだ。大気には白い霧きりが混じって、視界も悪化しつつある。

「まずい、川が凍り始めてる！　〝戦車乗り〟！」

「合がつ点てん承しよう知ち！」

　リディアーヌは整備用コンソールを投げ出して、有脚戦車ロボツトタンクを再起動した。

　水浸しになっていたせいか、途中で何度かエンストしつつも、メインのジェネレーターがどうにか起動する。シャーベット状になった川かわ面もをザクザクと掘り返し、有脚戦車ロボツトタンクは川岸に向かって歩き出した。川の凍結が予想以上に速い。浅あさ葱ぎが気づくのが遅れていたら、戦車ごと氷漬けになっていたところだ。

「なんにしても、さっさとこの谷底からは脱出したほうがよさそうね」

「御ぎよ意い。ワイヤーを使うでござる。女帝殿、シートベルトを締めてくだされ」

「今度は本当に大丈夫なんでしょうね……？」

　浅葱は副操縦席に滑すべりこみ、念入りにシートベルトを装着した。ついでに装甲ハッチも閉めておく。墜つい落らくの衝しよう撃げきでハッチは手て酷ひどく歪ゆがんでいるが、気休め程度にはなるはずだ。

『安心召めされよ。この〝膝ひざ丸まる〟は、もともと市街戦用に開発された機体。垂直の高層ビルをも登れる設計でござる。この程度の崖がけっぷちなど朝飯前でござれば』

「あんたの言うことは、今さらまったく信用できないんだけど……」

『……うぬ!?』

「言ってる傍そばから!?　今度はなに!?」

『未確認移動物体アンノウン確認！　魔ま獣じゆうにござる！』

「はい……!?」

　浅葱は慌あわてて外部カメラの映像を切り替えた。純白の冷気の霧きりの中に、鋼はがね色いろの魔獣のシルエットが浮かぶ。浅葱たちのティルトローター機を撃げき墜ついした、あの魔獣だ。彼ひ我がの距きよ離りは二百メートルほど。敵はまだ浅葱たちに気づいていない。

「さっきのやつ、まだいたの!?」

『先手必勝！　奇き襲しゆうをかけるでござる！』

　リディアーヌが、残っていた最後のロケットブースターを使って〝膝丸〟を無理やり地上に押し上げた。乱暴な加速と着地の衝撃で、有脚戦車ロボツトタンクの機体が激しく軋きしむ。

『起動確認。全武装ロック解放、自律射撃オートフアイア管制装置コントロール……おろ!?』

「待って、〝戦車乗り〟！　ちょっと待った！　撃ち方やめーっ！」

『……女帝殿!?』

　無理やりシステムに割りこんで射撃を中断させた浅葱に、リディアーヌが不服そうな声を出す。貴重な先制攻撃のチャンスをふいにしたのだから、リディアーヌが拗すねる気持ちもわかるが、

「前、見て！　民間人がいるの！　今撃ったらあの人に当たっちゃ

うでしょうが！」

『なんと……!?　ふむ……たしかに、場違いなお子様がいるようでござるな』

　場違いなお子様はあんたもだろ、と心の中で突っこみながら、浅あさ葱ぎはモニタの映像を拡大する。ろくに舗ほ装そうもされていない寂さびれた山道に立っていたのは、十二、三歳ほどの年若い少年だ。

　美しい黒髪に褐かつ色しよくの肌。それに金きん色いろの瞳ひとみをしている。幼さを残した顔つきに似合わず、少年の姿には不思議な威い厳げんが感じられた。気性の激しい若い獅し子しを見ているようだ。

　少年と魔ま獣じゆうの距きよ離りはわずか数メートル。迂う闊かつに有脚戦車ロボツトタンクの武装で魔獣を攻撃すれば、確実に彼を巻きこんでしまう。

「どうしてこんなところに一人で……？　登山客ってわけでもなさそうだけど……」

　少年は武装していない。しかし怯おびえている気配もなかった。鋼はがね色いろの魔獣と睨にらみ合いながらも、彼の表情には余裕がある。そのことがどこか不気味でもあった。

　だからといって、彼を見捨てるわけにもいかない。

　多少の危険リスクを冒おかしてでも少年の前に出て、魔獣に接近戦を挑むべきか──

　浅葱がリディアーヌにそう告げようとしたとき、有脚戦車ロボツトタンクが警告音を鳴らした。上空を埋め尽くすような勢いで、対物レーダーが反応している。

『女帝殿、新あら手てでござる！』

「新手!?　ほかにも魔獣がいたの!?」

『どうやら同じ群れの仲間のようでござるな』

「な……なによ、この数……!?」

モニタに映る敵の群れを眺めて、浅葱の全身から血の気けが引いた。飛来した鋼色の魔獣は、合わせて二十体近く。傷ついた有脚戦車ロボツトタンク一機で、どうにかできる数ではない。

しかも彼らの降下地点にいたのは、浅葱たちではなく、無防備に立つ少年だった。

「まさか、こいつら、全部あの子を狙ねらって……!?」

義ぎ憤ふんと葛かつ藤とうに襲おそわれて、浅葱が歯は噛がみした。少年を救わなければという思いと、死の恐怖が、浅葱の中でせめぎ合っている。その浅葱の耳元で、唐とう突とつにリディアーヌの声がした。

『女帝殿、許されよ』

「へ!?」

『少年、助勢するでござる！　我らが楯たてとなっている間に撤てつ退たい召めされよ！』

唖あ然ぜんとする浅葱の全身が、急激な加速でシートに押しつけられた。唐突にダッシュをかけた有脚戦車ロボツトタンクが、少年を庇かばって魔獣たちの前に飛び出したのだ。

「ちょ……あんた、勝算もなしになにしてくれてんの!?　こういう場合は退路を確保するのが先でしょ常識的に考えて！　このままじゃ全員まとめて無む駄だ死じにじゃない！」

早口でまくしたてる浅葱の絶叫が、銃声と爆ばく発はつ音おんにかき消される。リディアーヌが有脚戦車ロボツトタンクのすべての武装を一斉発射したのだ。

だがその弾幕の威力をもってしても、魔獣たちの勢いは止められない。群がってきた魔獣に押し潰つぶされて、有脚戦車ロボツトタンクの全身が悲鳴を上げた。負荷に耐えかねた関節が火花を散らし、装甲がひしゃげる嫌いやな音が響ひびく。

『潔いさぎよく散ってこその武士の誉ほまれ。悪くない死しに様ざまでござったな』

「どこがっ!?　どこからどう見ても最悪でしょうが！　ていうかそ

もそも、あんたもあたしも武士じゃないし！　武士じゃないし！」

　苦しまぎれに放った有脚戦車ロボツトタンクの主砲が、魔獣の一体を撃うち落とした。しかし反撃はそこまでだった。累るい積せきしたダメージで操縦席のモニタは警告に埋め尽くされ、頼みの綱つなの射撃管制装置も停止する。

「いやあああああ──っ！」

　鳴り響ひびく警報音にまぎれて、浅あさ葱ぎの絶叫がこだました。

　そんな浅葱の視界が、ゴッ、と突き飛ばされたように震ふるえた。一いつ瞬しゆん遅れて、横殴りの爆ばく風ふうが有脚戦車ロボツトタンクを襲おそってくる。

　正面のモニタを染めていたのは、眩まばゆい金こん色じきの輝かがやきだった。猛たけ々だけしく牙きばを剝むく閃せん光こうの正体は、濃のう密みつな魔力によって紡がれた巨大な黄金のジャッカルだ。

　その前まえ肢あしが煌きらめく颶ぐ風ふうと化して、鋼はがね色いろの魔ま獣じゆうたちを薙なぎ払う。

「な、なに……？」

　呆ぼう然ぜんと目を丸くして、浅葱はその嘘うそのような光景を眺めていた。

　最新鋭の有脚戦車ロボツトタンクが苦戦する怪物の群れを、黄金の獣けものはいとも容易たやすく駆く逐ちくしていく。光り輝く獣の正体は、魔力によって実体化した異界からの召しよう喚かん獣じゆう──吸血鬼の眷けん獣じゆうだ。

「やれやれ……そのようなガラクタを乗り回し、この俺おれの前で無ぶ様ざまを晒さらすか。無礼が過ぎるぞ、人間ども」

　黄金のジャッカルを従えた少年が、傷ついた有脚戦車ロボツトタンクを睨にらんで言った。彼の口元に浮かんでいたのは、どこか小気味よさげな微苦笑だ。

「だが、まあいい。浅せん慮りよとはいえ、身を挺ていして俺を庇

かばおうとした心意気だけは褒ほめてやろう」

　少年が軽く腕を振り、黄金のジャッカルに攻撃を命じる。

　浅葱がそれに気づいたときには、すべてが終わっていた。黄金の閃光が空を駆け抜け、魔獣の群れを肉片すら残さず擂すり潰つぶしたのだ。

「吸血鬼の……眷獣……!?　なによこのデタラメな力……！」

　動かなくなった有脚戦車ロボツトタンクの中で、浅葱は呆然と呟つぶやいた。

　幼いころから〝魔族特区〟で育った浅葱にとって、吸血鬼は特にめずらしい存在ではない。本物の眷獣を目にすることも多かった。だからこそ浅葱には、少年が操あやつる眷獣の異質さがよくわかる。あの黄金のジャッカルは、普通の吸血鬼の眷獣とは明らかに別格だ。

　浅葱が知る限り、これほどの眷獣を従えている吸血鬼は、ディミトリエ・ヴァトラーとジャーダ・ククルカン、そして〝第だい四よん真しん祖そ〟暁あかつき古こ城じようだけである。

　すなわちこの少年は、真祖に匹敵する力の持ち主、ということになる。

「貴き殿でん……その姿、まさか……コーカサスの……」

　戦車のハッチから這はい出したリディアーヌが、目を丸くして少年を見つめる。

　少年は、煩わずらわしげに顔をしかめてリディアーヌを見返し、

「このような極東の僻へき地ちに、この俺おれの顔を知る者がいたか」

　失敗した、と言いたげに吐き捨てる。

「コーカサス……まさか〝滅ほろびの王朝〟の……!?」

　浅あさ葱ぎはハッと顔を上げた。コーカサス地方は、中東を統すべる魔族自治領ドミニオン、〝滅びの王朝〟の支配地域だ。その中

でも、真祖に匹敵する力を持つ吸血鬼となれば限られる。

　ましてやそれが、年とし端はもいかぬ少年の姿となれば、思い当たる人物はただ一人──

「いかにも、我が名はイブリスベール・アズィーズ──第だい二に真しん祖そ〝滅びの瞳フオーゲイザー〟の直系にして、〝滅びの王朝〟北方八州を統すべる者よ。見知りおけ」

　少年はやれやれと首を振り、慣れた態度で名乗りを上げた。

5

「──くしゅ！」

　羽は波ば唯ゆい里りは、自分自身のくしゃみで目を覚ました。全身がすっかり冷え切っている。仰あお向むけに倒れた身体からだの上には、薄うすく雪が積もっていた。

「わたし……まだ……生きてた……」

　もう一度くしゃみをしながら唯里は起き上がり、周囲の様子を怖ず怖ずと見回す。

　唯里がいたのは神かん縄なわ湖この中央。黒殻アバロン封印の儀ぎ式しきのための、水上祭さい壇だんが浮かんでいた場所だ。

　しかし祭壇を支えていた小舟は粉々に砕け散り、祭壇の周囲に張り巡らされた注し連め縄なわや供く物もつは跡あと形かたもなく吹き飛ばされていた。湖の中から噴ふき出した、膨ぼう大だいな魔ま力りよくの直撃を受けたのだ。

「なんだったの、あの力……六式降魔剣・改ローゼンカヴアリエ・プラスがなかったら絶対死んでたよ」

　生々しく甦よみがえってきた死の恐怖に、唯里は肩を震ふるわせる。

祭壇の上で無事なのは、唯里の剣がかろうじて薙なぎ払える範囲と、その背後だけ──

獅し子し王おう機き関かんから与えられた唯里の六式降魔剣・改ローゼンカヴアリエ・プラスは、疑似的に空間の断層を生み出す装備だ。生み出された空間の断層は、一いつ瞬しゆんだけだが、あらゆる攻撃を防ぐ絶対的な障しよう壁へきとなる。その障壁に護まもられていたから、あれだけの魔力の直撃を受けて、唯里は無傷でいられたのだ。

暁あかつき凪なぎ沙さの護ご衛えいを唯里に命じた暁緋ひ沙さ乃のの判断が、結果的に正解だったということになる。

「って……凪沙さん!?」

ふと唯里は我に返って、うろたえながら祭壇の残ざん骸がいを見回した。

儀ぎ式しきの重要な鍵かぎとして、祭壇に祀まつられていたのは暁凪沙の肉体だ。唯里が生きているということは、唯里が庇かばった暁凪沙も、当然無事でいるはずだ。

事実、彼女が祀まつられていたはずの寝台は、壊こわれずに原形を留とどめている。にもかかわらず、暁あかつき凪なぎ沙さの姿はなかった。唯ゆい里りが意識をなくしていた間に、どこかに消えてしまっている。

「いない!?　どうして!?　どこに行っちゃったの……!?」

思わず涙目になりながら、唯里は凪沙の痕こん跡せきを捜さがした。

祭さい壇だんの周囲は広大な氷原だ。湖底で暴発した膨大な魔ま力りよくが、人造湖全体を凍りつかせてしまったのだ。濃こい霧きりのせいで視界が悪く、剣けん巫なぎである唯里の霊視めでも、暁凪沙を見つけられそうにない。

「そ、そうだ、無線機」

唯里はコートのポケットから、ごつい無線機を取り出した。祭壇の護ご衛えい任務に就く前に、自衛隊から借りてきたものだ。慣れない機械に戸惑いながらも、教わったとおりにスイッチを入れる。

しかしスピーカーから流れ出したのは、ガリガリと耳みみ障ざわりな雑音だけだ。

「なんで……なんでつながらないの……!?」

　唯里は力無く立ち尽くしたまま、消え入りそうな声で呟つぶやいた。

　魔力の暴発の影えい響きようか、湖面を覆おおう霧きりは強い魔力を帯びており、探索用の式しき神がみは使えない。それでなくとも唯里は、遠隔操作系の呪じゆ術じゆつが得意ではないのだ。こんなときに志し緒おがいてくれたら、と強く思わずにはいられない。

「寒い……」

　吹きつけてくる寒風に晒さらされて、唯里は思わず弱音を吐く。

　いずれにしても、今の状況では、唯里一人で暁凪沙を捜し出すのは不可能だった。護衛の役目を果たせないのは無念だが、唯里のプライドや評価より、暁凪沙の発見が優先だ。いったん自衛隊の作戦本部に戻って、救援を仰あおぐべきだろう。

　相変わらず視界は悪かったが、唯里は、勘を頼りに作戦本部の方角に見当をつける。湖面が凍結したことで、移動が楽になったのも事実だった。凍った足場に苦労しつつも、唯里は徒歩で岸辺に向かう。三百メートルほど進んだところで、ようやく陸地が見えてくる。

　緩ゆるやかな斜面になったコンクリート製のダムの堤防には、自衛隊の地上部隊が、非常事態に備えて展開しているはずだった。特殊攻魔部隊が一個小隊。隊員四十名近い戦力だ。

　しかし濃こい霧を透かして唯里が見たのは、破壊された装輪装甲車の残ざん骸がいと、倒れ伏す多数の負傷者の姿だった。

「嘘うそ……」

　コートの袖そで口ぐちを握にぎり締しめ、唯里は震ふるえる声を洩もらした。部隊の損害の規模はわからない。しかしほとんど壊かい滅めつ状態に見える。救援を求めて必死で歩いてきただけに、唯里が受けた衝しよう撃げきは大きかった。彼女が想像していたよりも、事態は遥はるかにまずい状況になっているらしい。

そして──

「魔ま獣じゆう!?」

霧の中に異様な羽は音おとを感じて、唯ゆい里りは慌あわてて身構える。

自衛隊を襲っていたのは見知らぬ怪物だ。鋼はがね色いろの鱗うろこに包まれた、蜂はちと蛇へびを掛け合わせたような魔ま獣じゆうである。白しろ奈なたちが蜂蛇ホウダと呼んでいた種族タイプかもしれない。その中の一体が牙を剝むき、唯里のほうへと向かってくる。

蜂蛇が放っている気配はどこか人工的で、唯里が知っている魔獣のものとは違っている。そのせいで唯里の反応が遅れた。背中から六式降魔剣・改ローゼンカヴアリエ・プラスを抜いている余裕はない。

「──伏ふし雷いかずちっ！」

異音とともに飛来する魔獣の頭を、唯里は右脚で蹴けり飛ばす。呪じゆ力りよくをまとった渾こん身しんの一撃。

だが、蜂蛇の甲こう殻かくには、その攻撃が通らない。反動で吹き飛ばされたのは唯里のほうだった。

「硬い……！　たしか、この手合いを倒すには、内側から……！」

どうにか体勢を立て直し、唯里は蜂蛇の懐ふところへと潜もぐりこむ。

唯里が脳裏に思い浮かべていたのは、一人の後輩のことだった。内部破壊は彼女の得意技だ。華きや奢しやで儚はかなげな容姿の彼女が、屈強な獣じゆう人じん族ぞくすら打ち倒す姿を、唯里は何度も見たことがある。

彼女の姿に憧あこがれて、唯里なりに特訓を重ねてきたのだ。実戦で使うのは初めてだが──

「──響ゆらぎっ！」

唯里が叩たたきこんだ必殺の呪じゆ力りよくが、魔獣の体内で炸

さく裂れつする。鋼色の蜂蛇の巨体が、震ふるえたように動きを止めた。

「効いた！　これなら──！」

　魔ま獣じゆうが止まった一いつ瞬しゆんの隙すきを衝ついて、唯里は六式降魔剣・改ローゼンカヴアリエ・プラスを抜く。

　その時点で戦いは終わったも同然だった。空間ごと斬きり裂く六式降魔剣・改ローゼンカヴアリエ・プラスの攻撃に、耐えられる魔獣など存在しない。あとは剣を振り下ろすだけで、蜂蛇を確実に両断できる。

「っ……！」

　しかし氷原に着地した姿勢のまま、唯里は動きを止めていた。

　手負いの仲間を援えん護ごするように、新たな蜂蛇の群れが、次々に唯里のほうへと殺到してくる。その数は七十、いや八十体を超えているだろう。空一面が鋼色に染まっているかのようだ。

「嘘うそ……こんなの、無理……絶対無理……！」

　さすがの唯里も恐怖に身体からだが竦すくんで動けない。いくらなんでも敵の数が多すぎる。堤防上の特殊攻魔部隊を壊かい滅めつ状態に追いこんだのも、この魔獣たちの大群に違いない。

「無理……だけど……っ！」

　鋼色の魔獣の戦せん闘とう力りよくは、今の攻防でわかっていた。破格の強さというわけではないが、獅し子し王おう機き関かんの剣けん巫なぎが手こずる程度には厄やつ介かいな相手だ。しかもそれらが群れで襲おそってくる。たとえ六式降魔剣・改ローゼンカヴアリエ・プラスを装備していても、唯里一人でどうにかできる数ではない。

　だからといって、逃げるという選択肢は唯里にはなかった。蜂蛇が自衛隊の包囲を突破して市街地に出たら、一般市民にどれだけの被害が出るか予想もつかない。

　そうなる前に、今ここで、一体でも多く蜂蛇ホウダを減らしておかなければならないのだ。

唯ゆい里りは静かに呼吸を整え、悲壮な決意をこめて、魔ま獣じゆうの群れを睨にらみつけた。

しかし蜂蛇が唯里を襲おそってくることはなかった。

彼らの群れが、突然、乱れた。そして怯おびえたように唯里に背中を向けた。まるで狼おおかみの接近に怯える羊の群れを見ているようだった。恐怖の雄お叫たけびを上げながら、魔獣たちは逃げるように飛び去っていく。銀色の長ちよう剣けんを構えたまま、唯里はその様子をぽかんと眺めていた。

「に……逃げた？　なんで？」

過度の緊張から解き放たれて、唯里はへなへなとその場にへたりこむ。氷の冷たさがタイツ越しに太ふと腿ももに浸しみてくるが、それを気にする余裕もない。

そんな唯里の視界の片隅で、なにか意外なものが動いた気がした。唯里はほとんど無意識に振り返る。そして次の瞬しゆん間かん、唯里の目は点になる。

「へっ!?」

冷たい純白の霧きりの中に、少女が立っていた。

唯里よりもさらに小柄な女の子が、スキップするように唯里のほうへと近づいてくる。人ひと懐なつこい微笑ほほえみを浮かべた、可愛かわいらしい少女だ。鋼はがね色いろの髪は長く、足首のあたりまで達している。

そしてなによりも唯里を動揺させたのは、少女がなにひとつ衣類を身に着けていないということだった。しかも彼女が、それを気にしている様子はない。

「な……あなた……なんで裸……!?」

唯里が少女を指さして訊きいた。少女に対する警戒心よりも、心配のほうが優まさっている。こんな気温の中に全裸でいたら、凍死してしまうのではないかと思う。

驚おどろく唯里の顔を見つめて、長い髪の少女は目を瞬またたき、「みっ？」と可愛らしく小首を傾かしげた。

「……み？」

　唯里もつられて思わず訊き返す。そんな唯里の反応を見て、少女は嬉うれしそうに目を大きくした。彼女の瞳ひとみも、美しい鏡鉄鉱へマタイトのような鋼はがね色いろだ。

「そうだ、とりあえず、これ着て！　コート！」

　唯里は自分のコートを脱いで、少女の肩にかけてやる。ショート丈のＰコートだが、彼女には少し大きめで、膝ひざ上うえまでしっかり隠かくしてくれる。

「おおー」

　唯里の体温が残ったコートを、少女は気に入ってくれたらしい。だぼだぼの袖そで口ぐちをキュッとつまんで、嬉うれしそうに両手をパタパタ上下させている。

「靴はないから、おんぶするね。乗って」

　そう言って唯里は、少女のほうに背中を向けた。氷原の上に裸足で立っている少女の姿は、痛々しくて見ていられない。

「おん……ぶ？」

　単語の意味を理解できなかったのか、少女はしばらく怪け訝げんそうに唯ゆい里りを見つめていた。が、やがて唯里の意い図とを察した彼女は、両手を高々と振り上げると、中腰の唯里の背中を目がけて勢いよくジャンプした。

「おぶっ！」

「わっ!?」

「おぶっ、おぶっ！」

　よろめきながらも少女を背負って立ち上がる唯里。そんな唯里の背中の上で、少女は愉たのしそうにはしゃいでいる。彼女の勢いに振り回されつつ、唯里はふらふらと足を踏み出した。

「なんなの、この子……助けて、志し緒おちゃん……！」

半泣きになっている唯里の背中で、少女は至し極ごくご機き嫌げんだ。銀色の長ちよう剣けんを引きずりながら、唯里は当初の目的地である堤防へと向かう。

堤防の上は、想像以上に酷ひどい有あり様さまだった。

蜂蛇ホウダに破壊された装甲車が、横転した無む惨ざんな姿を晒さらしている。冷え切った地面に数多くの負傷者が横たわり、大気には血と硝しよう煙えんの臭においが満ちている。

ただ、唯里を少しだけ安心させたのは、すでに救護部隊が到着していたことだった。衛生科の隊員たちが応急処置を施ほどこして、野戦用の救急車に負傷たちを搬はん送そうしている。

そんな中、戻ってきた唯里たちのほうへと、道着姿の女性が近づいてくる。薙刀なぎなたを持った、白はく髪はつの老女だ。

「無事でしたか、羽は波ば唯里」

「緋ひ沙さ乃の様！」

冷静な口調で呼びかけてくる緋沙乃に、唯里は謎なぞの少女を背負ったまま一礼した。ゆいりー、ゆいりー、と背中の少女が騒さわぎ出し、唯里は思わず赤面する。

「あの……緋沙乃様、すみません。わたし、凪なぎ沙ささんを見失ってしまって……！」

「わかっています。あなたはよくやってくれました」

責任を感じてうなだれる唯里に、緋沙乃は穏おだやかに告げてくる。そして緋沙乃は、唯里の背中の少女に訝いぶかしげな視線を向けた。

「彼女は？」

「え、あの……わかりません。ついさっき見つけて保護したところなんですけど……」

唯里は歯切れの悪い口調で説明する。少女を放っておける状況ではなかったのは事実だが、そんなことをしている場合か、と言われたら返す言葉もない。

　しかし緋沙乃は、唯里を責めようとはしなかった。なにか思案するような表情で、彼女は、少女の鋼はがね色いろの瞳ひとみを見つめる。少女は少し怯おびえたように、唯里の背中に身を隠かくした。

「あなたに懐なついているようですね、羽波唯里」

「は、はい。そうですね。いったいどうしてなんでしょう……？」

　唯ゆい里りは、半なかば自問するような気分でそう答える。

　緋ひ沙さ乃のは、ふむ、と息を吐き、

「羽は波ば唯里、あなたには自衛隊の負傷者の護ご衛えいを任せます。その娘さんを連れて、御ご殿てん場ばまで退避なさい。白しろ奈なにもそう伝えておきます」

「退避？」

　唯里は困惑して訊きき返す。獅し子し王おう機き関かん所属の剣けん巫なぎとはいえ、今の唯里は、神かみ緒お多だ神社に貸し出されている立場だ。緋沙乃に退避を命じられたら、大人おとなしく従うしかないのだが、

「でも、凪沙さんの捜索は……」

「それはわたくしのほうでやります」

　冷たく突き放すように緋沙乃が言った。そして彼女は、不意に真剣な眼まな差ざしで唯里を見つめ、

「それよりも、彼女から決して目を離はなさないように――頼みました」

「は、はい」

　緋沙乃の迫力に気け圧おされて、唯里はわけがわからないままうなずいていた。

　そんな唯里の背中にしがみついて、鋼はがね色いろの髪の少女が明るい声を上げている。

「ゆいりー……ゆいりー……！」

幕間 ii

「浅あさ葱ぎがこの近くに来てる？」

　白い湯ゆ気げに満たされた浴場内に、暁あかつき古こ城じようの狼ろう狽ばいした声が響ひびき渡る。

　箱はこ根ねの山中に位置する、高級旅館の温泉大浴場である。ヴァトラーが旅館を一棟まるごと貸し切りにしていたせいで、浴場にいるのは古城だけ。独ひとり言ごとに似た会話の相手は、防水仕様の改造スマホに映る不細工なマスコットキャラだった。モグワイだ。

「もしかして凪なぎ沙さを捜さがしに来たのか？　あいつ、そんなことなにも言ってなかったぞ？」

『嬢じようちゃんも、自分が役に立つところをこっそりアピールしたかったんだろうぜ』

　ケケッ、と人間臭く笑いながらモグワイが言う。

『あとはまあ、プライドの問題だな。ハッカーってのは、誰だれかが隠かくし事ごとをしてるのを見たら、なにがなんでも暴あばきたくなっちまう性分だからな』

「あー……そういうことか」

　浅葱の相棒である人工知能ＡＩの言葉に妙な説得力を感じて、古城はストンと納得した。

　獅し子し王おう機き関かんのアナログ主義と自衛隊の情報封鎖によって、浅葱のハッキング能力をもってしても、凪沙の失しつ踪そうの理由は結局わからずじまいだった。それが浅葱の自尊心を傷つけたのだろう。そのリベンジを果たすために、彼女はわざわざ本土まで渡ってきたわけだ。

「……で、その浅あさ葱ぎは今どこでなにをやってるんだ？」

広々とした湯船に浸つかって、古こ城じようが訊きく。

自前の携帯は〝静寂破りペーパーノイズ〟との戦せん闘とうのどさくさで壊こわれてしまったため、浅葱に借りたこの改造スマホだけが、今の古城に残された唯一の通信手段だ。

とはいえ、処理能力の大半をモグワイが占領しているため、普通の携帯電話としての機能は、まったく期待できなかったりもする。そんな改造スマホの小さな画面の中で、人工知能ＡＩの現身アバターは大げさに首を振り、

『それが、よくわからねーんだぜ。嬢じようちゃんのとこにいる俺おれの分身コピーと、さっきから連絡が途と絶だえててな。情報が同期マージできねーんだよな』

「連絡が途絶えてる……って、大丈夫なのか、それ？」

モグワイがもたらした不ふ穏おんな情報に、古城は思わず顔をしかめた。

『単純に電波が届かない場所にいるって可能性もあるんだが、嬢ちゃんたちの輸送機がレーダーから消えてるのも、気になるっちゃ気になるな。地上に降りただけなのかもしれねーが』

「ようやく凪なぎ沙さと連絡がついたと思ったら、なんで今度は浅葱が行方ゆくえ不明になってんだよ……ったく、勘弁してくれ……」

古城はタオルで目元を覆おおって嘆たん息そくする。

凪沙からの伝言が、古城の携帯の留守番電話サービスに残されている──それを教えてくれたのはモグワイだった。他人の携帯の留守電を勝手にチェックする人工知能ＡＩ、というのは、倫理的にいろいろ問題がある気もするが、とにかく今回は役に立ったわけだ。

凪沙からのメッセージは相変わらず多弁かつ早口で、理解するのに骨が折れつつ、内容そのものはシンプルだった。

祖母のいる神かみ緒お多だ神社に着くなり、体調を崩くずして寝こんでしまったこと。

携帯電話の圏外だったので、なかなか古城に連絡できなかったこ

と。

　重要なのはそれだけで、残りは年末年始の祝日にともなうゴミ収集日の変更などの、わりとどうでもいい事務連絡だ。正直、肩透かしに遭あった印象は否いなめない。

　古城たちが何度も死にそうな目に遭あいながら本土に来たのも、そもそもは凪沙からの連絡が途絶えたことがきっかけなのだ。なのに今さら無事だと言われても、釈然としない気分は残る。それに自衛隊や獅し子し王おう機き関かんの謎なぞめいた作戦行動の理由は、いまだに不明のままだった。

　それでも古城が呑のん気きに温泉に浸かっていられるのは、凪沙の無事が判明して、とりあえず心に余裕ができたというのが大きい。

　ついでに言えば、古城たちには、この旅館から出られない現実的な理由もあった。つまり海に落ちてベトベトになった制服が洗濯中のため、外に行きたくても着るものがないのだ。温泉でのんびりくつろぎつつも、制服がクリーニングから戻ってくるのを、ひたすら待ちわびている古こ城じようである。

『ま、浅あさ葱ぎ嬢じようちゃんは、例の戦車の嬢ちゃんと一緒にいるから、それほど心配するこたねーとは思うぜ。輸送機が撃げき墜ついされて、山の中で魔ま獣じゆうにでも襲おそわれてない限りはな』

　ケケッと無責任に笑いながら、モグワイが妙にリアルな例え話を口にする。

「戦車の嬢ちゃんって……あのリディアーヌって子か。まさか戦車ごと本土に来てるのか？」

　あんな戦モ車ノを紘いと神がみ島じまの外で乗り回して大丈夫なのか、と古城は他ひ人と事ごとながら不安になった。

　とはいえ、モグワイの言葉にも一理ある。対たい魔ま族ぞく用の有脚戦車ロボツトタンクに乗った浅葱たちが、そうそう危険な目に遭うとも思えない。

「……まあいいか。浅葱のやつも凪なぎ沙さを捜さがしてるのなら、そのうち合流できるだろうしな」

『だな』

　くだけた口調でモグワイが同意する。

『というわけで、温泉で青春を満喫するなら今のうちだぜ、兄ニイちゃん？』

「満喫するもなにも、いい加減、長く浸つかりすぎてのぼせそうなんだが」

『クックッ……とぼけんなヨ。女湯の様子、気になってんダロ？　侵入者よけの対人センサと従業員通路の電子ロックは、なんだったら俺おれのほうでなんとかしてやるぜ？』

「いや。要らねーから、そういうのは」

　モグワイの鬱うつ陶とうしい誘惑を、古城は迷うことなく拒絶した。

「オシアナス・ガールズの連中に会いたくねーから男湯に逃げこんでるのに、なにが悲しくてこっちからのぞきに行かなきゃなんねーんだよ。つか、普通に犯罪じゃねーか」

　あの五人組はただでさえ、なにかと理由をつけて古城を誘惑してくるのだ。うっかり女湯に迷いこんだところを、彼女たちに見られた日には、どんな目に遭あわされるかわからない。

　しかしモグワイはなおもしつこく喰くい下がり、

『──で、古城の兄ニイちゃんは、結局どの子が好みなんだ？　やっぱシスコンとしては、いちばん年下のあの黄色い子か？』

「誰だれがシスコンだっ！」

　皮肉っぽく笑う人工知能ＡＩを、古城が思わず温泉に沈めようしたとき、カラカラと大浴場の扉が開く音がした。白い湯気に包まれながら、ほっそりとした人影が入ってくる。

「──なかなか面おも白しろそうな話をしているのね」

　振り返る古城の耳に聞こえてきたのは、かすかな笑いを含んだ声だった。完全に油断していた古城の心臓が、不意を衝つかれて危う

く止まりそうになる。

「き、妃き崎さき!?　おまえ、なんで……どこから……!?」

「入り口から普通に入ってきたのだけど」

　バスタオルを身体からだに巻きつけただけの妃崎霧きり葉はが、頬にかかる髪をかき上げて、優ゆう艶えんに笑いかけてくる。

「心配しないで。ちゃんと人払いの結界は張っておいたから。ほかに邪じや魔まは入らなくてよ」

「心配してるのはそこじゃねえよ！　なにしに来た!?」

「あなたと一緒にお風ふ呂ろに入ろうと思って。裸のおつき合い、というやつ？」

「いや、駄目だろ、それは！」

　からかわれているだけだと頭で理解しつつも、古こ城じようは本気で焦あせりまくる。

　霧きり葉はの目的がわからないのが、なにより不気味だ。こういう自分の身体からだを張るタイプの性格キヤラではなかったはずなのだが。

「大丈夫、お湯に浸つかるときはちゃんとバスタオルを取るわよ。温泉のマナーですものね」

「マナーを語るなら、そもそも男湯に乱入してくるなっ！」

「ちらっ」

　睨にらみつける古城を愉快そうに見返して、霧葉がバスタオルの裾すそをつまみ上げた。彼女の太ふと腿ももの付け根近くまでが露あらわになって、古城は思わずゲホゲホと咳せきこむ。

「いざやってみると、さすがに恥ずかしいわね」

　やり過ぎたという自覚が少しはあったのか、霧葉は頬ほおを赤らめながら苦笑した。

　古城は疲れ切った表情で浴よく槽そうの縁ふちにもたれながら、

「だったら出て行けよ。べつに無理しなくていいから」

「そうね。そうするわ……と見せかけて、ばーんっ」

　自らの口で効果音を奏でつつ、出し抜けにバスタオルを脱ぎ去る霧葉。

「ば、ばかっ、おまえ、なに考えて……!?」

　モデルのようにポーズを決める霧葉に、古城は硬直したまま目を奪われる。が、

「み……水着？」

　霧葉がバスタオルの下に身に着けていたのは、肩かた紐ひものないタイプの黒いビキニだった。布の面積は下着以下だが、不思議とまったくいやらしくない。

「さっきの女の子たちに借りてきたの。残念だった？　残念だった？」

「いや……おまえはそれでいいかもしれんが、俺おれが裸という事実には変わりないんだが……って、見るなよ！」

　堂々と浴槽に入ってきた霧葉が、古城の隣となりに腰を下ろす。自分の下半身に向けられた彼女の視線を、慌あわてて遮さえぎろうとする古城。

　そんな古城の動きを観察して、霧葉が哀あわれむように溜ため息いきをついた。

「右手の感覚は、まだ戻ってないみたいね」

「……まあな」

　何なに気げに鋭い霧葉の指摘に、古城は舌打ち交じりに肩をすくめる。

　見た目は完治している古城の右手だが、手首から先の感覚はないままだった。掌てのひらの内側から手の甲にかけて、魔ま術じゅつ紋もん様ようのような奇妙な傷跡も残っている。

「結界を生成するための術式……おそらく〝静寂破りペーパーノイズ〟の仕し業わざね。彼女は、七式突撃降魔機槍シユネーヴアルツアーの神格振動波を応用して、あなたを封印するつもりだったのよ。あの場で滅ぼすのではなく、ね」

「封印……か。なるほどな」

霧きり葉はの説明を聞きながら、古こ城じようは右手に刻まれた傷跡に触れる。たまたま今回は右手だけのダメージで済んだが、最悪、古城は全身丸ごと封印されていたのかもしれない。古城を絃いと神がみ島じまの外に出さない、という閑しずか古こ詠よみの目的を果たすためには、それがいちばん確実だからだ。

「で、どうすればこの封印を解除できる？」

「さあ？　とりあえず、私の血でも吸ってみる？　姫柊ひめらぎ雪ゆき菜なには黙だまっておいてあげてよ」

苦笑交じりに素そっ気けなく答えて、霧葉は細い首筋を古城に向けてくる。

しおらしい表情を浮かべる霧葉を、しかし古城は疑惑の眼まな差ざしで睨にらみつけ、

「いや、それは嘘うそだろ。密チ告クる気満々だろ」

「あら……吃驚びつくり。どうしてわかったのかしら？」

「どうして俺おれがおまえを信用すると思ったのか、そっちのほうが不思議だわ」

驚おどろいたように目を丸くする霧葉に、古城は呆あきれ顔がおで呟つぶやいた。

霧葉は、そんな古城を気き遣づかうようにそっと目を伏せて、

「でも、その右手じゃ夜に独ひとりで愉たのしむときに困るでしょう？　男の子なのに……」

「やかましいわっ！」

「……とまあ、軽い下ネタで互いの距きよ離りも近づいたところ

で、本題なのだけど」

「いや、べつに近づいてねえから」

　むしろドン引きしたわ、と顔を引き攣つらせる古城。どうも霧葉との会話は今ひとつペースがつかめない。と、

「お別れを言いにきたのよ、暁あかつき古城」

「は？」

「太たい史し局きよくから呼び出されたの。六りく刃じん神しん官かんとしての本来のお役目よ」

　霧葉が、突然さばけた口調で言った。

　彼女の急な態度の変化に、古城は軽く面めん喰くらいつつ、

「六刃神官の役目……って」

「魔ま獣じゆう退治」

　霧葉が誇らしげな表情で胸を張る。

　魔族との戦せん闘とうを主な任務とする獅し子し王おう機き関かんの剣けん巫なぎに対して、霧葉たち六刃神官の専門は、凶暴な魔獣の捕ほ獲かくと抹まつ殺さつだ。古城たちとの共きよう闘とうは、霧葉にとっては、どちらかといえばイレギュラーな仕事なのだった。

「自衛隊の後衛バツクアツプとして、神かん縄なわ湖こ近辺に出現した魔獣の群れを掃そう討とうするわ。いちおうそのことを、あなたに伝えておこうと思って」

「神かん縄なわ湖こに……魔ま獣じゆうが出現した？」

　古こ城じようの声から温度が消えた。凪なぎ沙さに加えて、浅あさ葱ぎまでもが神縄湖の近くに来ていると連絡を受けた直後なのだ。ケケッと笑う人工知能の声が、スマホのスピーカーから流れ出す。

「残念ながら、私が教えてあげられるのはそこまでよ。どうやら獅

し子し王おう機き関かんの目もく論ろ見みは外れたみたいね。それともこの結末が彼らの望みだったのかしら……？」

　霧きり葉はが、自問するようにぼそりと呟つぶやいた。

　そして彼女は透明なお湯を滴したたらせながら立ち上がり、

「お互いに命があったら、また会いましょう、暁あかつき古城。そのときは本当に裸のつき合いができるといいわね」

「待てよ、妃き崎さき！　どういうことだ!?　神縄湖でいったいなにが――」

　立ち去ろうとする霧葉の背中に、古城は咄とつ嗟さに手を伸ばす。

　浴場の扉が乱暴に開け放たれて、新たな侵入者が現れたのはその直後だ。

「――妃崎さん！　どうしてあなたが男湯にいるんですか!?　この人払いの結界はいったい!?」

　浴衣ゆかた姿の姫柊ひめらぎ雪ゆき菜なが、血相を変えて男湯に飛びこんでくる。

　霧葉の結界を力ずくで破壊してきたのか、雪菜の手には〝雪せつ霞か狼ろう〟が握にぎられていた。ずらずらと雪菜のあとにくっついてきたのは、和装メイド服のオシアナス・ガールズたちだ。

「ひ、姫柊ひめらぎ……!?」

霧きり葉はの二の腕をつかんだまま固まって、古こ城じようはかすれた声で呟つぶやいた。

もちろん今の古城の姿は、生まれたままの素っ裸だ。

「え……!?」

　雪ゆき菜なは殊こと更さらに大きく目を見開いたまま硬直し、古城と無言で見つめ合う。

　水着の霧葉は、素知らぬ表情で目を逸そらした。きゃーっ、と歓かん声せいを上げるオシアナス・ガールズたち。そして雪菜は沈ちん黙もくしたまま、くるりと古城に背を向ける。

　すたすたと脱衣所へと戻って扉を閉め、一いつ瞬しゆんだけ横目で恨みがましく古城を睨にらむと、

「だ……大丈夫です……問題ありません……わたしは先輩の監視役ですから、この程度のセクハラくらい……先輩はそういう吸血鬼ヒトだってわかってましたから……」

　顔を耳まで真っ赤にしながら蔑さげすむようにそう言って、雪菜は外へと駆け出していく。

「あらあら」

　相当ショックだったみたいね、と他ひ人と事ごとのように言い残し、そのまま退出していく霧葉。

　文句を言うタイミングを失った古城は、浴場に一人取り残されたまま、

「なんでだ――っ！」

　理不尽な運命を呪のろいつつ、誰だれにともなく絶叫した。

第三章 咎神の騎士

Knight Of Sinful God

1

中東〝滅ほろびの王朝〟王家に連なる、純血の第二世代吸血鬼イブリスベール・アズィーズは、白いカップ容器に入ったインスタントラーメンを猜さい疑ぎに満ちた表情で睨にらんでいた。

お湯を注いで待つだけで完成するという料理の存在を、今イチ信じ切れずにいるらしい。

「この容器のまま食べるのか？」

浅あさ葱ぎとリディアーヌの様子をうかがいながら、王子は慣れない割り箸ばしで、怖おず怖おずと麺めんを口に運ぶ。独特なクセのあるスープの匂においに、警戒の表情を浮かべていたイブリスベールだが、

「む、美う味まいな……」

ズズ、と麺を一口すすって、彼は驚おどろいたように目を見張った。

有脚戦車ロボツトタンクに積まれていたチープな非常食の味付けは、意外にも王子の口に合ったらしい。

「でしょ。標高が高いと沸点が下がるから、気持ち長めに置いてから食べるのがコツなのよね」

得意げな表情でそう言ったのは、お湯の温度や調理時間に、やたら細かくこだわっていた浅葱である。それに対してリディアーヌは、

「拙せつ者しやは味み噌そ味あじのほうが好みだと、整備担当者にはあれほど言っておいたでござるのに」

ぶつぶつと小声で文句を言いながら、魚介ベースの醤しよう油ゆスープをすすっている。めずらしく年相応に幼いリディアーヌの態度に、浅葱はこっそり苦笑して、

「そういえば、殿でん下か、ニンニク大丈夫だったの？　臭においが嫌いな吸血鬼ヒト、多いでしょ？」

「それは軟弱な〝戦せん王おう領りよう域いき〟の連中だろう。我が王朝では気にする者は少ないからな。それと俺おれのことは、イブリスで構わん」

「じゃあ、イブリス、こっちのチョコもどうぞね。あとジュースも。粉末のやつだけど」

「拙者の羊よう羹かんも召し上がりくだされ。こちらの抹茶味が特にオススメでござる」

　ありったけの非常食をビニールシートの上に広げて、競い合うように食事を続ける浅葱とリディアーヌ。イブリスベールはその光景を、しばらく不思議そうに眺めていたが、

「リディアーヌ、それに浅葱と言ったか……おまえたちはずいぶん変わっているな」

「え？　そう？」

　浅葱が不満を隠かくそうともせずにイブリスベールを見返した。吸血鬼の王子に変人扱いされるという状況は、さすがに納得いかないものがあるらしい。

「いちおう言っておくけど、この変な服は好きで着てるわけじゃないからね。この子に無理やり着せられただけで」

「貴き様さまらのような色気のないガキどもの服装など、俺には心底どうでもよいわ」

「ぐぬ……!?」

　イブリスベールの冷ややかな言葉に、浅葱はイラッと表情を引き攣つらせた。

　実際、幼いのは見た目だけで、イブリスベールの実年齢は数百歳を超えているはずだ。それを思えば、彼が浅あさ葱ぎたちを子ども扱いするのも、無理からぬことではあるのだが――

「ただ、この俺おれと対顔して、媚こびへつらいも恐れもしない者

は、滅めつ多たにいなかったのでな」

　どこか戸惑っているような態度で、王子は続けた。

「かといって、おまえたちに、俺に対抗できるほどの魔ま術じゆつの心得があるとも思えぬ。どういうつもりかと、少し興味が湧わいただけだ」

「言ってることが、よくわからないんだけど」

　浅葱は首を傾かしげて言った。

「あんたがあたしたちに危害を加える気がないのに、それを恐こわがる理由はないでしょ？」

「この俺が真祖直系の吸血鬼でもか？」

　イブリスベールが不愉快そうに、金きん色いろの瞳ひとみを浅葱に向けてくる。

　ああ、そういうことね、と浅葱は肩をすくめて、

「それはほら、あたし、絃いと神がみ島じま育ちだから」

「なるほど……〝魔ま族ぞく特とつ区く〟の人間だったか」

　今度は王子が納得する番だった。そんなイブリスベールの反応に、浅葱は、おっ、と興味を示す。

「絃神島のことを知ってるの？」

「前に一度訪れたことがある。此こ度たびも空港には立ち寄ったしな」

　そうなんだ、と少し嬉うれしそうにうなずく浅葱。魔族の自治領ドミニオンへの直行便があるのは、日本国内でも絃神島の中央空港だけだ。当然〝滅ほろびの王朝〟から空路で日本に入るにも、いったん絃神島を経由することになる。

「子どものころから普通に吸血鬼と接してるから、今さら恐がれって言われてもね。人間やほかの魔族にだって、いいヒトもそうでないのもたくさんいるしさ」

「さすがに王子の知ち己きは初めてなれど、王族やら真祖やら、似たようなのが身近にいるでござるしな」

　同じく絃神島暮らしの長いリディアーヌが同意する。

　まったくだわ、と浅葱は相あい槌づちを打って、

「あ、そうだ。イブリス、絃神島経由で来たってことは、帰りも寄ってく？」

「かも知れぬ……が、それがどうした？」

　唐とう突とつな浅葱の質問に、イブリスベールは怪け訝げんな顔をする。すると浅葱は妙に気合いの入った瞳でイブリスベールを睨にらみつけて、

「だったら、国際線ターミナルにある闘とう将しよう軒けんには寄る価値があるわよ。麺めん屋やいとがみの濃厚背せ脂あぶらラーメンも捨てがたいけどね。最近のインスタントは悪くないけど、やっぱり本物のラーメンには本物の良さがあるし」

　いや待て、つけ麺めん太平洋という手もあるか、などと本気で悩み始める浅あさ葱ぎ。眉み間けんにしわを寄せたまま、イブリスベールは啞あ然ぜんとそれを眺めていたが、

「やはりおまえは変わっているな」

　やがて〝滅ほろびの王朝〟の王子は、たまりかねたように声を上げて笑い出す。普ふ段だんの彼を知る部下たちがそれを目にしたら、パニックになりかねないほどの晴れやかな笑顔だ。

　しかし、浅葱にはもちろんそんなことはわからない。

「あれ、もしかして呆あきれられてる……？」

　不満そうに唇くちびるを歪ゆがめる浅葱とは裏腹に、いつまでも笑い続けるイブリスベールだった。

「なあ、なんだったんだ、さっきの魔ま獣じゆうは？」

　氷原の中央に立ち尽くしたまま、斐ひ川かわ志し緒おが暁あかつき牙が城じように質問する。

　一介の民間人に過ぎない牙城に、任務中の舞ま威い媛ひめが助言を求める、という時点で失態ではあるのだが、今はそんな建たて前まえを気にしている場合ではない。

「魔獣……か。あれが本当にただの魔獣ならいいんだがな……」

　しかし牙城は、いつになく思い悩んだような表情で答えてくる。これまで謎なぞの余裕を漂ただよわせていた彼の、その弱気な反応は、志緒を余計に不安にさせた。

　そのことに志緒は、逆さか恨うらみ気味の苛いら立だちを覚えつつ、

「どういう意味？」

「この遺跡は、当たりだったのかもしれねーってことだよ。この地には災さい厄やくが埋まってるってウチの婆ばばあの話、案外、嘘うそじゃなかったのかもな」

「災厄って……まさかさっきの龍族ドラゴンのことか……？」

　霧きりの中で一いつ瞬しゆんだけ目にした漆しつ黒こくの巨きよ影えいを思い出し、志緒は声を低くする。

　本物の龍族ドラゴンは、攻魔師である志緒にとっても、ほとんど未知の存在だ。南米〝混こん沌とん界かい域いき〟や暗ア黒フ大リ陸カの奥地に少数だけ生き残っているとも、すでに絶滅したともいわれているが、その実態はわからない。時として人類以上の知性を持つという彼らは、魔族と魔獣の境界線上に位置する種族であり、旧き世代の吸血鬼をも凌しのぐ凄すさまじい戦せん闘とう力りよくを持つことで知られていた。

　その龍族ドラゴンがこの神かみ緒お多だ地区に出現したら、獅し子し王おう機き関かんや自衛隊による包ほう囲い網もうだけで防ぎきれるとは思えなかった。たしかにそれは災厄の名に相応ふさわし

いといえなくもない。

　しかし牙城は、志緒の呟つぶやきに素そっ気けなく首を振る。

「いや、そいつは、たぶん違うな」

「え？」

「龍ってのは、護る者だろ」

「護まもる……者……？」

　はぐらかすように曖あい昧まいな牙が城じようの言葉に、志し緒おは困惑の視線を向けた。牙城は、そんな志緒に向き直って、いつもの胡う散さん臭くさい笑顔を見せてくる。

「とにかく、一度引き上げようぜ。どのみち怪かい獣じゆう退治は俺おれたちの領分じゃねえ」

「そうだな……うん……」

　志緒は素直に牙城の提案を受け入れた。彼のあやふやな説明で納得したわけではなかったが、意識のない暁あかつき凪なぎ沙さの体調が気がかりだったからだ。

　冷気の霧きりに包まれた湖上の気温は、明らかに零れい度どを下回っていた。このまま彼女が無防備に眠り続けていたら、最悪、体温を奪われて凍死の危険性もある。

「霧が、晴れてきたか……」

　いちばん近い湖岸に向かって志緒たちが歩き出したその直後、牙城が不ふ機き嫌げんそうに呟つぶやいた。

　眠っている愛まな娘むすめを背負ったまま、彼は足を止めて、ゆっくりと周囲を見回している。

　たしかに牙城の言うとおり、湖の周囲を覆おおっていた霧は、やや薄うすれてきたように感じられた。

　遠くの景色はいまだに白く霞かすんでいたが、湖の対岸程度までは、うっすらと視認できるようになっている。それが気に入らな

い、といわんばかりに、牙城は小さく鼻を鳴らし、

「急に静かになったな……ヤな雰ふん囲い気きだぜ」

　盛り上がった氷の丘きゆう陵りようを睨んで、〝自称〟考古学者の男がそう呟く。

　彼が見つめていたのは、氷上に刻まれた不規則な染しみだった。

　無数の亀き裂れつに覆われた斜面のあちこちに、ぽつぽつと鋼はがね色いろの汚れが残されている。それが単なる汚れではなく、引き裂かれた魔ま獣じゆうの死し骸がいだと気づいて、志緒は小さく息を呑のんだ。

「こんな……いったい誰だれが……!?」

　魔獣の死骸は一体や二体ではなかった。四、五十体、あるいはそれ以上か──鋼色の怪物の群れが、一方的に虐ぎやく殺さつされている。

　霧に隠かくれていたせいで気づかなかったが、生き残っていた魔獣のほとんどが、この場所に集結していたのではないかと思われた。そして何者かと戦い、全滅したのだ。

　そんな氷の斜面の中腹に、立ち尽くしている小さな影がある。

　道着姿の白はく髪はつの女性だ。彼女の手には抜き身の薙刀なぎなたが握にぎられている。

「緋ひ沙さ乃の様!?」

　驚おどろく志緒の声が聞こえたのか、暁緋沙乃がゆっくりと振り向いた。

　志緒の背後にいる牙城を見ても、彼女はさして驚かず、疲れたような溜ため息いきを洩もらすだけだ。

「斐ひ川かわ志緒……凪沙を助けてくれたのですね。礼を言います」

「いえ、そんな。私はなにも……」

　感謝の言葉を告げてくる緋沙乃に、志緒は慌あわてて首を振る。事実、気絶した凪沙を保護した以外に、志緒はなにもしていない。

「よう、婆ばばあ。こいつらは全部あんたがやったのか？」

　牙が城じようが荒っぽい口調で緋ひ沙さ乃のに訊きく。緋沙乃は、冷ややかに息子を見返して、返り血の跡がないことを示すように、薙刀なぎなたを牙城の前に突き出した。

「そんなわけがありますか。私も、つい先程これを見つけたところです」

「自衛隊の仕し業わざ、ってわけでもなさそうだな」

　そう言って牙城は、魔ま獣じゆうの死し骸がいを靴の先で転がした。

　鋼はがね色いろの魔ま獣じゆうに残された傷跡は、すべて刃物か、あるいは鋭利な爪つめなどによるものだ。銃器が主体の自衛隊の攻撃ではあり得ない。

「まるで、なにかを護まもるために戦いを挑んだようにも見えますね……」

　志し緒おが無意識に感じた印象を口にする。

　全滅した魔獣の行動には、なんらかの明確な意思が感じられた。女王を護る蜂はちのように一カ所に群がって、そして彼らは全滅するまで戦いをやめようとはしなかったのだ。

　無差別に人を襲おそう凶悪な魔獣といえども、悲しい光景だと志緒は思う。

「牙城……」

　志緒の言葉を無言で聞いていた緋沙乃が、なにかに気づいたように顔を上げた。

　牙城は苦々しげな顔でうなずき返すと、振り向きもせずに早口で訊きいてくる。

「志緒ちゃん、筋力強化フイジカルエンチヤント系の術は使えるよ

な──？」

「……できるけど、どうして？」

　まるで試験官気取りの牙城の物言いに、志緒はムッとしながら訊き返した。

　しかし振り返る牙城の表情からは、これまでになく余裕が失われていた。意識をなくしたままの暁あかつき凪なぎ沙さの身体からだを、放り投げるような勢いで志緒に押しつけてくる。

「凪沙を連れてここを離はなれてくれ。なるべく遠くまでだ」

「え？」

　戸惑いを覚える志緒の頭上で、太陽が翳かげる気配がした。銀ぎん黒こく色しよくの巨大な影が、志緒たちの頭上へと旋せん回かいしながら降りてくる。

　その正体に気づいて、志緒は言葉を失った。

　魔獣がいた。蜂蛇などよりも、遥はるかに畏い怖ふすべき危険な魔獣が──

　翼よく長ちよう十四、五メートルにも達する巨大な翼つばさ。

　鎧よろいのような鱗うろこと、分厚い刃やいばのような蹴け爪づめで武装した二本の後ろ脚。

　鞭むちのように伸びる太い尾と、肉食のトカゲに似た凶暴な顎あご。

「わ、飛龍ワイバーン……!?」

　天空から舞い降りてくる巨大な魔獣を、志緒は呆ぼう然ぜんと見上げて呟つぶやく。

　かつて戦争の道具としても使われた飛龍ワイバーンの戦せん闘とう力りよくは、飛行系の魔獣の中では、文句なく最強クラスだ。本物の龍には及ばぬまでも、ほかの魔獣とは格が違う。太たい史し局きよくの六りく刃じん神しん官かんでも、あれを単独ひとりで撃げき破はすることは不可能だろう。

そして志し緒おをさらに動揺させていたのは、飛龍ワイバーンの背中に据え付けられた騎き乗じよう用の鞍くらだった。

鞍上には、騎槍ランスを構えた騎手の姿がある。

漆しつ黒こくのマントを羽は織おった、黒くろ銀がねの騎士だ。

「ここの魔ま獣じゆうを皆殺しにしたのは、あいつか」

〝死都〟から取り出した機関銃を構えて、牙が城じようが言った。大火力を誇る無ぶ骨こつな軍用重機関銃が、飛龍ワイバーンの禍まが々まがしい巨体の前には、ひどく頼りなく感じられる。

「正義の味方……というわけじゃなさそうだな」

黒銀の騎士を睨にらんだまま、牙城が緋ひ沙さ乃のに問いかけた。

緋沙乃は厳いかめしい表情のままうなずいて、志緒に抱かれた暁あかつき凪なぎ沙さを一いち瞥べつする。

「ええ。今ここで姿を現したということは、あの者の目的はおそらく――」

「神かん縄なわ湖この災さい厄やくそのもの、か……最悪の予想が的中しやがったぜ、クソッ！」

牙城の悪態と同時に、黒銀の騎士が動いた。飛龍ワイバーンを自らの手て脚あしのように操あやつって、志緒たちの頭上から一気に襲おそいかかってくる。

「牙城、飛龍の相手は任せます。乗り手は、わたくしが――」

「ただでさえ老い先短いってのに、無理すんじゃねーぞ！」

緋沙乃と牙城が、それぞれの武器を構えて散らばった。

牙城の機関銃が轟ごう然ぜんと火を噴き、飛来する飛龍ワイバーンを迎撃する。機関銃に給弾されているのは、対魔族用の琥珀金弾エレクトラムチツプ。だが、蜂蛇ホウダたちの鱗うろこを容易に貫通したその弾丸が、銀黒色の飛龍ワイバーンには通じない。

一方、緋沙乃は黒銀の騎士に向かって、攻撃用の式しき神がみを放っていた。

ハヤブサに似た銀色の猛禽が、弾丸並の速度で騎士を襲う。呪じゆ術じゆつの専門家である志緒から見ても、寒気を覚えるほど見事な攻撃術式だ。

だが二十体を超える緋沙乃の式神は、黒銀の騎士に触れた瞬しゆん間かん、砕け散るように消滅した。

防御されたわけでも、撃うち落とされたわけでもない。式神としての機能を失って、完全に無効化されたのだ。

「なに……!?　どうなってるの!?」

志緒は牙城たちの苦戦する様子を、困惑しながら見つめていた。

いくら強きよう靭じんとはいえ、単なる生物に過ぎない飛龍ワイバーンが、琥珀金弾エレクトラムチツプの銃弾を無傷で撥はね返せるとは思えない。ましてやただの人間が、魔術も使わずに緋沙乃の式神を無効化できるはずがない。

騎士たちの強さの性質は、どこか異常で異質だった。そして牙城と緋沙乃には、その異質さに対抗する手段がない――

おそらく牙城たちは、そのことに最初から気づいていたのだろう。だから彼は、志緒に離はなれろと言ったのだ。自分たちが時間を稼いでいる間に、逃げてくれ、と。

「走れ、志し緒おちゃん！」

銃身の焼きついた機関銃を投げ捨てて、牙が城じようは新たに対物ライフルを構えた。本来なら地面に固定して使うその巨大な銃を、強引に腰だめに構えて撃ち放つ。

飛龍ワイバーンの眉み間けんに正確に撃ちこまれた弾丸は、凄すさまじい魔ま力りよくを撒まき散らしながら爆ばく発はつした。濃縮した魔力を撃ち出す特殊で貴重な弾丸、呪じゆ式しき弾だんだ。

飛龍ワイバーンは大きく仰のけ反ぞり、動きを止めたが、それも一いつ瞬しゆんのことだった。ほとんど無傷のまま鬱うつ陶とうしげに首を振り、牙城を嘲あざ笑わらうように咆ほう吼こうする。

「呪式弾が……効いてない……!?」

　目の前の信じられない光景に、志緒は無意識に足を止めた。

　その直後、緋ひ沙さ乃のが振り下ろした薙刀なぎなたが、甲かん高だかい音を立てて砕け散る。黒くろ銀がねの騎き士しが握にぎった騎槍ランスが、奇怪な波動を放ちながら緋沙乃を地面に叩たたきつけていた。特殊攻魔部隊の教官を務めるほどの緋沙乃が、為なすすべもなく一方的にやられている。彼女が弱いわけではない。黒銀の騎士の装備が、緋沙乃の攻撃をことごとく封じているのだ。

「緋沙乃様!?」

　鮮血を吐く緋沙乃の姿に、志緒はたまらず悲鳴を上げた。暁あかつき凪なぎ沙さを凍った湖面に横たえて、志緒は銀色の洋よう弓きゆうを構える。

「──認証申請！　六式降魔弓・改フライクーゲル・プラスプロトIIIスリー、解放アンロツク！」

「よせ、志緒っ！」

　血ち塗まみれの牙城が、志緒に怒ど鳴なった。

　しかし志緒は、彼の警告を黙もく殺さつした。この状況で牙城や緋沙乃を救えるのは、志緒の六式降魔弓・改フライクーゲル・プラスだけなのだ。獅し子し王おう機き関かんが誇る最新鋭の制圧兵器なら、たとえ飛龍ワイバーンが相手でも、一撃で消滅させられるはず──

「獅子の舞ぶ女じよたる高たか神がみの真ま射い姫ひめが請こい奉たてまつる！　白刃ひかり、あれ──！」

　残された呪じゆ力りよくすべてを注ぎこんで、志緒は最大威力の攻撃を放つ。

　呪じゆ矢しに取りつけられた鳴なり鏑かぶらが、人間の限界を超えた高密度の魔ま法ほう陣じんを描き出した。それは、吸血鬼の眷けん獣じゆうにも匹敵する巨大な魔力の砲弾を生成する。

　その灼しやく熱ねつの閃せん光こうを、黒銀の騎士は自らのマントで受けた。

水すい面めんにこぼしたインクのように騎士のマントが虚こ空くうを侵しん蝕しよくし、厚みを持たない漆しつ黒こくのオーロラとなって、志緒の攻撃を包みこむ。

そして志緒の呪術砲撃は、闇やみの中に呑のみこまれて消滅した。

飛龍ワイバーンすら一撃で焼き尽くすはずの膨ぼう大だいな魔力が、音もなく消える。

まるで最初から存在しなかったかのように──

「う……嘘うそ……」

矢を放ち終えた姿勢のまま、志し緒おは全身を竦すくませる。

黒くろ銀がねの騎き士しが、ゆっくりと振り返って志緒を見た。音もなく飛ひ翔しようした飛龍ワイバーンが、そのまま志緒のほうへと突っこんでくる。

騎槍ランスの切きっ先さきは、迷いなく志緒の心臓へと向けられていた。それでも志緒は動けない。限界以上の呪じゆ力りよくを放出したせいだ。呪力の枯こ渇かつで全身の力が抜けていく。

自分の胸元へと迫る騎槍ランスの輝かがやきが、志緒の瞳ひとみにスローモーションで映っている。

ゴッ、と鈍い衝しよう撃げきがあった。

背中から氷原に叩たたきつけられて、志緒は激痛に表情を歪ゆがめた。

そんな志緒の頬ほおに、温かな鮮血が降りそそいだ。

志緒が流した血ではない。志緒は傷を負っていない。

彼女の楯たてとなって、代わりに騎槍ランスに貫かれた者がいたからだ。

ふてぶてしく笑う無ぶ精しよう髭ひげの中年男が、鮮血にまみれて志緒の上に倒れてくる。

「う……あ……」

志緒の喉のどから声が洩もれた。牙が城じようは目を閉じたまま動かない。彼の背中からものすごい勢いで血液が流れ出している。志緒を庇かばって、黒銀の騎士の攻撃を受けたのだ。

「違う……違うんだ……私……こんなはずじゃ……」

志緒が弱々しく首を振る。

だがすでに志緒にもわかっていた。この状況を招いたのは志緒自身だ。牙城の警告を無視して黒銀の騎士を攻撃し、そのせいで牙城は重傷を負ったのだ。

志緒の勝手な行動が、牙城たちを窮きゆう地ちに追いこんだ。

その結果、暁あかつき凪なぎ沙さまでもが危険に晒さらされている。牙城が命いのち懸がけで守ろうとした彼の娘が、だ。

なのに牙城は、志緒に向かってかすれた声で告げてくる。

「逃げ……ろ……志緒……おまえだけでも……！」

「っ!?」

志緒は声もなく絶叫した。たとえ命と引き換えにしてでも、彼らを救いたいと本気で願う。なのに今の志緒に出来ることはもうなにもない。

飛龍ワイバーンの無感情な瞳ひとみが、頭上から志緒たちを睥へい睨げいした。

重厚な鎌かまにも似た飛龍ワイバーンの鉤かぎ爪づめが、動けない志緒たちを目がけて振り下ろされる。

膨ぼう大だいな魔ま力りよくの奔ほん流りゆうを間近で感じたのは、その直後のことだった。

「──〝娑伽羅シヤカラ〟！」

静かな威厳に満ちた美しい声が聞こえてくる。

同時に銀黒色の飛龍ワイバーンの巨体が、凄すさまじい魔力と衝

撃を受けて吹き飛ばされていた。

　天災を思わせる爆ばく発はつ的てきな力の正体は、意思を持って実体化した濃のう密みつな魔力の塊かたまり。巨大な蛇へびの姿を持つ吸血鬼の眷けん獣じゆうだ。

　金きん髪ぱつ碧へき眼がんの青年貴族が、異界からの召しよう喚かん獣じゆうを引き連れて志し緒おたちの傍そばに立っている。

「あなた……は……」

　青年を見上げて志緒が訊きく。しかし吸血鬼の貴族は答えない。

「キラ、トビアス――あれは任せる。せっかくの手がかりだ。丁てい重ちようにもてなしてあげてくれ」

　自らが吹き飛ばした黒銀の騎士を睨にらんで、青年貴族は部下に呼びかけた。

　そして彼は志緒を無視して、氷上に横たえられた暁あかつき凪なぎ沙さのほうへと近づいていく。

「少し予定が早まったが……これで三体目、か」

　そう言って彼は暁凪沙を、どこか無造作に抱き上げた。

　そのころリディアーヌの超小型有脚戦車マイクロロボツトタンクは、浅あさ葱ぎとイブリースを乗せて神かみ緒お多だ神社へと侵入していた。予想されていた自衛隊による検問もなく、三人は、長い石段を登ってあっさり境内けいだいに辿たどり着く。

　しかし魔ま獣じゆうの襲しゆう撃げきによるものか、荒れ果てた境内に人の姿はない。まるで爆ばく撃げきにあったかのような、激しい戦せん闘とうの痕こん跡せきが残されているだけだ。

　そのことに落胆する暇もなく、浅葱たちの耳に聞こえてきたのは、戦車の操縦席からの騒そう々ぞうしいアラート音だった。有脚戦車ロボツトタンクに組みこまれた計測機器が、魔ま力りよくの反応を警告してきたのだ。

「イブリス殿、今の魔力は―」

「ああ。吸血鬼の眷けん獣じゆうだな」

　戦車の装甲上に無造作に座ったまま、イブリスベールは顔をしかめている。

　魔力の発生源は、神社から二キロ以上離はなれた神かん縄なわ湖この中心部だ。精度の粗い戦車用の魔力センサーがこの距きよ離りで危険を訴えてくるとは、尋常な魔力の濃度ではない。

「この力、戦せん王おう領りよう域いきの〝蛇へび遣つかい〟か……奴やつめ、いったい何と戦ってる？　リディアーヌ！」

「御ぎよ意い！」

　イブリスベールに命じられるまま、リディアーヌが有脚戦車ロボツトタンクを発進させた。山中の急な斜面を駆け下りて、真紅の車体が神縄湖へと猛進する。

　浅あさ葱ぎは副操縦席のハッチから身を乗り出し、双眼鏡をのぞきこんでいた。立ちこめていた霧きりもだいぶ薄うすれて、湖面の様子はこの距離からでもよく見える。

「見つけた！　凪なぎ沙さちゃん！」

　ろくに呼吸も出来ないほどの強い向かい風の中で、浅葱が叫んだ。

凍りついた湖面の中心近く。鋭く切り立つ断だん崖がいのような氷ひよう壁へきを背に、純白のコートを着た吸血鬼の貴族が立っている。彼に抱き上げられているのは、白い巫み女こ装しよう束ぞくの暁あかつき凪沙だ。眠り続ける彼女の姿は、まるで死体のようにも見える。

そして青年貴族の足元には、血ち塗まみれの暁牙が城じようと、制服姿の見知らぬ少女が倒れていた。

五分もかけずに有脚戦車ロボツトタンクは湖の中央へと辿り着き、ガリガリと氷を削りながら減速する。

「ヴァトラーさん!?　凪沙ちゃんになにをしたの……!?」

停止した有脚戦車ロボツトタンクから顔を出し、浅葱がヴァトラーに問いかけた。

「暁凪沙……第だい四よん真しん祖その妹か」

イブリスベールが、凪沙を抱えるディミトリエ・ヴァトラーに、攻撃的な視線を投げかける。

ヴァトラーは、そんな闖ちん入にゆう者しやたちを見返して皮肉っぽく笑い、

「これはこれは、イブリスベール・アズィーズ殿でん下か……よりにもよって〝カインの巫女〟を引き連れてのご来らい臨りんとは。さすがに驚おどろかされました」

そう言って慇いん懃ぎんに一礼した。

「〝カインの巫女〟だと……まさか……!?」

イブリスベールが、浅葱を見た。驚く彼を、浅葱が怪け訝げんそうに見つめ返す。吸血鬼の王子は動揺を隠かくして、舌打ち交じりに首を振り、

「まあよい。ここでまみえたのも因いん縁ねんよ。詳しく話を聞かせてもらうぞ、ヴァトラー！」

「因縁……だけで済めばいいのですが……さて」

イブリスベールの挑発を受け流しつつ、ヴァトラーは自らの背後へと視線を巡らせた。

その直後、爆ばく音おんとともに氷ひよう壁へきが砕け散る。

氷の破片を撒まき散らしながら出現したのは、飛龍ワイバーンに跨またがる黒くろ銀がねの騎き士しだ。

熔よう岩がんの糸を吐く蜘く蛛もと灼しやく熱ねつの猛もう禽きん―二体の眷けん獣じゆうを同時に敵に回しながら、古こ色しよく蒼そう然ぜんとした鎧よろいの男は、互角以上の戦いを繰り広げている。

「ヴァトラー……やつは……」

黒くろ銀がねの騎き士しを見上げたイブリスベールが、獰どう猛もうに牙きばを剝むいて目を細める。

「ええ。聖せい殲せん派はの武装工作員です」

「咎きゆう神しんの騎士、か……なるほど、貴き様さまが出で張ばってきたのもあれが理由か」

「そういうことになりますね」

平然と肩をすくめるヴァトラーに、イブリスベールは納得したような表情を浮かべた。

眷獣たちとの死し闘とうを繰り広げながら、黒銀の騎士は次第に浅あさ葱ぎたちへと近づいてくる。それに気づいたイブリスベールは、有脚戦車ロボツトタンクから無造作に飛び降りて、

「浅葱、そこの人間どもを連れて下がっていろ。おそらくおまえの傍そばがいちばん安全な場所だ。やつはおまえを傷つけられぬ」

「は、はあ……よくわかんないけど、いいわ！　〝戦車乗り〟！」

「承知仕つかまつった！」

有脚戦車ロボツトタンクの補助腕マニピユレーターを器用に操作して、リディアーヌは負傷した暁あかつき牙が城じようと、制服の少女、そして道着の老女を回収した。

「暁凪なぎ沙さも連れて行け。貴き様さまもそれで文句はないな、ヴァトラー？」

　イブリスベールが、〝戦せん王おう領りよう域いき〟の青年貴族を牽けん制せいするように睨にらみつけて言う。

　もちろん、とヴァトラーは有脚戦車ロボツトタンクの補助腕マニピユレーターに、眠ったままの凪沙をあっさりと預けた。驚おどろくほど執着を感じさせない冷ややかな態度だ。

　その間も騎士たちの戦せん闘とうは続いている。

　灼熱の魔ま力りよくの塊かたまりである猛禽を、黒銀の騎士が撃ち払い、全身にまとわりつく熔岩の糸を、飛龍ワイバーンが引きちぎる。今や眷獣たちが圧倒されているのは、誰だれの目にも明らかだ。

「キラ・ヴォルティズラワたちが押し負ける……あの飛龍ワイバーン、ただの魔獣というわけではなさそうだな。それにあの鎧よろい、本物の異ノ境ドの力を操あやつるか。面白い……」

　苦戦するキラとジャガンを眺めて、イブリスベールが獰猛に笑った。思いがけない強敵との邂かい逅こうで、魔族の闘争本能に火がついたのだ。

「できれば彼らは生かしたまま捕らえたかったのですが」

　ヴァトラーが、〝滅ほろびの王朝〟の王子をやんわりとたしなめる。

　しかしイブリスベールは、賢さかしげな青年貴族の言葉を鼻で笑った。

「貴き様さまらには、あのトカゲを残しておいてやる。せいぜい遊んでいろ、ヴァトラー」

　膨ぼう大だいな鬼き気きを撒まき散らし、魔力の翼つばさを広げてイブリスベールが跳ちよう躍やくした。

　眷獣を召しよう喚かんするまでもなかった。イブリスベールが叩たたきつけた魔力の衝しよう撃げきに屈して、飛龍ワイバーンの巨体が地上へと落下する。

　飛龍ワイバーンの背から投げ出された黒くろ銀がねの騎き士しが、騎槍ランスの切きっ先さきをイブリスベールに向けた。吸血鬼の王子の表情が歓喜に歪ゆがむ。

「この俺おれに刃やいばを向けるか、身の程知らずが！　臓ぞう物もつを引き摺ずり出せ、〝メルセゲル〟！」

　イブリスベールが、自らの眷けん獣じゆうを召しよう喚かんした。飛龍ワイバーンの巨体をも凌しのぐ、巨大な王蛇コブラに似た眷獣だ。猛毒の瘴しよう気きをまとう蛇だ身しんに触れて、飛龍ワイバーンが苦く悶もんの咆ほう吼こうを上げる。

　純粋な魔ま力りよくの塊かたまりである眷獣の攻撃は、生身の魔獣ごときに防げるものではない。本来なら、最初の一撃だけで、飛龍ワイバーンは絶命してもおかしくなかった。

　だが飛龍ワイバーンは耐えきった。氷上に降り立った黒銀の騎士が漆しつ黒こくのマントを展開して、闘とう牛ぎゆう士しよろしく眷獣の攻撃をいなしたのだ。

　マントの裾すそが虚こ空くうを包みこむように広がって、イブリスベールの王蛇コブラの接近を阻はばんでいた。厚みを持たない、オーロラ状の虚無の薄うす膜まくだ。触れるだけで生物を死に至らしめる瘴気すら、その虚無の障壁を破れない。

　キラやジャガンを苦しめていたのも、黒銀の騎士のその能力なのだろう。彼が展開した奇怪なオーロラには、眷獣が放つ魔力を消滅させる効果が付与されているのだ。が、

「その程度か、下げ郎ろう――！」

　イブリスベールが、黒銀の騎士を蔑さげすむように笑みを深くした。

　吸血鬼の眷獣の長大な蛇身が、騎士の周囲を取り囲むように旋せん回かいする。

　その直後、大気そのものに異変が生じた。眷獣に包囲された空間内のすべてが、不吉な薄紫に変色する。その紫色の大気に触れた飛龍ワイバーンが、のたうつように痙けい攣れんした。鋼はがね色いろの鱗うろこが白煙を噴き上げ、高温に晒さらされたように溶けていく。

イブリスベールの眷獣は、大気そのものを強酸性の猛毒に変える。たとえ魔力を消滅させても、猛毒と変化した大気までは防げない。

「この王蛇コブラ……〝雷酸の王蛇メルセゲル〟はマウィア第二王女の眷獣のはず……殿でん下か、あなたは……」

「同族喰くらいが貴き様さまだけの専売特許だと思ったか、〝蛇へび遣つかい〟？」

驚くヴァトラーを横目で睨にらんで、イブリスベールが猛たけ々だけしく言い放つ。

「〝焔えん光こうの宴うたげ〟で、ザハリアスめに舐なめさせられた屈辱―あの兵器商を手引きした、裏切り者の身内を討ち果たすことで晴らさせてもらった。それだけのことよ！」

「なるほど……」

圧倒的に魔力を高めた敵対国の王子を見つめて、ヴァトラーは満足そうに微笑ほほえんだ。

差し出された極上の料理を目の前にして、舌舐めずりする捕食者のように―

第だい四よん真しん祖その復活を巡る事件の最中、イブリスベールは、三体もの〝焔光の夜伯カレイドブラツド〟に襲しゆう撃げきされて屈辱的な敗北を喫している。それから一年足らずの間に、彼はその謀ぼう略りやくの首しゆ魁かいである実の姉への復ふく讐しゆうを果たし、それによって自らの戦せん闘とう力りよくをも増大させたのだ。そのことがヴァトラーを歓かん喜きさせている。

「どうした、咎きゆう神しんの騎き士しよ。そこまでか？」

一方のイブリスベールは、猛毒に包まれた黒くろ銀がねの騎士に、冷ややかな視線を向けていた。

黒銀の鎧よろいに今はかろうじて護まもられているものの、いずれ力尽きるのは時間の問題だ。奇怪なオーロラの力をもってしても、眷けん獣じゆうの結界を破るすべはない。誰だれもがそう思った直後だった。

黒銀の騎士が自らの騎槍ランスを、氷原の上に突き立てた。

そこに落ちていたのは、軍用の重機関銃だ。イブリスベールには知る由よしもないが、暁あかつき牙が城じようが使って投げ捨てたものである。その機関銃を貫いた瞬しゆん間かん、銀ぎん黒こく色しよくの騎槍ランスの輪りん郭かくが歪ゆがんだ。

融とけた飴あめのように流動して、鋭利な騎槍ランスが無ぶ骨こつな銃器へと姿を変えていく。

「なに……!?」

その異様な光景に、イブリスベールの表情が引き攣つった。

錬れん金きん術じゆつ師しが使う物質変成に似ている。だが本質はまったくの別物だ。錬金術師は物質の組成を自在に操あやつるが、原理のわからない複雑なメカニズムを再現することはできない。

それに対して黒銀の騎士は、騎槍ランスの組成は変えないままに、弾丸を撃ち出すという機能だけを模倣コピーした。機関銃という兵器の〝情報〟だけを奪ったのだ。

騎槍ランスの先端に新たに穿うがたれた銃口から、漆黒の弾丸が撃ち出される。

それは猛毒の大気の結界を貫通し、イブリスベールの眷獣を直撃した。

眷獣が仰のけ反ぞり、一いつ瞬しゆんだけ動きを止めた。

騎士に対する包囲に、隙すきが生じる──

その瞬間、傷ついた飛龍ワイバーンが飛ひ翔しようした。黒銀の騎士を拾い上げ、そのまま上空へと逃れていく。魔ま獣じゆうの限界を超えた凄すさまじい加速だった。

たちまち彼らの姿は小さくなり、消え残る冷気の霧きりに紛まぎれて消える。

「逃げた……いや、より有利に戦える場所を求めて撤てつ退たいしたか。小こ癪しやくなヤツよ」

イブリスベールが苛いら立だたしげに呟つぶやいた。

黒銀の騎士は、近代兵器の能力を模倣コピーする。だとすれば、周囲になにもない氷原よりも、利用できる兵器の多い場所のほうが圧倒的に有利に戦えるはずだ。もしも最初から市街地で戦っていたら、イブリスベールとて今のように敵を圧倒できたかはわからない。

「首尾はどうだい、キラ？」

ヴァトラーが、誰だれもいない方角に向かって呼びかける。と、その場に銀色の霧が集まって、美しい少年の姿を生み出した。彼の指先には、熔よう岩がんに似た琥こ珀はく色いろの糸が結びつけられて、それが上空に向かって伸びている。

「問題ありません、閣かつ下か。捕まえました」

キラ・レーベデフが恭うやうやしく答えた。

彼らのやりとりを聞いていたイブリスベールは、ふふん、と不満げに鼻を鳴らし、

「端はなから聖せい殲せん派はの隠かくれ家がをあぶり出すのが狙ねらいか。喰くえない男だな、〝蛇へび遣つかい〟──」

「我らが戦王の下げ知ちでしてね」

ヴァトラーは素知らぬ顔で肩をすくめる。

「──彼かの咎きゆう神しんを滅ほろぼすことが、我ら戦王の末まつ裔えいの宿願。そのための聖域条約だと」

「その言葉、今は信じたことにしておこう」

イブリスベールは、冷ややかな目つきでヴァトラーを見上げた。友好的な口調とは裏腹に、二人の間に流れている空気には、抜き身みのナイフのような緊張感が含まれている。

そんな空気の中に割りこんできたのは、有脚戦車ロボツトタンクに乗って戻ってきた浅あさ葱ぎだった。

「なんだったの、あの黒マント？」

まったく物もの怖おじしない態度で、浅葱はイブリスベールに質問する。ヴァトラーやキラに対しても相応の敬意は払いつつ、怯おびえている様子は微み塵じんもない。

そんな浅葱の態度に毒どく気けを抜かれて、イブリスベールは淡々と答えた。

「聖せい殲せん派は―咎神カインを奉じる狂信者テロリストだ」

「テロリストって……なんでそんなのが出てくるわけ……？」

浅葱が困惑したように唇くちびるを尖とがらせる。イブリスベールは少し意地悪く彼女に微笑ほほえんで、

「やつらの目的は〝聖殲〟の再現だ。すべての魔ま族ぞくを滅ほろぼし、人類の本来あるべき姿を取り戻す。魔族も魔術も存在しない世界をな。そのための鍵かぎが、この地に眠っていたのだろう」

「すべての魔族を……滅ぼす……？」

浅葱が驚きよう愕がくに目を見張った。しかし動揺を見せたのは一いつ瞬しゅんだ。浅葱は青ざめながらも眉まゆを吊つり上げ、イブリスベールを睨にらみつけてくる。

「どうして落ち着いてるの、イブリス!?　そんなの今すぐやめさせないと―！」

「やめさせる……？　無関係な人間のおまえがなぜそう思う？」

浅葱の意外な反応に、イブリスベールは戸惑いの表情を浮かべていた。

よもや〝滅びの瞳フオーゲイザー〟直系の王子である彼を怒ど鳴なりつけてくる人間がいるとは、これまで想像したこともなかったのだ。ましてやただの人間である浅葱が、魔族の行ゆく末すえを気き遣づかう理由がわからない。

浅葱はそんなイブリスベールの態度に、ますます苛いら立だったように戦車の装甲を殴りつけ、

「普通の人間なら、そういうのは止めなきゃって思うのよ！」

「……普通の人間なら……か」

　まったく迷いを見せない浅葱の主張に、イブリスベールが失笑した。

　本国にいるときの彼を知る者がいたら、さぞや驚おどろいたことだろう。気性の荒さで知られるイブリスベールが、人間の小娘に説教されて笑うなど、奇跡に近い出来事だからだ。

「ヴァトラー……悪いが少し気が変わった。あの咎神の騎き士し、俺おれが潰つぶさせてもらうぞ」

〝戦王領域〟の青年貴族を睨ねめつけて、〝滅びの王朝〟の王子が告げた。まるで開戦を告げるかのようなイブリスベールの物もの々ものしい言葉に、ヴァトラーは美しく唇を吊つり上げる。

「もちろん殿でん下かの御み心こころのままに──ただし、早い者勝ちということで」

　その言葉がすべて終わらぬうちに、青年貴族は金色の霧きりと化して姿を消した。

　イブリスベールは無言でそれを見送ると、負傷者を満載した有脚戦車ロボツトタンクに向き直る。

「気まぐれが過ぎたか……だが、それもいいか」

「なんのこと？」

　自じ嘲ちようするように呟つぶやくイブリスベールに、浅あさ葱ぎが訊きいてくる。

　気にするな、と首を振り、イブリスベールはもう一度苦笑した。

4

　羽は波ば唯ゆい里りを乗せた機材運搬用のカーゴトラックが、狭い山道を走っていた。負傷者の護ご衛えいという名目で、撤てつ退

たい中の自衛隊の部隊に同行しているのだ。

　路面が荒れていることに加えて、積雪対策のタイヤチェーンを巻いているため、トラックの荷台の乗り心地は悪い。油断すると、仮設のベンチシートから突然振り落とされそうになる。

「しばらく揺れます、羽波攻こう魔ま官かん。このような車しか用意できず、申し訳ありません」

　荷台の向かい側に座っていた若い二等特とく曹そうが、真剣な口調で詫わびてきた。

　やたら扱いが丁てい寧ねいなのは、唯里が攻魔師だからということではなく、緋ひ沙さ乃のの部下という肩書きが効いているのだろう。べつに唯里が尊敬されているわけではない。

　そのことを自覚しているだけに、唯里は肩身の狭い思いで首を振る。

「あ、はい、大丈夫です。わたしたちは、おまけみたいなものですから……あはは」

「いえいえ。頼りにしてますよ、剣けん巫なぎ殿どの」

　自じ虐ぎやく的てきな唯里を気き遣づかったのか、二曹はとってつけたような笑顔でそう言った。

　唯里たちを乗せたトラックは、隊列の最後尾を走っている。魔ま獣じゆうの追撃を警戒するという建たて前まえ上、護衛である唯里を殿しんがりに回すのは理に適かなっている。そういう意味では、唯里を当てにしているという二曹の言葉は、あながちお世せ辞じではないのかもしれない。

　それはもちろん唯里としても悪い気分ではないのだが、手放しでは喜べない事情もあった。唯里の隣となりに座っている、鋼はがね色いろの髪の少女の存在である。

「ゆいりー、ゆいりー！」

　非常食のビスケットを頬ほおいっぱいに頬張った少女が、唯里に向けて両手を差し出してくる。

彼女の謎なぞの言動に、唯里は首を傾かしげつつ、なんとか意思疎通を図ろうと必死で脳を回転させる。幼い園児に振り回される新米保母にでもなった気分だった。唯里の有用性を疑うような、自衛隊員たちの眼まな差ざしが痛い。

「え、えっ……と、おかわりってこと？」

「おか……わり？」

意味がわからなかったのか、少女はきょとんと目を瞬またたく。が、唯ゆい里りが取り出した新たなビスケットを見るなりパッと表情を明るくして、

「おかわりー！　おかわりー！」

「お、美お味いしい？」

「おいしー！」

唯里の手から直接ビスケットをついばむ少女の姿は、飼い主に懐なついた愛あい玩がん動物を見ているようだった。好意を覚えるというよりも、愛着が湧わくという感覚に近い。見知らぬ少女を餌え付づけしているような気分になってくる。

「ねえ、あなた、お名前は？」

少女の食欲が落ち着くのを待って、唯里は辛抱強く訊きいてみる。

「あのね……わたし、唯里。あなたは？」

身振り手振りを交えて、何度か同じ質問を続けていると、少女はなにか閃ひらめいたように、おお、と瞳ひとみを輝かがやかせた。

「ぐれんだ」

「グレンダ？　それがあなたの名前？」

「だー、ぐれんだ」

唯里を見つめ返したまま、少女はコクコクと何度もうなずく。

「グレンダ……」

名前を呼ばれたことが嬉うれしいのか、少女は目を細めて笑ってみせた。リズミカルに身体からだを揺する彼女を見ていると、ご機き嫌げんに尻尾しつぽを振っている子犬をついつい連想してしまう。

「──っ!?」

そのグレンダと目が合った瞬しゆん間かん、唯里は奇妙な幻視に襲おそわれた。

強烈な悲嘆と悔恨が流れこんできて、息が詰まった。

「……かはっ……！」

その生々しい感情に押し潰つぶされそうになった瞬間、唯里は幻視から覚めた。

呼吸のやり方を思い出すまでに、少し時間がかかった。凄すさまじい寒気と息苦しさに、しばらく全身を震ふるわせる。掌てのひらはしっとりと汗ばんでいた。唇くちびるが青ざめているのが自分でもわかる。

激しい目め眩まいと耳鳴りの中、異様に鮮明な映像が脳裏に浮かび上がる。

血のように赤い海の中に取り残された、小さな都市の風景だ。

カーボンファイバーと樹脂と金属と、見知らぬ異界の技術によって生み出された人工の島。

その街並みは騒そう乱らんによって破壊され、荒れ果てた廃はい墟きよと化している。

無む惨ざんに崩ほう壊かいした瓦が礫れきの上に、立ち尽くしているのは一人の少年だ。

深紅に染まった空を見上げて、彼は声もなく慟どう哭こくしていた。

胸を抉えぐる傷口から、どす黒い血を流しながら。

折れた槍やりを握にぎり締しめたまま──

「なに、今の景色……この子の記憶……？」

荒い呼吸を繰り返しながら、唯ゆい里りは呆ぼう然ぜんと呟つぶやいた。頭が酷ひどく混乱して、もどかしいほど思考がまとまらない。ただひとつだけ理解していたのは、唯里に幻を見せたのが、目の前の少女ということだけだ。グレンダに染しみついた記憶の残ざん滓しに、唯里の巫み女この力が反応したのだろう。

「ゆいり？」

放心している唯里の表情を、グレンダが不安そうにのぞきこんでくる。

唯里はハッと我に返ると、無理やりな作り笑顔を口元に貼はりつけ、

「ご、ごめん。なんでもないから」

「むー……」

疑わしげに低く唸うなるグレンダに、唯里は、あはは、と気弱に笑ってみせた。

ガタッ、と小石を踏みつけたように、トラックの車体が上下に揺れた。

その瞬しゆん間かん、グレンダがハッと前を見た。彼女が浮かべた険しい表情に、唯里は少し驚おどろいて、

「グレンダ？」

「きた……」

「え？　来たって、なにが……？」

唯里が戸惑いながら訊ききき返した直後、つんのめるような衝しよう撃げきが襲おそってきた。彼女たちを乗せたトラックが急制動をかけたのだ。横転しそうな勢いで横滑りして、車体が路肩の擁よう壁へきに激突し、どうにか無事に停止する。

シートから投げ出されそうになったグレンダを、唯里はギリギリで抱き支えた。グレンダはそれでも表情を変えずに、幌ほろに設け

られた小さな窓から外を見ている。

「羽は波ば攻こう魔ま官かん、あれを！」

　向かい側の座席に座っていた二に曹そうが、トラックの背後を睨にらんで叫んだ。

　怪物が、そこにいた。

　唯里たちに追いすがるように迫ってくるのは、骸がい骨こつに似た人ひと型がたの怪物だ。全高は三、四メートルほどだろうか。機械めいた質感の内ない臓ぞうが、剝むき出しのまま脈動を続けている。どう見ても自然界の生物ではない。乗用車の骨組みフレームだけを使って生物のオブジェを作ったら、このような姿になるのではないかと思えた。

　この怪物の攻撃を避けるために、トラックは路肩に突っこんだのだ。

「機械人形オートマタ……いえ、傀儡ゴーレムなの……？　だけど、なに、この気持ち悪い感覚……!?」

　怪物の周囲を取り巻く異様な魔ま力りよくの流れに気づいて、唯里は頬ほおを引き攣つらせた。

　唯里が知っている魔術とは、明らかに異なる系統の力だ。蠢うごめく毒虫の群れをのぞきこんだような、生理的な不快感がこみ上げてくる。

「う……うわあああああっ！」

　自衛隊員の誰だれかが発砲した。使われたのは対大型魔ま獣じゆう用のショットガンだ。だが、至近距きよ離りからのその銃撃を、怪物は平然と受け止めた。肋ろつ骨こつに似たフレームがぐしゃりと歪ゆがむが、痛みを感じている気配はない。

「まずい――！」

　人型の怪物が、異様に長い右腕を伸ばしてくる。それはトラックの幌ほろを容易たやすく引き裂き、鋼こう鉄てつ製の荷台にめりこんだ。怪物の腕が狙ねらっていたのはグレンダだ。

　鋼はがね色いろの髪の少女が怯おびえたように後ずさり、彼女を庇かばって唯ゆい里りは飛び出した。

「六式降魔剣・改ローゼンカヴアリエ・プラス、起動ブートアツプッ――！」

　銀色の長ちよう剣けんが眩まばゆい閃せん光こうをまとって、怪物の腕を斬きり落とす。

　金属製の巨大な右腕が、重々しい音を立ててトラックの荷台に転がった。

　痛みを感じてはいなくても、バランスを保つことはできなかったのだろう。怪物の巨体がぐらりとよろめき、片かた膝ひざを突く。

「逃げて！　今のうちに逃げてください！」

　荷台に残っている自衛隊員たちに向かって唯里が叫んだ。

　特殊攻こう魔ま部隊の隊員とはいえ、今の彼らは負傷者だ。彼らが避難を終えるまでの時間稼ぎが、唯里に課せられた使命である。幸いにして唯里の六式降魔剣・改ローゼンカヴアリエ・プラスと、傀儡ゴーレム系の敵との相性は悪くない。疑似空間切断による障壁は、敵の物理攻撃を完全に無効化するし、六式降魔剣・改ローゼンカヴアリエ・プラスの刃やいばは、金属をも容易く両断するからだ。が、

「は、羽は波ば攻魔官っ！」

　最後まで荷台に残っていた二に曹そうが、恐怖に声を歪ひずませた。唯里たちを乗せたトラックの車体が、水銀のように融とけ崩くずれたのだ。大型トラックの質量はそのままに、骸がい骨こつ状の人型へと姿を変えていく。

「な!?　なに……これ？　錬れん金きん術じゆつ……なの!?」

　その異様な光景に、唯里は混乱を隠かくせない。

　トラックを人型の怪物へと変える魔術――錬金術師が使う、傀儡創造メイクゴーレムの技法に似ている。

　しかし錬金術の効果は、複雑な機械には及ばないとされている

し、そもそも傀儡創造メイクゴーレムでは、生物の形を模もして造られたものしか動かせないはずだ。

しかしこの怪物は違っている。

重量や速さ、力強さ、そして自動で動く機械という性質──

トラックという人工物が持つそれらの〝情報〟はそのままに、姿形だけが変わっていく。

異世界に住む人間が、生まれて初めてトラックを見たときに思い描くであろう〝怪物〟のイメージ──それがそのまま実体化しているのだ、と唯里は思う。

「ゆいり！」

グレンダが、立ち竦すくんでいた唯ゆい里りを抱きかかえて跳ちょう躍やくした。小柄な身体からだからは想像できないほどの筋力で、彼女は一体目の怪物の頭上を跳び越える。そしてトラックから離はなれた場所に、彼女は鳥のようにふわりと着地した。

その直後、かつてトラックだった物体は、完全な怪物に変化を終えていた。グレンダが逃がしてくれなければ、唯里もその中に取りこまれていたはずだ。

唯里たちの背後では、変形に呑のみこまれそうになった若い二に曹そうが、自ら地面へと飛び降りている。周囲には、ほかの自衛隊員たちも倒れていたが、怪物たちは彼らには目もくれない。彼らの狙ねらいは自衛隊の隊員ではないのだ。二体の怪物の虚うつろな目は、グレンダだけを追っている。

『見ツケタ……グレンダ』

そして怪物たちの背後から、くぐもった声が聞こえてきた。機械で変調した女性の声だ。

銀ぎん黒こく色しよくのローブをまとった人影が、怪物たちの背後に立ってグレンダを睨にらんでいる。

ローブの下の女の顔は、仮面に覆おおわれてわからない。だが、金属製の杖つえを握にぎった彼女の姿は、おとぎ話に出てくる魔ま法ほう使つかいによく似ている。

「もしかしてグレンダの知り合い……なの？」

　長ちよう剣けんを握り直して、唯里が訊きいた。グレンダがぶるぶると首を振る。それは予想できたことだった。怪物を従えて襲おそってきた女が、グレンダの味方とは思えない。

　唯里は油断なく身構えて、黒くろ銀がねの魔法使いを睨にらんだ。

　たとえ敵の数が増えたところで、唯里の優位は揺らがない。トラックを怪物へと変えて操あやつる女の技は厄やつ介かいだが、そうやって生み出された怪物は、六式降魔剣・改ローゼンカヴアリエ・プラスの敵ではないからだ。

　しかし黒銀の魔法使いの次の行動は、唯里にとって予想外のものだった。

　彼女はグレンダを見つめたまま、奇妙な言葉を告げたのだ。

『──グレンダ、コード認証、正統ナル後継者トシテ49 72657175657374 72656c6963我ハ遺産ヲ要求スル6173 737563636573736f72』

　女はそう呟つぶやいたきり、グレンダの反応を待つように黙だりまこむ。異様な沈ちん黙もくが訪れた。

「……みっ？」

　やがてグレンダは首を振り、唯里に助けを求めるようにそう訊いてきた。

　もちろん唯里にもなにが起きているのかわからない。乱れた呼吸を整えながら、女とグレンダを見比べるだけだ。

『グレンダ4772656e6461！　汝ノ使命ヲ果タセ646f 796f7572 64757479！』

　やがて苛いら立だったように女が怒ど鳴なった。グレンダが怯おびえたように後ずさる。

「なにを言ってるのか、わからないけど！」

ようやく意を決して唯里は動いた。長ちよう剣けんの切きっ先さきを怪物たちに向けたまま、取り出した攻魔師免許Ｃカードを黒銀の魔法使いに突きつける。

「攻魔特別措置法に基もとづき、魔術の不正使用による暴行、傷害、器物破損の罪で、あなた方を拘束します！　武器を捨てて投降してください！」

「邪じや魔まダ、剣けん巫なぎ」

唯ゆい里りの警告を黙もく殺さつして、女が杖つえを振りかざした。怪物たちが金属質の咆ほう吼こうを奏かなで、地じ響ひびきとともに跳ちよう躍やくする。一体は唯里の頭上へと。そしてもう一体の狙いはグレンダだ。

「この──っ！」

唯里は、自分に向かってくる怪物を目がけて、剣を大だい上じよう段だんに振り上げた。銀色の長ちよう剣けんが眩まばゆい呪じゆ力りよくの輝かがやきに包まれ、疑似空間切断の刃やいばをまとう。

複雑な剣技は必要ない。最大出力で放たれた六式降魔剣・改ローゼンカヴアリエ・プラスの一撃は、巨大な怪物をもあっさりと両断する。否いな、両断する──はずだった。

だが、唯里の剣が触れる寸前、怪物の全身を漆しつ黒こくのオーロラが包みこむ。

「えっ!?」

ガラスが砕けるような音とともに、疑似空間切断の刃が砕けた。

単なる剣撃と化した唯里の攻撃は、怪物の上じよう腕わん骨こつに阻はばまれて虚むなしく撥はね返される。

「六式降魔剣・改ローゼンカヴアリエ・プラスが防がれた……!?」

どうにか体勢を立て直して着地しながら、唯里は弱々しい声を洩もらす。

怪物を包みこんだ黒いオーロラの源は、黒くろ銀がねの魔ま法ほ

う使つかいがまとうローブだった。

　ローブの裾すそから洩れ出した闇やみが、怪物の肉体を覆おおい尽くし、六式降魔剣・改ローゼンカヴアリエ・プラスの能力を無効化したのだ。まるで異能の力など、最初から存在しなかったかのように──

「ゆいり！」

　愕がく然ぜんとする暇ひまもなく、グレンダの悲鳴が唯里の耳じ朶だを打った。もう一体の怪物が、逃げ惑うグレンダを崖がけっぷちへと追い詰めている。

「逃げて、グレンダ！」

　唯里は再び長剣を構えて、今度はグレンダを襲おそう怪物の背中へと斬きりつける。

　それでも結果は同じだった。漆黒のオーロラで覆われた怪物には、六式降魔剣・改ローゼンカヴアリエ・プラスの能力が通じない。

「それならっ！」

　唯里はなにもない虚こ空くうを薙なぎ払い、空間そのものを斬きり裂いた。空間の断層をバリケードに使って、怪物の動きを封じようとしたのだ。

　だが、黒銀の魔法使いのオーロラは、その空間断層すら一いつ瞬しゆんで破壊する。

「なっ!?」

　唯里の顔が絶望に歪ゆがんだ。トラックから生み出された怪物の巨体が、唯里を目がけて足を踏み下ろす。障しよう壁へきを破られた今の唯里には、その攻撃を防ぐ手段がない。

　潰つぶされる──と、唯里は死を覚悟する。

　グレンダに異変が起きたのは、その直後のことだった。

「ゆいり――っ！」

絶叫するグレンダの甲かん高だかい声が、やがて獣けものの雄お叫たけびへと変わる。

彼女のコートが弾はじけ飛び、現れたのは透明な鱗うろこに覆おおわれた皮膚だった。小柄な少女が、巨大な獣へと姿を変えていく。異い形ぎようの翼つばさと禍まが々まがしい四し肢し。太古の恐竜を思わせる蛇だ身しん──

グレンダの姿は完全に消えて、そこには鋼はがね色いろの鬣たてがみを持つ巨大な龍族ドラゴンだけが残っていた。獣じゆう人じん化かでは説明がつかない、圧倒的な変貌だ。

「……グレンダ……あなた、いったい……!?」

唯ゆい里りの思考は完全に止まっていた。

鋼色の龍りゆうの巨体が、人ひと型がたの怪物を弾き飛ばす。たとえ怪物が二体がかりでも、龍族ドラゴン化した今のグレンダを押さえつけられるとは思えない。

しかし、黒くろ銀がねの魔ま法ほう使つかいに焦あせりは感じられなかった。おそらく彼女は、最初からグレンダの正体を知っていたのだ。

銀ぎん黒こく色しよくのローブが意志を持つように広がって、龍の巨体へとまとわりつく。

龍族ドラゴン化したグレンダが、苦痛を訴えるようにわなないた。龍の四し肢しから力が抜けて、鋼色の巨体が横倒しになる。黒銀の魔法使いの能力は、龍族ドラゴンにすら有効なのだ。

『捕トラエロ』

金属製の怪物たちに女が命じた。

グレンダを助けなければ、と唯里は思う。あの鋼色の髪の少女は、唯里を救うために、自ら龍へと変わったのだから。だが、唯里には、どうすれば彼女を救えるのかわからない。

魔族と戦うために編み出された剣けん巫なぎの体術は、金属製の怪物たちには無力だ。

そして六式降魔剣・改ローゼンカヴアリエ・プラスでさえ、黒銀の魔法使いには通じない。

誰だれか、助けて――

自らが剣巫であることすら忘れて、無力な少女のように唯里は祈った。

直後、

黒銀の魔法使いから伸びていた漆しつ黒こくの薄はく膜まくを、銀色の閃せん光こうが断ち切った。

その閃光の正体は、全金属製の銀色の槍やりだ。青白い神格振動波の輝かがやきが、龍族ドラゴンすら縛しばる魔法使いのローブを、紙のように無造作に引き裂いていく。

そして次の瞬しゆん間かん、眩いまばゆ黄金の雷らい光こうが、巨大な怪物たちを跡あと形かたもなく薙なぎ払っていた。

圧倒的な力の差。戦せん闘とうとすら呼べない一方的な蹂じゆう躙りんだった。

実体化した濃のう密みつな魔力の塊かたまりが、雷らい光こうの獅し子しの姿になって唯里たちの前に着地する。

「あ……」

唯里は、ぽかんと間の抜けた表情で呟つぶやいた。

雷光の獅子を従えて立っていたのは、どこか気け怠だるげな表情を浮かべた、パーカー姿の少年だ。

そんな少年の傍かたわらには、銀色の槍やりを抱いた制服姿の少女が寄り添っている。しなやかな猫科の猛もう獣じゆうに似た、華きや奢しやな美貌そのままに。

「大丈夫ですか、唯ゆい里りさん！」

少女が唯里の名を呼んだ。

　もちろん唯里も彼女の名前を知っていた。彼女が握にぎっている銀色の槍やりの銘なも。

　よかった、と唯里は安あん堵どする。もう大丈夫だよ、とグレンダに心の中で呼びかける。

　彼女たちが来てくれたのだ。世界最強の吸血鬼と、その監視者が。

　極度の疲労で薄うすれゆく意識の中で、唯里は少女の名前を呼ぶ。

「雪菜ゆっきー……」

　そして唯里はぷつりと意識を失った。

幕間 iii

羽は波ば唯ゆい里りたちが、怪物に襲おそわれたのとほぼ同時刻──

古こ城じようと雪ゆき菜なを乗せた車は、曲がりくねった山道を土つち煙けむりを上げて疾走していた。

車は、北米連合ＮＡＵ製の装甲兵員輸送車だった。自衛隊所属の車両ではない。取りつけられているのは外交官車両用ナンバーだ。

運転手は、赤いバンダナを巻いて迷めい彩さい服ふくを着たオシアナス・ガールズの金髪美女。助手席でナビを担当しているのも、青いカチューシャのお嬢じよう様さま風美人である。

古城と雪菜は、残りのオシアナス・ガールズとともに、兵員輸送車の荷に室しつに乗っている。

大量の銃器や武器弾薬を満載しているため、荷室の中は狭かった。

古城と雪菜は、互いに肩を寄せ合うようにして、隣となり合わせに座っている。制服のクリーニングがようやく終わって、凪なぎ沙さの救助に向かっているのだ。

しかし二人の間に会話はない。流れていたのは重苦しい沈ちん黙もくだけ。

例の男湯での一件以来、雪菜が完全に機き嫌げんを損ねてしまっていたのだった。

「あのな、姫柊ひめらぎ。さっきのことだけど──」

気まずい空気に耐えかねた古城が、仕方なくその話題に触れてみる。

しかし雪菜は、目を合わせないまま素そっ気けなく首を振り、

「大丈夫です。問題ありません」

「え……？　なにがだ？」

「わたしはなにも見てませんから。だから先輩の変態的露ろ出しゆつ行為のことも知りませんし」

「なんで裸で風ふ呂ろに入ってただけで、変態呼ばわりされなきゃなんねーんだよ!?」

　現実逃避っぽくもある雪菜の発言に、古城は苛いらゝいらと言い返す。

　そんな古城を、雪菜は半はん眼がんになって冷ややかに睨にらみつつ、

「妃き崎さきさんはちゃんと水着を着てたじゃないですか」

「あれはあいつが勝手に乱入してきたんだよ！　ていうか水着の有無よりも、妃崎が堂々と男湯に入ってることを問題にしろよ！」

「はあ」そうですね、と曖あい昧まいな返事を口にする雪菜。

「言っとくけど、姫柊に風呂をのぞかれた程度のことは、俺おれも気にしてないから気を遣つかわなくていいぞ。凪沙だって、平気で俺の着替え中に入って来たりするからな」

　そのくせ古城が、うっかり着替え中の妹に遭そう遇ぐうしたときには、三日くらい口を利きいてもらえなかったりするので、理不尽極まりないという感想を持ってもいるのだが──

「わ、わたしはべつにのぞいたわけじゃないですけど……でも、先輩がそう言うのなら気にしないであげます」

　なぜか古こ城じようの言葉を聞くなり、雪ゆき菜なは急に態度を軟化させた。コホンと小さく咳せき払ばらいして、柔らかな微笑すら浮かべてみせる。言い訳した古城ですら面めん喰くらうほどの急変ぶりだ。

「ねえ、マルーシャ……普通、彼氏に、妹と同じ扱いをされたら怒る場面だと思うのだけど、どうして雪菜はご機き嫌げんなの？」

　古城たちの会話を聞いていた運転席の美女が、助手席の青カチューシャに質問する。

　青カチューシャは、ふふん、と訳知り顔で笑うと、

「それはね、ヴィカ。ほら、第だい四よん真しん祖そは有名なシスコンだから」

「ああ！　妹と同格ということは、それだけ愛されてるということなのね、わお！」

「──聞こえてるからな！」

　わお、じゃねえよ、と古城がふて腐れたように頬ほお杖づえをついた。

「わ、わたしもべつにご機嫌なわけじゃありませんから！」

　雪菜が顔を真っ赤にして言う。しかしオシアナス・ガールズたちは、そんな雪菜に、すべてわかっていると言いたげな優しげな笑顔を向けるだけだ。

「……ていうか、あんたらなんでついてきてるんだ？　いや、神かん縄なわ湖こまで車で送ってもらえるのは普通にありがたいんだが」

　古城は溜ため息いきをつきながら、今さらの質問を口にする。

　青カチューシャは、ちらりと古城を振り返って思わせぶりに微笑ほほえむと、

「わたしたち、アルデアル公に第四真祖をおもてなしするように命じられてますし」

「それにこんな面おも白しろそう……いえ、大変な状況を見逃す……いえ、見過ごすわけにはいきませんから」

　ハンドルを握る赤バンダナが、声を弾はずませながらそう言った。

「そいつはどうも」

古城はがっくりと肩を落として、力無く乾いた笑みを洩もらす。

命いのち懸がけで妹の救助に向かう古城の手助けも、彼女たちにとっては、暇ひま潰つぶしの娯楽に過ぎないらしい。なんとなく感謝して損した気分だった。ヴァトラーの悪あく癖へきが彼女たちに伝染した、というよりも、暇を持て余したセレブというのは、似たり寄ったりなのかもしれない。

その暇潰しに助けられている身としては、強く文句も言えないのだが――

古城がぼんやりとそんなことを考えていると、装甲車が速度を緩ゆるめる気配があった。

神かん縄なわ湖こに向かう細い市道の分岐点に、自衛隊員が立っている。検問だ。

「この先は一般車両は通行禁止です。迂う回かいしてください」

外交官ナンバーの装甲車を訝いぶかしみつつも、隊員がそう声をかけてくる。

運転席の赤バンダナが、愉たのしげな表情で古城を見た。検問を強行突破してもいいのか、と古城に無言で訊きいているのだ。

たしかにこの装甲車の性能なら、検問所のバリケードを破るのは難しくないが、意味もなく自衛隊を敵に回すのは気が咎とがめた。だからといって、事情を説明したところで、彼らがすんなり通してくれるとは思えない。

どうしたものか、と古こ城じようが迷っていると、雪ゆき菜なが突然立ち上がった。運転席のほうに身を乗り出して、余よ所そ行きの事務的な口調で自衛官に告げる。

「太たい史し局きよくです。魔ま獣じゆう討とう伐ばつの任務で神かん縄なわ湖こに向かっています」

「太史局？」

「緊急事態だと聞いてますが？」

「あ……いえ、ですが……」

「攻こう魔ま師し免許と身分証です。確認してください」

「六りく刃じん神しん官かん……に、二十九歳!?」

　雪菜から渡された身分証を確認して、自衛官が驚おどろいたように目を見張った。そしてもう一度、身分証の写真と雪菜の顔を見比べる。

「なにか？」

　雪菜は、ひくひくと唇くちびるの端を引き攣つらせ、殊こと更さらに冷たい声を出す。

「いえ。失礼しました」

　自衛官は慌あわてて敬礼し、古城たちの車が通れるようにバリケードをどけた。

　どうもー、と愛あい想そよく手を振って、赤バンダナが車を発進させる。

　そして自衛官たちの姿が見えなくなったところで、車内が爆ばく笑しように包まれた。雪菜が二十九歳と名乗ったときの澄すまし顔。そして、自衛官がすんなりそれを信じたことがおかしかったのだ。

「どうしてそんなに笑うんですか──!?」

　雪菜がムキになって古城を睨にらんでくる。古城は目の端に浮いた涙を拭ふきながら、

「いや……妃き崎さきがくれた偽ぎ造ぞう身分証が役に立ったなと思って」

「くっ……」

　どうしてわたしがこんな目に、と恨みがましく唇くちびるを噛かむ雪菜。太史局名義の偽造身分証は、妃崎霧きり葉はが別れる前に渡してくれたものだった。さっそく役に立ったわけだが、雪菜の年齢がやはりアラサーに設定されているあたりに、霧葉の悪意が感じられる。

「第だい四よん真しん祖そ──」

　助手席の青カチューシャが、静かな口調で古城を呼んだ。

　残るオシアナス・ガールズたちの表情から、笑みが消える。

　古城たちの装甲車の進行方向から、何台もの自衛隊車両が近づいてきたのだ。魔獣との戦せん闘とうの痕こん跡せきなのか、車両の多くは傷ついて、痛ましい空気を漂ただよわせている。狭い山道を下っているとは思えないほど運転も荒い。まるで敗走している軍隊のような、焦あせりと余裕のなさがうかがえる。乗車した隊員たちの表情には、異様な緊張と、隠かくしきれない恐怖が浮かんでいた。

「負傷者を運んでいるようですね」

「ああ……だけど、妙だな」

　雪ゆき菜なの呟つぶやきに同意しつつも、古こ城じようは疑問を感じていた。

　負傷者を抱えて撤てつ退たいしているのなら、不安を感じるのも理解できる。だが、彼らが撒まき散らしている生々しい恐怖は、負傷による消耗や疲労とは明らかに別物だった。

　まるで間近に迫っている敵から、必死で逃げているような──

「止めてくれ！」

　巨大な魔ま力りよくの気配を感じて、古城は叫んだ。

　そのときにはすでに運転席の美女──ヴィカがブレーキを踏みこんでいる。横滑りして路ろ肩かたの斜面に乗り上げた装甲車から、古城はすぐに飛び出した。

　密集した木こ立だちの向こう側に、立ち上がる巨大な影が見える。金属光こう沢たくを持つ人ひと型がたの怪物だ。

「姫柊ひめらぎ、あれは──」

「はい、傀儡ゴーレムです。見たことのない術式ですけど、おそらく……！」

　折り畳まれていた銀色の槍やりを展開しながら、雪菜が答えた。

　古城はギリッと奥歯を鳴らす。凪なぎ沙さのいる神かん縄なわ湖こまでは、まだかなりの距きよ離りが残っている。こんな場所で怪物に行く手を塞ふさがれるとは、完全に想定外だ。

「あんたたちはここにいてくれ！　ヤバそうだったら、迷わず逃げろ！」

　武器の準備を始めたオシアナス・ガールズに、古城が叫ぶ。

「わかっています」

「足手まといになるつもりはありません」

「ご武運を――」

　どこか気品を感じさせる口調で、彼女たちが答えてくる。

　助かる、と無言でうなずいて、古城は怪物たちのほうへと駆け出した。視界に新たな魔ま獣じゆうの姿が映ったのは、その直後だ。

「なんだ……!?　龍族ドラゴン!?」

　蛇だ身しんと禍まが々まがしい翼つばさ。そして屈強な四し肢しを持つ巨体――その姿に古城は顔をしかめる。

　絶滅すら噂うわさされる龍族ドラゴンは、〝魔族特区〟である絃いと神がみ島じまでも目にすることのない種族だ。その希少種の突然の出現には、さすがに驚かずにいられない。それでも古城は足を止めなかった。古代兵器ナラクヴエーラだのレヴィアタンだのを見慣れて、今さら龍族ドラゴン程度では動じなくなってしまった自分に少し絶望する。

　その龍族ドラゴンを護まもろうとしているのは、銀色の長ちよう剣けんを構えた制服姿の少女だ。

「唯ゆい里りさん!?」

　少女の姿に気づいた雪菜が、驚いて彼女の名前を呼ぶ。

「姫柊の知り合いか？」

「獅し子し王おう機き関かんの剣けん巫なぎです。高たか神がみの杜もりで一緒だった──」

　そうか、と古こ城じようは安あん堵どの息を洩もらした。魔ま術じゆつの産物とおぼしき鋼はがね色いろの怪物と、傷ついた龍りゆうを庇かばっている少女──どちらを助けるべきか、かすかに残っていた最後の葛かつ藤とうが消えた。

「どっちに手を貸せばいいのか、迷う必要はなさそうだな」

「はい！」

　銀色の槍やりを握にぎり締しめたまま、雪ゆき菜なが怪物たちの前に飛びこんでいく。

　古城は彼女を援えん護ごするべく、自らの眷けん獣じゆうを召しよう喚かんした。

第四章　真祖と龍と

The Original Vampire And The Dragon

1

「雪菜ゆっきー……」

　唯ゆい里りと呼ばれていた制服姿の少女が、雪ゆき菜なを見つめて呆ぼう然ぜんと呟つぶやく。

　なるほど、と古こ城じようは薄うすく笑った。彼女も獅し子し王おう機き関かんの剣けん巫なぎだという雪菜の言葉は真実だった。この少女の側についたのは、やはり正解だったらしい。

「あれが傀儡ゴーレムの親玉か……？　いかにもそれっぽい見た目だけど……」

　銀黒色のローブをまとった魔ま法ほう使つかい風の女を睨にらんで、古城は小さく眉まゆをひそめる。趣味の悪いコスプレにしか見えないが、意味もなくそんな恰かつ好こうをしているわけではないはずだ。

『第だい四よん真しん祖そ……』

　その黒くろ銀がねの魔法使いが、苛いら立だたしげに古城を見据えて言った。路上にぶちまけられたゴミを見るような冷たい眼まな差ざしだ。

「俺おれのことを知ってるのか……？」

　古城は驚おどろいて訊きき返す。しかし黒銀の魔法使いはなにも答えない。

　彼女が無言で杖つえを振り上げたその直後、巨大な咆ほう吼こうが古城の肌を震ふるわせた。

「なんだ!?」

「先輩、後ろです――！」

　混乱する古城に、雪菜が叫ぶ。振り返る古城の目に映ったのは、

木々を薙なぎ倒しながら迫ってくる巨大な魔ま獣じゆうの姿だった。翼よく長ちよう十数メートルにも達する二脚の翼よく竜りゆうだ。

「な!?　なんだっ!?」

「飛龍ワイバーン――！」

　雪菜に突き飛ばされた古城の頭上スレスレを、飛龍ワイバーンの鉤かぎ爪づめが駆け抜けていく。危うく首から上を持っていかれるところだ。

「くそっ……！　疾きくや在がれれ、〝獅子の黄金レグルス・アウルム〟！」

　古城が自らの眷けん獣じゆうに反撃を命じる。膨ぼう大だいな魔力によって実体化した獅子の前まえ肢あしが、飛龍ワイバーン目がけて振り下ろされる。

　だが、その前に黒銀の魔法使いが動いていた。彼女のローブの内側から洩もれ出した闇やみ色いろのオーロラが、水面に落としたインクのように広がって、古城の眷獣の行く手を阻はばむ。

　雷らい光こうの獅子は構わずそれを引き裂こうとするが――

「なに!?」

　漆しつ黒こくのオーロラに触れた瞬しゆん間かん、獅子の前肢は、音もなく弾はじかれた。眷獣がまとう閃せん光こうと稲妻が霧む散さんして、火花すら残さず消えていく。

　オーロラに包まれた飛龍ワイバーンは無傷。激突の衝しよう撃げきで、大きく姿勢を崩しただけだ。

「第だい四よん真しん祖その眷けん獣じゆうの攻撃に……耐えた!?」

　雪ゆき菜なが、信じられないという風に目を見張った。眷獣とは濃のう密みつなエネルギーの集合体であり、本来なら、生身の生物が受け止められるような存在ではないのだ。より強大な魔ま力りよくをぶつける以外に、眷獣を倒す方法はないとされている。たったひとつの例外を除いては。

「姫柊ひめらぎ、今のは……！」

「はい。同じです。闇やみ誓せい書しよのときと……！」

　銀色の槍やりを握にぎり締しめ、雪菜は険しい表情を浮かべている。

　眷獣に対抗する、もうひとつの方法。それは魔力の完全な無効化だ。だからこそ第四真祖の監視者である雪菜には、魔力無効化能力を持つ七式突撃降魔機槍シユネーヴアルツアーが与えられたのだ。

　そして古城たちの知る限り、魔力無効化を可能にする手段は、七式突撃降魔機槍シユネーヴアルツアー以外にもひとつだけ存在する。それは仙都とこよ木ぎ阿あ夜やが使った〝闇誓書〟だ。

　異能の力が存在しない世界で絃いと神がみ島じまを塗りつぶすことで、彼女は古城の眷獣を無力化した。

　黒くろ銀がねの魔法使いが使った闇色のオーロラは、その闇誓書の能力によく似ている。

『グレンダ……』

　倒れている龍りゆうを眺めて苦にが々にがしげに呟つぶやくと、黒銀の魔法使いは、舞い降りてきた飛龍ワイバーンの背中に跳び乗った。

「待て……っ!?」

　飛び去る飛龍ワイバーンを撃ち落とすために、新たな眷獣を召しよう喚かんしようとして、古城は苦痛に顔を歪ゆがめる。右手が、焼けつくような痛みを訴えてくる。絃神島で〝静寂破りペーパーノイズ〟に、〝雪せつ霞か狼ろう〟で刺された傷の場所だ。

「先輩……その手は……」

　古城の異変に気づいた雪菜が、青ざめた顔で駆け寄ってくる。咄とつ嗟さに隠かくしたつもりだったが、彼女には気づかれていたらしい。

「ああ、ちょっとな」

激痛に汗を浮かべながら、たいしたことはない、と古城は笑ってみせる。古城たちの傍そばには、倒れた龍を庇かばっている唯ゆい里りもいるのだ。彼女に余計な心配をかけるのは得策とは思えない。

「眷獣を召喚した反動ですか？」

「かもな」

古城の右手の甲に浮かぶ、亀き裂れつのような傷跡が広がっていた。正確な原因はわからないが、今の戦せん闘とうで一気に症状が悪化したらしい。

「それより、姫柊、彼女たちは――」

とりあえずの脅きよう威いが去ったことを確認して、古城は背後を振り返る。そこには傷つき倒れた龍りゆうと、長ちよう剣けんを持った唯里がいるはずだった。が、

「み、見ちゃダメ――ッ！」

彼女は焦あせりの表情を浮かべ、古こ城じようを見上げて絶叫する。

制服姿の剣けん巫なぎの腕の中で、龍りゆうが形を変えていく。巨大な龍族ドラゴンから、鋼はがね色いろの髪を持つ小柄な少女の姿へと。歳としの頃ころは十三、四歳ほどの、可愛かわいらしい顔立ちの女子だった。

当然といえば当然だが、少女は何も着ていない。彼女が本来身に着けていた衣服は、龍族ドラゴン化した際に弾はじけ飛んでしまったのだろう。

「え？」

龍が少女の姿に変わったことよりも、彼女が裸だったことに驚おどろいて雪ゆき菜ながうめく。

「え……!?」

驚いていたのは古城も同じだ。龍族ドラゴンの女の子の裸身を見つめて、完全に硬直してしまう。唯ゆい里りは、意識のない龍族ド

ラゴンの子を必死に隠かくそうとしているが、彼女もパニックになっているのか、ほとんどなんの役にも立っていなかった。

「先輩、いつまで見てるんですか？」

　最初に冷静さを取り戻した雪菜が、古城の目元を手で塞ふさぎながら睨にらみつけてくる。

「わ、悪い！　すまん！」

　古城はハッと我に返って、顔を背けながらそう言った。

　冷たい風に乗ってそんな古城の耳に届いてきたのは、人々の悪意のこもった囁ささやき声だった。

「お、おい」

「ああ、吸血鬼だ……なんで魔ま族ぞくがこんなところに……？」

「それにあの娘……獣じゆう人じんか？」

　負傷した自衛隊の隊員たちが、古城を遠巻きに見つめている。彼らは互いに顔を寄せ合って、低い声で会話を続けていた。敵意と好奇に満ちた彼らの視線は、古城にとっては馴な染じみの薄うすいものだった。これまでほとんど体験することのなかった感情だ。

　魔族に対する怯おびえと敵意──

「先輩……」

　まるで古城を支えるように、雪菜がそっと身体からだを寄せてくる。

　彼女の温ぬくもりを間近に感じながら、古城はゆっくりと空を見上げた。うっすらと低い灰色の雲に覆おおわれた真冬の空。常とこ夏なつの絃いと神がみ島じまには存在しない季節──

「ああ……そうか」

　そうだったな、と古城はようやく実感する。

「ここは〝魔族特区〟じゃないんだな」

2

有脚戦車ロボツトタンクのマニピュレーターに担かつがれたまま、斐ひ川かわ志し緒おは、神かみ緒お多だダムの堤防へと帰還していた。負傷した暁あかつき緋ひ沙さ乃のや牙が城じよう、眠り続ける暁凪なぎ沙さも一緒だ。

「日本の自衛隊デイフエンスフオースか。ずいぶん手て酷ひどくやられたものだな」

大破した装甲車の残ざん骸がいを眺めて、イブリスベールが冷たく言い放つ。

堤防上には、衛生科の隊員が到着して、負傷者の救きゆう護ごに当たっている。そこから少し離はなれた場所に有脚戦車ロボツトタンクが停止して、志し緒おは、気絶した牙城たちの傷の手当てを始めた。羽は波ば唯ゆい里りの行方ゆくえも気がかりだったが、今は負傷者の処置が優先だ。

暗殺者として育てられた獅し子し王おう機き関かんの舞ま威い姫ひめは、人体の構造を熟知している。要人警けい護ごの任務に就つくことも多いため、救命処置についてもそれなりに訓練を受けていた。戦車に積まれていた救急キットも借りて、志緒はどうにか手当てを終える。

緋沙乃と牙城の傷は深いが、幸い命にかかわるほどではなかった。あの状況でも、彼らはきっちり急所を庇かばっていたらしい。とはいえ、これ以上の戦せん闘とうはもちろん不可能だ。

「この場でまともに話ができそうなのはおまえだけか、娘」

心細さで半なかば放心していた志緒に訊きいてきたのは、〝滅ほろびの王朝〟の王子だった。

「まずは名前を聞かせてもらおうか。見たところ人間の攻こう魔ま師しのようだが、なぜおまえのような子どもがここにいる？」

そう告げてくるイブリスベールを、志緒はのろのろと振り返って

見上げた。子どもなのはあんたのほうだろ、と喉のどまで出かかった言葉を危うく呑のみこむ。

　失われていた気力がわずかに回復したのは、怒りで分ぶん泌ぴつされたアドレナリンのせいだろう。

「斐ひ川かわ志緒。獅子王機関の舞威媛です、イブリスベール・アズィーズ殿でん下か」

　志緒は立ち上がって、吸血鬼の王子を真まっ直すぐに見返した。そんな志緒の強気な態度に、ほう、とイブリスベールは面おも白しろそうに眉まゆを上げる。

「獅子王機関って、じゃあ、姫柊ひめらぎさんのお仲間ってこと？」

　戦車のハッチから顔を出した、華やかな髪型の少女が、志緒の頭上から訊いてきた。読者モデル風の派手な顔立ちで、胸にゼッケンを縫ぬいつけた、よくわからないエロい服を着ている。自分とは別世界に住む人種だと思っていただけに、彼女の口から出た名前に、志緒は少し驚おどろいた。

「姫柊雪ゆき菜なを知ってるんですか？　えっと……あいば……あさぎさん？」

「え、なんであたしの名前……」

　読者モデル風の美少女は、一いつ瞬しゆん、怪け訝げんそうに首を傾かしげて、ハッと胸元を見下ろした。頬ほおを真っ赤に染めながら、ゼッケンに書かれた自分の名前を慌あわてて隠かくす。

「ち、違うの！　この服は戦こ車れに乗るために仕方なく──」

「は、はあ」

　第一印象と違って、なんだか可愛かわいい人だな、と志緒は毒どく気けを抜かれた。

　見た目に反して頭の回転も速い。もっと地味な恰かつ好こうをしていれば、さぞ男子にもてるだろうに、と他ひ人と事ごとながら少し不ふ憫びんに思う。ともあれ、姫柊ひめらぎ雪ゆき菜なの知り合いということは、彼女も第だい四よん真しん祖その関係者なのだろ

う。それならば彼女がここにいることにも納得できる。

「では、志し緒おとやら。事情を聞かせてもらおうか。おまえたちの目的はなんだ。なぜ聖せい殲せん派はがこの地に現れた？」

　イブリスベールが、あらためて志緒を詰きつ問もんした。

　志緒は迷いながら小さく唇くちびるを噛かむ。

　目の前の少年は、異国の王子──それも〝滅ほろびの王朝〟の吸血鬼だ。

　彼が獅し子し王おう機き関かんの味方だと確信できない以上、志緒が勝手に作戦内容を明かすわけにはいかない。たとえそれが、イブリスベールを怒らせる結果を招いても、だ。

「それは、わたしの口からは言えません──」

　声を震ふるわせながら、志緒が答える。

「ほう、俺おれの質問への返答を拒むか、斐ひ川かわ志緒。忠実な飼い犬は嫌いではないぞ」

　イブリスベールが獰どう猛もうに微笑ほほえんだ。彼が放つ生々しい殺気に、志緒の全身が凍りつく。

「だが、命を救ってやった恩にも報いぬというのなら、もはや貴き様さまは獣けだもの以下だな。ならば相応の躾しつけを施ほどこさねばなるまい。手脚の一本ももぎ取れば、少しは話す気になるか──」

　白い牙きばを剝むいて笑うイブリスベールから、志緒は目を逸そらさない。

　一いつ瞬しゆんでも気を抜けば、殺されるという予感があった。全身に冷たい汗が噴き出す。こんな化け物と平気で行動を共にしていた藍あい羽ば浅あさ葱ぎは、普通ではない、と志緒は思う。

　それでも志緒がイブリスベールの圧力に屈しなかったのは、後輩の姫柊雪菜に対する対抗心があったからだ。第四真祖などというイブリスベール以上の怪物を、雪菜は、二十四時間監視し続けているという。彼女に負けたくないという一心で、志緒は恐怖に耐えてい

た。

　そんな志緒を見てイブリスベールはますます愉快そうに笑い、鬼き気きの圧力を増していく。と、

「待てよ、王子様。こういう一生懸命な子をあんまいじめるなって。事情なら、民間人の俺が気兼ねなく全部話してやるからよ」

　野戦ベッドに横たわっていた牙が城じようが、上体を起こしてイブリスベールに呼びかけた。

　その瞬しゆん間かん、志緒を縛しばっていた圧力が嘘うそのように消失する。

「牙城さん!?　喋しやべったりして大丈夫なんですか!?」

　重傷の牙城を見つめて、浅葱が訊く。

「おー、藍羽ちゃんか。最近の高校生はエロい恰かつ好こうしてんなー。古こ城じようのアホには勿もつ体たいないぜ」

　ぎゃああっ、と悲鳴を上げて浅葱が戦車の中に引っこみ、俺があと十年若ければ、と牙城は本気で悔しがる。しかし軽口を叩たたく牙城の顔色は、血の気けを失って蒼そう白はくだ。

「ぶっちゃけしんどいが、なんとかなるだろ。志緒ちゃんの処置のおかげだな。それに正直、喋しやべり続けてねーと意識を保てそうにないんだよな」

「……〝死し都と帰がえり〟の暁あかつき牙城か。十二番目ドウデカトスの発掘現場にも居合わせたと聞くが、噂うわさどおりふざけた男だな」

　ふん、とイブリスベールが、少し感心したように牙が城じように目を向ける。

「だが、たしかに貴き様さまでも構わん。答えてもらおうか、暁あかつき牙城。聖せい殲せん派はの目的はいったいなんだ。貴様たちはこの湖でなにをしていた？」

「テロリストの狙いは正直よくわからねーな。だが、獅し子し王おう機き関かんの目的は、ずばり、黒殻アバロンの封印だ。で、気づ

いたら、湖がこんなふうに凍りついて、魔ま獣じゆうがいきなり現れたってわけだ──」

「……黒殻アバロン？　なんだそれは？」

　イブリスベールが眉まゆをひそめて訊きき返す。

「〝聖殲〟の遺産だよ。少なくとも建たて前まえはそういうことになってる。第だい四よん真しん祖そなんかと同じ、〝天てん部ぶ〟に封印された殺さつ神じん兵器だとな」

「ふん、なるほどな……十二番目ドウデカトスの魔力を使って、〝聖殲〟の遺産を封印しようとしたわけか。殺さつ神じん兵器の名に竦すくみ上がった、浅はかな人間どもが考えそうなことだ」

　イブリスベールは、凍りついた神かん縄なわ湖こをゆっくりと見回した。

　六千万トンを超える人造湖の湖水すべてを氷結させるほどの膨ぼう大だいな魔力は、イブリスベールにとっても脅きよう威いなのだろう。彼の表情には、畏い怖ふと呆あきれの入り混じった色が浮かんでいる。

「この氷原は〝妖姫の蒼氷アルレシヤ・グラキエス〟の仕し業わざだな。宿やど主ぬしの肉体から切り離はなされてなおこの威力──忌いま々いましいが真祖の眷けん獣じゆうを名乗るだけはある、ということか。黒殻アバロンとやらがただの殺さつ神じん兵器なら、たしかに封印できたかもしれんな」

「だったら、どうして……」

　志し緒おは思わず声に出して呟つぶやいた。実際には黒殻アバロンの再封印は失敗して、魔獣の大量発生を引き起こした。そして聖殲派などというテロリストの介入も招いてしまっている。獅子王機関の作戦は失敗したのだ。

「知れたことよ。黒殻アバロンとやらに封印されていたものは、殺さつ神じん兵器などではなかったのだ。そもそも本当に封印であったのかどうかも怪しいものだな」

　イブリスベールが嘲あざけるように言い捨てた。その言葉に志緒は愕がく然ぜんとする。

「で、でも……殺さつ神じん兵器の封印じゃないとしたら、黒殻アバロンの正体はいったい……」

「おまえは〝聖殲〟の遺産と言われて、なぜ真っ先に兵器を連想した？」

「え？」

　イブリスベールの問いかけに、志緒は盲点を衝つかれたような気がした。

　闇くらき白しろ奈なたちの説明を、疑うことなく受け入れていたから気づかなかった。だが、遺産と兵器を結びつけるのは、言われてみれば奇妙な話だ。どうして自分は、黒殻アバロンの中身が、危険な兵器だと信じて疑わなかったのか、と志緒は悔やむ。

　そんな証拠は、なにひとつ提示されていなかったのだ。災いが眠っているというあやふやな伝承以外にはなにも──

「遺産といわれて人が最初に連想するものは、財貨宝物の類たぐいであろうがよ。咎きゆう神しんの後継者の資格を与えるほどの神しん具ぐか宝ほう器きか──ならばこそ、厳重に護まもられていたのだろうな」

「封印されていたのではなく、護られていた……じゃあ、まさか私たちが見た龍りゆうは……」

「龍……だと？」

　志し緒おの言葉に、今度はイブリスベールが動揺する番だった。

「斐ひ川かわ志緒、貴き様さま、龍を見たのか？」

「は、はい。でも、一いつ瞬しゆんだったし、霧きりに邪じや魔まされて今どこにいるのかまでは──」

　イブリスベールに睨にらまれて、志緒は声を上うわ擦ずらせた。

　脳裏をよぎったのは、凍りついた湖面に残されていた巨大な裂け目クレバスだ。巨大な怪物が這はい出したような不自然な亀き裂れつ。あれはやはり、湖底で目覚めた龍が残した痕こん跡せきだったのかもしれない。

「龍って……本物の龍族ドラゴンのこと？」

　戦車のハッチから顔だけ出して、藍あい羽ば浅あさ葱ぎが怪け訝げんそうに呟つぶやく。

「そんなのが飛んでたら、すぐに見つかりそうなものだけど……このあたりには自衛隊だってまだ大勢残ってるんだし」

　それを野戦ベッドの上で聞いていた牙が城じようが、突然なにかに気づいて跳ね起きる。

「自衛隊……！　そうか……そういうことか……っ痛つう！」

「あ、暁あかつき牙城？」

　傷口を押さえてうめく牙城に、志緒は慌あわてて駆け寄った。

　やれやれ、と呆あきれ顔がおで首を振っていたイブリスベールが、不意に目つきを鋭くする。

「浅葱、リディアーヌ……おまえたちはしばらく戦車の中に籠こもっていろ」

「え？」

　イブリスベールの突然の忠告に、浅葱が困惑の表情を浮かべた。

　吸血鬼の王子が睨んでいたのは、堤防上を歩いてくる自衛官の一団だ。武装した彼らは真まっ直すぐに、志緒たちのほうへと向かっている。

「顔を出すなよ。地元の官かん憲けんと面倒を起こしたくはあるまい？」

「そっか。ごめん、あとよろしく」

「恩に着るでござる、イブリス殿」

「ふん」

　有脚戦車ロボツトタンクに乗っていた二人が、操縦席のハッチを閉める。民間人の藍羽浅葱たちが、自衛隊の封鎖区域で戦車を乗り回しているのは問題だが、姿だけでも隠かくしていれば、イブリス

ベールの従者と見なされて自衛隊もおいそれとは手が出せない──そういう判断なのだろう。イブリスベールが彼女たちに、そこまで気を遣つかうのが志緒には意外だった。

「彼奴きやつらは何者だ、斐ひ川かわ志し緒お？」

　その志緒に、イブリスベールが訊きいてくる。自衛官たちを引き連れた、指揮官らしき男を気にしているのだ。魔ま獣じゆうとの戦せん闘とうに巻きこまれたのか、男の全身のあちこちには、真新しい包帯が巻かれている。

「自衛隊の安あ座ざ真ま三佐です。今回の作戦指揮官の──」

「ふ……なるほどな」

　イブリスベールが、どこか意味ありげに微笑ほほえんだ。

　それを見ていた志緒の脳内で、小さな白い閃せん光こうが弾はじけた。浅葱の言葉と、牙が城じようの反応。そして志緒自身が抱いていたいくつかの疑問が重なり合う。

「──斐ひ川かわ攻魔官、彼らは？　暁あかつき巫ふ司しは負傷しているのか」

　そんな志緒たちの前で足を止め、安座真三等特佐が訊いてきた。

　揶や揄ゆするような声こわ音ねで、それに答えたのは暁牙城だ。

「たいした傷じゃねえよ。無駄に鍛きたえてるからな、この婆ばあさんは」

「あなたは民間人か……たしかにあなたのほうが重傷のようだが」

　血ち塗まみれの牙城を見下ろして、安座真が言う。そして彼はイブリスベールに一いち瞥べつをくれ、

「そちらの方は魔族か。あとで詳しく話を聞かせていただきたい──が、今は負傷者の手当てを優先しましょう。まずは彼女を──暁凪なぎ沙ささんを引き渡してください」

　安座真が、眠り続ける巫み女こ装しよう束ぞくの少女に視線を向ける。

　その直後、志緒は暁凪沙の隣となりに移動して、彼女を庇かばうように安座真を睨にらみつけた。不可解な志緒の行動に、安座真が小さく眉まゆを寄せる。

「斐川攻魔官？」

「残念ですけど、その命令は聞けません」

　志緒は腰のマウントに手を伸ばし、銀色の洋よう弓きゆうを握にぎり締しめた。六式降魔弓・改フライクーゲル・プラスプロトIIIスリー、解放アンロック──

　取り出した新たな矢を洋弓につがえて、静かに弦を引き絞る。

「動かないでください、安座真三佐」

　そう告げる志緒の矢の先端は、安座真の心臓に向けられていた。

3

「〝滅ほろびの王朝〟の……王子？」

　曲がりくねった山道の路ろ肩かたに屈かがみこんで、古こ城じようは改造スマホの画面をのぞきこんでいた。通信相手は、不細工な縫ぬいぐるみ型の現身アバターだ。

「なんだそれ？　なんでそんなのが浅あさ葱ぎと一緒にいるんだ？」

『浅あさ葱ぎ嬢じようちゃんたちが、カップ麺めんで餌え付づけに成功したみたいだぜ』

「は？　餌付け？」

　吸血鬼の王子をカップ麺で餌付け──まったく意味がわからない。しかし浅葱の身の上に、直接的な危険が迫っているというわけではないらしい。

「なんだかよくわからんが、とにかく凪なぎ沙さたちは無事なんだ

な。じゃあ、とりあえずそっちは任せた。合流するまでもう少し時間がかかるって浅葱に伝えといてくれ」

『あいよ、了解だ』

　そう言い残して、モグワイの映像が消える。古こ城じようは溜ため息いきを洩もらしつつ、スマホをパーカーのポケットに戻した。改造スマホのバッテリー残量も、そろそろ心こころ許もとなくなってきたところだ。

「凪沙ちゃんは無事だったんですね？」

　古城と向かい合うように座っていた雪ゆき菜なが、念押しするように訊きいてくる。安あん堵どの表情を浮かべる彼女に、古城は苦笑交じりにうなずいて、

「まあ、概おおむね、みんな無事らしい」

　うちの親父おやじは死にかけてたらしいけど、と心の中だけで付け足した。

　そんな古城たちの傍そばに突然駆け寄ってきて、唯ゆい里りと呼ばれていた少女が頭を下げる。ほとんど土下座しそうな勢いだ。

「すみませんでした――！」

「え？」

　古城は呆あつ気けにとられて彼女を見上げた。

　唯里の身長は、雪菜よりもやや高い。髪は肩にかかる程度の長さで、サイドに流した前髪のせいか、優等生っぽい雰ふん囲い気きがある。見た目の印象はだいぶ違うが、生き真ま面じ目めで思いこみの激しそうなところは、雪菜に似ているといえなくもなかった。

「本当はわたしが妹さんの護ご衛えいについてなきゃいけなかったのに、見失ってしまって……そのせいで凪沙さんを危険な目に――」

　自分を責めるような口調で、唯里が言う。古城はそのことに少し戸惑って、

「あ、ああ……でも結局は無事だったわけだし」

「いえ、わたしの力不足です。本当にすみませんでした」

　深々と頭を下げる唯ゆい里りを眺めて、古こ城じようは困ったように首を振った。

「おい、姫柊ひめらぎ……この子、本当に獅し子し王おう機き関かんか？」

「はい。わたしよりもひとつ年上で、すごく優秀な剣けん巫なぎ候補生でした」

「そうか、なんか意外だな」

「なにがです？」

　小声で呟つぶやく古城を見つめて、雪ゆき菜ながきょとんと小首を傾かしげる。

　うーむ、と古城は真剣に悩みながら、

「いや、獅し子し王おう機き関かんの関係者にしては、ずいぶん性格がまともだと思って」

「はい？」

　ピキ、と雪ゆき菜なの頬ほおが引き攣つる気配があった。

「あの、それは、わたしの性格になにか問題があるという意味ですか？」

　半はん眼がんになって問い返してくる雪菜に、だってなあ、と唇くちびるを歪ゆがめながら古こ城じようはうなずく。

「俺おれの知ってる獅子王機関の人間は、だいたい初対面で俺のことを殺しにかかってくるようなやつばっかだろ。姫柊ひめらぎとか煌きら坂さかとか、あとはこないだの〝静寂破りペーパーノイズ〟って女とか――」

「あ、あのときは先輩がわたしのことをいやらしい目で見るから――！」

「見てねえ！　あれは事故だ、事故！」

　声を荒らげて怒ど鳴なり合う古城と雪菜を、唯ゆい里りが驚おどろいたように見つめていた。彼女の中にあった第だい四よん真しん祖そとその監視者のイメージが、音を立てて崩くずれ落ちている――そんな表情だ。

　そして途と方ほうにくれたように立ち尽くす唯里に、駆け寄ってくる小柄な人影がある。長い鋼はがね色いろの髪をなびかせた龍族ドラゴンの少女だ。

「ゆいりー！」

「グレンダ？　どうしたの、その服……？」

　飛びついてきたグレンダをふらつきながら抱き留めて、唯里は目を丸くした。

　グレンダが着ていたのはサイズ大きめのミリタリージャケットとコンバットブーツ。そしてアクセントのイヤーマフだった。

「余っていた私たちの装備の中から、勝手に選ばせてもらいました」

　グレンダと一緒に戻って来たのは、オシアナス・ガールズだ。国籍不明の謎なぞの美女集団に、唯里は怯おびえたような顔で頭を下げつつ、

「あ、ありがとうございます。似合うよ、グレンダ」

「えへへー」

　唯里に褒ほめられたグレンダが、嬉うれしそうに目を細めて笑う。巨大な龍族ドラゴンが変身しているとは、とても信じられない可か憐れんな笑顔だ。

「あの、ところで、皆さんはいったい……？」

　龍族ドラゴンの少女にまとわりつかれたまま、唯里はオシアナス・ガールズを見返して遠慮がちに質問した。ある意味、当然の疑問だといえる。

　これは失礼しました、と赤バンダナの金髪美女が、迷めい彩さい服ふく姿のまま優美に一礼し、

「申し遅れました。第だい四よん真しん祖その妻です」

「へ!?」

　まったく予想外の彼女の答えに、唯里はぽかんと口を開けて絶句した。

　残る四人の異邦の少女たちも、次々に澄すまし顔で微笑ほほえんで、

「同じく、側そく室しつです」

「愛人です」

「セフレです」

「ハーレム要員、的な」

「え!?　え……!?」

　唯ゆい里りはあまりの驚おどろきで、彼女たちと古こ城じようの顔を見比べるだけの機械マシーンと化している。思わぬ濡ぬれ衣ぎぬをかけられた古城は、唯里とオシアナス・ガールズの間に慌あわてて割りこみ、

「信じるな！　違うから！　全然違うから！」

「で、でも、第だい四よん真しん祖そともなれば、妻や愛人の五人や六人くらいは──」

「だから違うって！　姫柊ひめらぎもなんとか言ってくれ！」

　身の潔白を証明するべく、雪ゆき菜なに助けを求める古城。しかし雪菜は、拗すねたような無表情で首を振るだけだ。

「わたしはただの監視役ですから。性格だってまともじゃないですし」

「まだその話を根に持ってたのかよ!?」

　最後の希望を断たれた古城が、頭を抱えて大おお袈げ裟さに喚わめく。

狼ろう狽ばいする古城をしばらく呆ぼう然ぜんと眺めていた唯里だが、やがてなにか吹っ切れたようにクスクスと声を洩もらして笑い出した。

「唯里さん？」

雪菜が、唯里を気き遣づかうように怖おず怖おずと声をかける。唯里は笑いながら首を振って、

「ううん。やっぱり古城くんは似てるな、と思って。牙が城じようさんの息子さんなんだな、って」

その瞬しゆん間かん、古城の口元が苦にが々にがしげに歪ゆがんだ。

「あ!?」

「わ、ごめんなさい。で、でも、苗みよう字じで呼ぶと牙城さんと混乱するかと思って、つい」

唯里が焦あせって謝罪する。馴なれ馴なれしく名前で呼んでしまったせいで、古城が怒ったのだと誤解したらしい。違う違う、と古城は顔の前で手を振って、

「いや、俺おれとあいつは全然似てないだろって話。呼び方なんかべつになんでもいいんだけど」

「そ、そうですか？　あ、いえ、そうですね。すみません。わたしのことも呼び捨てちゃってくれていいですから」

すぐさま礼儀正しく謝罪する唯里に、ああ、と古城は曖あい昧まいにうなずいた。

「やっぱまともだよな……獅し子し王おう機き関かんなのに」

「だからってどうしてわたしを見るんですか？」

しみじみと感想を洩もらす古城を、雪菜がむっつりと睨にらみつけてくる。

これ以上、雪菜の機き嫌げんが悪化しないうちに、と古城は咄とつ嗟さに目を逸そらし、唯里にしがみつくグレンダを見た。

「で、俺たちからも質問なんだけど、この子はいったい何者なんだ？」

「詳しいことは私にもわからないんです。グレンダって名前もさっきようやく教えてもらったばかりで……」

　唯ゆい里りが、そう言って困ったように眉まゆを寄せた。謎なぞの少女に理由もなく懐なつかれていることに、唯里も困惑しているらしい。

　しかしグレンダはそんな唯里に対して、無条件の信頼を寄せているようだ。

　敵意がないことを敏感に感じ取っているのか、目が合えば古こ城じようたちに対しても、にっこりと笑い返してくる。人ひと懐なつこい小動物を見ている気分だった。

　そのグレンダが、ぴくり、と耳を動かして、低い声で唸うなり始める。彼女が睨にらんでいる方角は、神かん縄なわ湖こに続く細い山道である。

「ゆいり、きた。また」

「え？」

　グレンダの言葉から少し経たって、野太いエンジン音が聞こえてきた。自衛隊の装輪装甲車が三台連なって、古城たちのほうへと近づいてくる。

　停車した装甲車から降りてきたのは、武装した迷めい彩さい服ふく姿の一団だった。小隊長とおぼしき人物が、グレンダを庇かばう唯里に近づいてくる。

「獅し子し王おう機き関かんの羽は波ば攻こう魔ま官かんですね」

　形ばかりのおざなりな敬礼をして、小隊長は唯里に問いかけた。

「自衛隊特殊攻こう魔ま連隊第二中隊、上うえ柳やなぎ二尉です。負傷者搬送中の部隊が、龍族ドラゴンの襲しゆう撃げきを受けたとの報告があったため、安あ座ざ真ま三佐より護ご衛えいを命じられました」

「龍族ドラゴンの襲撃……？」

　唯里が驚おどろいたように目を見開く。

「いえ、違うんです。襲おそってきたのは龍族ドラゴンじゃなくて、むしろ彼女はわたしたちを助けようとしてくれたっていうか――」

「ゆいり……」

　グレンダが怯おびえた声で唯里を呼んだ。

　上柳二尉の背後の隊員たちが、無言で銃を構えている。特殊攻魔部隊専用の個人防衛火器ＰＤＷ。その銃口が狙ねらっているのはグレンダだ。

「この現場における指揮権は我々にあります。グレンダを引き渡してください、羽波攻魔官」

　表情を強こわ張ばらせる唯里に向かって、上柳が高圧的に言い放った。

　敵意に満ちた声だった。

4

「なんのつもりだ、斐ひ川かわ攻魔官？」

　志し緒おに洋よう弓きゆうで狙われたまま、安あ座ざ真まは平然と問い返した。特殊攻魔部隊の作戦指揮官に相応ふさわしい剛ごう胆たんぶりだ。

　だが、それでも志緒の照準は揺ゆるがない。

「初めから違和感はあったんです。今回の作戦はなにもかもがおかしかった」

　自分でも驚おどろくほど冷静な口調で、志緒が告げた。

　イブリスベールが愉快そうな表情で、そんな志緒たちのやりとりを眺めている。

「魔ま導どう災害の封印なんて獅し子し王おう機き関かんにとっては日常茶飯事です。獅子王機関の剣けん巫なぎは、たった一人で世界最強の吸血鬼をも滅ほろぼす力を持っている──なのになぜ、今回に限って、出現してもいない魔ま獣じゆうを恐れて、自衛隊の力を借りなければならないのか──ずっと不思議に思ってました。民間人の凪なぎ沙ささんを、こんな危険な作戦に巻きこむ理由もわからなかった」

「……我々は獅子王機関に協力しただけだ。実際、獅子王機関の攻魔師だけでは、大量に出現した蜂蛇ホウダには対処できなかったはずだが？」

　安座真が冷静に反論した。筋の通った説明だと、志緒は認める。だからこそ志緒は自衛隊の存在に、今まで疑問を抱かなかったのだ。

「そうですね。私も最初は、そう考えて納得してました。でも、安座真三佐、あなたの部隊は魔獣に対して脆もろかった。いえ、あまりにも脆すぎました」

　負傷した隊員たちを視界にとらえたまま、志緒が言う。

　蜂蛇は強力な魔獣だったが、志緒たちの能力で対処できない相手ではなかった。ましてや自衛隊の特殊攻魔部隊が、圧倒されるほどの相手とは思えない。ただしそれは、特殊攻魔部隊が、万全の状態であれば、の話だ。

「理由は簡単です。あなたの部隊は、蜂蛇の群れに対抗できるだけの装備を持たされてなかったんです。そのせいで単純に攻撃力で圧倒された。魔獣の出現を警戒して神かん縄なわ湖こを包囲していたはずなのに、それに見合うだけの装備が与えられていないのは不自然ではありませんか？」

「残念だが……我々の活動は常に予算に縛しばられているし、計画には不確定要素がつきものだ。蜂蛇の大発生は想定されていなかった」

「だとしたら、あなたはなにが出現すると想定していたのですか、

安座真三佐？」

　志緒が穏おだやかな声で訊きき返す。

　その刹せつ那な、安座真の表情がかすかに乱れたことに、志緒は気づいた。

　蜂蛇ホウダは、龍族ドラゴンと共生する魔獣だ。象や水牛の背中に集まる鳥たちのように、強力な龍りゆうによる庇ひ護ごを求めて、黒殻アバロンの周囲には蜂蛇の群れが巣くっていた。

　それが安座真の計画を狂わせたものの正体だ。蜂蛇の大発生は獅子王機関だけでなく、安座真にとっても想定外イレギユラーだったのだ。

「あなたは、黒殻アバロンの中に龍族ドラゴンが眠っていることを、最初から知っていたのではありませんか？　だから神縄湖の周辺に部下を待機させていたんです。獅子王機関より早く、龍の出現位置を割り出すために」

　志し緒おの指摘に安あ座ざ真まは答えず、ただ疎うとましげな眼まな差ざしを向けてくる。

　もしも蜂蛇ホウダの大発生がなかったら、安座真は容易たやすく龍りゆうの位置を特定したはずだ。そして彼の同志なかまたちが、その龍を捕ほ獲かくしていたことだろう。なぜなら特殊攻こう魔ま部隊には、龍族ドラゴンに対抗できる武器が与えられていなかったからだ。ほかならぬ安座真が、そのように手配したのだから。

「なるほどな。自衛隊が、雑ざ魚こ魔ま獣じゆうごときに苦戦したのはそのせいか。連中は、対魔獣用の強力な武器を装備させてもらえなかったわけだ。あんたが龍を捕らえる前に、部下に獲え物ものを横取りされたら意味がねーからな」

　暁あかつき牙が城じようが、クックッと喉のどを鳴らして笑い出す。

「端はなから龍族ドラゴンが目的だったとすれば、今回の儀ぎ式しきに凪なぎ沙さが引っ張り出された理由にも説明がつくな。龍を覚かく醒せいさせる生いけ贄にえの条件を満たしてたのが、たまたま凪沙あいつだけだった、ってわけだ。その情報をあんたに与えた黒幕は誰だれなのか、ついでに教えてくんねーか？」

だいたい想像はついてるが、と牙城は挑発的な口調で言った。

志緒も同意するように小さくうなずく。〝第だい四よん真しん祖そ〟暁古こ城じようの肉親の情報を知り、獅し子し王おう機き関かんを動かせるほどの立場の人物は、政府内部にもそう多くはない。その人物は安座真を介して、自衛隊だけでなく、獅子王機関をも利用しようとした。安座真の身柄を拘束すれば、その人物を捜さがし当てるのは、そう難しいことではないだろう。

「きみたちがなにを言っているのか、私には理解できないのだが」

しかし安座真は、蔑さげすむように志緒を見つめてくる。志緒の言葉は想像だけで、具体的な証拠はなにもない。それを知って嘲あざ笑わらっているような表情だ。

「龍族ドラゴンの目撃報告は私も聞いている。だが、仮に私がそれを捕らえたとして、いったいなにをすればいいのかな？」

「知れたことよ」

安座真の質問に答えたのは、志緒ではなくイブリスベールだった。

長く沈ちん黙もくを保っていた吸血鬼の王子が、燃えるような金きん色いろの瞳ひとみで安座真を睨にらんでいる。

「龍は財宝を護まもる者。それを殺して宝を奪い取るのは、いつだって騎き士しの仕し業わざであろうが──なあ、咎神カインの騎士よ」

「もう、結構──」

安座真が、イブリスベールの言葉を遮さえぎって言った。

「私を告発したければ、正規の手続きに従ってやればいい。だが、この場の作戦指揮官は私だ。今は私の命令に従ってもらおう、斐ひ川かわ攻こう魔ま官かん──抵抗するなら、全員拘束させてもらうだけだ」

たとえ本心では安座真を疑っていたとしても、上官の命令は絶対だ。安座真の指示に従って、周囲の自衛官が志緒たちに一斉に自動小銃を向けてくる。

志緒は奥歯を軋きしませながら、構えていた洋よう弓きゆうを静かに下ろした。ここで下へ手たに抵抗すれば、負傷した牙が城じようたちまで巻きこんでしまう。そうなることを恐れたのだ。が、

「人間ごときがこの俺おれを拘束する、か。悪くない冗談だ。貴き様さまには、騎き士しよりも道化のほうが似合いだぞ」

イブリスベールが肩を揺らして笑い出す。

安あ座ざ真まも自ら拳けん銃じゆうを抜いて、その銃口を吸血鬼の王子に向けた。

特殊攻こう魔ま部隊が使用する拳銃の弾は、おそらく対魔族用の銀イリジウム合金弾だ。直撃すれば吸血鬼とて無事では済まない。それでもイブリスベールは哄こう笑しようをやめない。

「あなたも動かないでもらいましょう。それとも〝戦せん王おう領りよう域いき〟の吸血鬼が、日本の自衛官を相手に攻撃を仕掛けますか？」

安座真の警告を聞いたイブリスベールが、ほう、と興味深そうに眉まゆを上げる。

「語るに落ちたな、道化。何なに故ゆえ、この俺おれを〝戦王領域〟の者だと思った？」

「……それは……」

自らの失策に気づいたように、安座真が言葉を濁にごらせる。彼の構えた拳銃が震ふるえた。

志し緒おは半なかば呆ぼう然ぜんと、安座真の腕に巻かれた包帯を見つめている。

「この俺がディミトリエ・ヴァトラーと共にいたからか？　あの派手好きの〝蛇へび遣つかい〟めと違って、この国には、イブリスベール・アズィーズの顔を知る者は少ないからな。勘違いするのも無理はない――が、そもそも、なぜ貴様が、俺とヴァトラーが一緒にいたことを知っている？」

イブリスベールが笑みを深くする。

「あの場面を目撃したのは、こやつらを除けばただ一人──咎神カインの騎き士しだけだぞ、聖せい殲せん派はよ？　貴様に傷を刻んだのが誰だれか、もう一度、思い出させてやろうか？」

「く……」

　安座真がはっきりと表情を歪ゆがめた。彼の手が無意識に腕の包帯をなぞる。

　それはイブリスベールの眷けん獣じゆうによって、彼が受けた傷跡だった。咎きゆう神しんの騎士と安座真が同一人物であることを示す動かぬ証拠だ。

「最後の警告だ、斐ひ川かわ攻魔官。武器を捨てて投降したまえ」

　安座真が頬ほおを引き攣つらせたまま、志緒に命じた。

　その命令を否定したのは、思いがけない人物の声だった。

『──その必要はないぞ、斐川志緒』

　か細い少女のような頼りない声が、安座真の背後にいた自衛官から放たれる。同時に周囲の自衛官たちが、一斉に安座真に自動小銃を向けた。

「──っ!?」

『なぜなら、その命令は無効だからよ。安座真元三佐──其方そなたはたった今、解任された。ほかの聖殲派の一党とともにな』

「霊れい糸しによる人体の一斉操作……闇くらき白しろ奈なか！」

　安あ座ざ真まの表情から余裕が消える。

　獅し子し王おう機き関かん三さん聖せい、闇白奈の〝神は女王を護り給うテオクラテイア〟──

　不可視の霊れい糸しが上空より無数に降りそそぎ、数十人の自衛官たちを糸繰り人形マリオネツトのように無む慈じ悲ひに支配している。

『我ら獅子王機関を利用した気でいたか、安座真達たつ巳み？』

　肉体の支配権を奪われた自衛官たちの口から、一斉に少女の声が流れ出す。

『ならば、それはお互い様よ。儂わしの目的は、神かん縄なわ湖この脅きよう威いを取り除くことに加えてもうひとつ、自衛隊の内部に潜伏する聖せい殲せん派はを燻いぶり出すことにあったのでな』

「龍りゆうをエサにすることで、我々を狩り出すつもりだった──というわけか。やはりおまえたちも黒殻アバロンの中身を知ってたのだな……」

　安座真が、構えていた拳けん銃じゆうを足元に投げ落とす。

　抵抗を諦あきらめたような彼の行動に、白奈が笑う気配があった。

『聖殲派が手に入れられる程度の情報、古いにしえより神かみ緒お多だの社やしろに仕つかえる正統な巫ふ司しが知らぬはずもあるまい。そも、暁あかつき凪なぎ沙さに累るいが及ぶやもしれぬ儀ぎ式しきを緋ひ沙さ乃のが認めるものかよ』

「そうか……だがそれも、今となってはどうでもいいことだ。目的はどうあれ、本物の龍族ドラゴンを囮おとりに使ったのは失敗だったな、獅子王機関……」

　安座真が無表情に呟つぶやいた。

　その瞬しゆん間かん、ぞくり、と本能的な恐怖を覚えて、志し緒おは背後を振り返る。赤い有脚戦車ロボツトタンクの操縦士パイロツトが、外部スピーカーの最大音量で怒ど鳴なった。

『接近警報！　皆の衆、伏せるでござる！』

『──なに!?』

　白奈が操あやつる自衛官たちが、一斉に驚きよう愕がくの相を浮かべた。

　風を切るような咆ほう吼こうとともに、超低空から滑かつ空くうしてきたのは二体の飛龍ワイバーンだ。その片方の背中に跨またがっているのは、作戦本部にいるはずの沖おき山やま観み影かげ一等特尉。迷めい彩さい服ふくを着た彼女の全身が、奇妙な衣装に包

まれていく。銀黒色の魔ま法ほう使つかいのローブに──

「沖山一尉!?　まさか、あなたまで──!?」

　野戦ベッドの上の牙が城じようを庇かばいながら、志緒は思わず絶叫していた。部隊指揮官の安座真だけでなく、彼の補佐である沖山までもが、聖殲派の一員だったのだ。

　動揺する志緒たちの目の前で、飛龍に跳び乗った安座真の姿が遠ざかっていく。

「飛龍ワイバーンが二体とはな……なかなか楽しませてくれる」

　飛び去る安座真たちを見送って、イブリスベールが獰どう猛もうに独ひとりごちた。彼にとっては、安座真の裏切りや獅子王機関との対立もしょせん他ひ人と事ごとだ。

「イブリス、龍りゆうの居場所がわかったわ。古こ城じようも一緒よ」

　有脚戦車ロボツトタンクのハッチから頭を出して、藍あい羽ば浅あさ葱ぎが吸血鬼の王子に告げる。彼女が握にぎっているのは、私物とおぼしきピンクのスマートフォンだ。

「わかった、追うぞ。案内あないしろ、浅あさ葱ぎ」

　そう言ってイブリスベールが戦車の脚によじ登る。有脚戦車ロボツトタンクはその場でくるりと旋せん回かいすると、志し緒おたちを置いて猛スピードで発進した。安あ座ざ真またちを追撃するつもりなのだ。

「唯ゆい里り……」

　その場に取り残されてしまった志緒が、親友の名前をぼそりと呟つぶやく。

　状況から考えて、唯里が龍族ドラゴンの傍そばにいる可能性は高い。このままではおそらく高確率で、彼女と安座真は接触することになるはずだ。

　しかし今の志緒には、唯里を助ける手段が残されていない。

「大丈夫だ。あとはあいつらに任せようぜ」

「暁あかつき牙が城じよう……」

　泣きそうな表情を浮かべる志緒を気き遣づかったのか、牙城が志緒の頭を撫なでてくる。

　負傷している彼の手を振り払うのは簡単だったが、なぜか志緒はそうしなかった。彼の馴なれ馴なれしい掌てのひらから伝わる温ぬくもりに、不思議な安心感を覚えたせいかもしれない。

「よくやったな、志緒ちゃん」

　牙城が、小さな子どもをあやすような口調で言う。

　志緒は無言でうなずきながら、照れたように頬ほおを赤らめた。

5

「……グレンダを引き渡せ、か」

　大柄な自衛官──上うえ柳やなぎ二尉を気け怠だるく見返して、暁古こ城じようは大げさに肩をすくめた。

　羽は波ば唯里は龍族ドラゴンの少女を庇かばったまま、びっくりしたように目を見開いて、会話に割りこんできた古城を見つめる。

「なあ、ひとつ聞かせて欲しいんだが、あんたたち、どうして龍の名前がグレンダだと知ってたんだ？　保護者のこの子だって、さっきようやく教えてもらったばかりだってのに」

　古城が、だろ、と確認するように唯里の目をのぞきこんでくる。

　唯里は唇くちびるを噛かんでうなずいた。グレンダの名前を知っているのは、唯里と、襲おそわれたトラックに乗っていた自衛隊員だけ。上柳が、グレンダの名前を知る機会はなかったはずだ。

「仮に龍族ドラゴンが女の子に変身した──って情報を知ってたとしても、ここにいるのは龍族ドラゴンなんかよりも見た目の怪しい連

中ばかりだぜ。どうやってあんたは本物のグレンダを見分けたんだ？」

　そう言って古城は、オシアナス・ガールズの面々を無遠慮に見回した。

　年齢も国籍も髪の色も違う謎なぞの美女集団。銃器で武装した彼女たちは、全員、グレンダよりもよほど場違いだ。しかも彼女たちが着ているのは、グレンダとお揃そろいの迷めい彩さい柄がらのミリタリージャケット。この中で、迷わずグレンダの正体を見分けることなど不可能に近い。

　そんなことができるとしたら、最初からグレンダの詳細な特徴を知っていた者だけ。つまり黒くろ銀がねの魔ま法ほう使つかいの仲間だけ、ということになる。

「小僧──」

　上うえ柳やなぎが、表情を憤ふん怒ぬに歪ゆがめて古こ城じようを睨にらむ。

「おまえが沖おき山やま一尉の報告にあった第だい四よん真しん祖そか。可能な限り交戦を避けろと言われていたが、この状況ではやむを得んな──」

　ごく自然な何気ない動作で、それでいて誰だれかに合図を送るように、上柳が右手を上げた。

　その瞬しゆん間かん、唯ゆい里りは背中から剣を抜いていた。

　古城の顔面が何者かに狙そ撃げきされて、弾はじけ飛ぶのを唯里はたしかに見たのだ。

　しかし、その事象が現実に発生する前に、唯里の剣が飛来した銃弾を撃うち落とす。

　唯里の未来視。獅し子し王おう機き関かんの剣けん巫なぎは、一瞬先の未来を視みる──

「うおっ!?」

　目の前で飛び散る火花を見て、古城がようやく驚おどろきの声を

洩もらした。

　そのときには雪ゆき菜なが投げ上げた金属製の呪じゆ符ふが、銀色の狼おおかみの姿に変わって、狙撃手へと襲おそいかかっていた。雪菜は、唯里が狙撃を防ぐ未来を視みた上で、更さらに次の行動を起こしていたのだ。相変わらず凄すさまじい才能だと唯里は舌を巻く。

「雪菜ゆつきー！」

「はい、唯里さん！」

　上柳の部下の隊員たちが、一斉に引き金に指をかける。

　しかし彼らの攻撃が、古城たちへと届くことはなかった。二人同時に飛び出した唯里と雪菜が、上柳の部下たちに奇き襲しゆうを仕掛けたからだ。

　包囲陣形をとっていただけに、内側に入られた彼らは脆もろかった。同士討ちを恐れて自由に発砲できない彼らを、唯里と雪菜は、藁わら束たばを薙なぎ払うようにあっさりと倒していく。

　まるで互いの次の動きをすべて知っているような二人の連携に、隊員たちは対応できない。

　剣巫二人の猛攻を浴びて、上柳の部下は瞬またたく間まに数を減らしていった。

「つ、強つえェ……」

古城が啞あ然ぜんとしたようにうめいている。

自衛隊の特殊攻魔部隊の個々の実力は低くない。だが、奇襲に加えて、唯里たちが小娘だという侮あなどりもあったのだろう。満足

な抵抗も出来ないまま、彼らは無力化されていいく。

　それでも最後まで無傷で残った上柳は、さすがというべきだった。

「……神よ、我が神よ、我に報復の力を──」

　装輪装甲車に駆け寄った上柳は、腰のポーチから奇妙な道具を取り出した。それは銀黒色の籠こ手てだった。中世の騎き士しが身につけるものに似たガントレットだ。

　その籠こ手てで上うえ柳やなぎが触れた瞬しゆん間かん、装輪装甲車の輪りん郭かくに変化が起きた。

　金属製の装甲が融とけたように流動し、甲こう虫ちゆうに似た怪物へと姿を変えていく。黒くろ銀がねの魔ま法ほう使つかいが操あやつっていた、人ひと型がたの傀儡ゴーレムにそっくりだ。

「これは……!?」

「雪菜ゆつきー、下がって！」

　戸惑う雪ゆき菜なを押しのけて、唯ゆい里りは前に出る。雪菜の七式突撃降魔機槍シユネーヴアルツアーでは、装甲車の防御は破れない。無機物の破壊は、六式降魔剣・改ローゼンカヴアリエ・プラスの領分だ。

「え!?」

　だが、装甲車を包む黒い膜に触れた瞬しゆん間かん、ガラスが擦こすれ合うような不快な音を鳴らして、唯里の剣は弾はじかれた。やはり最初の傀儡ゴーレムのときと同じだ。六式降魔剣・改ローゼンカヴアリエ・プラスの疑似空間切断が無効化されたのだ。

「しまっ──！」

　体勢を崩くずした唯里の眼前で、かつて装甲車だった怪物が起き上がった。巨大な前まえ肢あしを振り上げて、唯里を踏み潰つぶすべく襲おそってくる。唯里は必死で後方に跳び退のくが、怪物の動きは予想よりも遥はるかに速い。攻撃の射程距離リーチが長すぎる。

「〝龍蛇の水銀アル・メイサ・メルクーリ〟――！」

絶体絶命の唯ゆい里りを救ったのは、古こ城じようが喚よび出した眷けん獣じゆうだった。

絡み合う水銀色の双そう頭とう龍りゆうが、巨大な顎あぎとを広げて銀黒色の甲こう虫ちゆうに襲おそいかかったのだ。が――

「なに!?」

古城が純粋な戸惑いの声を洩もらす。空間そのものを抉えぐり取るはずだった双頭龍の攻撃が、甲虫の装甲に届く前に弾かれる。

激突の衝しよう撃げきで甲虫の巨体は吹き飛ばされたが、その表面はほぼ無傷。古城の眷獣が喰くいきれなかったのだ。黒くろ銀がねの魔ま法ほう使つかいの飛龍ワイバーンと同じ――魔力無効化能力だ。

「伏せてくださーい！」

手詰まりになった古城たちの背後で、突然、軽やかな声がした。

咄とつ嗟さに身を屈かがめた古城の頭上を、なにかが物もの凄すごい勢いで駆け抜けていく。

振り返ると、黄色いベレー帽を被かぶったオシアナス・ガールズの一人が、金属製の筒を担かついでいるのが見えた。対戦車ロケットランチャーだ。

「なっ!?」

戦せん慄りつする唯里たちの眼前で、爆ばく発はつに巻きこまれた甲虫が横転する。

魔力を無効化する黒い膜も、純粋な射撃兵器には効果がない。戦車の正面装甲すら撃ち抜く成型炸さく薬やく弾頭は、甲虫の外がい殻かくを呆あつ気けなく貫通して爆ばく散さんさせた。

「くっ……〝情報〟が……俺おれの〝情報……！」

甲虫の内部から吐き出された上うえ柳やなぎが、ちぎれかけた自分の腕を押さえてもがいている。

　彼の肉体から流れ出しているのは、オイルに似た黒い液体だった。それは青白い閃せん光こうを散らして、地面に落ちる前に虚こ空くうに溶けていく。上柳が身に着けた黒銀色の籠手ガントレツトは、彼の肉体をも人間以外のなにかに変えていたのだ。

「痛みを感じてないのか……？　なんだ、こいつ……！」

「聖せい殲せん派はですわ、第だい四よん真しん祖そ」

　動揺する古城の背後から、白リボンのオシアナス・ガールズが答えてくる。

「聖殲派？」

「過激派テロリストの一種だと思ってください。特殊な魔ま具ぐを使う集団です」

「魔具……！　ゼンフォースの連中が使ってたあれか……！」

　同じく黒リボンの少女の説明に、古城は唸うなった。

「ええ。それも彼らが使う魔具は〝聖殲〟の遺産です」

「粗悪な複製や損傷品ジヤンクが中心ですが、どうぞご用心を――」

「ああ、わかった」

　彼女たちの忠告にうなずいて、まずいな、と古城は口の中で呟つぶやく。

　体内に魔具を埋めこんだ兵士とは、古城たちも前に戦ったことがある。魔義化歩兵ソーサラスソルジヤーと呼ばれる彼らは、並の魔族を圧倒するほどの不死身さと戦せん闘とう力りよくを手に入れていた。

　機械を変容させて傀儡ゴーレムを生み出す上うえ柳やなぎの魔ま具ぐは、その魔義化歩兵ソーサラスソルジヤーすら凌しのぐほどに凶悪だ。たとえ古こ城じようが眷けん獣じゆうを喚よび出しても、生なま半はん可かな攻撃では通じない。だからといって、魔具の魔力無効化能力を上回るほどの攻撃を仕掛けたら、確実に上柳を殺してしまうだろう。

ただでさえ制御の難しい古城の眷獣とは、どうにも相性が悪い敵だった。

「くそ……許さん……許さんぞ、貴様ら……！」

「なに……!?」

逡しゆん巡じゆんする古城たちの目の前で、上柳が再び装輪装甲車に近づいた。残っていた二台の装甲車を融ゆう合ごうさせて、彼は新たな傀儡ゴーレムを生み出そうとしている。攻撃力を犠ぎ牲せいにして、そのぶん防御を強化したのだろう。古代の鎧竜アンキロサウルスに似た重装甲の爬は虫ちゆう類るいだ。

オシアナス・ガールズの黄色が、再び対戦車ロケットを発射した。残る四人も、それぞれ対物ライフルや無反動砲を撃うちまくる。どれもが並の魔ま獣じゆうなら一撃で仕留められる強力な武器だ。

しかし上柳の鎧竜は、その攻撃を平然と受け止めた。

「あいつ……装甲車の頑がん丈じようさをそのまま引き継いでるってことか……」

古城は、上柳が口にしていた〝情報〟という言葉を思い出す。

あの魔具は、単に機械を傀儡ゴーレムに変える道具ではないのかもしれない、と古城は感じた。上柳が生み出した傀儡ゴーレムは、装甲車と同じ性質と能力―すなわち〝情報〟を与えられて生み出された新たな生物だ。

工業製品を生物へと変える魔具。機械と生命の等価交換。それは人間が扱える道具の領域を超えている。そんなことが可能なのは神の持ち物だけだ。

それが聖せい殲せん派はが使う銀黒色の武器―咎きゆう神しんの魔具の正体だ。上柳の肉体が、人じん外がいのものへと変貌しつつあるのは、いわば神の魔具を使った代償ということか。

このまま魔具を使い続ければ、彼はいずれ人ではいられなくなるはず―

「先輩」

雪ゆき菜なが、見慣れた構えを取りながら古城を見た。

唯ゆい里りが怪け訝げんな表情を浮かべた。後輩の剣けん巫なぎがなにをしようとしているのか、すぐには理解できなかったのだ。

「姫柊ひめらぎ？　そうか――」

しかし古城は、雪菜と目を合わせた一いつ瞬しゆんに、彼女を意図をすべて悟っていた。

タイミングを計る合図すら不要だった。巨大な鎧竜が旋せん回かいする隙すきをついて、二人同時に攻撃を仕掛ける。

「――〝雪せつ霞か狼ろう〟！」

雪菜の槍やりが、鎧竜の表面を覆おおう漆しつ黒こくの薄はく膜まくを消滅させる。

それもやはり闇やみ誓せい書しよのときと同じだった。ありとあらゆる結界を斬きり裂く〝雪せつ霞か狼ろう〟の神格振動波は、魔力を無効化するフィールドそのものをも無効化するのだ。

『なに!?』

肉体の大半を鎧竜と融ゆう合ごうさせた上うえ柳やなぎが、愕がく然ぜんとうめいて動きを止める。

そんな上柳の眼前に、新たな眷けん獣じゆうが出現した。陽炎かげろうにも似た濃のう密みつな大気の歪ゆがみ。暴風と振動そのものを実体化させた緋ひ色いろの双角獣バイコーンだ。

「疾きくや在がれれ――〝双角の深緋アルナスル・ミニウム〟！」

宿やど主ぬしである古こ城じようの戦意に共鳴して、双角獣バイコーンが吼ほえた。

巨大なビルをも瓦が解かいさせる超振動の蹄ひづめが、鎧竜の甲こう羅らを粉砕する。第だい四よん真しん祖その眷獣の力の前には、装甲車二台分の防御など、脆もろい砂糖細工も同然だ。

原形も留とどめぬほどに傀儡ゴーレムは粉々に砕け散り、金属と融合した姿の上柳だけが地面に投げ出される。

「ぐ……魔ま族ぞくごときに、この俺おれが……」

　オイルに似た液体をこぼしながら、上柳が憎々しげに古城を睨にらんだ。半なかば機械と融とけ合った彼の肉体は、もはや身動きもままならない有様だ。彼がいかに憎ぞう悪おをつのらせようと、これ以上の戦闘は無理だろう。

　古城はやれやれと首を振りながら、双角獣バイコーンの召しよう喚かんを解除しようとする。

「―古城くん！」

　その直後、唯ゆい里りが鋭い声で古城に警告した。

　唯里が見つめていたのは、双角獣バイコーンの頭上だ。

　銀黒色の翼つばさを広げた飛龍ワイバーンが、上空から古城の眷獣を狙ねらって急降下してくる。

　漆しつ黒こくのオーロラをまとった飛龍ワイバーンの激突に、緋色の双角獣バイコーンが大きくよろめいた。古城の眷獣にダメージはない。だが、魔力を無効化する黒いヴェールのせいで、自由な動きは封じられる。飛龍ワイバーンの背中に跨またがっているのは、最初に唯里たちを襲おそっていた黒くろ銀がねの魔法使いだ。

「さっきのコスプレ女か！」

「いえ、先輩！　もう一人来ます―！」

「え……!?」

　雪菜が指摘したとおり、飛来した飛龍ワイバーンは二体いた。最初の飛龍ワイバーンが古城の眷獣を抑えているうちに、地面スレスレを滑かつ空くうしてきたもう一体が、上柳の真横に着地する。二体目の背中に乗っているのは、銀黒色の騎き士し鎧よろいをまとった長身の男だ。

「安あ座ざ真ま三佐！」

　黒銀の騎士を崇あがめるような姿勢で、上柳が歓喜の声を上げた。

　その言葉に古城たちは衝しよう撃げきを受ける。安座真とは、上柳が唯里との交渉の中で口にした、自衛隊の指揮官の名前だったからだ。

「増援感謝します、三佐！　自分に〝情報〟を、もっと強力な〝情報〟を――」

　古城たちが困惑の視線を向ける中、上柳は、すがるように黒銀の騎士に手を伸ばす。

　騎き士し鎧よろいで全身を覆おおった安あ座ざ真まは、そんな上うえ柳やなぎを無表情に見下ろした。

「グレンダの足止め、ご苦労だった、上柳二尉――」

　感情のこもらない平へい坦たんな声でそう言って、手に持っていた騎槍ランスを上柳に向ける。そして彼は研とぎ澄すまされた騎槍ランスの先端を、無造作に上柳に突き入れた。

「え？」

　自分の胸に突き刺さった騎槍ランスを、上柳は間の抜けた表情で見下ろした。

　そんな彼の全身が、光り輝かがやく無数の光点ドツトに変わり、騎槍ランスの中に吸い上げられていく。

「三……佐？　なぜ……」

「不完全なきみの魔ま具ぐの力では、ここまでだ。今、楽にしてやる――」

　安座真の言葉を最後まで聞くことなく、上柳の姿は消滅した。彼らが言うところの〝情報〟へと変換されて、安座真の騎槍ランスに喰くわれたのだ。

「あ……あ……」

　驚きよう愕がくに声を失う古こ城じようたちの背後で、鋼はがね色いろの髪の少女が悲鳴を上げた。

「あああああああああああ――――っ！」

「グレンダ!?」

　激しく取り乱すグレンダを、唯ゆい里りが必死で落ち着かせようとする。

　唯里一人では危険だと判断して、古城と雪ゆき菜なも、慌あわてて彼女たちのほうに駆け寄った。

「落ち着け、グレンダ！　いったいなにが――うおおおっ!?」

　古城が、彼女の肩に手をかけようとした瞬しゆん間かん、凄すさまじい衝しよう撃げきが古城を襲おそった。

　身に着けていたミリタリージャケットを引き裂いて、グレンダの肉体がいきなり何十倍もの質量へと膨ふくれあがったのだ。龍族ドラゴン化だ。

「せ、先輩！」

「つかまれ、姫柊ひめらぎ！」

　グレンダの背中から振り落とされそうになった雪菜に、古城は必死で手を伸ばす。

　ほっそりとした雪菜の手首を、どうにか握にぎり締しめた瞬間、内臓を引きずり出されるような強烈な加速が古城たちを襲ってきた。

　魔力を帯びた巨大な翼つばさが、古城たちの頭上で大きく羽ばたいた。物理法則を無視した強烈な速度で、龍族ドラゴン化したグレンダが空へと舞い上がる。

「いやあああ――っ、グレンダの馬ば鹿かぁ――！」

　龍りゆうの前脚に握にぎられた唯里が、半泣きになって絶叫している。

　叩たたきつけてくる暴風に息を詰まらせながら、古城は、遠ざかる地上を呆ぼう然ぜんと眺めていた。

幕間 iv

閉鎖された季節外れのキャンプ場に、ディミトリエ・ヴァトラーは立っていた。

彼の周囲に広がっているのは、凄すさまじい破壊の痕こん跡せきだ。装甲車などの現代兵器を素材に生み出した奇妙な傀儡ゴーレムの残ざん骸がいが無数に転がり、うっすらと白はく煙えんを噴き上げている。

聖せい殲せん派はの支援部隊が陣取っていた野や営えい地ちを、ヴァトラーがたった一人で急きゆう襲しゆうしたのだ。今ごろはキラ・レーベデフやトビアス・ジャガンも、それぞれほかの隠かくれ家がを潰つぶしているはずだ。

結果的に獅し子し王おう機き関かんに協力するような形になったわけだが、それが目的だったわけではない。ヴァトラーが聖殲派を襲しゆう撃げきしたのには、もちろん彼なりの理由があった。

特殊な魔ま具ぐを使う敵との戦せん闘とう、というのも、もちろん理由のひとつだ。

結局それは、予想どおりの一方的な蹂じゆう躙りんになってしまったわけだが──

「お愉たのしみだったようですね、アルデアル公」

自らが破壊した傀儡ゴーレムの残骸を調べていたヴァトラーに、涼やかな声が問いかけてくる。アルディギア王国の美貌の王女──ラ・フォリア・リハヴァインだ。

「これはこれは。王女、直じき々じきのお出ましとは。目的は、彼らの魔具ですか？」

芝居がかった口調で答えながら、ヴァトラーはその場に屈かがみこんだ。

主君に仕つかえる忠実な騎き士しを真ま似ねて、ラ・フォリアの前になにかを差し出す。それは銀黒色の杖だった。半なかばから砕けた古い杖ワンドだ。

「よろしければ差し上げましょう。再会の記念として、どうぞ」

「異ノ境ドの魔具……やはり複製品レプリカでしたか」

吸血鬼の貴族の手から折れた杖ワンドを受け取って、ラ・フォリアはそれを興味深そうに眺めた。

ヴァトラーはコートの裾すそを払って、何事もなかったかのように立ち上がる。

「すでに機能は停止しているよ。それでも解析すればなにかの役には立つかな」

「そうですね。感謝します、ディミトリエ・ヴァトラー」

背後に控えていた護ご衛えいを呼びつけて、ラ・フォリアは折れた杖ワンドを彼女に手渡した。

そして王女は、あら、と意外そうに目を細める。燃え残った大型トレーラーの陰に、聖殲派の生存者を見つけたのだ。

濃緑色の作業服を着た整備員らしき男だった。しかし彼の半身は、すでにトレーラーの車体と融ゆう合ごうして、人間のものではなくなっている。ひび割れた肉体の表面からは、オイル状の黒い液体が流れ出し、その滴しずくは光となって消滅を続けていた。

このまま放っておいても彼は死ぬ──否いな、消滅することになるだろう。

こちら側の世界から、跡あと形かたもなく。それが異ノ境ドの魔具に手を出した者の末路なのだ。

「一国の王女の身でありながら薄うす汚ぎたない魔族と馴なれ合うか、雌め狐ぎつねめ！」

最後の力を振り絞って、男がラ・フォリアに呪じゆ詛その言葉を吐く。

しかし王女は、男を哀あわれむように悠ゆう然ぜんと首を振り、

「真しんに穢けがれた魂こころの持ち主は、私欲や怨えん恨こんのために殺さつ戮りくと破壊を望むあなた方でしょうに」

「ほざくな、雌め狐ぎつね……我らの望みは、世界を真にあるべき姿に戻すことだ！　貴き様さまらのような化け物の存在しない、清浄にして平等な世界にな！」

男が歯を剝むいて荒々しく吼ほえた。

その言葉を最後まで聞き終えて、ラ・フォリアは静かな微笑ほほえみを浮かべる。

凍いてつく氷河のように美しくも冷酷な微笑みを──

「大地を血で汚けがし、世界から追放された咎きゆう神しんの力をもって、清浄で平等な世界を実現できると本気で思っているのなら、ずいぶんとおめでたいことですね」

「なに……!?」

「ご安心を。あなたをこのまま死なせはしません。あなたが知るすべての情報を、わたしたちに余さず伝えるまでは──」

「ま、待て……なにを……やめろ……やめ……！」

恐怖に歪ゆがむ男の顔が、そのままの姿で凍りついたように動きを止めた。

ラ・フォリアが右手に嵌はめた指輪が、透きとおるような青い輝かがやきを放っている。

魔ま導どう技術大国であるアルディギアが誇る高こう位いの凍結魔術だ。規模は小さく、威力も低いが、それはかつて模造天使エンジエル・フオウと化した叶かな瀬せ夏か音のんが使ったものと同種の能力だった。異ノ境ドの魔ま具ぐによって引き起こされた男の肉体の崩ほう壊かい現象も、今は完全に静止している。

その一部始終を眺めていたヴァトラーもまた、満足げな微笑みを浮かべていた。

稀き代だいの戦闘狂バトルマニアとして知られた彼にとって、他者の価値とは、すなわち敵としての手て強ごわさ、という一点で決定される。アルディギアの王女が見せた力の片へん鱗りんは、ヴァトラーを満足させるに足るものだった。そのことが彼を上じよう機き嫌げんにさせている。

そんなヴァトラーが向けてくる歪いびつな好意を知りながら、ラ・フォリアは素知らぬ顔で、残されたトレーラーを見つめていた。対地攻撃ヘリを整備するための専用トレーラーだ。

しかし一緒に運ばれてきたはずの、二機の攻撃ヘリの姿はここにはない。

「なるほど……戦せん闘とうヘリの〝情報〟を供く物もつに捧ささげることで、飛龍ワイバーンを生み出したのですね。これが咎神の魔具本来の力ですか」

らしいね、とヴァトラーが首しゆ肯こうする。

「しかも彼らは、ある程度まで、異ノ境ドによる侵しん蝕しよくを自由に操あやつれる。アズィーズ王子殿でん下かのお力添えでね、貴重なデータが手に入ったよ」

「異ノ境ドの侵蝕……やはり吸血鬼にとっては厄やつ介かいな力なのですか？」

唇くちびるに手を当てて王女が訊きく。ヴァトラーは愉たのしげに肩をすくめて、

「古こ城じようのことが心配かい？」

「そうですね、もちろん。いずれ彼はわたくしの伴はん侶りよになる方ですから」

冗談とも本気ともつかぬ澄ました口調で、ラ・フォリアが答えた。

王女の護ご衛えいの女性騎き士しが苦悩の表情で額ひたいを押さえ、ヴァトラーはますます愉快そうに笑う。

「それに気がかりなことはもうひとつ――」

「カインの巫み女こ、か」

　王女の言葉を引き継いで、ヴァトラーが言う。

　うなずくラ・フォリアの表情からは、いつの間にか微笑が消えていた。

「ええ。彼女がこの地にいることを知りながら、咎きゆう神しんの騎き士しは興味を示さなかったそうですね。それどころか、彼女を戦せん闘とうに巻きこむことを避けようとすらしなかった」

「考えられる可能性はふたつだね」

　ヴァトラーは気取った仕草で指を二本立て、それをすぐに一本に変えた。

「彼らはカインの巫女の存在を知らなかったのかもしれない。聖せい殲せん派はを名乗るにはあまりにもお粗末だが、絶対にあり得ないとは言い切れない」

「もうひとつの可能性とは？」

　優美に首を傾かしげて、ラ・フォリアが訊きく。

　二本目の指を折りながら、一いつ瞬しゆんだけ獰どう猛もうな笑みを浮かべてヴァトラーは続けた。

「カインの巫女はもう一人いた」

「まさか──」

　ラ・フォリアが声を震ふるわせる。

　ヴァトラーは動揺する王女を見返して満足げに笑うと、両腕を広げて空を見上げた。

「いいね……愉たのしくなってきたじゃないか。やはり混乱に愛されているな、あの島は──」

第五章 果境からの帰還
Return From The Farthest World

1

魔ま力りよくを帯びた翼つばさがはためいて、巨大な龍族ドラゴンを飛ひ翔しようさせていく。

絶え間ない振動と暴風に翻ほん弄ろうされながら、古こ城じようは龍りゆうの首筋にしがみついていた。

「グレンダ、落ち着け！　どこに行く気だ┉!?」

必死に叫ぶ古城の声は、興奮したグレンダの耳には届かない。恐怖に駆られた龍族ドラゴンの少女は、行く当てもなくただ闇やみ雲くもに、黒くろ銀がねの騎き士しから遠く離はなれようとしているのだ。

「うおっ┉！」

気流にあおられてグレンダの身体からだが激しく揺れた。

ぐらり、と大きくバランスを崩くずして、古城の身体が滑すべり落ちる。龍の背びれをつかもうと、無意識に右手を伸ばした古城は、手て応ごたえのなさに愕がく然ぜんとした。感覚を失った右手が動かない。〝静寂破りペーパーノイズ〟に貫かれた傷が原因だ。

やばい┉と頼りない浮遊感に襲おそわれながら、古城はうめいた。落下する┉

そう覚悟した瞬間、古城の右腕が誰だれかにつかまれた。

「先輩！」

右手に銀色の槍やりを握にぎった雪ゆき菜なが、転落しかけた古城の身体を、左手だけで支えていた。呪じゆ力りよくで筋力を無理やり強化して、そのまま強引に引っ張り上げてくる。

「姫柊ひめらぎ！　悪い、助かった！」

カエルっぽい姿勢で四よつん這ばいになって、再び龍の肩に張り

つく古城。互いに片腕が使えない者同士、雪菜と密着することでどうにか姿勢を安定させる。

「しっかりつかまってください！」

「あ、ああ。いや、だけど──」

　頬ほおに触れる慣れない感触に、古城は逡しゆん巡じゆんしながら言い淀よどみ、

「なんですか？」

「いや、姫柊の胸が思いきり顔に当たるんで──」

　ちょっとズレてくれないか、と言いかけた古城の横っ面つらを、強烈な肘ひじ打うちが襲ってきた。

「ば、馬ば鹿か、落ちる落ちる落ちる落ちる──！」

「先輩がいやらしいことを言うからです！」

　再び落下しかけた古城に、雪菜が渋しぶ々しぶと手を伸ばしてくる。

　古城は頬を腫はらしたまま、やれやれと首を振り、

「そうだ……あの唯ゆい里りって子は？」

　まだ彼女の苗みよう字じを聞いてなかったな、と思いつつ、近くにいるはずの唯里を探した。

　龍族ドラゴン化したグレンダの肩越しに、おそるおそる顔を出すと、龍の前まえ肢あしにしがみついている唯ゆい里りの姿が目に入る。

　彼女の制服のスカートは上昇気流に乗って舞い上がり、タイツに覆おおわれた形のいい腿ももの付け根が見事に丸見えになっていた。だからといって手で隠すこともできずに、

「み、見ないでえ──！」

　唯里が涙目で古こ城じようたちにそう訴えてくる。

「……なんとか大丈夫そうだな」

　彼女の無事を確認して、古城はそっと姿勢を戻した。唯里もいろいろ大変だが、差し迫った命の危険はなさそうだ。

　しかし安あん堵どする古城のすぐ背後で、雪ゆき菜なが身を硬くする気配があった。

「まだです、先輩！」

「え……？」

　古城が状況を把は握あくする前に、龍りゆうの巨体が衝しよう撃げきで震ふるえた。

　苦痛に耐えるように身体からだをうねらせながら、龍族ドラゴン化したグレンダが悲痛な咆ほう吼こうを上げる。

　そんなグレンダのすぐ傍そばを、漆しつ黒こくの球体が駆け抜けた。

　銃撃だ――と古城は気づく。後方から古城たちを追ってきた誰だれかが、グレンダに攻撃を仕掛けているのだ。

「さっきの飛龍ワイバーンか……！」

　振り返った古城の視界に映ったのは、銀ぎん黒こく色しよくの飛龍ワイバーンだった。その背中に跨またがっているのは、騎き士し鎧よろいの男だ。少し遅れて、女おんな魔ま法ほう使つかいの乗ったもう一体の飛龍ワイバーンもついてくる。

　騎士鎧の男が騎槍ランスを構えた。その騎槍ランスの形が変わっていることに、古城は気づく。今の姿は、槍やりというよりも巨大なライフルに近い。あの騎槍ランスは接触した機械の〝情報〟を基もとに、自らの姿を変えるタイプの武器なのだ。

　騎槍ランスから放たれた銃弾は、漆黒の球体だった。

　古城たちを乗せたグレンダは、その攻撃をよけられない。全身に何発もの銃撃を喰くらって、龍族ドラゴンの少女が吼ほえる。

「グレンダさん――!?」

雪菜がグレンダを気き遣づかうように懸けん命めいに呼びかける。その効果があったのか、グレンダがパニックに陥おちいって、古城たちを振り落とすような最悪の事態は免まぬがれていた。だが、このまま攻撃を受け続ければ、いずれグレンダの体力が尽きる。

「悪い、姫柊ひめらぎ──少し支えててくれ」

そう言って古城は、不安定な龍の背中の上に立ち上がる。

古城がやろうとしていることに気づいて、雪菜が頬ほおを強こわ張ばらせた。

「先輩、駄だ目めです。眷けん獣じゆうを使ったら、傷が、また──」

「出し惜しみしてる場合じゃねえだろ──疾きくや在がれれ、〝双角の深緋アルナスル・ミニウム〟！」

反動と、右手を襲おそう激痛に耐えながら、古こ城じようは眷けん獣じゆうを召しよう喚かんした。

大気をねじまげて出現した緋ひ色いろの双角獣バイコーンが、飛ひ翔しようする飛龍ワイバーンに向かって、砲弾にも似た衝しよう撃げき波はの咆ほう吼こうを放つ。

しかし騎き士し鎧よろいの男──安あ座ざ真まは、古城の反撃を予測していたのか、取り乱すことなく漆しつ黒こくのマントを広げて、巨大な防御膜を展開した。

緋色の双角獣バイコーンの攻撃は、実際には、衝撃波の姿をした魔ま力りよくの塊かたまりだ。だからこそ生み出される強大な破壊力が、今回ばかりは裏目に出た。魔力による直接攻撃は、黒くろ銀がねの騎き士しが生み出す防御障しよう壁へきで無効化されるのだ。

「やっぱり眷獣の攻撃は効かないのか……だったら！」

古城は開き直ったような笑みを浮かべると、緋色の双角獣バイコーンを上昇させた。

眷獣の魔力を直撃させても、あの飛龍ワイバーンは倒せない。だ

が、一方で彼らがまとう漆黒のオーロラは、オシアナス・ガールズが放った対戦車ロケットを防げなかった。魔力と無関係な攻撃ならば、彼らにダメージを与えられるということだ。

　眼下を舞まう二体の飛龍ワイバーン目がけて、古城は眷獣を急降下させた。

　同時に眷獣の制御を完全に放棄して、濃のう縮しゆくされた魔力を無制限に解放する。

　実体化を保てなくなった双角獣バイコーンは、巨大な振動と暴風の塊に変わった。それは荒れ狂う無数の竜たつ巻まきと化して、周囲の大気を攪かく拌はんしていく。

　急激な気圧の変動に、鼓こ膜まくが軋きしんだ。

　地表を覆おおう木々が根こそぎ引き抜かれ、大量の土ど砂しやとともに宙を舞った。

　まさに天災そのもの──あるいは、それ以上の災さい厄やくだ。

　絨じゆう毯たん爆ばく撃げきのような圧倒的な破壊。山の稜りよう線せんが削られ、岩肌は崩ほう落らくし、周囲の地形が見る間に変わっていく。

　都市ひとつに匹敵する広大な面積が、暴風に抉えぐられ掘り起こされていた。山奥の無人地帯でなければ、数万人規模の犠ぎ牲せい者しやが出ていたはずだ。

「な、なんてことを……」

　雪ゆき菜なは顔を蒼そう白はくにして、眷獣の暴走を見つめている。

　久々に目まの当たりにした第だい四よん真しん祖その眷獣本来の威力に、古城自身、言葉を失っていた。

　もしも絃いと神がみ島じまの上空でこの力を解放していたら、今ごろあの島は、跡あと形かたもなく消滅していたはずだ。迂う闊かつに試さなくてよかったと、心の底から安あん堵どする。

　この荒れ狂う気流と暴風の中で、飛龍ワイバーンが飛行を続けら

れるはずもなかった。たとえ魔力の直撃は無効化できても、攪拌された大気まではどうすることもできないからだ。

　安座真たちが追跡を諦あきらめたことを確認して、古城は眷獣の召喚を解除した。

　しかし一度発生してしまった竜巻は、古城の意思ではどうすることもできない。

　山肌が抉られ、次々と発生する土ど砂しや崩くずれを、古城はしばらく呆ぼう然ぜんと眺めていた。横顔に突き刺さってくる、雪ゆき菜なの責めるような視線が痛い。と──

「グレンダ……？」

　暴風圏外にいたはずの龍りゆうの身体からだが大きく傾いた。

　負傷の影えい響きようか、あるいは力尽きたのか、グレンダが意識を失ったのだ。

　龍の翼つばさは羽ばたく力を失って、巨体を支えることができなくなっている。

　背中に乗っている古こ城じようたちもろとも、グレンダは地上へと落ちていく。

「きゃあああああああ──っ！」

　死を覚悟した唯ゆい里りの絶叫が、灰色の冬の空にいつまでも響ひびき渡っていた。

2

　第だい四よん真しん祖その噂うわさが聞こえてきたのは、夏になる少し前のことだった。

　不死にして不滅。一切の血けつ族ぞく同どう胞ほうを持たず、支

配を望まず、ただ災さい厄やくの化け身しんたる十二の眷けん獣じゆうを従え、人の血を啜すすり、殺さつ戮りくし、破壊する―世界の理ことわりから外れた冷酷非常な吸血鬼。

その怪物がこの国のどこかに出現し、獅し子し王おう機き関かんの誰だれかが、彼を抹まつ殺さつするために派遣されるのではないか。全寮制の名門女子校にして獅子王機関の養成施設でもある〝高たか神がみの杜もり〟の生徒の間では、そんな情報が瞬またたく間まに広がって、彼女たちを恐怖のどん底に突き落としていた。

とはいえ、しょせん根拠のない無責任な噂話だ。急速に広がったのと同じ勢いでその話題は風化して、忘却の彼方かなたに追いやられるまで、そう長くはかからなかった。

そんな中で、羽は波ば唯里は、思いがけない人物の口から第四真祖の話を聞かされる。

獅子王機関三さん聖せい、閑しずか古こ詠よみである。

第四真祖の正体が、絃いと神がみ島じまに住む高校生であること。そして唯里と同い年であること。彼の監視役として派遣される剣けん巫なぎの候補に、唯里の名前が挙がっていること―

そのことに唯里は驚おどろき、そして恐怖した。

一方で、かすかな期待もあった。

つまり同い年の男子であるところの第四真祖を監視しているうちに、彼とロマンティックな関係になってしまうのではないか、という甘い期待だ。寮で同室の斐ひ川かわ志し緒お以外は知らないことだが、唯里の愛読書は少女向けのベタな恋愛マンガであった。

だが、結局のところ、唯里が第四真祖の監視役に選ばれることはなかった。

その理由はごく単純だ。ひとつは唯里が七式突撃降魔機槍シユネーヴアルツアーを上う手まく扱えなかったこと。獅子王機関の秘ひ奥おう兵器である七式突撃降魔機槍シユネーヴアルツアーは、使用者に合わせた調整チユーニングができない。そのため使いこなせるかどうかは、使い手の能力レベルや技量スキルではなく、武器との相性に左右される、という話だった。事実、閑古詠ですら、七式突撃降魔機槍シユネーヴアルツアーの本来の能力を完全に引き出す

ことはできなかったらしい。

　そして唯ゆい里りが監視役に選ばれなかったもうひとつの理由は、唯里が孤児ではなかったことだ。

　高たか神がみの杜もりで暮らす少女たちの中ではめずらしく、唯里の家族は存命だった。両親は獅し子し王おう機き関かんの事務員で、歳としの近い弟もいる。

　もちろん唯里とて、親の七光りで剣けん巫なぎになったつもりはない。だが、唯里の家族に配慮して、第だい四よん真しん祖その監視役などという危険な任務から外された、というのは、考えられることだった。

　だから唯里は雪ゆき菜なに対して、今も負い目を感じている。

　自分がもう少し上う手まく七式突撃降魔機槍シユネーヴアルツアーを使えていたら。

　そして彼女にも自分と同じように家族がいたなら──

　第四真祖の監視という危険任務に就ついていたのは、唯里のほうだったかもしれないのだから。

「気がついたか、えーと……唯里さん……」

　ぼんやりと輝かがやく薪まきストーブの炎に照らされながら、その第四真祖が声をかけてくる。

　吸血鬼の真祖というイメージから思い描いていた端たん整せいな二枚目にはほど遠いが、それなりに魅力的といえなくもない顔立ちの少年だ。見知らぬログハウス風の建物の床に、彼は、脚を投げ出して座っている。

「古こ城じようくん？　ここは？　グレンダは……!?」

　あやふやな記憶を辿たどりながら、唯里はゆっくりと上体を起こした。

　その瞬しゆん間かん、左腕に鈍い痛みが走る。飛龍ワイバーンに

乗った騎き士しの攻撃で受けた傷だった。グレンダが庇かばってくれたお陰で、たいした負傷ではなかったが、しばらく左手で剣を振るのは無理だろう。

あのあと、龍族ドラゴン化したグレンダの腕につかまれたま、地上に向かって落下したのは覚えている。そして地表に激突する直前、唯里の視界は銀色の霧きりに覆おおわれた。

正確には、自分自身が霧に変わったような異様な感覚に襲おそわれたのだ。

その凄すさまじい濃のう霧むの中で、巨大な甲こう殻かく獣じゆうの姿を見たような気がした。もしかしたら、あれは第四真祖の眷けん獣じゆうだったのかもしれない。

自らの肉体を霧に変化させて移動するのは、多くの吸血鬼が持つ特殊能力だが、本人だけでなく周囲の物体すべてを、まとめて霧に変える現象など聞いたこともない。今回はどうにか元に戻れたからよかったが、もし彼が眷獣の制御に失敗していたらと思うと正直ゾッとした。

ともあれ、唯里とグレンダは、またしても古城に救われたわけだ。

まずは彼に礼を言わなければ、と口を開きかけ、唯里は古城が困ったように顔を背けていることに気づいた。

「あー……悪い。隠かくしてもらえると……助かる」

決して目を合わせようとしないまま、古城がボソボソと小声で言った。

「きゃ……あああああああっ！」

その瞬しゆん間かん、唯ゆい里りは自分が制服を着ていないことに気づいて悲鳴を上げた。幸い下着は身に着けたままだが、そんなことはなんの救いにもならなかった。男子の前で堂々と肌を晒さらすなど、もちろん初めての経験だ。弟の前でもこんな姿は見せたことがない。

「──唯里さんになにをやってるんですか、先輩!?」

唯里の悲鳴を聞きつけた雪ゆき菜なが、バタバタとログハウスの奥から駆けつけてきて古こ城じようを睨にらむ。

下着姿の唯里を見て、おおよその事情を理解したのか、雪菜は深々と溜ため息いきをついて、

「本当に油断も隙すきもない吸血鬼ヒトですね……」

「今のは俺おれ一人のせいじゃなかっただろ！」

古城が、ふて腐れたように頬ほお杖づえをついて反論する。実際、彼の言うとおりだったので、唯里は頼りない笑みを浮かべるだけだ。

「動けますか、唯里さん？　応急処置だけはしておいたんですけど」

包帯を巻いた唯里の左腕を見て、雪菜が心配そうに訊きいてくる。

どうやら唯里の制服を脱がせたのは、彼女だったらしい。

「ありがとう、雪菜ゆつきー。怪け我がは大丈夫。それより、ここは……？」

「登山客向けの山小屋だと思います。自衛隊の封鎖の影えい響きようで、無人になってたみたいです」

「そっか……」

自分の隣となりで寝ているグレンダの無事を確認して、唯里はホッと息を吐いた。

たまたま墜つい落らく地点の近くにあったこの山小屋を見つけて、古城と雪菜は唯里たちを運んできてくれたのだろう。外の明るさから判断して、唯里が意識を失っていたのは、二、三時間といったところか。

「あと少ししたら、浅あさ葱ぎが……俺の友達が迎えに来てくれることになってる。グレンダもまだ動けそうにないし、今はここに隠れてたほうがいいだろ。もうすぐ陽ひも暮れるしな」

「うん、そうだね」

　雪菜に渡された制服を着ながら、唯里は、背中を向けたままの古城に同意した。

　同じ布団の中にいた灰色の髪の少女が身じろぎして、母親に甘える子猫のように、唯里にしがみついてくる。

「ひゅいりー……ひゅいりー……」

「グレンダ、怪我は大丈夫？」

「だー」

　まだ少し寝ぼけているのか、謎なぞの言葉で呼びかけてくるグレンダの髪を唯里は撫なでた。

　オシアナス・ガールズが用意してくれたグレンダの服は、龍族ドラゴン化で再び弾はじけ飛んでしまっている。今の彼女が身に着けているのは、さっきまで暁あかつき古城が来ていた男物の白いパーカーだけだ。

　ぶかぶかのパーカーにくるまれたグレンダの身体からだに目立つ外傷はなく、それを確認して唯ゆい里りは胸を撫なで下ろす。

「で……この子は結局なんなんだ？　安あ座ざ真まに狙ねらわれてる理由はなんだ？」

「それはわたしにもさっぱりで」

　ようやく向き直って訊きいてくる古こ城じように、唯里は頼りなく首を振った。

　だよな、と古城が目に見えて落胆する。狙われている理由がわからなければ、安座真たちの次の行動も読めないし、グレンダを保護するにも限界があるからだ。

　いちおう唯里は、グレンダと出会った前後の状況すべてを古城と雪ゆき菜なに説明したが、二人は困ったような表情を浮かべるだけだった。当事者である唯里にもよくわからない状況を、彼らが理解できるはずもない。

　教えられる情報すべてを伝え終わったところで、訪れたのは短い沈ちん黙もくだけだった。

　その気まずい静せい寂じやくを破ったのは、ぐるぐる、という獣けものの唸うなりのような低い音だ。

　空腹に耐えかねた唯里のお腹なかが鳴った音である。

　考えてみれば唯里は今朝から、なにも口にしていない。非常食のビスケットは、すべてグレンダに奪うばわれてしまった。おまけに気づけば山小屋の中には、いい匂においが漂ただよい始めていた。薪まきストーブの上に載せられた鍋なべの中身が煮えているのだ。

「キッチンに非常食が残っていたので、いちおう温めてみたんですけど」

　控え目な口調で言いながら、雪菜が料理を取り分ける。

　具だくさんの野菜スープに、乾パンとチョコレートバーなどのお菓子類。空腹で倒れそうな身の上には、実に魅力的なごちそうだ。ふと見ればグレンダは寝ぼけたまま、さっそく乾パンに齧かじりついている。

「ありがとう、雪菜ゆつきー。なんだか、助けてもらってばかりだね」

「いえ。唯里さんには、昔から紗さ矢や華かさんがよくお世話になってましたから。恩返しができてよかったです」

「あはは。煌きら坂さかさんは、よく志し緒おちゃんと喧けん嘩かしてたからねー」

　スープを口に運びながら、唯里は懐なつかしい気分で笑う。同学年で同じ舞ま威い媛ひめ候補で、しかもどちらも気が強いこともあって、斐ひ川かわ志緒と煌きら坂さか紗矢華はなにかにつけて張り合うことが多かった。その尻しりぬぐいをさせられるのは、たいてい彼女たちと同室の唯里と雪菜だったのだ。

「そうか……姫柊ひめらぎと唯里さんは子どものころからの知り合いなのか」

　古城が、不思議そうな表情を浮かべて訊いてきた。

　過去の話をするのは苦手なのか、雪菜は少し照れたようにうつむいて、

「そうですね。学年が違ったので、直接お話しする機会はあまりなかったんですけど」

「ていうか、雪菜ゆつきーは誰だれともあまり話さなかったよね。孤高っていうか、小さなころからやたら冷静で、模擬戦のときとか、ちょっと恐こわかったし」

　目の前の綺き麗れいな後輩を見つめて、唯ゆい里りはしみじみと呟つぶやいた。

　それを聞いた雪ゆき菜なが、びっくりしたように目を瞬またたく。

「こ……孤高？　恐こわい？」

「うん。勝ってもにこりともしないし、話しかけても素そっ気けないし。わたしの渾こん身しんのギャグをスルーされたときにはへこんだよー」

「そ、それは試合前で緊張してただけで……」

　雪菜が弱々しく弁解する。が、彼女のその可愛かわいらしい表情に悪戯いたずら心ごころを刺激され、唯里は、ふふふ、と笑いながら続けた。

「やたら真ま面じ目めで几き帳ちよう面めんで、成績も抜群だったしね。なんていうか、もう近寄りがたくて」

「わたし、そんなふうに思われてたんですか……」

　本気でショックを受けている雪菜を見て、唯里は少し反省した。久しぶりに再会しても雪菜の生き真ま面じ目めさは相変わらずだ。そのことが少し微笑ほほえましい。

「あ、でも嫌われてたわけじゃないんだよ。憧あこがれてる後輩も多かったし。そんなだから、雪菜ゆつきーが七式突撃降魔機槍シユネーヴアルツアーをもらって第だい四よん真しん祖その監視役になったって聞いたときには、わたしも納得したよ。やっぱりって」

　雪菜を慌あわててフォローする唯里の言葉を聞いて、古こ城じようがなにかに気づいたように口を開く。

「そうか……唯里さんも剣けん巫なぎってことは、姫柊ひめらぎの代わりにうちの隣となりに引っ越してくる可能性もあったのか」

「え？　雪菜ゆつきー、古城くんの隣に住んでるの？」

　唯里が驚おどろいて雪菜を凝ぎよう視しした。雪菜は、唯里の大げさな反応に怪け訝げんな表情を浮かべて、

「はい。任務ですから」

「おおー……そ、そうなんだ」

　唯里が動揺した理由の半分は、もちろん古城が口にした何なに気げないひと言だ。隣に住んでいる同級生同士の恋愛は、唯里が愛読する少女マンガでも鉄板といえるシチュエーションだからだ。

　もしかしたら古城の隣に住んでいたのが自分だったのかもしれないと思うと、さすがに冷静ではいられない。

　そうやって唯里が一人で妄もう想そうに耽ふけっていると、古城が今度は雪菜に訊きいた。

「昔の唯里さんはどんな感じだったんだ？」

「へ!?」

　いきなり自分の話題になったことに、唯里は激しい焦あせりを覚える。なにしろ唯里は、昔のことで雪菜を散々からかった直後なのだ。

　そして生真面目な唯里の後輩は、古城の質問に答えるべく素直に口を開いて、

「そうですね。最初に会ったときのことで覚えてるのは、ちょうど夜間の野外実習で──」

「ごめん、雪菜ゆつきー、その話だけは本当に許して」

　すがりつくように頭を下げる唯ゆい里りを見て、古こ城じようと

グレンダが声を上げて笑った。

　そんなどうでもいい会話を続けていた効能か、唯里は消耗していた気力が回復していくのを実感していた。〝第だい四よん真しん祖そ〟暁あかつき古城に対して抱いていた緊張感と警戒心も消えている。

　だが、同時にひとつの疑問も感じていた。

　冷静に考えれば古城には、唯里やグレンダを助ける義理はないのだ。彼がこの地を訪れた理由は妹を保護するためであり、安あ座ざ真まと戦う理由などない。

　なのにどうして、唯里たちのためにここまでしてくれるのか――

　その理由を知りたくもあり、同時に、それを彼に訊きくのが恐こわくもあった。

　ただひとつだけわかっているのは、古城がそんな性格だから、雪ゆき菜なが――あの姫柊ひめらぎ雪菜が、彼を信頼しているのだろう、ということだ。

　少し信頼し過ぎているのではないかと思えるほどに。

「先輩、お行ぎよう儀ぎ悪いですよ」

　その雪菜が、ズルズルと音を立ててスープを啜すする古城を睨にらんで、お小こ言ごとを口にする。しかし古城は、素そ知しらぬ顔で肩をすくめるだけだ。

「右手が動かせないんだから仕方ねーだろ」

「もう、貸してください……はい」

　業ごうを煮やした雪菜が古城の腕から皿を奪い、彼の口元にスプーンでスープを運んだ。あーん、という効果音が聞こえてきそうな仕草だ。古城は、ん、と短く礼を言っただけで、当たり前のように雪菜のスプーンからスープを啜る。

　そして彼は、その合間に緑色のシリアルバーを一口食べて、

「美う味まいな、これ」

「そうなんですか？　見た目どことなく不気味ですけど……」

「そうなんだけど、意外にな。たぶん姫柊の好きな味だと思う。ほら」

　そう言って、食べかけのシリアルバーを雪菜の前に差し出す古城。雪菜は小鳥のように身を乗り出して、シリアルバーの先端を迷いなくかじる。

「本当ですね、美お味いしい……」

「だろ」

　うなずきながら、古城はきょろきょろと自分の周囲を見回した。それを見た雪菜は、すぐに古城の足元にあったペットボトルを手に

取って、

「お水ですか、はい」

「ああ、サンキュ」

　雪菜はごく自然な態度でペットボトルの蓋ふたを開け、古城はなんの疑問も抱かずにそれを受け取った。その古城が窓まど際ぎわの寒々しい場所から動こうとしないのは、薪まきストーブの前のいちばん快適な場所を、それとなく雪菜に譲ゆずるためだ。

　そんな二人の恐ろしく自然なやりとりを、唯ゆい里りはしばらく無表情に眺めていた。が、やがてついに発作的な衝しよう動どうに襲おそわれて、

「夫婦か！」

　思わず天井目がけて大声で叫ぶ。

「な、なんだ!?」

「唯里さん？」

　古こ城じようと雪ゆき菜なが、驚おどろいた顔で唯里を見た。二人とも唯里が突然なにを言い出したのか理解できないという表情だ。よもや自分たちの行動に問題があるとは、夢にも思ってないのだろう。

　だが、そんな雪菜たちの仲なか睦むつまじい姿は、ほんの少しだけ唯里の罪悪感を溶かしてくれた。

　雪菜が唯里の代わりに危険な任務に就ついたことには変わりない。

　けれど、そのことで、彼女は唯里にはないものを手に入れたのだから──

「ごめんなさい、なんでもないから。ちょっと叫びたくなっただけだから」

「お、おう」

釈然としない表情を浮かべつつ、それでも古城はうなずいた。

グレンダは腹が膨ふくれて眠気を催したのか、布団の上に丸くなって再び寝息を立てている。

だが、そのグレンダの耳がピクリと動き、悪夢にうなされたように彼女は低く唸うなった。

同時に唯里も気づいていた。奇怪な魔ま力りよくの持ち主が、この山小屋へと近づいている。唯里がそれを古こ城じようたちに告げようとした瞬しゆん間かん、雪ゆき菜なが立てかけてあった槍やりに手を伸ばすのが見えた。

「先輩……飛龍ワイバーンです」

「見つかったのか……早かったな、くそ」

シリアルバーの残りを口に含んで、古城が素早く立ち上がる。

よく見れば古城も雪菜も、靴を履はいたままだった。リラックスしているように見せかけて、安あ座ざ真またちの襲しゆう撃げきに備えていたのだろう。

慌あわてて追いかけようとした唯ゆい里りを見て、雪菜が冷静に伝えてくる。

「唯里さんはグレンダさんをお願いします。もしものときは、わたしたちを置いて逃げてください」

「雪菜ゆつきー……」

山小屋を出て行く雪菜の背中を見送って、唯里は思わず苦笑した。

当然のように雪菜が口にしたひと言を、思わず口の中で繰り返す。

わたしたち、かあ……

銀ぎん黒こく色しよくの飛龍ワイバーンは、山小屋から少し離はなれた場所に着地した。

乗っているのは、騎き士し鎧よろいを身に着けた安あ座ざ真まだけ。もう一体の飛龍ワイバーンと、黒くろ銀がねの魔ま法ほう使つかいの姿は見当たらない。

古城の眷けん獣じゆうの攻撃に巻きこまれたせいか、飛龍の全身は激しく傷いたんで、剝はがれた鱗うろこの下には金属質の断面が剝むき出しになっていた。この飛龍ワイバーンたちもまた、咎きゆう神しんの魔ま具ぐによって生み出された傀儡ゴーレムだったのだ。

「安座真三佐──だっけ。あんた一人か？」

飛龍ワイバーンから降り立つ騎士鎧の男に、古城が訊きく。

安座真は騎槍ランスを構えることもなく、魔具の一部である騎士兜ナイトヘルムを脱いだ。意外に若い、猟りよう犬けんを思わせる風貌の男だ。

「暁あかつき古城……きみと少し話がしたくてね」

「俺おれと？」

思いがけない安座真の言葉に、古城は訝いぶかしげに眉まゆを寄せた。

ああ、と安座真は重々しくうなずいて、

「立場上、私はきみが第だい四よん真しん祖そになった事情を、多少は知っている──防衛省の幹部でもほとんど知り得ない情報だがね」

「なにが言いたい？」

古城が顔をしかめて訊き返す。見ず知らずの相手にオマエの過去を知っている、と言われて、愉快な気分になれるはずもない。

「我々がグレンダを捕らえようとしている理由、知りたくはない

か？　つまりグレンダと名付けられた龍族ドラゴンの正体はなにか、という話だが──」

「……聞かせてくれ」

　少し迷って、古こ城じようは答える。それはまさに古城たちが求めていた情報そのものだ。

　安あ座ざ真まは、古城のその答えを予期していたように、微笑んですぐさま言葉を続けた。

「かつて〝天てん部ぶ〟と呼ばれた古代超人類と、カインと呼ばれる異世界の神が争いを繰り広げた、という神話は知っているな。〝聖せい殲せん〟と呼ばれる争いだ」

「歴史的な事実として認められた学説じゃない、とも聞いてるぜ？」

　しょせん神話だろ、と古城は問い返す。安座真を揶や揄ゆしているわけではなく、そんな曖あい昧まいな情報を信じて、彼のような男が行動していることが意外だったのだ。

「だが一方で、我々が使う魔ま導どう技術の多くは、その〝聖殲〟の痕こん跡せきに根差しているのも事実だ。魔術や呪じゆ術じゆつ、錬れん金きん術じゆつ、それに魔ま具ぐ──そこにいる獅し子し王おう機き関かんの剣けん巫なぎが使う七式突撃降魔機槍シユネーヴアルツアーも、古代の宝ほう槍そうを核コアとして製造されている。そしてきみ自身もだ、第だい四よん真しん祖そ」

「だからなんなんだ？　グレンダとなんの関係がある？」

　古城は苛いら立だったように目を眇すがめた。

「仮に〝聖殲〟なんてものが実際にあった出来事だとしても、何千年も前に終わったことじゃないのか？」

「戦争は繰り返されるものだ。当事者のどちらかが死に絶えても、な……〝天部〟は滅ほろびたといわれてるが、この世界には魔術も、それに魔族も残っている」

　安座真は奇妙な威厳を備えた、張りのあるバリトンで言葉を紡ぐ。

「……魔族？」

「カインは、すべての魔族の創造主だといわれている。そして人類に魔術と科学を与えたのも彼だ。いわばこの世界の法則は、咎きゆう神しんカインの遺産に支配されているといってもいい」

「あんたがそう信じるのはあんたの勝手だが……」

古城は溜ため息いき混じりに頭を振った。

「だからって、今さらどうにもならないだろ。それともあんたが神様の代わりに世界の法則を変えようってのか？」

「まさかな。人は神にはなれんよ」

安座真が自じ嘲ちようするように微笑ほほえんだ。そして彼は、挑発的な視線を古城に向けてくる。

「だが、滅びた神を甦よみがえらせることはできる……そしてそれを操あやつることもな」

「神を……操る……？」

正気か、と古城は安座真を睨にらみ返す。だが、咎神の騎き士しは薄笑みを浮かべて首を振るだけだ。

聖殲派とは、咎神カインを奉ほうじる異端のテロリストだと聞いていた。

だが、安あ座ざ間まの真の目的が神を操ることだとしたら、彼らの行動の意味はまったく変わってくる。聖せい殲せん派はは単純にカインを信しん奉ぽうしているわけではない。その逆だ。彼らは咎きゆう神しんカインと、咎神が生み出したものすべてを否定するために行動しているのだ。

「沼の龍グレンダは、咎神カインが残した遺産の護まもり手──神の〝情報〟の器うつわだ。彼女は魔ま族ぞくでも魔ま獣じゆうでもない、いわばシステムの一部に過ぎない。ある特定の条件を満たしたときに目覚めるように定められたシステムだ」

「特定の条件……？」

古城は、安座真があえて口にした小さな手がかりに気づく。獅し子し王おう機き関かんが、暁あかつき凪なぎ沙さを生いけ贄にえとして使った真の理由。彼女だけが持っている知識──記憶。〝聖殲〟の遺産であるグレンダを目覚めさせる鍵かぎが、同じ〝聖殲〟の遺産だったとしたら？

「そうか……第だい四よん真しん祖その覚かく醒せいか……！」

古城が辿たどり着いた解答こたえを認めるように、安座真は長い溜ため息いきをつく。

「たしかにグレンダの脅きよう威い度は低い。それでいて我ら聖殲派が、是が非でも手に入れなければならない遺産だ。獅子王機関はそれを利用して、我々を狩り出す罠わなとして使ったわけだが──たとえ同志の大半を犠ぎ牲せいにしてでも、グレンダを手に入れれば帳ちよう尻じりは合う」

「……どうして、そんな話を俺おれに聞かせた？」

素直な疑問を覚えて、古城が訊きく。聖殲派の目的がなんであれ、安座真がそれを古城に語り聞かせる理由はないはずだ。

しかし安座真が古城に向けたのは、異様なほどに真しん摯しな眼まな差ざしだった。

「きみにも無関係な話ではないからだ、暁古城。かつて人間だったきみにはわかるはず。魔族の持つ能力が、どれほど破格で、いかにたやすく世界を歪めるか。たった一人の吸血鬼の気まぐれが、巨大な都市を壊かい滅めつさせる──こんな歪ゆがみが世界の正しい姿だと思うのか？」

「だから、魔族を滅ほろぼすのか……？」

古城は苦にが々にがしげな表情を浮かべる。すべての魔族を滅ぼすために、魔族を生み出した神を利用する。安座真の目的は歪いびつだが、たしかに筋は通っていた。

「世界を本来あるべき姿に戻すだけだ。それは、きみ自身にとっての福音にもなるはずだ、暁古城──我々はきみを不老不死の呪のろいから解き放ち、人間としての死を与えてやる」

安座真が冷れい厳げんな口調で告げてくる。

怪物として、たった一人で何千年も生き続けるくらいなら、人間として死ね、と彼は古城に伝えているのだ。

馬ば鹿かげた理屈ではあった。

だが一方で、魅力的な提案でもあった。

永えい劫ごうの孤独と、先の見えない不安。それは一人で抱えこむには、正直あまりにも重すぎる荷物だ。安座真はその終わりなき苦悩から、古城を解放しようとしている。

だから邪じゃ魔まをするな、と彼は古こ城じように言っているのだ。

「考えようによっては、まあ、悪くない提案だよな……あんたの言うことが本当なら」

安あ座ざ真まの主張の正当性を、古城は認めた。もとより不老不死の吸血鬼の力など、古城が望んで手に入れたものではない。それを捨て去ることに抵抗はなかった。不死とはまさしく呪のろいなのだから。

「先輩……！」

自暴自棄とも取れる古城の呟つぶやきを聞いて、雪ゆき菜なが怒りを露あらわにする。

そんな雪菜を見て、古城は曖あい昧まいな苦笑を洩もらした。ほかならぬ雪菜こそ、第だい四よん真しん祖そ抹まつ殺さつの任務を与えられて古城の監視を続けているのだ。彼女が怒るのは理屈に合わない。

「グレンダを渡せ、第四真祖。我らには〝器うつわ〟が必要だ。人工島管理公社に対抗するために」

安座真が淡々と要求を口にする。古城の顔がハッと強こわ張ばる。

「人工島管理公社……だと？　絃いと神がみ島じまになんの関係が……!?」

ゴォン、と遠えん雷らいに似た轟ごう音おんが聞こえてきたの

は、その直後のことだった。着陸間ま際ぎわの旅客機のような巨大な飛行物体が、立ちこめる雲の中から降下してくる。

「先輩！　あれは……!?」

「なんだ!?　輸送機か……？」

　灰色に塗られたその機体は、軍用の輸送機によく似ていた。だが、機体側面に設置された無数の砲ほう門もんは、ただの輸送機のものではあり得ない。

　その禍まが々まがしくも巨大な機体は、グレンダたちのいる山小屋を目がけて高度を下げている。

「自衛隊特殊攻こう魔ま連隊の切り札……ＡＣ□２対ガ地ン攻シ撃ツ機プだよ。今は聖殲派われわれのものだがね」

　安座真は、勝ち誇るでもなく淡々と告げてきた。

　輸送機として設計された機体に、大量の武器弾薬を積みこむことで、通常の航空機にはあり得ない重武装と大火力を与えられた局地制圧用の攻撃機。それを操縦しているのは、銀ぎん黒こく色しよくのローブをまとった女だ。

「まさか、あの機体を素そ体たいにして傀儡ゴーレムを──!?」

　安座真たちの目的に気づいて、雪菜が表情を凍らせる。

　黒くろ銀がねの魔法使いの能力は、兵器の持つ性能を、そのまま受け継いだ傀儡ゴーレムを造り出すことだ。兵員輸送用の装甲車が素体の傀儡ゴーレムですら、普通ではあり得ないほどの堅けん牢ろうさと攻撃力を持っていた。だとしたら、対ガ地ン攻シ撃ツ機プを素体に生み出した怪物が、いったいどれほどの火力を持つか、想像もつかない。

　しかも彼らは、古城の眷けん獣じゆうの攻撃を無効化することができるのだ。魔法無効化障しよう壁へきに唯一対抗できる〝雪せつ霞か狼ろう〟も、空を飛ぶ傀儡ゴーレムには届かない。

「話は終わりだ、暁あかつき古城。グレンダを置いてここから立ち去れ」

　安座真が騎士兜ナイトヘルムを装着した。彼の背後で、飛龍ワイバーンが巨大な翼つばさを広げる。

「あんたの話は少しだけ魅力的だったよ、安あ座ざ真ま三佐」

　古こ城じようが牙きばを剝むきながら獰どう猛もうに笑った。

「だけど俺おれは、あんたが仲間をあっさり殺したのを見てる。聖殲派あんたたちのせいで、負傷した無関係の隊員も大勢いたはずだ。あんたは信用できねーし、そんな相手にグレンダは渡せねえな」

「そうか……残念だよ、第だい四よん真しん祖そ」

　安座真が再び構えた騎槍ランスが、古城の心臓に向けられる。

　そして彼は宣告した。初めて生の感情を剝き出しにした声こわ音ねで―

「ならば、魔ま族ぞくに堕おちたままここで死ね！」

4

　黒くろ銀がねの騎き士しが構えた騎槍ランスから、轟ごう音おんとともに弾丸が放たれた。グレンダを傷つけたものと同じ漆しつ黒こくの球体だ。

　古城はその球体をよけられない。よければ球体は山小屋に当たり、中にいる唯ゆい里りたちが巻きこまれるからだ。だから古城は右腕を掲かかげて荒々しく吼ほえる。

「―疾きくや在がれれ、一番目の眷けん獣じゆう、〝神羊の金剛メサルテイム・アダマス〟！」

　古城が、右手を襲おそう激痛に耐えて召しよう喚かんしたのは、光り輝かがやく神しん羊ようだった。眷獣を取り巻く無数の金剛石ダイヤモンドの結晶が、騎士の攻撃を防ぐ楯たてとなる。

漆黒の球体と激突した結晶は、ビリヤードの球のように次々とぶつかり合って、方向ベクトルを変えた。それぞれの結晶が弾丸と化して、あらゆる角度から安座真を襲おそう。絶ぜつ対たい無む謬びゆうの神の羊は、恐るべき報復の眷獣でもあるのだ。

だがその金剛石ダイヤモンドの弾丸は、安座真が展開した漆黒のオーロラに阻はばまれる。

一切の厚みをもたない黒い膜が、染しみこむように空間を侵しん蝕しよくし、世界そのものを塗り替えていくのだ。音もなくその闇やみの中に呑のみこまれ、第四真祖の眷獣の攻撃が無効化されていく。

「またあの黒いカーテンみたいなやつか……！」

古城の眷獣を無効化する騎士の力に焦あせりを覚えながら、一方で古城は密ひそかに安あん堵どしていた。

いかに〝聖せい殲せん〟の遺産で武装しているとはいえ、安座真はただの人間だ。まともに眷獣の攻撃を浴びれば、ほぼ確実に彼は死ぬ。相手が殺人者だからといって、古城が彼を殺していい理由にはなるまい。たとえ彼の目的が、すべての魔族の抹まつ殺さつにあるとしても、だ。

「―先輩は、グレンダさんたちの護ご衛えいをお願いします！　安座真三佐はわたしが！」

攻撃をためらう古城の傍そばから、銀色の槍やりを構えて雪ゆき菜なが跳んだ。

古城が止める暇はなかった。黒銀の騎士が放つ銃弾をことごとく撃ち落とし、雪菜はたちまち敵との距きよ離りを詰めていく。が、

「邪じゃ魔まだ、剣けん巫なぎ！」

安あ座ざ真まが飛龍ワイバーンに攻撃を命じた。飛来する銀ぎん黒こく色しよくの魔ま獣じゆうに阻はばまれて、雪ゆき菜なの攻撃は黒くろ銀がねの騎き士しに届かない。地表スレスレを跳ね回る飛龍ワイバーンの巨体は、その質量だけでも脅きよう威いだった。物理的な追加効果を持たない雪菜の〝雪せつ霞か狼ろう〟では、その攻撃を防げない。

「姫柊ひめらぎ──！　下がれ！」

　雪菜を援えん護ごするために駆け出そうとした古こ城じようの頭上で、対ガ地ン攻シ撃ツ機プが咆吼した。

　上空を旋せん回かいする巨大な機影は、もはや航空機の形を保っていなかった。龍族ドラゴン化したグレンダや飛龍ワイバーンたちを遥はるかに上回る巨体、そして九つの首を持つ多頭龍ヒユドラもどきだ。対ガ地ン攻シ撃ツ機プの火力をそのまま受け継いだ多頭の怪物が、凄すさまじい勢いで漆しつ黒こくの炎を吐く。

「黒い砲弾……だと！」

　古城の眷けん獣じゆうが、障しよう壁へきを展開した。だが、無類の硬度を誇る金剛石ダイヤモンドの結晶が、多頭龍ヒユドラもどきの砲撃の前にことごとく砕けていく。安座真の騎槍ランスの銃撃と同じだ。多頭龍ヒユドラもどきの砲弾には、魔力無効化能力が与えられている。

　眷獣の障壁を破られて、無防備になった古城を漆黒の砲弾が襲おそった。

　その巨大な球体が古城の全身を呑のみこむ寸前、眩まばゆい閃せん光こうが虚こ空くうを薙ないだ。

「六式降魔剣・改ローゼンカヴアリエ・プラス──起動ブートアツプ！」

　銀色の長ちよう剣けんを構えた唯ゆい里りが、古城の前に着地する。彼女の剣撃が生み出した空間の断層が、漆黒の砲弾を防いでいた。砲弾の魔力無効化能力で疑似空間切断の効果は失われるが、そのときには砲弾そのものも消滅している。

「唯里さん……!?」

「ごめんなさい！　でも、あんなのが相手じゃ、隠かくれてても無駄だと思って──」

「ああ、いや……そうだな。助かった。グレンダは？」

「だー！」

周囲を見回す古城の背中に、パーカー姿のグレンダが、ばふ、という効果音とともに跳び乗ってくる。少女の身体からだの軽い感触に、古城は戸惑いの表情を浮かべ、

「ええと……たぶん、古城くんの後ろがいちばん安全だと思って……」

そんな古城に、伏し目がちに答えてくる唯里。古城にくっついていろとグレンダに指示したのは、どうやら唯里だったらしい。グレンダが文字どおり古城に密着するとは、唯里も予想していなかったのかもしれないが。

「それはいいけど、まずいな、このままじゃ――」

頭上の多頭龍ヒユドラを見上げて、古城は焦しよう燥そうを覚える。次に多頭龍ヒユドラの砲撃を受けたら、唯里にも防ぎきれないはずだ。その前にあの巨大な傀儡ゴーレムを倒さなければ――

「くそっ！　疾きくや在がれれ、〝獅子の黄金レグルス・アウルム〟！　〝龍蛇の水銀アル・メイサ・メルクーリ〟！」

古城は新たに二体の眷獣を喚よび出した。雷らい光こうの獅し子しと水銀色の双そう頭とう龍りゆうだ。それらは宙を舞まう多頭龍ヒユドラに殺到し、その巨体を撃ち落とそうとする。

その攻撃を防いだのは、多頭龍ヒユドラの頭上に立つ黒くろ銀がねの魔ま法ほう使つかいだった。彼女はローブの隙すき間まから漆しつ黒こくのオーロラを広げて、多頭龍ヒユドラの全身を覆おおい尽くしたのだ。

激突の衝しよう撃げきが、多頭龍ヒユドラを揺らした。

だが、それだけだ。魔力を封じられてしまえば、いかな第だい四よん真しん祖その眷けん獣じゆうといえども、多頭龍ヒユドラの巨体を破壊しきれるものではない。

だからといって飛龍ワイバーンを撃ち落としたときと同じ手段は使えなかった。多頭龍ヒユドラとの距きよ離りが近すぎる。この状態で眷獣を暴走させたら、古こ城じようたちも無事では済まないし、今度こそ安あ座ざ真またちを確実に殺してしまうだろう。

「ダメか……！」

　多頭龍ヒユドラが轟ごう然ぜんと炎を放った。古城の眷獣たちがそれぞれ攻撃を放って、飛来する漆黒の砲弾を相そう殺さいする。それでも防ぎきれない砲弾が古城たちの頭上へと降りそそぎ──

「──〝雪せつ霞か狼ろう〟！」

　それらを古城たちの眼前で撃ち落としたのは、雪ゆき菜なだった。

「無事ですか、先輩！　唯ゆい里りさん！」

「雪菜ゆつきー……！」

「姫柊ひめらぎ！　飛龍ワイバーンは……!?」

　驚おどろく古城たちの無事を確認して、雪菜はすっと自らの前方を指さした。

　雪菜と戦っていた飛龍ワイバーンは、片かた翼よくと胴体を深々と抉えぐり取られて、地上でのたうち回っていた。多頭龍ヒユドラの砲撃に巻きこまれたのだ。

　否いな──多頭龍ヒユドラの砲撃に巻きこまれる位置に、雪菜が誘導した、というべきか。雪菜は自らが囮おとりになることで、彼らを同士討ちさせたのだ。飛龍ワイバーンを護まもるはずだった漆黒のオーロラは、彼女の〝雪せつ霞か狼ろう〟によってズタズタに斬きり裂かれている。

「……獅し子し王おう機き関かんの七式突撃降魔機槍シユネーヴアルツアー……ありとあらゆる結界を斬り裂くとは聞いていたが、よもや異ノ境ドの侵しん蝕しよくすら断ち切るとはな。厄やつ介かいな武器だ」

　安座真が、半なかば賞賛するような口調で低く呟つぶやいた。

「異ノ境ドの侵蝕……？」

　古城は、安座真が洩もらした聞き慣れない言葉を反はん芻すうする。

「異ノ境ドとは、咎きゆう神しんカインが放ほう逐ちくされたとされる異世界だ。そして〝聖せい殲せん〟によって、統すべるべき神

を失った、虚無の世界でもある──」

　安座真は意外にも、古城の疑問に律りち義ぎに答えてきた。

　なるほど、と古城は無言でうなずく。この世界の魔力が、咎神カインにもたらされたものならば、そのカインの力が及ばない異ノ境ドは、魔力の存在しない世界ということになる。

　魔力を無効化する黒いオーロラの正体は、その異ノ境ドが洩もれ出した痕こん跡せきだったのだ。

「でもって、その古臭い鎧よろいは、異ノ境ドの侵蝕とやらを操あやつる魔ま具ぐってわけか。趣味のコスプレかと思ってたぜ」

「私としても、このような道化じみた姿は本意でないが──甘んじて受け入れるさ。おかげで貴き様さまらのような魔ま族ぞくを一いつ掃そうできる力を得られるのだからな」

　そう言って安あ座ざ真まは、漆しつ黒こくのマントを広げた。

　しかし滲しみ出した闇やみ色いろのオーロラは、虚こ空くうを覆おおい尽くすこともなく、安座真の足元の地面に音もなく呑のみこまれていく。

　そのことに戸惑う古こ城じようの足元に、暗い影のような染しみが広がった。その染みは、厚みを持たない無数の刃やいばになって、地中から古城を刺し貫く──

「な……に!?」

　鈍い衝しよう撃げきと激痛が、古城の全身を襲おそった。

「先輩──！」

「古城くん!?」

　雪ゆき菜なと唯ゆい里りが、驚きよう愕がくに目を見開いて振り返る。地中からの見えない攻撃には、未来視の力を持つ彼女たちも反応できなかったのだ。

「ぐ……はっ……！」

古城の全身を貫いた闇色の刃は、古城の吸血鬼の力をも奪っていた。自らの眷けん獣じゆうを喚よび出すこともできず、古城は声もなく鮮血を吐く。背負っていたグレンダを突き飛ばし、彼女を救うだけで精いっぱいだ。

古城の足元に広がった闇は、そのまま大気をも侵しん蝕しよくして、古城の全身を包みこんだ。

「駄だ目めだ、唯里さん……グレンダを連れて……逃げ……」

自分に駆け寄ってくる唯里を、古城は目の動きだけで制止する。迂う闊かつに今の古城に触れたら、唯里までもが虚無に呑まれてしまう。

雪菜が銀色の槍やりを突き出すが、異ノ境ドの侵蝕速度のほうが速かった。古城は完全に闇の中へと溶けこみ、あとには漆黒の澱よどみだけが残される。

「第一目標排除クリア──沖おき山やま一尉、残りは任せる」

「了解コピー」

安座真の指示を受けた黒くろ銀がねの魔法使いが、多頭龍ヒユドラの上から降りてくる。安座真がグレンダを確保するまでの間、一人で雪菜と唯里の相手をするつもりなのだ。

「私が時間を稼ぎます！　唯里さんはグレンダさんを逃がしてください」

「雪菜ゆつきー……！」

身構える雪菜の背中を見て、唯里の瞳ひとみに迷いが浮かんだ。

雪菜一人で、安座真と沖山、そして多頭龍ヒユドラの相手をするのは不可能だ。飛龍ワイバーンを倒したときのような同士討ち狙ねらいも、おそらく通用しないだろう。

だからといって唯里までもがここで倒れたら、グレンダを護まもる者がいなくなる。

どうすればいい、と苦悩する唯ゆい里りの前で、グレンダは思いがけない行動に出た。

「うぅ――――っ！」

　地表に残された漆しつ黒こくの澱よどみに―古こ城じようが呑のみこまれた虚無の闇やみへと、彼女は自ら飛びこんだのだ。グレンダの姿が消えた直後、収縮を続けていた闇は完全に消滅する。

　彼女が着ていたパーカーだけが、ぱさり、と音を立てて地面に落ちた。

「グ……グレンダ!?」

「なに……!?」

　驚おどろいていたのは、唯里たちだけではなかった。闇の侵しん蝕しよくを操あやつっていたはずの安あ座ざ真ま自身も、予期せぬ結末に呆ぼう然ぜんとしている。

「〝器うつわ〟が自ら異ノ境ドに呑みこまれた……だと……馬ば鹿かな……！」

　自失したような口調で、安座真がうめく。

　咎きゆう神しんの騎き士しの力をもってしても、闇の侵蝕に巻きこまれた存在を元に戻すことできない―その冷れい徹てつな現実を、絶望に震ふるえる彼の声が示していた。

5

　真夏の街―

　そこは洋上に浮かぶ小さな島だった。

　血のように赤い海に取り囲まれた人工島だ。

　空は、夕ゆう陽ひが沈んだ直後のように紅あかい。その深しん紅くの空を背景に、巨大なビルの残ざん骸がいが屹きつ立りつしている。周囲の建物も、原形を留とどめぬまでに破壊され、焼け落ちていた。巨大な災さい厄やくに襲おそわれた直後か、さもなくば戦火

に焼き尽くされたかのような風景だ。

「なんだ……ここは？」

　どこか懐なつかしく思えるその廃はい墟きよを見回して、古城は頼りなく呟つぶやいた。その声に、苦痛のうめきが混じる。

　安座真の攻撃で全身を刺し貫かれ、虚無の闇に呑まれた。そして気づいたときには、古城は、この世界に一人で立っていたのだ。

　その記憶が夢でなかったことは、全身に残された生々しい傷跡が証明している。身に着けた衣服も、足元の地面も、流れ出した血でべったりと濡ぬれていた。

　吸血鬼の再生能力を失った今、このままでは出血多量で力尽きるのも時間の問題だろう。

　だが今は自分自身の生死よりも、この世界のほうが気になった。

「まさか……絃いと神がみ島じま……なのか!?」

　破壊されたビルの残骸が、絃神島のキーストーンゲートに酷こく似じしていることに気づいて、古城は困惑する。その特徴的な建物の形を、古城が見間違うはずもない。

　人工島を取り囲むようなモノレールの高架も、周囲の街並みも、絃神島によく似ている。が、

「いや、違う……」

　看板や標識に記された見知らぬ文字に気づいて、古こ城じようは戸惑い、首を振った。

　この世界はやはり絃いと神がみ島じまではない。絃神島によく似た別の土地だ。

　なぜ異ノ境ドの侵しん蝕しよくに呑のまれたはずの自分がこんな場所にいるのだろう──古城はそう自問する。

　誰だれかの気配を近くに感じたのは、その直後のことだった。

「誰だ……!?　誰かいるのか？」

振り返った古城が目にしたのは、廃はい墟きよの瓦が礫れきの上にたたずむ一人の男の姿だった。

背後の夕焼けが邪じゃ魔まをして、彼の顔はよく見えない。

古城にわかるのは、男が胸に抱く折れた槍やり──

そして彼の背中にうっすらと浮かぶ、黒い十二枚の翼つばさの存在だけだ。

男は慟どう哭こくしているようにも、あるいは歌っているようにも見える。

「□□□……□□□□□□」

やがて古城の存在に気づいた彼は、なにかを伝えるべく唇くちびるを震ふるわせた。

だが、その言葉が声になる前に、男の姿は薄うすれ、消えていく。

同時に、古城が立っていた廃墟の島も、細かな光の粒と化して静かに消滅を始めていた。

長い時間とともに記憶が色いろ褪あせ、消えていくように──

「残留思念……ってやつだったのか？」

闇やみに呑まれ、消えていく風景を見回しながら、古城は焦あせりを覚えていた。

古城の足元の人工の大地が、そして古城の肉体までもが、ゆっくりと消滅を始めたからだ。

淡い光を放ちながら、虚無に溶けて、すべてが消えていく。

「く……まずい……」

古城は激しい異ノ境ドの侵蝕を受けながら歯は噛がみする。

こんなところで消えてしまうのか、という悔恨と怒りが胸の奥に広がった。

しかし今の古城には、消滅に抗あらがうことはできない。たとえ吸血鬼の力が残されていたとしても同じだ。異ノ境ドの侵蝕に抗うことができるのは、〝雪せつ霞か狼ろう〟の神格振動波だけだからだ。

銀色の槍やりを持つ雪ゆき菜なだけ──

「なっ……!?」

〝雪せつ霞か狼ろう〟の名と雪菜の姿を脳裏に思い描いた瞬しゆん間かん、古城の右腕に激痛が走った。

手の甲に埋めこまれていた見えない回路に、電気が流れたような衝しよう撃げきだ。

その直後、古城の肉体を襲おそっていた異ノ境ドの侵蝕が止まった。

古城の周囲を泡あわ玉だまに似た、光り輝く透明な膜が包みこんでいる。その膜が漆しつ黒こくの虚無から古城を護まもっているのだ。

「結界？　この光……〝雪せつ霞か狼ろう〟と同じ……」

異ノ境ドの侵しん蝕しよくを喰くい止めている光の膜の正体に気づいて、古こ城じようは呆ぼう然ぜんと呟つぶやいた。

古城を消滅の危機から救ったのは、間違いなく神格振動波の結界だった。雪ゆき菜ながこれと似た技を使うのを、何度か目にした記憶がある。

だが、ここには雪菜はいない。なのに、そんな強力な神格振動波が、古城の右手に埋めこまれていた理由──考えられる可能性はひとつだけだ。

「〝静寂破りペーパーノイズ〟か……あいつが、あのとき……！」

古城の右手に刻まれていたはずの、奇妙な傷跡が消えていた。失われたはずの右腕の感覚も戻っている。古城との最後の激突の瞬しゆん間かん、閑しずか古こ詠よみは、古城の右手に結界の術式を刻印していた。

紘いと神がみ島じまを出て行く古城を止められないと気づいて、彼女は保険をかけたのだ。

異ノ境ドの侵蝕を操あやつる敵と遭遇する万一の場合に備えて、古城を消滅から救う切り札をこっそり仕込んでいた。古城自身にも気づかれないように。

妃き崎さき霧きり葉はは、古城の右手に刻まれたのが封印の術式だと見抜いていた。だが、封印とは、外に逃がさないためのものとは限らない。封印は、時として、内側にあるものを護まもるためにも使われる。閑古詠が古城に刻んだ封印は後者だったのだ。

今にして思えば古城の右手の傷は、眷けん獣じゆうを喚よび出したから苦痛を訴えていたわけではない。

古城の傷が疼うずくのは、決まって咎きゆう神しんの魔ま具ぐが使われた直後だった。あの傷は、異ノ境ドの侵蝕に反応していたのだ。

とはいえ、と古城は溜ため息いきをつく。

〝静寂破りペーパーノイズ〟の術のお陰で、即時消滅だけは免まぬがれたが、だからといって元の世界に戻れたわけではない。神格振動波の結界も、いつまでも保もつわけではないだろう。

異ノ境ドから抜け出す手段を見つけないことには、やはり消滅は時間の問題だ。

どうすればいい、と古城が頭を抱えたそのとき――

鋼はがね色いろの鬣たてがみを持つ龍りゆうの巨体が、古城の頭上に現れる。

「だー……こじょう……！」

龍族ドラゴンの咆ほう吼こうが、結けつ界かいの中の大気を震わせた。

虚無の闇やみを泳ぐようにして、巨大な龍は真まっ直すぐに古城のほうへと向かってくる。

その圧倒的な質量に押し潰つぶされるのではないかという恐怖を

古城が感じ始めたとき、龍は、少女の姿へと変わった。

　神格振動波の泡すらすり抜けて、グレンダが古城の背中にしがみついてくる。

「グ、グレンダ!?　おまえ、どうやってここに……!?」

　無む邪じや気きに笑っている裸の少女の横顔を、古城は呆然と見返した。

　グレンダは、そんな古城の血ち塗まみれの身体からだに触れて、

「いたい？　こじょう、いたい？」

「わかってんなら、触るなよ……」

　無造作に傷口を撫なでられた古こ城じようが、顔をしかめて弱々しくうめく。

　どうしてグレンダがここに現れたのか、もちろん古城にはわからない。元の世界に残された雪ゆき菜なたちのことも気がかりだ。いずれにせよ、グレンダが出現したことで、このまま消滅を待つわけにはいかなくなった。どんな手段を使っても、彼女を、元の世界に連れ帰らなければならないのだ。

「ったく、なんだっておまえまでここに来たんだ？」

「こじょう、つれてかえる。ゆいり、よろこぶ」

　鋼はがね色いろの髪の少女は、ためらいもせずに答えてくる。そういうことか、と古城は息を吐いた。唯里に喜んでもらいたいというただそれだけの理由で、グレンダはこの虚無の世界に飛びこんできたらしい。

「どうやればここから脱出できる？　グレンダ、わかるか？」

　グレンダを軽く抱き上げながら、真剣な口調で古城が訊きく。

　なにしろ相手が素っ裸なので、身体からだを離はなすといろいろ問題がある。それに迂う闊かつに手を放して、グレンダとはぐれる事態は避けたい。結果的に、古城は彼女と密着する形になってしまう。

鏡鉄鉱ヘマタイトに似たグレンダの美しい瞳ひとみが、古城を見つめ返してくる。

「わかる……しってる……グレンダ……〝情報〟のうつわ……みこにとどける……」

「……巫み女こ？」

酷ひどく断片的なグレンダの言葉を、古城は戸惑いながら聞いていた。彼女の無む邪じや気きな表情から、次第に人間らしい温ぬくもりが消え、どこか無機質な美貌が取って代わる。

仄ほのかな輝かがやきがグレンダの周囲を包みこみ、彼女の輪郭が曖あい昧まいにぼやけた。

「こじょう、つれてかえる……みんな、よろこぶ……」

青い輝かがやきに包まれたグレンダが、古城の目の前で姿を変えていく。

古城は龍族ドラゴン化を警戒したが、そこに現れたのは思いがけない少女の顔だった。

銀色の髪と碧あおい瞳。聖女を思わせる穏おだやかな美貌──叶かな瀬せ夏か音のん。

「叶瀬……なんで……!?」

驚おどろく古城の前で、グレンダは再び光に包まれた。次に現れたのは仙都とこよ木ぎ優ゆう麻まの中性的な美貌。そしてラ・フォリアの高貴な面おも立だちだ。そして煌きら坂さか紗さ矢や華かの優美な姿が浮かび上がる。

そこで古城はようやく気づいた。グレンダが彼女たちの姿を知っていた理由──

「おまえ……俺おれの記憶を遡さかのぼっているのか……？」

グレンダが映し出していたのは、古城がかつて血を吸った少女たちだった。

吸血鬼としての古城の中に刻みこまれた、血の記憶を彼女は辿た

どっていたのだ。

　藍あい色いろの髪の人工生命体ホムンクルスの少女を経て、グレンダは最後に一人の少女の姿に変わる。

　姫柊ひめらぎ雪ゆき菜な。古城が初めて自らの意思で吸血した、小柄な剣けん巫なぎの姿へと―

『……わたしの……血……わたしの血を吸ってください』

　雪ゆき菜なの姿に変わったグレンダが、そう言って首筋にかかる髪をかき上げた。

　古こ城じようの記憶の中にある、雪菜の声、雪菜の姿そのままで。

『吸血行為によって、先輩にもたらされる血の記憶……わたしの中にある〝情報〟が、先輩アナタに力を与えます。異ノ境ドの虚無に抗あらがう力を―』

　グレンダが―雪菜が古城の手を取って、自らの胸元へとそっと導いた。

　仄ほのかな膨ふくらみの下で脈打つ、心臓の上へと。

「ちょ……おまえ……!?」

　いまだかつて触れたことのない滑なめらかな肌と柔らかな弾力に、古城の意識が白く染まった。

　視野が狭まり、犬けん歯が疼うずく。強烈な喉のどの渇かわきが襲おそってくる。

『大丈夫、触れてください―わたしの中の〝情報〟を感じて……』

　雪菜の声で、グレンダが言う。古城は言われるがままに、彼女の身体からだを抱き寄せる。

　吐息、脈拍、体温、手触り、心地ここち好よい匂においと存在感。

　彼女は器うつわだと、安あ座ざ真まは言った。グレンダは〝情

報〟の器だと。

ならば彼女に、その〝情報〟を注いだのは誰だれだ──と古城は疑問に思う。

グレンダの唇くちびるから歌が零こぼれる。夕ゆう闇やみの中で折れた槍やりを抱き、慟どう哭こくしていた少年の歌が──

「そうか……グレンダ、おまえは……」

瞳ひとみを真しん紅くに染めて、古城は呟つぶやいた。グレンダはすでに雪菜ではなく、彼女自身の姿に戻っている。しかし古城は自らの吸血衝しよう動どうのままに、彼女の細い首筋に牙きばを突き立てた。

雪菜に対する罪悪感はあるが、それでも今は、この少女を連れて帰らなければならない。

生きて、元の世界に。

「あ……」

古城の腕の中で少女が身じろぎし、細く弱々しい吐息を洩もらす。

そして──

6

多頭龍ヒユドラの砲撃が、大地を抉った。雪菜と唯ゆい里りは、その攻撃をギリギリで回避する。

銀ぎん黒こく色しよくの騎き士し鎧よろいに身を包んだ安あ座ざ真まは、再び地表に漆しつ黒こくのオーロラを広げていた。

一度は閉ざされてしまった異ノ境ドへの回かい廊ろうを、あらためて開こうとしているのだろう。そしてグレンダが自力で戻ってくるのを期待しているのかもしれない。

その場合、邪じや魔まになるのは雪菜たちの存在だ。

だから黒くろ銀がねの魔法使い―沖おき山やま観み影かげは、安座真のサポート役として、雪菜たちを排除しようとしているのだった。

「雪菜ゆつきー！　わたしがあの大きいのを引きつけてる間に―！」

「はい！」

多頭龍ヒユドラの相手を唯ゆい里りに任せて、雪ゆき菜なは地上に降りた黒くろ銀がねの魔ま法ほう使つかいを狙ねらった。どのみち雪菜の〝雪せつ霞か狼ろう〟では、装甲に覆おおわれた多頭龍ヒユドラは倒せない。

だが沖おき山やま観み影かげを倒せば、多頭龍ヒユドラを覆おおっている虚無の薄はく膜まくが消える。そうなれば、あとは唯里が多頭龍ヒユドラを破壊してくれるはずだ。

「―っ!?」

雪菜の槍やりが、魔法使いのローブを裂く。だが、沖山観影がまとった漆しつ黒こくのオーロラが消滅することはない。それどころか彼女は自らローブを脱ぎ捨てて、雪菜の視界を遮さえぎる楯たてにした。

そしてローブの死角から、雪菜へと杖ワンドを叩たたきつけてくる。銀ぎん黒こく色しよくに輝かがやく杖ワンドを―

雪菜はギリギリでその一撃を受け止めた。防ぎきれなかった衝しよう撃げきで、後方に大きく吹き飛ばされる。それでも姿勢を崩くずさなかった雪菜を眺めて、沖山観影は感心したように微笑ほほえんだ。

腹立たしいほどの余裕の表情だ。

「それがあなたの魔ま具ぐですか、沖山一尉―」

沖山観影の杖ワンドを睨にらんで、雪菜が言った。

安あ座ざ真まが身に着けている騎き士し鎧よろいは、それ自体が

異ノ境ドの侵しん蝕しよくを操あやつる咎きゆう神しんの魔具だ。だから彼女のローブにも、魔具としての機能があると思っていた。

　だが、違った。魔法使い風のローブはただのまやかしだ。

　それに気づくのが遅れたせいで、雪菜の最初の攻撃は見事に防がれた。沖山観影を倒すのが遅れれば、そのぶん唯里が危険になるというのに、だ。

「ええ、そう。もう一人の剣けん巫なぎ……あなたは、姫柊ひめらぎ雪菜さん、でしたね」

　沖山観影が、手の中で杖ワンドを回転させて雪菜を睨にらむ。

「ご安心を。この魔具はただの複製品レプリカです。安座真三佐の騎槍ランスを模倣コピーしたまがい物。異ノ境ドの侵蝕を自在に操るほどの力はありません。せいぜい傀儡ゴーレムを生み出して、虚無のヴェールで覆うのが精いっぱい。ただし――」

　そう告げた次の瞬しゆん間かん、沖山観影の姿が雪菜の視界の中で霞かすんだ。

　凄すさまじい速度の跳ちよう躍やく。そして刺し突とつ。雪菜の反応速度をもってしても、攻撃の軌道をわずかに逸そらすことしかできない。杖ワンドの先端に装着された銃じゆう剣けんが、雪菜の肩をかすめていく。

「銃剣術――!?」

「白はく兵へい戦せん闘とうなら、私に勝てると思いましたか？　私は特殊攻魔連隊ですよ？」

　沖山観影の絶え間ない連続攻撃に、雪菜はたちまち追い詰められた。

　想像を絶する強さだった。単純な格闘戦の技術では、沖山観影は雪菜を遥はるかに上回る。

　沖山観影の杖ワンドは、雪菜の槍に比べて射程リーチで劣るが、圧倒的に小回りが利きく。その優位性を最大限に活かすために、沖山観影は雪菜に超至近距きよ離りでの打撃戦を挑んでいた。体格と筋力で彼女に劣る雪ゆき菜なには、反撃のきっかけがつかめない。

「その槍やりが魔ま族ぞくに対して無敵を誇ろうとも、人間である私にとっては、時代遅れの近接兵器に過ぎない！　それにあなた方、剣けん巫なぎの未来視も、異ノ境ドの侵しん蝕しよくに覆おおわれた私には通用しない！」

「くぅっ……！」

　沖おき山やま観み影かげの体当たりを喰くらって、雪菜は大きく吹き飛ばされる。だが、それは雪菜にとってもチャンスだった。ようやく槍やりを構え直す間合いが得られたからだ。

　着地すると同時に乱れた呼吸を整え、顔を上げる。そして雪菜は、沖山観影が、自ら後方に跳び退くのを見た。なぜ、と雪菜が混乱した一いつ瞬しゆんの隙すきをつき、沖山観影が傀儡ゴーレムに命じる。

「ＡＣ□2 ガンシツプ、撃て！」

「しまっ──！」

　着地した直後の雪菜に向かって、多頭龍ヒユドラの九つの頭が一斉に火を噴ふいた。

「雪菜ゆつきー、伏せて！」

　硬直する雪菜の前に飛び出したのは唯ゆい里りだ。銀色の長ちよう剣けんを振り下ろして、疑似空間切断の障しよう壁へきを張る。だが、その絶対の障壁は、多頭龍ヒユドラの最初の一撃であっさり破られた。

　呪じゆ力りよくの再充塡チヤージが終わるまで、六式降魔剣・改ローゼンカヴアリエ・プラスは使えない。唯里の焦あせりを嘲あざ笑わらうかのように、多頭龍ヒユドラが再び砲撃の準備態勢に入る。

　よけきれない──

　雪菜と唯里が、同時にそれを理解して小さく喘あえいだ。

　その直後、多頭龍ヒユドラが炎に包まれた。

　戦車砲弾の直撃を受けた傀儡ゴーレムの巨体が、着弾の衝しよう

撃げきで大きくよろめく。

「うっ―!?」

　動揺を見せたのは、雪菜たちではなく沖山観影のほうだった。

　密集する針葉樹林の中から現れたのは、真しん紅くに塗られた超小型有脚戦車マイクロロボツトタンクだ。その主砲が、沖山観影の傀儡ゴーレムを狙ねらい撃ったのだ。

「効いてるわ、〝戦車乗り〟！　もう一発！」

　ハッチから顔を出した華やかな髪型の少女が、双眼鏡を片手に叫んでいる。

『火力を強化してきた甲か斐いがあったでござるな！』

　有脚戦車ロボツトタンクの操縦士パイロツトが、自動装そう塡てんされた次弾を再び撃ち放つ。同時に戦車背面のミサイルポッドから、大量の対戦車ミサイルがばらまかれた。

　多頭龍ヒユドラの巨体が、大量の金属片を撒まき散らしながら崩くずれていく。

　沖山観影の銀黒色の杖ワンドは、現代兵器を魔ま獣じゆうへと変える魔ま具ぐだ。兵器としての攻撃力はそのまま魔獣にも引き継がれるが、同時に魔獣の防御力が、素そ体たいになった兵器の強度を超えることもない。輸送機をベースに設計された対ガ地ン攻シ撃ツ機プには、戦車砲に耐えられるほどの強度はないのだ。

　真しん紅くの小さな有脚戦車ロボツトタンクが、巨大な傀儡ゴーレムを一方的に蹂じゆう躙りんする。戦車がすべての砲弾を撃ち尽くしたときには、多頭龍ヒユドラはもはや瀕ひん死しの鉄てつ屑くずと化していた。

「藍あい羽ば先輩―！」

　しばし呆ぼう然ぜんと立ち尽くしていた雪ゆき菜なが、戦車の上の少女に向かって呼びかけた。

　赤い有脚戦車ロボツトタンクは、そんな雪菜たちのすぐ隣となりに停止して、

「遅くなってごめん、姫柊ひめらぎさん。古こ城じようは―？」

「それが―」

　歯切れ悪く言い淀よどみながら、雪菜は黒くろ銀がねの騎き士しへと目を向けた。

　安あ座ざ真まは、破壊された傀儡ゴーレムには目もくれず、地表に展開したままの虚無の薄はく膜まくを眺めていた。

「異ノ境ドの侵しん蝕しよくに呑のみこまれたか」

　その光景を見てすべてを悟ったのだろう。戦車の上に乗っていた異邦人の少年が、愉快そうにクックッと喉のどを鳴らす。彼の全身から立ち上っているのは、尋常ならざる濃のう密みつな魔ま力りよくだった。

「イブリスベール・アズィーズ……それにカインの巫み女こか。こんなときに……」

　安座真が、騎槍ランスを抜いて少年を睨にらみつけた。

　イブリスベール・アズィーズの名前を聞いた唯ゆい里りが、ぎょっとしたように少年を見上げる。

　一方、雪菜の瞳ひとみに浮かんでいたのは純粋な困惑だった。〝滅ほろびの王朝〟の凶王子イブリスベール・アズィーズの悪あく名みようは、もちろん雪菜も知っている。あのディミトリエ・ヴァトラーにも劣らぬ超危険人物だ。その凶悪な吸血鬼の王子が、どういう経緯で藍羽浅あさ葱ぎと行動を共にしていたのか―雪菜にはまったくわからない。

「沖おき山やま一尉」

「はい、三佐。戦車の始末は私が―」

　安座真と沖山観み影かげが、それぞれ自らの魔ま具ぐを構えた。

　雪菜と唯里も身構える。たとえ多頭龍ヒユドラを失っても、安座真にはまだ異ノ境ドの侵蝕が残っている。たとえイブリスベールの助力があっても、油断が許される相手ではない。

だが、殺さつ気き立つ雪菜たちとは対照的に、イブリスベールの表情は穏おだやかだった。

地表に残されたままの虚無を眺めて、吸血鬼の王子が歯を剝むいて笑う。

「逸はやるな、咎きゆう神しんの下げ僕ぼく──貴き様さまの相手は俺おれではないぞ。今は、まだな」

「なに……!?」

騎き士し鎧よろいに隠かくされた安座真の表情が、驚きよう愕がくに歪ゆがむ気配があった。彼の制御を離はなれたはずの異ノ境ドの侵蝕が、消滅することなくゆっくりと膨ふくれあがっていく。

まるで誰だれかが、そこにある見えない扉をこじ開けていくように──

闇やみの中から噴ふき上がる魔力は、決してグレンダのものではない。もっと禍まが々まがしく獰どう猛もうな、世界最強の吸血鬼の魔力だ。

「馬ば鹿かな！　魔族が……魔族ごときが自力で異ノ境ドの境界を破るというのか!?」

安座真の声こわ音ねに、明らかな混乱の響ひびきが交じる。咎神カインを奉ほうじる彼にとって、異ノ境ドとは、すべての異能の力が存在しない世界でなければならない。そこから帰還する魔ま族ぞくなど、決してあってはならないはずだった。たとえ第だい四よん真しん祖そといえども、その例外ではあり得ないのだ。

「なにを驚おどろく？　異ノ境ドからの帰還を成し遂とげた者はすでにいるはずだぞ。遥はるか遠い過去に、一人だけな」

動揺する安あ座ざ真まを嘲あざ笑わらうように、イブリスベールが厳おごそかに告げた。

安座真の全身が、戦せん慄りつしたように凍りつく。

「まさか、やつは咎神カインの記憶を喰くったのか──!?　馬ば鹿かな、そんなことが──」

かすれた安座真の声が響ひびく前に、闇やみが割れた。

凄すさまじい魔力の奔ほん流りゆうとともに現れたのは、しっかりと抱き合ったひと組の男女だ。どこか気け怠だるげな表情を浮かべた少年と、ぶかぶかの制服のブレザーを羽は織おった小柄な少女。

「先輩！　グレンダさん！」

「こ、古こ城じよう!?」

「グレンダ！　古城くん――！」

雪ゆき菜なと浅あさ葱ぎ、そして唯ゆい里りが口々に驚きの声を洩もらす。そして、

「第四真祖――ッ！」

銀ぎん黒こく色しよくの鎧よろいをまとった、咎きゆう神しんの騎き士しが絶叫した。

7

「ゆいりー――！」

「グ、グレンダ!?」

物もの凄すごい勢いでジャンプしてきた鋼はがね色いろの髪の少女を、唯里が慌あわてて抱き留めた。

ぶかぶかのブレザーの裾すそからは、少女―グレンダのすらりとした太ふと腿ももがのぞいている。それに目を奪われながら、浅葱は表情を強こわ張ばらせる。

「だ、誰だれよあれ!?　なんで!?　どうして古城と一緒に……!?」

『おー、なかなかの美脚でござるな。眼がん福ぷく眼がん福ぷく』

焦あせりまくる浅葱と、呑のん気きな感想を洩もらしているリ

ディアーヌ。

　そんな少女たちの姿を遠目に長めながら、古城は疲れたような溜ため息いきをついた。唯里たちが無事だったのは幸いだったが、なにやら面倒なことにもなっているらしい。

「なぜだ、第四真祖……なぜ咎神の〝器うつわ〟がきみを選ぶ……!?」

　何事もなかったように大地に立っている古城を睨にらんで、黒くろ銀がねの騎士が忌いま々いましげに吼ほえた。

「あんたがなにを言ってるのかわからないな、安座真三佐」

　古城は、あえて彼の神経を逆さか撫なでするように言い放つ。身勝手な正義を振りかざし、グレンダたちを危険に晒さらした安あ座ざ真まに、古こ城じようはいい加減、怒りを覚えていたのだった。

「俺おれを助けてくれたのはグレンダだ。あんたが道モ具ノ扱いしてたあいつが、あいつの意思で俺に力を貸してくれた。自分の仲間をあっさり殺したあんたには理解できねーか？」

「心まで魔ま族ぞくに成り下がった裏切者が、なにを言うか――」

　安座真が、古城を蔑さげすむように睨にみらつけてくる。

「黙だまれよ、おっさん」

　そんな安座真の罵ののしりを、古城は無造作に切って捨てた。

　怒りに絶句した咎きゆう神しんの騎き士しを哀あわれむように見返して、古城は冷ややかに言い放つ。

「たしかにあんたの言うように、この世界は歪ゆがんでるのかもしれねーな。だけど、世界を在るべき姿に正すという、あんたの理想が正しいのなら、あんたはどうしてテロリストになった？　仮面を被かぶって正体を隠かくしてないで、平和的な手段で世の中を変えてみせろ！　吸血鬼の真祖たちが、聖域条約の形で実現してみせたようにな！」

「貴き様さま……」

騎士兜ナイトヘルム越しにもはっきりわかるほどに、安座真の顔が激情で染まった。

傍ぼう観かんしていたイブリスベールが、ふふん、と小気味よさそうに笑う。

古城が何なに気げなく口にした言葉は、安座真の中のもっとも柔らかな部分を抉えぐったのだ。安座真自身が気づかないふりをして、目を逸そらし続けていた真実に。

「それができない今のあんたは魔族以下だ。種族も能力も関係ない。あんたは魔族の正義に負けたんだ。歪んでるのは世界じゃなくて、真実を直視できないあんたのほうだろ！」

沈ちん黙もくする安座真へと、古城は足を踏み出した。

人類と魔族の共存を目的に締結された〝聖域条約〟──その実現に貢献したのは、吸血鬼の真祖たちの強力な後押しだった。すべての魔族を滅ほろぼすことでしか世界を正せないと聖せい殲せん派はが主張している間に、ほかならぬ魔族の盟主たちが、平和に至る手段を形にしてみせたのだ。

その時点で聖殲派は、正義を語る資格を失った。

だからこそ彼らはテロリストであり、そして犯罪者とされたのだ。

「来いよ、おっさん。あんたがそれでも正義を名乗ってグレンダを狙ねらうのなら、俺があんたを止めてやる！　ここから先は、第四真祖オレの戦争ケンカだ！」

「暁あかつき……古城ォォォォォォォォ――――ッ！」

生の感情を剝むき出しにして、安座真が吼ほえた。

騎き士し鎧よろいから放たれた異ノ境ドの侵しん蝕しよくが、再び地中へと伸びていく。

だが、それらが刃やいばと化して古城を貫こうとした瞬しゆん間かん、銀色の閃せん光こうが虚無の薄はく膜まくを縫ぬい止めた。

青白い輝かがやきをまとった雪ゆき菜なの槍やりが、古城の足元

の地面に突き立てられている。

「いいえ、先輩。わたしたちの戦争ケンカ、です――！」

　異ノ境ドの侵しん蝕しよくを斬きり裂いて、雪ゆき菜なが古こ城じようの傍かたわらに着地した。

　地中から襲おそい来る咎きゆう神しんの騎き士しの攻撃は脅きよう威いだが、警戒していれば、動きを見切るのは難しくない。一度手の内を見せた時点で、安あ座ざ真まの奇き襲しゆう攻撃は効果を失っていたのだ。

「姫柊ひめらぎ、悪い。待たせた」

　おそらくは心配をかけたであろう雪菜のために、古城は自発的に謝罪する。

　しかし雪菜が投げかけてきたのは、古城の予想を上回る冷めた視線だった。

「――グレンダさんの血を吸ったんですね、先輩？」

　抑揚の消え失うせた雪菜の口調に、古城は声を上うわ擦ずらせた。

　それらしい痕こん跡せきは残っていなかったはずだが、雪菜にはとっくに気づかれていたらしい。

「ち、違う。あ、いや、違わないけど、つまり、正確にいえば、あれはグレンダであってグレンダじゃなかったっていうか」

　などと意味不明な古城の供述を、雪菜は無感動に聞いていた。

　そして彼女は、古城の隣となりに並んで、銀色の槍やりを旋せん回かいさせる。

「そうですか。では、その話はあとでゆっくりと――」

　静かに告げてくる雪菜の言葉を聞きながら、無かったことにはならないんだな、と古城は軽い絶望感を覚えていた。

　その間に、安座真の隣には、杖ワンドを握にぎった沖おき山やま

観み影かげが駆け寄っている。

「安座真三佐──」

「あとは頼む、沖山一尉」

　撤てつ退たいを進言しようとした沖山観影を制止して、安座真は自らの胸に騎槍ランスを向けた。その先端を、心臓目がけて突き入れる。

　騎槍ランスは、あっさりと安座真の胸を貫通した。出血も、苦痛の声もない。ただ、銀ぎん黒こく色しよくの騎き士し鎧よろいが、青白い光の粒と化して騎槍ランスに呑のみこまれていく。

「やばい……！」

　安座真の目的に気づいて古城が青ざめた。咎神の騎士が持つ魔ま具ぐはふたつ。ひとつは異ノ境ドの侵蝕を操あやつる騎士鎧。そして残るひとつは、あの騎槍ランス──

　兵器の〝情報〟を奪い取り、自らに融ゆう合ごうさせる魔具である。

「あいつ、自分の魔具を、もうひとつの魔具に喰くわせる気だ……！」

「え!?」

　雪菜が驚きよう愕がくに目を見張った。古城の予測を裏付けるように、騎士鎧を喰った安座真の騎槍ランスが変貌していく。今やふたつの魔具は完全に融合して、人ひと型がたの新たな魔具へと姿を変えていた。騎士鎧を身に着けていた、安座真の肉体を呑のみこんだ上で。

「そんな……そんなことをしたら、自我が魔具と融合して消滅するしか──」

　銀色の槍を握にぎり締しめて、雪菜が言った。それを聞くと同時に、古城は地面を蹴けって飛び出していた。

「──止めるぞ、姫柊ひめらぎ！」

「はい！」

　かつて安あ座ざ真まと呼ばれていた鎧よろいの怪物は、〝情報〟が足りない、と言わんばかりに、破壊された多頭龍ヒユドラの残ざん骸がいへと手を伸ばす。騎槍ランスの魔ま具ぐは、破壊された兵器からでも〝情報〟を抜き取れるのだ。事実、安座真はそうやって、上うえ柳やなぎ二尉の〝情報〟を奪っている。

　しかし、所有者を失った一個の魔具が制御するには、多頭龍ヒユドラの情報はあまりにも巨大だった。安座真の意思は増殖する膨ぼう大だいな〝情報〟の中で希釈され、もはや統一された人格を残しているとは思えない。

　安座真を救える可能性があるとすれば、彼が完全な融ゆう合ごうを終える前に、融合の鍵かぎである騎槍ランスを破壊することだけだ。だが、

「やらせない！」

　銀色の槍やりを構えた雪ゆき菜なの目の前に、沖おき山やま観み影かげの銃じゆう剣けんが突き出される。

　彼女は安座真の部下として、彼の最後の命令を、愚ぐ直ちよくに実行するつもりなのだ。

「くっ！」

　鬼き気き迫る沖山観影の攻撃を、雪菜はかろうじて避よけ続けた。

　今や安座真は完全な融合を終え、破壊されたはずの多頭龍ヒユドラの残骸は、新たな魔ま獣じゆうへと再生している。獰どう猛もうなワニガメと、巨大な蛇へびを融合させた異い形ぎようの怪物だ。騎き士し鎧よろいに似た甲こう羅らを持つその姿は、伝説上の魔獣である玄げん武ぶによく似ている。

　全長三十メートルを超える怪物が相手では、もはや雪菜の力は及ばない。

「無駄です、剣けん巫なぎ――あなたの霊視めでは私の攻撃は防げない。純粋な実戦経験でも、あなたは私に及ばない。あなたに勝ち目はありませんよ」

体力に優まさる沖山観影が、雪菜を屈服させるように宣言する。

たしかにそのとおりだと雪菜は認めた。おそらく一対一の戦せん闘とうでは、雪菜は決して彼女には勝てない。しかし今の雪菜は、一人で戦っているわけではない。

「はあああああっ――！」

裂れつ帛ぱくの気合いとともに、沖山観影が杖ワンドを突き出した。その先端の銃剣が、疲労で動きを鈍らせた雪菜の喉のどを、深く刺し貫く――

そう思われた瞬しゆん間かん、雪菜の姿が陽炎かげろうのように揺らいだ。

残像。否いな、幻げん術じゆつだ。

「馬ば鹿かな……獅し子し王おう機き関かんの剣巫が、幻術を……!?」

想定外の雪菜の戦術に、沖山観影の連続攻撃が途絶えた。

沖山観影が動揺したのは当然だ。対魔族の直接戦闘に特化した剣巫は、呪じゆ術じゆつ全般が得意ではない、というのが常識だからだ。事実、雪菜の幻術は、今でも初級者の域を出ない。

だが、近接戦闘の最中に、ほんのわずか相手に間合いを見誤らせるにはそれで十分だった。

数日前の南みな宮みや那な月つきとの戦せん闘とうでは、雪ゆき菜なはそれを嫌というほど思い知らされたのだ。

戦闘――

いや、と雪菜は心の中だけで首を振る。

あれは戦闘などと呼べるものではなかった。

今にして思えば、あれは那な月つきが、稽けい古こをつけてくれていたに等しい。

絃いと神がみ島じまを出ようとする雪菜たちが、無事に帰って来

られるようにと──あれは那月からの餞せん別べつだったのだ。

「黒くろ雷いかずち──！」

　無数の残像を従えて、雪菜が跳んだ。人間の限界を遥はるかに超えた敏びん捷しよう性せいだ。

　銀色の槍やりを煌きらめかせて、沖おき山やま観み影かげが持っている魔ま具ぐを狙ねらう。

「呪的身体強化フイジカルエンチヤント!?　だけど──！」

　閃せん光こうにも似た雪菜の攻撃に、沖山観影は反応していた。狙ねらいが丸わかりだ、と言わんばかりに、カウンターで銃じゆう剣けんを突き出してくる。もしも雪菜が、馬ば鹿か正しよう直じきに彼女の魔具を狙っていたなら、そこで勝敗は決していただろう。

　しかし雪菜は、槍を繰り出してはいなかった。武器を持たない左手を、無造作に前に突き出していただけ。体勢の崩くずれた沖山観影を目がけて、溜ためこんだ呪じゆ力りよくを一気に放出する。

「火ほの雷いかずち──！」

「がっ……！」

　透明なハンマーに似た呪力の塊かたまりが、攻撃を終えた直後の、無防備な沖山観影を襲おそった。一いつ瞬しゆん、呼吸不能に陥おちいって、沖山観影の全身が硬直する。

　本家・獅し子し王おう機き関かんの剣けん巫なぎに、あっさり負けてもらっては具合が悪いのよ──

　妃き崎さき霧きり葉はの偽ぎ悪あく的な台詞せりふが、雪菜の脳裏に甦よみがえる。

　呪術放出を利用した奇き襲しゆう攻撃は霧葉の技。対たい魔ま獣じゆう用の目め眩くらましだ。本来は太たい史し局きよくの六りく刃じん神しん官かんが使う戦術だが、同じ系統の術者である獅子王機関の剣巫も、簡単な練習で使いこなせる。

　そして──

「響ゆらぎよ」

　雪菜が最後に放ったのは、密着状態からの打撃技だった。雪菜がもっとも得意とする剣巫の基本攻撃だ。本来は、対魔族用の凶悪な内臓破壊技だが、素す手でで放つ密着攻撃だけに、手加減しやすいというメリットもある。

　沖山観影は、信じられないという表情で雪菜の顔を凝ぎよう視ししたまま、ゆっくりと倒れた。

　彼女の手から離はなれた魔具を、雪菜は〝雪せつ霞か狼ろう〟であっさりと破壊した。

　おそらく沖山観影には最後まで、自分が敗北した原因を理解できなかったのだろう。

　単純な実戦の経験だけなら、沖山観影は雪菜を遥かに上回っていた。だが、それだけだ。

　雪ゆき菜なは最初から一人で戦っていたわけではない。彼女を育てた獅し子し王おう機き関かんと、絃いと神がみ島じまで出会った多くの人々──彼らが与えてくれた力に支えられていた。それは組織と仲間を裏切り、テロリストとなった沖おき山やま観み影かげが失った力だ。

　聖せい殲せん派はの使う魔ま具ぐを見ればわかる。彼らは、他人の〝情報〟を奪い、使い捨てるだけ。

　自分たち以外の存在をすべて敵だと切り捨てたときから、沖山観影の実戦経験は消耗品となった。彼女は自ら成長の機会を捨てた。それが沖山観影の敗因だ。

　そして雪菜の傍そばには、もう一人──多くの人々の想おもいに支えられている少年がいる。

「第だい四よん真しん祖そォォォォォ！」

　巨大な玄げん武ぶが、安あ座ざ真まの声で咆ほう吼こうした。

　その怪物の顎あごから吐き出されたのは、かつての対ガ地ン攻シ撃ツ機プの一斉射撃を凌しのぐ砲弾の嵐あらしだ。狙ねらわれている古こ城じようだけでなく、その近くにいる雪菜や沖山観影。さら

にはグレンダたちまでも巻きこもうとしている。

　だがその無差別の砲撃は、地上から噴ふき上がった琥こ珀はく色の壁に阻はばまれた。

「なに!?」

　玄武の口から、地じ響ひびきにも似た驚きよう愕がくの声が洩もれてくる。

　彼と古城を隔てているのは、煮えたぎる灼しやく熱ねつの熔よう岩がんの壁だ。放たれる高熱が大気を歪ゆがめ、膨ぼう大だいな質量が生み出す圧迫感に、玄武の巨体が後退する。

「あんたのことは哀あわれに思うよ」

　古城が、揺らめく陽炎かげろうの中で静かに告げた。その瞳ひとみが怒りに赤く燃えている。

「目的のためには犠ぎ牲せいを厭いとわない。仲間の命すら平然と使い捨てにする──その犠牲の中には、あんた自身の命もカウントされてたわけか！　歪みすぎだろ、あんたは！」

「黙だまれ──」

　玄武が再び砲撃を放った。そして熔岩に全身を灼やかれながら、古城目がけて突進する。

「あんたは絶対に死なせない。自分がどこで道を誤ったのか、きっちり反省させてやる──！　疾きくや在がれれ、二番目の眷けん獣じゆう〝牛頭王の琥珀コルタウリ・スキヌム〟！」

　古城の全身から噴き出した魔力が、新たな眷獣を実体化させた。

　それは熔岩の肉体を持つ巨大な牛頭神ミノタウロスだった。大地から無限に湧わき上がる熔岩自体が眷獣の本体だ。琥珀色アンバーの輝かがやきを放つ全身は身長十メートルを超え、その巨体をも超える重厚な戦せん斧ぷを握っている。

　その灼熱の戦斧を防ぐため、玄武が虚無のオーロラを展開する。空間を塗りつぶす異ノ境ドの侵しん蝕しよく──

牛頭神ミノタウロスの肉体がどれほどの高温と大質量を誇ろうとも、それが魔力によって生み出されたものである以上、異ノ境ドの障しよう壁へきは破れない。

だが、古城たちはすでに知っていた。異ノ境ドの侵蝕が無力化できるのは、咎きゆう神しんカインが支配する魔ま術じゆつの法則だけ。単純な物理攻撃に対しては無力だと――

玄げん武ぶの足元の地面が灼しやく熱ねつの輝かがやきを放った。

墓場から掘り出した呪のろわれた土を、棺かん桶おけの中に敷き詰めて眠る――そんな迷信が流る布ふするほどに、吸血鬼は〝大地〟と関かかわりの深い魔ま族ぞくだ。そして吸血鬼を象徴する物体はもうひとつ。

地底から噴ふき出した無数の熔よう岩がんの杭くいが、異ノ境ドの侵しん蝕しよくを破り、玄武の巨体を刺し貫く――

「熔岩の杭……だと……!?」

銀ぎん黒こく色しよくの玄武の巨体が震ふるえた。対ガ地ン攻シ撃ツ機プの残ざん骸がいと魔ま具ぐで構成された肉体が、高温で熔とけ落ち、その表面が赤あか錆さびた鉄てつ塊かいへと変わっていく。

「この力……第だい四よん真しん祖そ、貴き様さまはやはり……」

破壊された玄武の頭部に、青い光の粒子に包まれた人型の影が浮かび上がる。

騎槍ランスに胸部を貫かれた騎き士し鎧よろい――咎きゆう神しんの魔具が、破壊された〝情報〟を切り捨てて、本体だけを脱出させようとしている。当然その騎士鎧の内部には、安あ座ざ真まの肉体が残されているはずだ。

「――獅し子しの神み子こたる高たか神がみの剣けん巫なぎが願い奉たてまつる」

砕け散った玄武の甲こう羅らを足場に、煮えたぎる熔岩の上を雪ゆき菜なが跳んだ。呪じゆ力りよくを流しこまれた銀色の槍やりが、眩まばゆい神格振動波の輝かがやきを放つ。剝むき出しになっ

た今の魔具には、〝雪せつ霞か狼ろう〟の刃やいばが届くのだ。

「破は魔まの曙しよ光こう、雪せつ霞かの神しん狼ろう、鋼はがねの神しん威いをもちて我われに悪あく神じん百ひやつ鬼きを討たせ給たまえ！」

　魔具が自らを守るべく、異ノ境ドの侵蝕を展開した。

　しかし雪菜の銀色の槍は、狭さ霧ぎりを払うようにその結界を破り、銀ぎん黒こく色しよくの魔具を貫いた。

「咎きゆう神しんの鎧……が……！」

　魔力を奪われた〝聖せい殲せん〟の遺産が呆あつ気けないほど簡単に砕け散り、血ち塗まみれの安あ座ざ真まが姿を現す。

　雪菜と入れ替わるように、彼の前に立ったのは古こ城じようだ。

「―終わりだ、オッサンっ！」

　驚きよう愕がくと憎悪に歪ゆがむ安座真の顔を、古城の拳こぶしが打ち抜いた。

安座真の肉体は音もなく宙を舞い、地面に叩たたきつけられて動きを止める。

それを確かめて、古城は深々と息を吐いた。

達成感はない。なにかを終わらせたという実感もない。古城と雪

菜は、最初から最後まで、事件の核心から遠く離はなれた場所にいたのだから当然だ。ただ安座真を止めなければ、と感じて、それをどうにかやり遂とげた。それが正しい選択だったのかすら、今はまだわからない。

　だが、振り返った古城たちの視界に映ったのは、安あん堵どの表情を浮かべている唯ゆい里りと、彼女に甘えるグレンダの無む邪じや気きな笑顔だった。

　だから、まあいいか──と古城は思った。

　そんな古城の制服のポケットの中で、ケケッ、と誰だれかが愉快そうに笑った。

終章
Outro

　正月休み真まっ直ただ中なかにもかかわらず、羽はね田だ空港の旅客ターミナルは混こみ合っていた。丹たん沢ざわ上空で発生した謎なぞの暴風の影えい響きようで、航空ダイヤが乱れたせいらしい。

　帰省客や観光客が慌あわただしく行き交かう出発ゲートの片隅で、煌きら坂さか紗さ矢や華かは、小さな縫ぬいぐるみを抱いていた。色素の淡い長い髪をポニーテールにまとめた、制服姿の少女だ。

　すらりとした長身に、キーボード用の黒い楽器ケースが似合っている。

　黙だまって立っていれば誰だれもが振り向くほどの優美な容姿の持ち主だが、今は周囲の人々全員が、彼女を避けるようにして足早に通り過ぎていく。紗矢華が、柳りゆう眉びを逆さか立だてながら、縫いぐるみ相手に必死で語りかけていたからだ。

「お、終わった……!?」

　手にした縫いぐるみの瞳ひとみを見つめて、紗矢華は呆ぼう然ぜんと呟つぶやいている。

　傍はた目めには猫の縫いぐるみに見えるし、実際、材質的にはそのとおりなのだが、その猫はれっきとした式しき神がみだ。操あやつっているのは、縁えん堂どう縁ゆかり。紗矢華の師し匠しようにあたる凄すご腕うでの魔ま術じゆつ師しである。

　紗矢華は彼女に呼びつけられて、遠路はるばる羽田までやってきたところだったのだが、

「なんなんですか、師し家け様!?　獅し子し王おう機き関かん三さん聖せいの勅ちよく命めいじゃなかったんですか──？　事件は片付いたから、もういいってなんなんです!?　こっちは謹きん慎しん明けでようやくもらえた休暇を潰つぶしてここまで来てるんですけど!?　来てるんですけど!?」

　そう喚わめき散らしながら、紗矢華は縫いぐるみを揺さぶった。猫の首に縫いつけられた小さな鈴が、チリチリと軽やかな音を立てる。

しかし縫いぐるみの応答はない。式神の制御を解除して、通話を一方的に打ち切られたのだ。

「──って、師家様？　ちょ、逃げないでくださいよ、師家様！」

あの女アマァ、と地じ団だん駄だを踏みながら紗矢華が絶叫した。

そんな紗矢華の細い肩が、背後から誰だれかに叩たたかれる。

「おーい、奇行に走るのはその辺にしとけよ。あんたはただでさえ目立つんだから……」

「げっ、お、男っ!?」

振り返る紗矢華の背後に立っていたのは、髪をツンツンに逆立てて、首にヘッドフォンをぶら下げた男子高校生だった。紗矢華はほとんど本能的な動作で、彼の顔面に肘ひじ打うちを叩きこもうとする。が、彼は軽くスウェーバックしただけで、その攻撃をいなしてみせた。

紗矢華は思わずカッとなり、懐ふところの呪じゆ符ふに手を伸ばそうとしたが、そこでようやく少年の顔にどことなく見覚えがあると気づく。

「あなた……暁あかつき古こ城じようの友達の……」

「矢や瀬ぜ基もと樹きだ。いい加減、名前くらい覚えてくれてもいいんだぜ、煌坂さん」

馴なれ馴なれしい口調で矢瀬に呼びかけられて、紗矢華は本気で殺意を覚えた。

それでも頬ほおを引き攣つらせながら、なるべく冷静な声を出す。

「……〝魔族特区〟の住人がこんなところになんの用？　観光客には見えないけど？」

「たぶんあんたと同じだよ」

矢や瀬ぜが苦笑交じりに肩をすくめる。

「ウチの幼なじみのじゃじゃ馬が、絃いと神がみ島じまを飛び出してったからな。様子を見に行こうと思ったんだが、追いつく前に祭りパーテイが終わっちまってな」

「なにそれ。ストーカーってこと？　キモッ……！」

「隠かくし撮どりの写真を待ち受けにしてる子に言われたくねーなー……」

　そう言いながら矢瀬が取り出してみせたのは、獅し子し王おう機き関かんに支給された紗さ矢や華かの携帯だった。つい最近まで謹きん慎しんを理由に没収されていて、ようやく返してもらったばかりのものだ。

　ロック画面に表示されていたのは、登校中の姫柊ひめらぎ雪ゆき菜なの写真。雪菜の隣となりには、若じやつ干かん見切れ気味の暁あかつき古こ城じようの姿も映っている。

「ちょっ……わ、私の携帯！　なんであなたが……!?」

　いつの間に掏すり取られたのか、と混乱しながら、紗矢華は背中の楽器ケースに手をかけた。

　ケースの中に収められているのは、攻こう魔ま師し権限で機内持ちこみを認めさせた銀色の長ちよう剣けん。獅し子し王おう機き関かん製の試作制圧兵器〝煌こう華か麟りん〟だ。

「き、斬きる！」

「待て待て！　返す！　返すから！」

　周囲の通行人の目を気にしながら、矢瀬が慌あわてて携帯を突きつけてくる。

　紗矢華は顔を真っ赤にしながら、その携帯を受け取って、

「い、言っとくけど、この待ち受け画像は雪菜がメインで、背景に映ってる通行人モブなんて全然興味ないんだからね！　むしろ汚点だと思ってるから――！」

「へいへい」

　なにもかも見透かしたようなむかつく表情で矢瀬が投げやりにうなずいた。

　紗矢華は涙目で彼を睨にらみつけ、

「用が済んだんなら、さっさと絃神島に帰るか、地獄に落ちるかしなさいよ！」

「帰りたいのは山々なんだが、ちょっと気になるものを見つけちまってな―あんたにここで騒さわがれると、連中が警戒しそうで困るんだよ。少し静かにしててくれ」

　頼むぜホント、と矢瀬が目を眇すがめながら言ってくる。どうやら矢瀬が声をかけてきたのは、紗矢華に不用意に目立たれたくない、という理由だったらしい。

　それはつまり獅子王機関の舞ま威い媛ひめに見られると困る人々が、この近くにいる、ということだ。

「連中って……彼らのこと？」

　矢瀬の視線を追いかけて、紗矢華は空港の貨物積み卸し場ローディングエプロンに駐とまった航空機に目を留めた。貨物機仕様の小型ジェット旅客機だ。

　貨物の積み替えに当たっての検査中らしく、機体の周囲に技術者らしき人物が集まっている。

　その検査官の中に見知った顔を見つけて、紗矢華は、おや、と目を瞬またたいた。

「暁あかつき古こ城じようのお母さま……？」

「なんだ、知り合いだったのか」

　矢や瀬ぜが少し意外そうに訊きいてくる。紗さ矢や華かは無言でうなずいた。

　よれよれの白衣を着た眠そうな顔立ちの女性、暁深み森もり。紗矢華は彼女と、多国籍魔ま導どう企業ＭＡＲ社のゲストルームで遭そう遇ぐうしたことがある。ふわふわした頼りない童顔とは裏腹に、深森はＭＡＲ医療部門の主任研究員なのだ。

「あの機体、ＭＡＲがチャーターした貨物機だ」

　矢瀬が、自分の耳元に手を当ててぼそりと言う。

「貨物室の中身は北海道から運んできた、って建たて前まえになってるが、あれの出で所どころはもっと北だな」

「北……って、もしかしてモスクワ皇こう国こくってこと？　聖域条約非加盟国のはずだけど……」

　紗矢華が表情を険しくした。ユーラシア大陸北部に位置するモスクワ皇国は、広大な領土と豊富な地下資源を持つ大国だが、日本との交流はほとんどない。〝聖域条約〟に非加盟の彼らは、国際的な経済制裁の対象国だからだ。

「だからこんなところでコンテナを広げてるんだろ。人道支援って扱いにしとけば、相手が経済制裁対象国でも難病の患者の受け渡しはできるし、〝魔族特区〟の検疫よりは、羽田こつちのほうが緩ゆるいしな」

「……難病の患者？」

　妙に具体的な矢瀬の言葉に、紗矢華は不審なものを感じながら目を凝こらした。

「ほとんど密輸すれすれじゃない……ＭＡＲほどの企業がそこまでしていったいなにを……」

　機内に貨物が運びこまれる直前、コンテナの扉が開いて一いつ瞬しゆんだけ中身が外気に晒さらされる。

　それは、まるで氷の柩ひつぎのような青いガラス容器に収められていた。

　眠り続ける、美しい少女だ。

「女の……子？」

　紗矢華が困惑に眉まゆを寄せる。

　少女を保護する容器には、彼女の素す性じようを示す単語が、短く、ひと言だけ刻みこまれていた。

―巫女シビユラ、と。

†

獅し子し王おう機き関かんが用意したヘリが、古こ城じようたちを迎えに来たのは、日没近くになってからだった。

迷惑をかけたお詫わびということで、古城と雪ゆき菜なは、そのまま紘いと神がみ島じままで送り返してもらえる手て筈はずになっている。〝魔族特区〟から本土への密航もうやむやのうちに、なかったことにされたらしい。もちろん古城たちとしても文句があろうはずもない。

唯一、問題と言えるのは、その送迎ヘリに、なぜか凪なぎ沙さが同乗していたことだ。

「ねえ、だから聞いてよ、古こ城じよう君。お祖ば母あちゃんってば、検査入院しろって白しろ奈なちゃんに散さん々ざん言われてるのに、全然聞く耳持たないんだよ。年寄り扱いするな―ってさ！　牙が城じよう君は牙城君で、深み森もりちゃんのとこの病院に搬は送こばれるって言われた途と端たんに、やめろ殺される、って暴れ出しちゃって。あれは絶対こないだ酔っ払って帰ってきたときのアレが原因だね」

ほぼ十日ぶりに顔を合わせた妹は、これまでの鬱うつ憤ぷんを晴らすかのようにものすごい勢いで、一方的に古城たち相手に喋しやべり続けた。凪なぎ沙さが喋り疲れて眠るまでの約二時間、古城たちはただ呆ぼう然ぜんと彼女の話を聞いていただけだ。

安あ座ざ真まとの戦せん闘とう以上に疲れ果てたが、凪沙の無事が実感できただけでも、よしとすべきなのだろう。ちなみに凪沙には神社の風ふ呂ろ場ばで倒れて以降の記憶はないらしく、魔ま獣じゆうの出現についても知らされていない。

古城が本土にいる理由も、妹のことが心配で、いてもたってもいられず迎えに来た、という扱いになっている。今イチ釈然としないものの、神社の巫み女こにセクハラして、緋ひ沙さ乃のに刺された、という無茶な言い訳で納得された牙城に比べれば、まだいくら

かマシといえるだろう。

「おまえも一緒に乗ってくのか？」

　凪沙を寝かしつけて手持ちぶさたになった古城が、待機中の輸送ヘリを指さして浅あさ葱ぎに訊きく。事件の現場検証の関係で、ヘリの出発までには、もう少し時間がかかるらしい。

「あたしは二、三日都内で買い物してから帰るわ。正規の出島手続きも済ませて来ちゃったから、ちゃんとした飛行機で帰らないと、あとあと面倒だし」

　浅葱は、早速スマホでブランドショップの検索を始めている。せっかく本土まで来たのだからと、がっつり服やバッグや化粧品を買いまくるつもりらしい。

「あんたはどうすんの、〝戦車乗り〟？　この戦車、だいぶボロボロだけど……」

「拙せつ者しやはディディエ重工の回収機を待つでござる。今回のデータ収集は実に有意義でござった」

　有脚戦車に跨またがる赤毛の少女は、やり遂とげた感に溢あふれた、いい表情で浅葱に答えた。

「まあ、あんたが満足してるのならいいけど……イブリスは？　あれ、イブリス……？」

　そう言って浅葱は、怪け訝げんな顔で周囲を見回した。

　彼女たちと一緒にいたはずの、異邦人の少年はいつの間にか姿を消している。古城は結局、彼とまともに顔も合わせないままだった。だが、まあべつにいいか、と古城は思いつつ、

「ところで、なんでこのクソ寒いところで水着なんか着てるんだ、おまえ？」

「へ!?」

　古城の指摘で、ようやく思い出したのか、浅葱の顔が羞しゆう恥ちに染まった。

　彼女が着ているのは、身体からだのラインがくっきりと浮き出た競泳水着風パイロットスーツだ。ご丁てい寧ねいに胸にはゼッケンまで貼はりつけられている。

「こ、これはいろいろ事情があって……って、いつまでやらしい目で見てるのよ！」

「やらしくねえ！　おまえが勝手にそんな恰かつ好こうで出歩いてたんだろ！」

「うわあぁ――っ！」

　浅あさ葱ぎは謎なぞの悲鳴を上げると、古こ城じようの顔面目がけて左のショートアッパーを放った。予期せぬ奇き襲しゆうに、もんどり打ってぶっ倒れる古城。その間に浅葱は、有脚戦車ロボツトタンクの中に逃げこんでしまう。

　なんなんだまったく、と噴ふき出した鼻血を拭ぬぐいながら、古城は上体を起こした。

　そんな古城の目の前に差し出されたのは、綺き麗れいに折り畳まれたハンカチだ。

　古城が驚おどろいて顔を上げると、そこには微笑ほほえむ雪ゆき菜なの姿があった。

　妙に殺伐とした、人工的な微笑みだ。

「いやらしいといえば、先輩―グレンダさんの血を吸ったんですよね」

　血ち塗まみれの古城の口元を、雪菜がガシガシと乱暴に拭ふく。

　下へ手たなごまかしは逆効果だと咄とつ嗟さに判断して、古城は必死に冷静を装うと、

「ま、まあな。異ノ境ドの境界だかどっかから戻ってくるためには、仕方なかったしな。それに、あのときはグレンダのやつが姫柊ひめらぎに化けてたから……」

「わたしに化けた……？　変身してたということですか？」

　戸惑うように小首を傾かしげて、雪菜は古城の隣となりに腰掛けた。

　ああ、と古城は曖あい昧まいにうなずく。

「まあ、そんな感じかな。俺おれの中の血の記憶を読み取って、姫柊の姿を再現したんだと思う」

「血の記憶……なるほど……」

　唇くちびるに指先で触れながら、雪菜が小さく呟つぶやいた。

　そして彼女は、大切なことを思い出した、という風に大きな目を細めて、

「でも、グレンダさんはあのとき裸だったんじゃ……」

「あ、いや、そう、グレンダは龍族ドラゴン化してたから。裸といっても、あくまで龍族ドラゴン的に――」

　古城は必死に主張する。最初に現れたときは、きっちり龍族ドラゴンの姿をしていたのだから、完全に嘘うそというわけでもない。

　しかし雪菜は、温度のない瞳ひとみで動揺する古城の顔を映して、

「そのグレンダさんがわたしに化けた、ということは……もしかして、先輩、見たんですか？」

「え？」

　一いつ瞬しゅん、雪菜になにを言われているのかわからず、古城は視線を彷徨さまよわせた。

　そんな古城の目の前に、ぐい、と雪菜が顔を近づけてくる。

「見たんですか？　わたしの裸を？」

「あー……そ、それは……なんていうか……」

　正確には見ただけでなく触ったりもしたのだが、もちろんそんなことを言えるはずもない。

古城が答えられずにいる間に、雪菜は冷ややかな殺さつ気きを放ち始めていた。

「見たんですか？」

「いや、でも中身はグレンダだし……」

「見たんですか？」

「……」

「先輩？」

冷たい刃やいばのような視線で雪ゆき菜なに睨にらまれて、古こ城じようは硬直したまま脂あぶら汗あせを流し続けている。

勘弁してくれ、という無意識の呟つぶやきが、冬の空に溶けて消えていく。

†

「―唯ゆい里り！」

輸送ヘリから降りてきた斐ひ川かわ志し緒おは、親友の姿を見つけて明るい声を上げた。

人里離はなれた丹たん沢ざわの山中だ。聖せい殲せん派はの安あ座ざ真ま三佐と第だい四よん真しん祖その激突によって、美しかった山の尾根には、火山噴火の痕こん跡せきのような巨大な爆ばく発はつ痕こんが刻みこまれている。

その爆心地近くに取り残された山小屋の前に、羽は波ば唯里は立っていた。

「志緒ちゃん！　よかった、無事で―！」

「うん、唯里もね」

二人は互いに手を取り合って、笑顔で再会を喜んだ。お互いボロ

ボロの姿ではあったが、なんとか生き延びることができたのだ。
〝滅ほろびの王朝〟の王子や第四真祖などの怪物に囲まれていたことを思えば、本当に奇跡のような幸運だった。今だけは獅し子し王おう機き関かんの攻こう魔ま師しであることを忘れて、普通の少女たちのように喜んでもバチは当たるまい。

「ゆいりー！」

　はしゃいでいる志緒たちを見て真ま似ねしたくなったのか、鋼はがね色いろの髪の少女が、唯里と志緒に抱きついてくる。多少驚おどろきはしたものの、不思議と不快とは思わなかった。それは少女の表情が、幼い赤ん坊のように無む邪じや気きだったせいかもしれない。

「こら、グレンダ！　靴！　ちゃんと靴を履はいて！」

　唯里がまるで保護者のように、鋼色の髪の少女の世話を焼く。

　グレンダと呼ばれた少女は、素直にその場に腰を下ろして、ブーツの靴くつ紐ひもと格かく闘とうを始めた。唯里が慣れない手つきで彼女を手伝う。どことなく、ほのぼのとした光景だ。

「この子が龍族ドラゴン？」

「うん。たぶん」

「そっか。よろしく、グレンダ。わたし、斐川志緒」

　志緒が彼女の隣となりに屈かがみこんでそう言うと、鋼色の髪の少女は人ひと懐なつこい笑顔になって、しおー、と歌うように返事をした。

　唯里はそんな志緒たちの様子を、微笑ほほえみながら見つめている。だが、志緒は、唯里が時折、自分の背後をチラチラと眺めていることにすぐに気づいた。

　唯ゆい里りの視線の先にいたのは、同じ色の制服を着たひと組の男女だ。

　銀色の槍やりを抱いた小柄な少女と、気け怠だるげな表情を浮かべた少年である。

「ねえ、唯里。あれって、もしかして姫柊ひめらぎ雪ゆき菜な？」

　志し緒おがさりげない口調で唯里に訊きく。

「う、うん」

　唯里は、ぎくり、と肩を震ふるわせて、ぶんぶん、と首を縦に振った。

　志緒は、ふーん、と唯里が気にしていた二人を観察する。

　姫柊雪菜と少年は互いに顔を寄せ合って、なにやら口論をしているようだ。明らかに険悪な雰ふん囲い気きなのだが、そのくせ二人の間には、妙に心安い空気が流れていた。人目をはばからずにいちゃついている傍はた迷めい惑わくなカップルを見ているような気分だ。

「あの子、なんだか可愛かわいくなった？　いや、もとから綺き麗れいな顔はしてたけど」

　怒り顔の雪菜を見ているうちに、知らず知らずに志緒はそう呟つぶやいていた。自分でもどうしてそんなことを思ったのかはわからない。

　しかし同じ事を感じていたのか、唯里も真ま面じ目めな顔で同意する。

「うん……そうかも」

「じゃあ……あれが第だい四よん真しん祖そ、暁あかつき古こ城じょう……」

「……うん。意外に恰かつ好こうよかったよ。やっぱり、ちょっと妬やけちゃうかな……」

　唯里が独ひとり言ごとのようにぼそりと呟いたので、志緒は今度こそ本気で驚おどろいた。

「ふーん、まあ、たしかにあと二十年くらいしたら、いい男になりそうだよね」

　暁古城の横顔を遠目に眺めて、無意識に思ったことをそのまま口

にする。

　すると今度は、へ、と唯里が驚きの表情を浮かべる番だった。

「志緒ちゃん、まさか……」

　びっくりしたように目を見開いて、唯里が声を震わせる。

　そこでようやく志緒は自らの失言を悟った。暁古城を二十歳ばかり老ふけさせたような人物。そんな中年男の具体例に心当たりがあったからだ。

　だが違う、と志緒は首を振る。志緒は決して、あんな性しよう悪わるで失礼なセクハラ中年のことを、恰好いいとは思っていない。そんなことは夢にも思っていないはずなのだ。

「え？　あ……ち、違うから。今のなし。本当に違うから……！」

　違うから――と絶叫する志緒の声が、夕暮れの空に響ひびき渡る。

　絃いと神がみ島じまの空と同じ、銀色の月が、そんな彼女たちを静かに見下ろしていた。

あとがき

ちょっとだけ、ほんのちょっとだけ前巻より刊行ペースを上げてみました（ドヤ顔）。お久しぶりです。そんなわけで『ストライク・ザ・ブラッド12』をお届けしております。

過去篇の一部を除いてほぼ絃いと神がみ島じまの中だけで展開していた『ストライク・ザ・ブラッド』の物語ですが、今回はついに日本本土が舞台になりました。しかも季節は真冬です。湖は凍るし、雪も舞まったりします。そのわりに女子の肌色率が（男子も約一名）普通に高めだった気がしなくもないですが、それはアレです。冬場に暖かい部屋でアイスを食べるのが贅ぜい沢たく、的なアレ。ともあれ、暑くない『ストライク・ザ・ブラッド』の世界というのは個人的に新鮮でした。

そして新鮮といえば、今回は、新キャラクターの多いエピソードです。特に唯ゆい里りと志し緒おの新人二人組は、これまでの獅し子し王おう機き関かん関係者とは違って一般人に近い視点のキャラということで、書いてて楽しかったです。（周りにとっては迷惑なことに）本人たちに自覚はないのですが、やはり雪ゆき菜なや紗さ矢や華かは、あの世代では突出したデタラメな才能の持ち主でして、ようやくそのあたりの事情が描けたかな、と思っております。唯里と志緒のコンビは、今後もちらほら活かつ躍やくの機会があると思うので、なにとぞよろしくお願いします。

さて次巻では、舞台は再び絃神島に戻る予定です。主要な顔ぶれも集まってきたりで、そろそろクライマックスに向けての大きな動きがある時期でしょうか。ついでに刊行ペースももう少し速く出来たらいいなあと思っております。本ほん篇ぺんとはべつの、ちょっとした新しい展開などもぼちぼち考えていますので、期待していただけたら嬉うれしいです。

また『月刊コミック電撃大王』誌上にて、コミック版『ストライク・ザ・ブラッド』も連載させてもらっております。コミカライズを担当してくださっているＴＡＴＥ先生、いつもありがとうございます。連載の回を重ねるごとに戦せん闘とうシーンの迫力やキャラ

クターたちの魅力が増していて、毎号感動しています。原作既き読どくの読者の皆様も確実に楽しめると思いますので、コミック版『ストライク・ザ・ブラッド』もぜひお手に取っていただければ。

　イラストを担当してくださったマニャ子さま、今回も本当にお世話になりました。厳しいスケジュール、後先考えずガンガン服を着替える登場人物たち、しかも新キャラ多数という悪条件の中、魅力的な作品を仕上げてくださって、ひたすら感謝しております。今回の雪菜の脚あし、もとい表紙も素晴らしかったです！

　そして本書の制作・流通に関かかわってくださったすべての皆様にも心からお礼を申し上げます。

　もちろんこの本を読んでくださった皆様にも精一杯の感謝を。

　それではどうか、また次巻でお目にかかれますように。

三み雲くも岳がく斗と

三み雲くも岳がく斗と

大分県出身。主に小説などを書いてる通りすがりの人。座右の銘というほど恰好よくないけど、好きな言葉は大学時代の友人に言われた「人間が一生に味わえる食事の回数は有限だから、できるだけ美味いものを喰うべきだ」という言葉。人生の真理だと思いマス。

イラスト / マニャ子こ

佐賀県出身、東京都在住。フリーのイラスト、原画描きです。最近はソーシャルゲームのイラストを沢山描いてます。…いつも同じプロフィールを使っていたら、謎の着る毛布愛好者みたいになってました…。因みに今も着ています。

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

電撃文庫公式ホームページ 読者アンケートフォーム

http://dengekibunko.dengeki.com/

※メニューの「読者アンケート」よりお進みください。

ファンレターあて先

〒102-8584　東京都千代田区富士見1-8-19

アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部

「三雲岳斗先生」係

「マニャ子先生」係

本書は書き下ろしです。

電撃文庫

ストライク・ザ・ブラッド12

咎きゅう神しんの騎き士し

三み雲くも岳がく斗と

発　行　　2015年3月26日

発行者　　塚田正晃

発行所　　株式会社KADOKAWA

〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3

03-3238-8745（営業）

http://www.kadokawa.co.jp/

プロデュース　アスキー・メディアワークス

〒102-8584　東京都千代田区富士見1-8-19

03-5216-8399（編集）

http://dengekibunko.dengeki.com/

本書（電子版）に掲載されているコンテンツ（ソフトウェア／プログラム／データ／情報を含む）の著作権およびその他の権利は、すべて株式会社KADOKAWAおよび正当な権利を有する第三者に帰属しています。

法律の定めがある場合または権利者の明示的な承諾がある場合を除き、これらのコンテンツを複製・転載、改変・編集、翻案・翻訳、

放送・出版、公衆送信（送信可能化を含む）・再配信、販売・頒布、貸与等に使用することはできません。

(C)2015 GAKUTO MIKUMO

※2015年2月10日発行の電撃文庫『ストライク・ザ・ブラッド12 咎神の騎士』初版に基づき制作

BOOK☆WALKER